



# パパが見た映画

365本

(上)

磐田 匠

## はじめに

---

亡くなった父は、映画が大好きでした。

二つ年上の、まわりよりは早熟な映画少年だった兄の影響で、私は小学生のうちから映画館に通っていました。

っていっても半ズボンはいた小学生ですから。

封切映画とか見ることができたわけではなく。

家の近所の一本三百円の名画座とか、ロードショーのあと二〜三ヶ月経って、二本立て五百円とかで上映している映画館に、おこづかいの百円玉何枚かをポケットに突っ込んで自転車に乗って見に行っていました。

そんな小学生でしたから、テレビで放送される映画なんかもすごくよく見ました。

当時の自宅にはテレビが二台ありまして。リビングのテレビでは母親がドラマを思い切り見てました。

だもんで、小学生の私にとっての映画館は、父親の寝室にあった、ちっこいテレビでした。

自営をしていた父は、毎日七時半ごろに家に帰ってきて、そこから夕食を食べ、九時くらいに寝室に入ります。

で、ウイスキーをちびちびやりながら、帳簿つけたり、仕事の資料作ったりしてました。

で、ときどき手を止めて映画を見て。「この映画はむかし見たなあ」とか言いながら。

父はけっこう映画好きでした。

父が一番好きだったのは、シドニー・ポワチエ主演の「夜の大捜査線」。

でもいつの間にか「踊る大捜査線」にはまったりして。

新聞のテレビ欄見て、「今晚、大捜査線あるやないか」って言って、朝からすごく楽しみにしてて、映画が始まったら「夜の大捜査線」で。

「織田裕二ちゃうやないか」ってめっちゃ不機嫌になるという、おちゃめでわがままな父でした。

父が映画好きなのは知ってたけど。「夜の大捜査線」以外の映画で、父が好きだった映画って知らないんです。

「ビデオレンタルしてきてくれ」って頼まれたの、ほんまに「踊る大捜査線」やったし。

だから、父が、どんな映画を見てどんな感想を持ったのかってこと、知らないで映画をみつづけてきたことになります。

で。

時は流れて。

父が亡くなったとき幼稚園児だった息子が、高校受験です。

ぼちぼち難しい映画なんかも見るようになってきました。

映画の感想記録、残さにはあって思いました。

映画評論、みたいな大上段に構えたものではなく。

この映画見て、父はこう思ったぞよ、お前は思うんじゃ？みたいな。

父がこう思った映画、興味もったら見てみなさい...みたいな。

見た映画を通じて、父が思ったこと、感じたこと、わかってもらえたらな...みたいな。

だからね。

この映画感想文集は、父と。息子と。

あと、父世代のみなさまには、あなたの子供世代はこの映画みてこんなこと感じました、的な感じで読んでいただきたくて。

同世代のみなさまには、普通に楽しんだり懐かしんだりしていただきたくて。

息子世代のみなさまには、まだ見ていない映画のことを知る機会にさせていただきたくて。

っていう、まあ、都合の良い映画ガイド的なものがないかなって思いながら書いてまいります。

それでは、365本の映画、開演です...

## スピーシーズ・種の起源

---

1995年アメリカ映画。

監督 ロジャー・ドナルドソン

主演 ベン・キングスレー、マイケル・マドセン、アルフレッド・モリーナ、ナターシャ・ヘンストリッジ

最初にとりあげる作品が「スピーシーズ・種の起源」ってのが、いかがわしくていいでしょ。この映画感想文集。

そもそも、これは友人向けに公開していた芸能ネタブログのネタだったんですわ。

最初のうちはそのブログ、芸能とかテレビとかのネタがメインだったのですが、そこで「1年で365本の映画を紹介したい」って企画をスタートさせちゃいまして、それがこの本のコンセプトにつながったという話ですわな。

本にするにあたって、作品の並べ替えとか、真剣に検討したんだけど。

「ゴッドファーザー」なり、「カサブランカ」なり、「ショーシャンクの空に」なりから始まる映画紹介本はあっても、「スピーシーズ・種の起源」から始まる映画紹介本ってまずないでしょ。

ってことで、あえてブログでのご紹介順でここでもご紹介させていただきますね。

SFエロティックホラーサスペンスになるんでしょうか。この映画のジャンル。

宇宙に向けて送信したメッセージに、太陽系外の知的生命体からの返信があります。それには未知のDNA情報が含まれていまして、そのDNAを合成してみたら生命が生まれてしましまして、それが金髪のかわいい女の子。

んでこりゃまずいと判断した科学者は実験を中断して実験体を殺そうとするのですが、彼女が逃げちゃう。

科学者は殺し屋とか別の科学者とか超能力者とかを集めたチームで彼女を追う。

生命体の目的は人間の男性との性交。

本能的に種を残し、増殖させようとする。DNA情報を送ってきた知的生命体の真の目的は、人類を滅ぼすことだったのだろうか...

なんて話です。

話の必然性からか、やたら裸が出てきます。

そらそうやわな。

エイリアンの目的って、エッチですから。だから子供とは見られない作品でございます。

何故かベン・キングズレーさま様がお出演。

なんでこんないかがわしい系の作品に出ておられるんでしょうか。

「ディープ・ブルー」に出ていたサミュエル・L・ジャクソンさまとか、「ジャッジ・ドレッド」に出演していたマックス・フォン・シドゥさまと同じくらいわけのわからない配役です。

## ゲッタウェイ

---

1972年アメリカ映画

監督 サム・ペキンパー

主演 スティーブ・マックウィーン、アリ・マックロー

今回ご紹介するゲッタウェイは昭和版。1972年版です。

1994年にアレック・ボールドウィンさまとキム・ベイシングーさまの主演でリメイクされましたですね。リメイク版の主題歌はリチャード・マークスさまの「ノウ・アンド・フォーエバー」でございました。

ま、そういう話はええんですが。

昭和版の「ゲッタウェイ」の話。

主演はスティーブ・マックウィーンさま。共演がアリ・マックローさまです。

監督はバイオレンスの詩人ことサム・ペキンパーさま。

服役中のワル、マックウィーンさまがいかにも悪そうな金持ちに身元引き受けをしてもらって出所します。

で、妻と共に強盗を強要される。

ん？って思ったマックウィーンさま、強盗成功の後、有力者をぶちかまして妻と逃げる。

「ゲッタウェイ」（逃避行）ですな。

実は妻はその有力者とできてたりしています。

妻を半分信じて半分疑って。

で、強盗仲間に追われて撃ち合いになって。

この撃ち合いの場面がええんですわ。

ペキンパー監督、さすがに巧い。スローモーションが光っています。「ワイルドバンチ」も良かったですが、これもなかなかいいです。

しかしマックウィーンさまが若い。

この映画、私が小学生の頃の映画。

「はじめに」で、小学生のころの私が半ズボンはいて見に行った映画のうち的一本です。

マックウィーンさま、この後、「タワーリング・インフェルノ」あたりで超大物になり、人気に比例して出演作品がだんだん少なくなっていくます。

ちなみに私は「ゲッタウェイ」のころのマックウィーンさまが一番好きですね。

## 悪魔のような女

---

1955年フランス映画

監督 アンリ・ジョルジョ・クルーゾー

主演 シモーヌ・シニョレ、ヴェラ・クルーゾー

ミステリー映画館というタイトルの本がありました。

ミステリー映画をひたすら紹介する一冊。

その中で、映画好きの映画好きのためのミステリー映画ガイドみたいなコーナーがありましてです。ねえ。

そのコーナーで、映画好きなコメンテーターが選んだ『これまでに見た映画の中で一番だまされたと思った映画』に挙げられた作品は「生きていた男」とこの「悪魔のような女」でした。

1996年にシャロン・ストーンさまとイザベル・アジャニーニさま主演でリメイクされました。オリジナルはシモーヌ・シニョレさまが主演。

この人の顔、言っちゃ悪いが、怖い。とっても、怖い。マジ悪魔のような女、みたいな顔しておられます。

心臓が悪い大富豪の女性がいます。

彼女の財産のひとつにお嬢様学校がありまして、夫はその校長です。

夫には愛人がいます。しかも公然とつきあっているわけですね。

妻も愛人も、男の身勝手な行動に困り果て、やがて二人は結託して男を殺す計画を立てることになるのですが...

さあどうなる。

途中からのシチュエーションはほとんどホラー。

ラストも思わずゾーっとする。

ネタばれになてはいけないので詳しく書けないのが残念。

悪魔のようなのは女なのか男なのか。やっぱり女なのでしょう。

これ、シャロン・ストーンさまのリメイク版はともかく、ぜひクルーゾー監督版のオリジナルも見たい作品でございます。

## ウエストサイド物語

---

1961年アメリカ映画

監督 ロバート・ワイズ、ジェローム・ロビンス

主演 ナタリー・ウッド、リチャード・ベイマー、ジョージ・チャキリス

歴史的ミュージカル映画の傑作でございます。

すごい映画です。はじめて見たときびっくりしました。

有名なフィンガースナップのトップシーンから画面にくぎ付けです。

不良が町を闊歩するシーンから乱闘シーン、不良同士のおいかけっこ。

これが全てダンス。

主役から端役に至るまで、立ち位置から立ちかたまで全てが計算され尽くされている。映像的に美しい。

すごい映画です。

「アメリカ」での群舞の素晴らしさがあったかと思うと、「トゥナイト」ではしっとりじっくりと聴かせてくれます。

ジョージ・チャキリスさま、ナタリー・ウッドさま、リチャード・ベイマーさま、リタ・モレノさまが主演。

物語の基本構造は、ロミオとジュリエット。対立しあう二つの不良組織の間に生まれてしまった恋って物語です。

ただ、ジョージ・チャキリスさまはロミオじゃない。

これに気づいたときはびっくりしました。

ジョージ・チャキリスさまって四人目のクレジットなんですよね。

なんか「ウエストサイド物語」って「主演、ジョージ・チャキリス」ってイメージだったのですが。

しかし。

うむむ。

物語の中でいきなり歌を歌うミュージカルってのはどうしても私の皮膚感覚にあいません。

普通に話してたかと思うと、いきなり「なんやかんやああああ」って歌いだすという。

昔は劇団でミュージカルやってたんですが、私。

普通あんなにいきなり歌わへんやろ。変なの。

あの曲入りのなんともいえない気まずさだけなんとかなれば、ミュージカルってもっと見られると思うのですが、こんな映画のみかたするのって、ひょっとして私だけでしょうか。

## アルマゲドン

---

1998年アメリカ映画

監督 マイケル・ベイ

主演 ブルース・ウィリス、ベン・アフレック、リブ・タイラー

宇宙系のSF作品を続けてガガッと見たら、あとになって思い出した場面がどの映画のものだったかさっぱりわからなくなった、てえことがよくあります。

昨日、会社で女子社員のおばちゃんたちがあーだこーだと映画の話をしていましたので、どの映画の話か聞いてみたところ、「インデペンデンス・デイ」と「アルマゲドン」と「ザ・デイ・アフター」と「デイ・アフター・トゥモロー」あたりがごっちゃになっていたようです。

私もここいらの映画はきわめて弱い。

ただ、アルマゲドンは比較的印象が強烈だったので、けっこう記憶が鮮明でした。

主演はブルース・ウィリスさま。

映画を見た当時はそれ以外の役者さんわからなかったです。

いやあ、最近の若い役者の名前や顔はわからんですたい。

なんて頑固じいさまみたいなリアクションしている場合ではない。

ベン・アフレックさまもリブ・タイラーさまもぜんぜん知らなかったです。

私、見る映画がアクション系に偏ってますので、リチャード・ギアさまとかメグ・ライアンさまとかジュリア・ロバーツさまとかヒュー・grantさまとか、全然見ないんですよ。

ちょい昔だと、デ・ニーロさま、パチーノさまはめっちゃ見たけどホフマンさまはパピヨンでしか知らないとか。

ま、こういう話はおいといて。

アルマゲドン。

地球にとんでもない大きさの隕石が接近する。衝突を回避する方法はない。

NASAは隕石にシャトルを着陸させ、隕石にドリルで穴をあけて核爆弾を埋め込み、爆発させるという手段を選びます。

で、油田掘りのプロであるブルース・ウィリスさま率いるチームが宇宙に飛ぶことになるって話です。

ちょっと設定に無理があるような気がしますね。

当然ミッション遂行にあたっていろんな事件事故が起こるわけですが。

ウィリスさま、果たして人類を救えるか。

音楽がいいですね。エアロスミスの曲が全編に流れます。

「カム・トゥゲザー」とか「スイート・エモーション」とか。んで「アイ・ドント・ウォント・トゥ・ミス・ア・シング」が流れる。なんかこの曲が流れるだけでお腹いっぱいになっちゃいました。



## ジャッジ・ドレッド

---

1995年アメリカ映画

監督 ダニー・キャノン

主演 シルヴェスター・スタローン、ダイアン・レイン、ジョアン・チェン、マックス・フォン・シドウ

近未来のアメリカ。

核戦争かなんかの後、社会システムが崩壊して、秩序維持のために生まれた警察官・検察官・裁判官・死刑執行人などの権限を集中させたジャッジってえ治安維持部隊の物語。

スタローンさまはそのジャッジの一人。名前はドレッド。だからジャッジドレッド。

別にドレッドヘアなわけではありません。

そんな世界の説明が、「スター・ウォーズ」みたいに冒頭の字幕で説明される。

楽でいいですよ。こういうのありだと。

この世界に終身刑の囚人として監禁されている男がおります。こいつが脱獄する。

そしてスタローンさまの格好で暗殺とかするわけです。

で、スタローンさまがつかまって、有罪になって、飛行機で護送される途中、突然登場したならず者が飛行機を撃墜。そいつらに捕われて、逆にそいつらをやっつけて、町に戻って濡れ衣を晴らすためにワルと対決するという話。

「ランボー」と「デモリッション・マン」と「ロボコップ」足して三で割ったみたいですよ。

途中、スタローンさまが有能な裁判官とか検察官とかのDNAを合成されて生まれたとか、その実験で生まれたもう一人がワルのボスだったりとか、ロボコップみたいに敵ロボットが登場したりとか、やたらサービス精神が旺盛ですが、そこまで無理やり話を複雑にしなくてもいいんじゃないって感じです。

なんでお前がこんな映画に出るねん、みたいな人も出ています。

「偉大なる生涯の物語」「エクソシスト」のマックス・フォン・シドウ大先生とか、「ラストエンペラー」のジョアン・チェンさまとか。

いや、こういう映画が悪いとは言いませんよ。しかし...なんかアメコミ風アクション映画にこういう人を起用するのって、いかがなものかって思っています。

なんか見てはいけないものを見てしまった感じ。

「孔雀王」に緒形 拳さまが出演されているのを見てしまったような気まずさです。

スタローンさまは主役だからいいんだけど。

## 模倣犯

---

2002年「模倣犯」制作委員会作品

監督 森田芳光

原作 宮部みゆき

主演 中居正広、木村佳乃、津田寛治、藤井隆、山崎努、寺脇康文、小池栄子、爆笑問題

邦画もとりあげませえ。

うむむむむむ。コメントしにくい映画です。森田監督の映画、苦手です。

「家族ゲーム」もそうだし、「39」も「黒い家」も苦手だったです。なんか、独特な世界を構築する方ですが、それにしても個性が強すぎです。

えっとですねえ。この映画って、推理ものですから、犯人とか筋書きとかあまり書きちゃいけない。

ただ、ビデオジャケットとか映画の予告編とかで犯人は知ってるでしょ？

まああえて書きませんが。

とりあえず、都内の公園で切断された女性の腕と鞆が発見される。

これが事件の発端なわけです。

やがて第二の被害者が発見され、連続殺人事件になります。

犯人はマスコミに犯行声明を送るとか、生放送のニュース番組に生電話をかけるとかをはじめます。

やがて公開殺人ライブをネット配信するからそれをテレビ中継しろとか言い出す。

このライブ中継の最中、一台の車が事故で崖から落ちて爆発炎上します。

運転席、助手席の男が死にますが、トランクから死体が発見されたからさあ大変。

ここまでが前半部です。

で、いきなり物語は事件発生前に戻る。

そこから時間をもう一度なぞりながら、犯人の立場からもう一度物語が進む。

で、車が崖から転落して中盤部が終了。

後半、物語は犯人・被害者・マスコミの三つの視点をからませながら最終局面にむかいます。

原作はすごく面白いんだらうと思います。

でも、私はとても普通の映画ファンなので、森田監督のように特殊な映像手法で攻めてこられると、それを味わう以前に拒否反応が先行してしまいます。

正直、集中できなかった作品でございます。

## 心の旅路

---

1942年アメリカ映画

監督 マーヴィン・ルロイ

主演 ロナルド・コールマン、グレア・ガースン

私が劇団をしていた頃の話。

とあるCMの撮影現場で知り合ったプロデューサーの方と、そのCMの待ち時間中に映画の話を  
していました。

私は「カサブランカ」とか「第三の男」が好きだと言いました。

その頃はまだ「天井桟敷の人々」は見ていなかったです。

で、そのプロデューサーさんの生涯ベストワンの映画は「心の旅路」だったそうです。

主演はロナルド・コールマンさまとグレア・ガースンさま。

絶対に見なさいと言われて、もしその人と別の現場でいっしょになったら困るから、慌てて見ま  
したです。

ロナルド・コールマンさまは軍人さん。砲撃のショックで記憶喪失になってしまいます。

そんなコールマンさまが知り合ったのは、踊り子のガースンさま。

二人は恋におち、結婚します。で。ありがちなパターン。

コールマンさまは今度は交通事故にあって頭を打ち、砲撃のショックで失った記憶を取り戻すか  
わりに、砲撃から交通事故までの記憶を失ってしまうわけですな。

コールマンさまは実は大会社の御曹司で、それを知ったガースンさまは彼の会社に秘書として雇  
われまして、彼を見守る...

ってな話。

物語後半のポイントは、コールマンさまがいつガースンさまのことを思い出すか、に尽きます。

結局思い出すんですよ。絶対。

でもその思い出すのがいつなのかって話ですから。

で、その思い出す場面だけを待ちながらヤキモキしながら映画を見てしまうってことになるわけ  
ですな。

すごく面白いとは思わなかったですが、なんかほんのりといい映画だったっす。

ちなみに「コールマン髭」って髭の形があるんですが、その言葉は、このロナルド・コールマン  
さまの髭が語源です。

## エレファントマン

---

1980年アメリカ・イギリス合作

監督 デビッド・リンチ

主演 ジョン・ハート、アンソニー・ホプキンス、アン・バンクロフト

象皮病という治療不可の病気に身体を蝕まれた青年、ジョン・メリックの悲しい物語。彼は見世物小屋で暮らしていましたが、そこで彼を見つけた医師ホプキンスさまにより治療を受け、人間らしい暮らしをはじめます。

しかし、畸形である彼を研究材料とし、彼の病を学会で発表する医師は、自分が見世物小屋の主人と同じことを彼に要求していることに気づき、苦悩します。

やがてあまりにも悲しい結末が待っていますです。

もともこのエレファント・マンという物語は、舞台の戯曲でありました。

イギリスではかのデビッド・ボウイさまがジョン・メリックを演じました。

舞台でのこの作品は、特殊メイクなどを使わず、肉体だけでメリックを表現するというものだったようです。

映画版のメリックを演じたのはジョン・ハートさま。

「エイリアン」で最初の犠牲者役、腹からエイリアンを出して死ぬ宇宙飛行士役がジョン・ハートさまです。

それよりもびっくりするのは、超アーリーな時期の後のレクター博士役者、アンソニー・ホプキンスさままでございますわな。

私はホプキンスさまのことは、この映画以前に、海洋パニック作品の「ジャガー・ノート」で知ってたんですが。

っていう意味では、「ジャガー・ノート」って映画、今では知る人ぞ知るって作品ではありますが、後のハリポタシリーズ初代校長先生リチャード・ハリスさまと、後のレクター博士ホプキンスさまが競演していたって豪華な作品だったんですよ、今にして思えば。

2000年アメリカ映画

監督 ジョン・ウー

主演 トム・クルーズ、サンディ・ニュートン、ダグレイ・スコット

トム・クルーズさま、カッコよすぎて映画です。

監督はジョン・ウーさま。

この監督さん、本当にアクションを面白く撮りますです。

主人公は前作、「ミッション・インポッシブル」で活躍したイーサン・ハントというIMFのスパイです。

トム・クルーズさま、いきなりフリークライミング見せてくれます。

今回の敵役はIMFの元スパイ、ダグレイ・スコットさま。

彼は組織から命じられたミッションで裏切ってしまうわけですね。

ある製薬会社がワクチン開発途中で作ってしまった驚異的な致死率をもつキメラというウイルスの開発者を殺し、どこかに姿を消す。

IMFはダグレイ様の元カノのサンディ・ニュートンさまをおとりにして彼の動きを探ろうとする。

トム・クルーズさまは上司のアンソニー・ホプキンスさまに命じられてミッションにとりかかるわけですね。

メンバーとして召集されるのは前作でもチームに参加したヴィング・レイムスさま。

ここからはキメラウイルス争奪を軸に物語が進行していきます。

キメラを培養している製薬会社ビルでの銃撃戦だとか、ウイルス受け渡し場所での銃撃戦。

そこから銃撃カーチェイス。

それが終わると肉弾戦。

カンフー映画顔負けのアクション。

すげえすげえ。

この映画に関してはジョン・ウー監督を起用したプロデューサー、トム・クルーズさまの作戦勝ち。

アクションにこだわったスパイ映画。

前作での推理サスペンスモードを控え、わかりやすい構図で押しています。

監督自らインタビューで答えていたように、これは続編ではなくM I 2という独立した作品であると考えていいでしょうね。

## クリムゾンリバー

---

2000年フランス映画

監督 マチュー・カウヴィッツ

主演 ジャン・レノ、ヴァンサン・カッセル

原作 ジャン・クリストフ・グランジェ

フランス映画です。

映画を見た人はみんな口をそろえて「面白い」って言いまして、ずっと機会を待っていたのですが、かなり経ってから見ました。

フランスの辺鄙な山奥で死体が発見されます。

死体は近くの大学の研究生で、地上五十メートルの崖の上で胎児のような姿勢で見つかります。身体には生きながら拷問にかけられたような傷。

この事件を捜査するのがジャン・レノさまです。

んでヴァンサン・カッセルさまは、それとは全く別の事件を捜査している警察官。

この二人がある場所です。

やがて閉鎖的な村社会というか大学社会というか、そういう悪しき地域システムが事件の根幹にあるのではないかと二人は気づきます。

犯人はアッと驚く人物。

そしてアッと驚くトリック。

しかしながら「なんじゃ、こりゃあああああ」って感じ。

それはないやろ、とってしまいました。

うん。

ありはありなんですけど、映画の物語的にはちょっと違うんじゃないかなって犯人でございました。

ヴァンサン・カッセルさまってひょっとして...って思って調べてみたら、やっぱり往年の名優、ジャン・ピエール・カッセルさまの息子さんでした。

衝撃の問題作「アレックス」とか、最近では「ブラック・スワン」なんかにも出演しておられます。

「アレックス」見たけど、ヴァンサン・カッセルさまがこの映画に出演してた役者さんだってこと、完璧に忘れておりました。

## エントラップメント

---

1999年アメリカ映画

監督 ジョン・アマール

主演 ショーン・コネリー、キャサリン・ゼタ・ジョーンズ

ショーン・コネリーさまは怪盗というか泥棒というか、絵画や芸術品を狙う大泥棒です。

キャサリン・ゼタ・ジョーンズさまは保険会社の調査員。

コネリーさまを追っています。

で、コネリーさまに泥棒の仲間として接近し、彼を捕らえようと考えます。

そのためには泥棒としての自分を信用させなきゃってことで...

まずは美術館で公開中の秘宝のマスクを失敬し、次にはクアラルンプールで銀行に潜入。

コンピュータープログラムに不正アクセスし、巨額の送金をするプログラムをインストールしようとする。

コネリーさまの相棒というかワル仲間はヴィング・レイムスさま。

「ミッション・インポッシブル」の天才ハッカー役の人。

しかししかし。

次第にキャサリン・ゼタ・ジョーンズさまがよくわからなくなってきました。

コネリーさまの味方として本当に大金を狙っているのか、保険会社の調査員としてコネリーさまをはめようとしているのか。

コネリーさまもよくわからない。

ジョーンズさまを信用してるのか疑っているのか。

ジョーンズさまの上司も、彼女を信用しているのか疑っているのかわからない。

ってところでいよいよ大仕事。成功するのか失敗するのか。

ラストにドンデン返しあり。

しかあし。

一応、推理作家志望なんすよね、私。

推理ものを書く者の性でしょうか。こういう作品を見ていると、様々な結末のパターンを物語中盤から予測してしまいます。

意外だと評判のラストも残念ながら予想の範囲内でした。

もうひとひねり欲しかったです。

## 砦なき者

---

2004年テレビ朝日製作のテレビドラマです。

監督 鶴橋康夫

主演 役所広司、妻夫木 聡、鈴木京香

原作・脚本 野沢尚

音楽 宇崎竜堂

野沢 尚さまのかなり後期の作品です。

野沢さまのファンだったので、長い間見る気持ちにならなかった思い出の二時間ドラマです。野沢さまの作品、すごく好きでけっこう応援していましたので、DVD化もされていることで、ドラマではありますが、あえてご紹介します。

冒頭、テレビ局の編成会議の場面があります。

役所広司さま、大杉漣さま、塩見三省さま、田山涼成さま、内野聖陽さま、近藤芳正さまなどのちょっと重い芸達者たちが罵り合いながら会議する。この場面だけでお腹いっぱいになりました。

野沢さまお得意のマスコミ現場内幕ものです。

女子高生売春組織の特集をしたニュースキャスターが役所さま。担当ディレクターが鈴木さま。この番組のオンエア直後に売春組織の元締めとされた女子高生が自殺します。

この少女の恋人が妻夫木さま。妻夫木さまの告発によって役所さまは番組を降ろされます。で、妻夫木さまはこの件でマスコミの寵児になります。

しかしこれを不審に思った鈴木さまが妻夫木さまを調べます。

調べた結果、妻夫木さま、マスコミの報道によって自殺に追いやられた父の復讐のためにそのマスコミを利用しているのではないかという疑いがもたれはじめます。同時に彼は自分の野望達成のためには手段を選ばない男だということがわかります。過去に彼に殺されたっぽい人物や、重傷を負わされた人なんか浮かび上がってくる。

やがてテレビ局は役所さまと妻夫木さまの直接対決の番組を仕組みます。

そのために役所さまがとった行動とは...

そしてその結末は...

役所さま、妻夫木さまが素晴らしい。鈴木さまもなかなかいいです。編成部長役の内野さまも良い。時期的には映画「黒い家」あたりの時期の作品になるのではないのでしょうか。

ちなみに私、長い間、この作品が野沢さまの遺作だと思っていましたが、このあと映画「深紅」って作品がありまして、そちらが遺作ってことになっているようです。

また、亡くなったときに手がけておられた連続ドラマがありまして、脚本のほうでは未完ながらそちらが遺作だそうです。

もっと野沢さまの作品、見たかったです。



# 呪怨

---

2003年日本映画

監督 清水崇

主演 奥菜恵、津田寛治

呪怨。

とっても怖いです。

ビデオで1・2、映画でも1・2がありまして、アメリカ版リメイクは1・2・3。

そのあと、「呪怨・黒い少女」「呪怨・白い老女」なんて新作も発表され、いまだ呪怨ワールドは増殖中でございます。

本当は一番怖いのはビデオ版の1です。

この作品、「怖すぎる」って理由で発売禁止になりそうになったとか。

ただ、2は映画もビデオもちょっとわけわからなくなってきました。

とりあえずパルプフィクションみたいに時系列を無視して、登場人物ごとのエピソードを積み重ねていくという手法をとっています。

だから時間が前後したり、物語途中で死んだ人が後になって出てきたりとかしますです。

描かれているのがどの時間の話で、誰を主人公にしているのかをしっかりとつかまえておかないとあれれとか思うかもしれません。

ノイローゼ気味のイラストレーターの男が、妻が浮気したと思い込んで妻と子供を殺します。

かなり残酷な方法で。

で、妻は夫だけではなく、自分を取りまく世界そのものを激しく恨みながら死んでいく。

その子供は行方不明ってことになっていますが、恐らく死んでいるでしょうね。

で、妻と子供の霊が家に入出入りする全ての人と、その周囲の人を呪うわけです。

奥菜 恵さまは空家になった家の次の持ち主の家庭のおばあちゃんを介護しにやってきたヘルパーさん。

呪われます。

津田寛治さまはその借り主。

呪われます。

って感じで、どんどん呪われる人が増えていきます。

どこまでいくねんって感じです。

とりあえず映画版を見ていただいて、物足りなかったらビデオ版って順番がよろしいかと思えます。

ハリウッド版は怖さ的にはイマイチかな。

## ゴッドファーザー

---

1972年アメリカ映画

監督 フランシス・フォード・コッポラ

主演 マーロン・ブランド、アル・パチーノ、ダイアン・キートン、ジェームズ・カーン、ロバート・デュバル

音楽 ニノ・ロータ

やっぱりこの作品は避けて通れない。というか、スタッフキャストとも、資料とか全く見ずに書きました。最近の映画だとかはいかない。

ニューヨークで一大勢力をもつマフィアのコレオーネ・ファミリーの物語。

このファミリーのドンがマーロン・ブランドさま。長男がジェームズ・カーンさま、次男がジョン・カザールさま、三男がアル・パチーノさま。

物語はブランドさまの末娘の結婚式から始まります。こういう席ではファミリーの力を頼っているいろいろな人が集まってきます。映画の主演をとりたいて泣きついてくる人気歌手だとか、レイプされた娘の仇をとってくれと言ってきた葬儀屋だとか。

人気歌手に主演をとらせるためにファミリーがとる方法が実はえげつないんですが。

さてさて、コレオーネ・ファミリーは別のファミリーと抗争しております。この抗争でブランドさまが撃たれる。海軍に従軍していた三男のパチーノさま。ファミリーの事業に無関心だった彼ですが、父を撃った男とその黒幕を手打ちの席で殺し、シシリーに逃げます。

パチーノさまは婚約者のダイアン・キートンさまをほったらかして現地の娘と結婚。

しかし対立組織の巻き返しが始まる。

長男のジェームズ・カーンさまはマシンガンで蜂の巣にされ、パチーノさまは車に爆弾を仕掛けられて妻が爆死。

ブランドさまは対立組織と和平を結び、パチーノさまはニューヨークに呼び戻されます。パチーノさまは兄カーンさま亡きあと、役立たずの次男カザールさまをすっ飛ばして、ファミリーを継承する決意をします。

やがて父ブランドさまは大往生を遂げる。ここでパチーノさまは一気に対立組織を壊滅させる作戦に出ます。

敵組織と通じていたファミリー幹部をまず始末する。そして次兄を馬鹿にしたカジノの実力者だとか、対立組織のボスだとかを一気に片付けます。そして兄殺しの片棒をかついでいた妹の夫をも殺す。映画の冒頭で結婚した妹の夫です。

説明が前後しますが、トップシーンでドンに復讐を願い出た葬儀屋にカーンさまの死体をきれいにするのを頼んだりとか、細部で縦横に物語が交錯しています。

三時間という物語の長さを感じさせない構成も素晴らしい。

歴史的な名作であります。

## グリース

---

1978年アメリカ映画

監督 ランダル・クレイザー

主演 ジョン・トラヴォルタ、オリヴィア・ニュートン・ジョン

高校生くらいのときに見た映画です。映画としては、本当にどうってことないです。この映画を青春の一本に選んでいる方がもしおられたら申し訳ないのですが。

「サタデー・ナイト・フィーバー」で一躍時代の寵児となったトラヴォルタさまが、人気の女性シンガー、オリヴィア・ニュートン・ジョンさまと共演。おおすごい。僕も私も見なきゃ、って感じの映画。

ビートルズの「ヘルプ」や「レット・イット・ビー」を人生のベストワン映画にあげる人はいるでしょうが、マッチさま明菜さまの「傷だらけの純情」だとかマッチさまの「嵐を呼ぶ男」とかチェッカーズの「タンタンタヌキ」とか、ましてやフォーリーブスの「急げ若者」とかをベストワン映画に選ぶ人、少ないと思うんですよ。

なんか人気あるから映画撮ろうよ、みたいな感じが見え見えで。ねえ。

「グリース」もそういうところある映画です。でも時代を懐かしむのにはいい映画。

トラヴォルタさまは不良高校生。でもいいとこのぼっちゃんのふりをしていかにもいいとこのお嬢さんとひと夏の恋をする。この相手がオリヴィアさま。

で、オリヴィアさまがトラヴォルタさまの高校に偶然転校してきます。トラヴォルタさま、慌てる。

最初のうちはネコかぶっていい子ぶったりするんですが、結局本性晒してしまっ、トホホ、俺の恋は終わったあ、みたいな感じになりますが、最後にオリヴィアさまがいかにもロックンロールねえちゃん風不良ファッションで登場。メデタシメデタシ。

まあ途中にいろいろ事件とかあるっちゃああるんですが。

グリースってのは不良のリーゼントに使うグリスのことですなあ。お分かりかと思いますが。

いちおうミュージカル仕立てで、トラヴォルタさまもオリヴィアさまも歌います。

トラヴォルタさま、若いです。トラヴォルタさまはこの後、「ステイン・アライブ」みたいなダンスものに出て、その後演技派に転向。

デ・パルマ監督の「ミッドナイト・クロス」とかに出演。

しばらく死んだふりしてましたが、「フェノミナン」「パルプ・フィクション」あたりで息を吹き返し、「ブローケン・アロー」「フェイス・オフ」で見事に名悪役の仲間入り。

この人がこんなに悪役の似合う役者だとは思わなかったです。

## リーサルウェポン3

---

1992年アメリカ映画

監督 リチャード・ドナー

主演 メル・ギブソン、ダニー・グローバー、ルネ・ロツソ、ジョー・ペッシ

撮影、なんとヤン・デ・ボン

1、2のこと書いてないのになんで3のこと書くんでしょう。答えは簡単。この本の元になったブログ書いたところに見たからです。

こういうブロークンな流れ、慣れてください。

個人的には4が一番好きな「リーサル・ウェポン」シリーズです。

これも答えは簡単、ごひいきのジェット・リーさまがでているからでございます。

さて今日は3のお話。

メル・ギブソンさま演ずるリッグス刑事、すっかり明るくなりましたね。

パート1では自殺未遂の常習者って設定でしたが。冒頭いきなり爆発物処理に失敗して、ビルを吹っ飛ばします。

この失敗でギブソンさま・グローバーさま両名は交通課に飛ばされる。

ここで二人は現金輸送車襲撃現場に居合わせ、襲撃犯を逮捕する。しかしこの犯人が警察署内で殺されてしまう。殺人犯は凄腕の元警官。

内部調査に来ていた女性警官がルネ・ロツソさま。

犯人の逮捕に協力する不動産屋がジョー・ペッシさま。

ロツソが調べていたのは警察内部の裏切り者。

押収した銃をギャングに横流ししていたのが例の殺人犯だったわけです。

大胆不敵な犯人は警察官を人質に署に入り、倉庫の銃や弾丸をまたまた強奪。

これに気づいたギブソンさま・グローバーさま・ロツソさまと壮絶な銃撃戦とカーチェイス。

とり逃がすが、ペッシさまの情報でアジトに突入し...

ロツソさまのキャラがいいです。

ギブソンさまと古傷を見せ合い、自慢しながら結果的に服を脱いでいく。そこからいちゃいちゃが始まる。それでいて格闘場面になるとカンフーアクション。物語後半ではすっかり恋人どうし。いいなあ、リッグス刑事、幸せそうで。

## 破線のマリス

---

2000年「破線のマリス」製作委員会作品

監督 井坂 聡

主演 黒木 瞳、陣内孝則、白井 晃、笈 利夫、篠田三郎、中尾 彬

野沢 尚さまが江戸川乱歩賞を受賞した作品の映画化。当然脚本は野沢 尚さまです。テレビ局の内幕もの。やりての女性編集マン黒木さまが、犯罪告発のために自らが仕掛けた映像の罠に自分自身がはまりこんでいくって作品。

マリスってのは敵意・悪意・犯意って意味です。

冒頭いきなり中村敦夫さまと鳩山邦夫先生のニュース番組での生放送トーク。そのオンエアの最中、次のコーナーのビデオを編集する黒木さま。捏造すれすれの映像を作り、それをオンエア。疑惑の人物を犯人とイメージづけようとします。

黒木さま演ずる女性編集マンは日常的にこういうことをやっているテレビウーマン。よくありますよね。警察より先にマスコミが犯人つくってしまう。怖い怖い。

マスコミによってつくられる犯人は陣内さま。

陣内さまは郵政省の官僚。黒木さまが編集して映像によって、彼は郵政省の疑惑を追っていた弁護士殺害の犯人と目される男にされてしまいます。

情報画像の提供者はその後、姿を消す。ちなみに黒木さまは離婚した夫との間に十歳の子供がいます。

やがて陣内さまは黒木さまをつけまわすようになる。放送局や自宅近くで黒木さまを待ち伏せしたりします。

やがて自宅に侵入者の気配。

寝顔をビデオ録画され、そのテープが届けられる。んで、黒木さま、自分の生活を脅かす影との対決を決意します。

何が正しいのか。何が間違っているのか。

黒木さまがはまりこむ映像の罠とは何か。

何が起こっていて何が起こっていないのか。

さすが映像畑出身の乱歩賞作家の作品であります。

意外な結末が用意されています。残念ながら、原作では私は作家・野沢 尚さまが仕掛けたトリック、見抜いてしまいました。途中のたった一つの文のおかげ。でもその一文を見逃してしまっていたらトリックを見抜くのは無理だったかも。巧みな伏線というもののお手本のような作品です。

結末を知っていてもラストは泣ける。

映画のラストは特に秀逸。

すべての謎がラストたった三分の映像で解けてしまう。すごい種明かしてこういう映画のことを言うのでしょうか。

## スターウォーズ・帝国の逆襲

---

1980年アメリカ映画

監督 アーヴィン・カーシュナー

主演 マーク・ハミル、キャリー・フィッシャー、ハリソン・フォード、ビリー・ディー、ウィリアムス

このシリーズに関しては役名も書いたほうがわかりやすいでしょうなあ。

主演はマーク・ハミル（ルーク・スカイウォーカー）、キャリー・フィッシャー（レイア姫）、ハリソン・フォード（ハンソロ船長）、ビリー・ディー・ウィリアムス（カルリシアン男爵）、デヴィッド・プライス（ダース・ベイダー）、アレック・ギネス（ベン・ケノビ）、んでフランク・オズ（ヨーダ操演、声）。

スターウォーズ。

物語は当初、九部作が予定されていましたが、ゼネラルプロデューサー、ジョージ・ルーカスさまの高齢のために六部作に変更になりました。

この物語は後半三部作の二作目。全体では五作目にあたります。

前作「新たな希望」で第一作からちょろちょろ出ていた帝国軍の要塞「デス・スター」を破壊した革命軍。

その後、氷の惑星に前線基地を構え、抵抗活動を続けています。

ここでベン・ケノビの霊にヨーダのもとで修行をするように命じられるルーク。

惑星には帝国軍の追っ手がやってきます。

交戦しながら離脱するソロとレイア。

ルークも離脱し、彼は単独でヨーダのもとで修行をはじめます。

ソロの船は故障し、二人はカルリシアン男爵を頼って雲の惑星に身をよせますが、男爵の裏切りでソロ、レイアは帝国軍に囚われます。

帝国軍の狙いはジェダイの騎士の血をひき、その力が目覚めはじめたルーク。

フォースの力でソロとレイアの危機を知ったルークは二人を助けに男爵の雲の惑星へ。そこで待ち受けるのがダース・ベイダーでございます。

そしてベイダーとルークの一騎打ち。

結局、ソロは氷づけにされるわ、ルークはベイダーに片腕飛ばされるわ、えらいこっです。

そうとうドンヨリして物語は終わります。

そして物語は第六部に続くと、こういうこっです。

三部作の中間作品の宿命でしょうか。この話もエピソード2（クローンの逆襲）も、同じ感じのドンヨリ感を残して終わります。んで続く。

三部作の二作目ってたいていこんな感じっていえばこんな感じかもしれませんね。

## ターミネーター

---

1984年アメリカ映画

監督 ジェームス・キャメロン

主演 アーノルド・シュワルツネッガー、リンダ・ハミルトン、マイケル・ビーン

今となっては説明不要の感のあるSF映画の傑作でございます。

未来世界、人間と機械が戦っていて、機械軍の防衛線を破る男がジョン・コナー。

機械軍は考えた。この戦いを負けないものにするためには、過去に遡ってジョン・コナーが生まれないようにすればいいのだ。

んで、殺人機械（ターミネーター）を送り込んでジョン・コナーの母となるサラ・コナー（リンダ・ハミルトンさま）を殺そうとする。

このターミネーターをまだまだ芝居が下手で筋肉オバケだったシュワさまが演じております。

ハミルトンさまを守るために後から未来から追いかけてきたのがマイケル・ビーンさま。

んで、最後にはハミルトンさまとビーンさまが仲良くなって結局ジョン・コナーが生まれる。

息子に戦士としての知識を教えるのも母なので、結局未来からターミネーターを送ったことが戦士のリーダー、ジョン・コナーを生むことになって、うーん。ややこしい。

2、3と物語が進むにつれてよじれていく時間軸。

ややこしいややこしい。

まあこの映画以後によじれていく物語はまた後日書くとして、本作ではターミネーターとハミルトンさま、ビーンさまのおいかけっこが見どころ。これはこれで名作でございます。

## 踊る大捜査線 THE MOVIE 2・レインボーブリッジを封鎖せよ

---

2003年東宝作品

監督 本広克行

脚本 君塚良一

主演 織田裕二、柳葉敏郎、いかりや長介、深津絵里、真矢みき、水野美紀、ユースケサントマリア・小西真菜美

人気テレビ番組の映画版第二弾、なんて書かなくても十分わかりだと思えますが。亡くなった父が大好きだった作品の映画化です。

冒頭いきなり、特殊部隊チームによる豪華客船ジャックの犯人鎮圧デモンストレーション。マスコミを集めての警察広報活動ですな。犯人役はご存知湾岸署の刑事たち。

織田さまは特殊部隊リーダーから「実弾を使わない以外は実戦同様。しっかりやれ」とか言われてブチキれます。んで湾岸署の皆様マジで特殊部隊に応戦。

特殊部隊に勝ってしまう。いきなりやってくれます。

今回の事件は連続殺人犯。死体をディスプレイする猟奇殺人鬼。

捜査本部の監理官は真矢さま。すげえむかつく女。

所轄を兵隊代わりに使い、こき使う嫌なキャリア婦警を見事に演じておられます。

事件が動くときの緊迫した描写。細かいカット割りを生かした演出。

相変わらず素晴らしい。

第一弾やこれまでにオンエアされた二時間スペシャル同様、細かい伏線が縦横無尽に張りめぐらされています。

ばらばらのパーツがやがて一つに統合されていくドラマ展開は爽快。

ドラマ先行の映画だからといって甘くみちゃいけません。

内容もかなり深い。

映画シリーズはこのあと正編の三作目が製作されたほか、スピンオフ作品が二本、二時間ドラマでも三本の外伝が製作されている大人気シリーズです。

織田さまってこの青島シリーズと「アマルフィ」の黒田シリーズ、どっちのほうが好きなんですか。こっちのほう伸び伸びやっておられるように感じるのですが...



## ナインハーフ

---

1986年アメリカ映画

監督 エドリアン・ライン

主演 ミッキー・ローク、キム・ベイシングー

恋愛ものをあまりとりあげてなかったの、何か書こうって思って、ずっと考えていたんですが、ないですねえ。あまりいい恋愛映画。

ちゅうか、ほとんど見てないから、引き出し少なすぎ。

この映画は予告編があまりにもかっこよかったので見ちゃいました。

ビリー・ホリデイの「奇妙な果実」が陰鬱に流れる。

「究極のエロティック・ムービー」とかいうテロップ流れえの、いちゃいちゃする画像流れえの。

究極なエロティックな場面ってどんなんやねん、って期待して見てましたが、あんまり究極じゃなくてがっかりしたような記憶がありますです。

画廊を経営するベイシングー。んで、そこにロークがやってきて、二人は恋におちる。

出会ってから別れるまでの九週間半を描いた作品。

だから「ナインハーフ」。原題は「NINE 1/2 WEEKS」。そのまんまやんけ。

ミッキー・ロークってかっこいいのかなあ。あんまりいいって思わないんですが。

「究極の」ラブシーンはカテゴリーとしてはソフトSMになるんだろうと思います。目隠しして、これなんだ的な感じでお腹とか背中をそのもので愛撫すると。氷をお腹にあてて、つつつ。ああん、って感じ。

「究極の」って言葉に踊らされた観客の典型でございます。

同じこと誰かとやろうと思いつつ、結局しないままこの年になっちゃった。でも今さらこんなことやろうとも思わないし。

ただ、マフラープレゼントするときに、後ろからかけてあげてそのまま抱きしめるってのは一回だけやったような記憶があります。この映画見てたときに片思いしてた彼女に。

バラの花束渡して、マフラーかけてあげて抱きしめて。

すごく感激されました。その子、ショートカットの運動部系の子で、自分のことをときどき「俺」って言うような子で、今までそんなことされたことないって言われて。

ただし。ここまでやっても駄目なときは駄目。

まあ私はミッキー・ロークじゃなかったわけで、彼女もキム・ベイシングーじゃなかったわけですな。

あかん、凹んできた。なんか恋愛映画の感想とか書いたら凹んじゃうのは気のせいだろうか...

## ターミネーター 2

---

1991年アメリカ映画

監督 ジェームス・キャメロン

主演 アーノルド・シュワルツェネガー、リンダ・ハミルトン、エドワード・ファーロング、ロバート・パトリック

ターミネーターシリーズの中で、タイムパラドックスに挑戦する内容の作品。

前作で人類の未来を知ってしまったハミルトンさま。

今は精神病院に隔離されています。

息子のファーロングさまはっぱしのワルに成長しています。

そんな現在に、コンピューター軍は再び強力なターミネーター、パトリックさまを送り込みます。

目的はファーロングさまを殺すこと。

で、未来の人間軍は前作で送り込まれてきたシュワルツェネッガーさま型のターミネーターに「ファーロングさまを守る」プログラムを入れて送り込む。

精神病院に忍び込んだパトリックさまとの攻防。

逃げきったハミルトンさま、ファーロングさま、シュワルツェネッガーさまは、未来で人類に反乱を起こすコンピュータの開発そのものを止めようとして、設計者とその会社を攻撃します。

んでそこに再びパトリックさまが登場。ヘリチェイスやカーチェイスの末、またしても工場での追いかけっこ。

物語が進み、登場人物が動けば動くほど、時間軸が弄ばれ、パラドックスがいつ起きてもしかたのない様相を呈してきます。

まあそもそも最初の設定からしてパラドックスを起こすことが目的だったからなあ。第一作では結局未来は変わらず、どんよりした終わりがたしましたが、この二作目は未来が変わるかもって終わりがたをします。でも未来が変わると人類とコンピューターの戦争もなくなるから、第一作のターミネーターも来なくなって、マイケル・ビーンさまも来なくなって、ファーロングさまが生まれることはなくて、でもそうなったらまた未来が変わって。

うーん。パラドックス。この作品そのものは、「未来は変えることができるから頑張ろう」という力強いメッセージで終わりますが、残念ながら作品世界の根幹にかかわる「タイムパラドックスを起こさないプチ幸せな結末」はついに探すことはできず、シリーズはこのあと、テレビシリーズの「ターミネーター サラ・コナー・クロニクルズ」を経て3、4と、どんどん破滅ワールドに突入してまいります。

## 動乱

---

1980年東映作品

監督 森谷司郎

主演 高倉 健、吉永小百合、米倉斉加年、田村高廣、田中邦衛

五・一五事件から二・二六事件、さらにその事件の收拾までを描いた作品。

これより後に五社英夫監督がそのまんまのタイトルで「二・二六」って映画を撮りました。

こいつはこいつでまた別の機会にご紹介しようと思っております。

五・一五事件、二・二六事件は様々な立場から様々な事件検証が行われ、様々な物語が作られています。

この作品は決起した青年将校たちの立場と、さらにはその妻や恋人の目からみた、いわば「女の二・二六」といった描き方をしています。

だから内容は限りなく青年将校寄りの視点で描かれています。

あまりにも有名な事実の映画化なので、歴史解釈に差がでるといけませんので、事件そのものに対するコメントはあまりしません。

あと、事実誤認とかがばれるといけないので、今回はあらすじもパスだなあ。ちなみに私は、軍部暴走の歯止めとして高橋蔵相は生きていなければならなかったのではなかったかと考えている人なので、どちらかという決起行動については批判的です。

しかし決起する側の理屈もわからないではない。

当時の政治体制がやっていたことと世界情勢を考えると、決起止む無しとは思いますが、現実にはこの事件が引き金となって軍部が暴走し、結果的に泥沼の大戦に突入していったのも事実。難しいですね。

映画では米倉さまが実に良いです。

心情的には決起将校たちを理解しながら、憲兵という立場で彼らの前に立たねばならない。

悲しい形相で「私は憲兵です」と言って、高倉 健さまの前に立ちふさがり、斬られて命を落とす。おお、さすが劇団民芸の中心俳優。

すごい名演技。

三時間近い大作の中で、実は主役の高倉さまより目立っておいしいところをもっていってましたです。

## ターミネーター3

---

2003年アメリカ映画

監督 ジョナサン・モストウ

主演 アーノルド・シュワルツェネッガー、ニック・スタール、クレア・デインズ、クリスタナ・ローケン

「ターミネーター3」です。2から十年後、また未来からターミネーターがやってきます。今度は女ターミネーター、演ずるのはクリスタナ・ローケンさま。前作まで活躍していた母、リンダ・ハミルトンさま演ずるサラ・コナーはすでに故人という設定。ニック・スタールさま演ずるジョン・コナーはすっかりおっさんになっています。

今回のターミネーターのターゲットは成長したジョン・コナーと、そのガールフレンドのクレア・デインズさま演ずるケートという女性。なんでこの二人なん？って疑問からスタートですね。んでまたシュワルツェネッガーさま型のターミネーターが未来から送られてくる。

使命はスタールさまとデインズさまを守ること。

前作で回避したはずの「ジャッジメント・デイ」。

しかし送られてきたターミネーターは近い将来、「ジャッジメント・デイ」が訪れ、その日、機械の反逆が始まり、コンピューターの核攻撃が始まるといいます。なんなん？前作での苦労は。どうやら「ジャッジメント・デイ」は回避されたのではなく、延びただけだったと明らかになる。

サラが壊滅させたサイバーダインのかわりに、今度は軍が人類を滅ぼすスカイネットシステムを開発してしまったからさあ大変。スタールさまは第二作同様、ジャッジメント・デイを回避させようと軍施設に向かいます。

おっとここから先はネタバレでっせ。

奮闘する登場人物をよそに、物語は粛々と終末に向かって進みます。

結局スカイネットは止まらない。核ミサイルは発射される。そして第一作の未来へつながります。おお、タイムパラドックス完全回避。そうですよね。こうならないとおかしい。2の設定のまま物語が進むとパラドックスが起こるから、話はこういう決着でないといけないんです。やっぱり。

でもこれって一番安易な筋書きだと思います。

1でどんより終わった。で、救いのある結末の2ができた。でもそれじゃあパラドックスが起こるから、物語の整合性をとらせるためにやっぱり3では核戦争起こさないとだめだなあ、って感じがみえみえです。全てのパラドックスを整合させながらそれでいた悲惨ではないラストってどう作ってくれるんだろう、と期待していた作家的な期待は見事に裏切られ、パラドックスの收拾のみに重点を置いたつくりになっていたのはちと残念。

うむむ。これじゃああかんやろ、って感想をもちましたです。

## 少林サッカー

---

2001年香港映画

監督 チャウ・シンチー

主演 チャウ・シンチー、ン・マンタ、ヴィッキー・チャオ、パトリック・ツエー

元有名サッカー選手ン・マンタさま。ツエーさまのクラブチームで下働きをしながら、サッカーチーム監督就任のチャンスを待っていましたが、チームをクビになります。

失意の彼の目の前に現れたのはカンフーの達人チャウ・シンチーさま。

マンタさまはシンチーさまの天才的なキック力をサッカーに生かそうと思い、シンチーさまはカンフーを広めるためにサッカーを利用しようとする。

おお、利害が一致。

シンチーさまは少林寺の兄弟子たちを集めます。

「魔の手」の使い手をキーパーに。

「鎧の肌」と呼ばれた男をディフェンスに。

「空渡り」の達人をフォワードに。

「旋風脚」の達人もディフェンス。

みんなぶちぶち言いながらも少林寺の師の教えを思い出し、カンフーを広めるためにサッカー選手として集結します。最初のうちはただただやっていたメンバーですが、練習試合の最中に少林寺の教えが降臨するわけですね。

チームのメンバー、とんでもない力を発揮しはじめる。

チームはあれよあれよという間に大会の優勝決定戦にまで勝ち進む。

さてさて、ヴィッキー・チャオさまはシンチーさまが通う饅頭屋の店員。

シンチーさまはチャオさまに恋しまして、チャオも同じ感情を持ちます。

この二人の恋愛感情が物語後半の伏線。

この少林チームが決勝で対戦するのが因縁あるツエーさま率いるチーム。

どうやらこいつらは禁止薬物やってて、本来以上の力が発揮できるらしい。

少林チーム危うし。戦いの結末やいかに。

ヴィッキー・チャオさまがむちゃカワイイ。

前半のブサイクメイク、中盤のケバケバメイクはすべてラストのためにあります。

太極拳を操る饅頭屋。こんな店あったら行ってみたいなあ。

香港映画の常として、かなり達人のカンフー使いたちが集結しているようです。

そんな方々がサッカーユニフォーム着て、ワイヤーで吊られてCG合成の魔球を放って。

こういう絵をみるだけで監督、主演のチャウ・シンチーさまの才能を感じてしまいます。

蛇足。パトリック・ツエーさまってたかじんさんに似てる...

## ソドムの市

---

1975年イタリア映画

監督 ピエル・パオロ・パゾリーニ

原作 マルキ・ド・サド

主演 パオロ・ボナチェッリ、アルド・パレッティ、ジョルジュ・カタルディ

これって、私には幻の映画でした。封切り当時は中学生。映画好き中学生だった私は、「スクリーン」とか「ロードショー」とかで新作映画をチェックしておりました。

「エマニエル夫人」「O嬢の物語」、そしてこの「ソドムの市」あたりの文芸系ポルノっていうんでしょうか。このへんの映画は、年齢制限にひっかかって見られなかったもので、幻の映画でした。「インモラル物語」とか「ディープ・スロート」なんかも見たかった。そりゃあさあ、性への興味津々の中学生ですもん。その頃はビデオなんてものなかったわけだし。

で、そういう映画見ることができる年齢になったころはAV花盛りで、あえて難しいいやらしい映画見なくても...ねえ。

難しくないいやらしい作品選ぶじゃないですか。そんなこんなですっかり見る気をなくしてましたねえ。で、あるときレンタルビデオ屋さんでこの「ソドムの市」を見つけて、レンタルして見ました。

感想。

見なきゃよかった。理解できなかつたです。最初から最後まで。

パゾリーニ監督は、「王女メディア」とかの芸術性の高い作品を撮る監督でした。ただ、この人、有名な同性愛者だったんですね。で、この映画を撮った直後に同性の恋人に殺されてしまいました。なんかそっち系のトラブルだったと記憶しております。

この映画はそんなパゾリーニ監督がそういう趣味全開で撮った映画です。多分。

原作はそれなりに古い時代の本。サドさまってフランス革命とか、その頃の人。それを第二次大戦の頃のイタリアに置き換えています。原作は確か、フランス貴族が平民の若い男女を金で買って、好き勝手するって話だったような記憶があります。とはいってもこの本は長い間完訳されてなかったですが。

映画ではイタリア人の変態高級軍人や変態政治家が、ユダヤ人を拉致して好き勝手するって話。なんか、最初から最後までそんな調子。スカトロジーありSMあり同性愛あり。

で、普通に男女のエッチした人は銃殺されちゃうとか。わけわからん。

最後はなんか処刑場みたいなところに捕虜を連れ出して、レイプとかしてその後、拷問みたいなことして何人かの人を殺して、んで何故か兵隊がワルツ踊って終わる。わけわからん。

パゾリーニさまとゴダールさまは理解できませんです。見てかなりどんよりした作品。

どんより度は「アレックス」「レクイエム・フォー・ドリームズ」、難解度は「気狂いピエロ」、おぞまし度は「ブレイン・デッド」に匹敵します。

見たことをかなり真剣に後悔した作品でございます。

## ダーティハリー

---

1971年アメリカ映画

監督 ドン・シーゲル

主演 クリント・イーストウッド、ハリー・ガーディノ、アンディ・ロビンソン

「ダーティハリー」でっせ。

クリント・イーストウッドさま、マカロニウェスタンから出てきた人ですよ。

「荒野の用心棒」とか「夕陽のガンマン」とかがマカロニ時代の代表作。

このへんの作品はまた機会を改めて書きますです。

そこからちょこっと作品に恵まれない時期が続きます。

「白い肌の異常な夜」とか「シノーラ」とか「荒鷲の要塞」とかに出演されてましたが、もひとつパツとしなかつたって印象です。

「ダーティハリー」に出会ってブレイクした、と私は理解しております。

ダーティハリーは全部で五作作られました。

作品として一番好きなのは2ですね、やっぱり。

すごく構造がねじれていて、面白かった。

3以降はハリー・キャラハンってキャラが一人歩きをはじめて、製作側がその後ろからついていく感じがしてあんまり好きじゃないです。

もちろんこの第一作も傑作。

スコルピオという異常犯罪者を追うキャラハン刑事の物語。

スコルピオという男、少女誘拐とか無差別狙撃とかスクールバスジャックとか、とんでもないことをする異常者系の悪党ですな。

無差別狙撃を阻止しようとするハリーとスコルピオの銃撃戦とか、少女誘拐の身代金を運ぶ役を買って来たハリーが町じゅうを走り回る場面とかが印象に残っています。

しかし何といってもトップシーンとラストシーンで使われる台詞。

「この銃は44マグナムといって、お前の頭くらいふっとばすことが出来る。ところがさっきの撃ちあいで弾丸が残っているかどうか数えるのを忘れちゃった」

銃撃戦の後、犯人に銃を向けたハリーが言います。

かっこええ。

冒頭とクライマックス。冒頭でこのセリフを言われるのは、黒人の銀行強盗。

この役者さん、「ダーティハリー2」では中盤、犯人に射殺されるポン引きを演じておられた人です。

クライマックスでは、同じセリフが凶悪犯スコルピオ＝アンディ・ロビンソンさまに向かって言われます。

弾丸が残っていたのかいなかったのかはDVDでお確かめください。

## ゴッドファーザーパートII

---

1974年アメリカ映画

監督 フランシス・フォード・コッポラ

主演 アル・パチーノ、ロバート・デ・ニーロ、ロバート・デュバル、ダイアン・キートン、ジョン・カザール、リー・ストラスバーグ

映画の最後に、なんとジェームス・カーンさまが特別出演しています。

私は三部作のなかでこの話が一番好き。ドラマ的に多層構造になっています。

パチーノさま演ずるマイケルがファミリーを拡大していく様子と、デ・ニーロさま演ずるその父がファミリーの基盤を築く様子が時間を超えて並行して描かれます。

それでいながらブリッジ部分の編集にも意味というものが感じられます。

例えば、家族の問題で悩むパチーノの向こうに、彼を見つめるようにデ・ニーロがオーバーラップして過去に物語が推移するとか。そういう演出です。

ファミリーを拡大していきながら家族の絆を作り上げていくデ・ニーロさま。逆に家族の絆を失っていくパチーノさま。マフィアのボスの孤独。

とってもやるせない。

今回、パチーノさまと対立するのはバハマの大ボス、演ずるはリー・ストラスバーグさま。

ストラスバーグさまはかの有名なアクターズ・スタジオの主宰者です。いわばジェームス・ディーンさまやマーロン・ブランドさまやパチーノさまやデ・ニーロさまの師匠。

すげえすげえ。こんな人が出てる映画なのですじゃ。

パチーノさまはファミリーを守るため、再び血の粛清を決意します。そして最後に粛清されるのは実の兄カザールさま。義兄で弁護士のデュバルさまもファミリーの仕事から締め出し、妻ダイアン・キートンさまも彼のもとを去る。

パチーノは一人、兄弟たちととった懐かしい夕食を思い出す。ここでジェームス・カーンさまが登場。

強烈な演出。過去の映像が暖かければ暖かいほど、現在の孤独が鮮烈に表現されます。

そして物語はより辛辣なラストをもつパートIIIへ続きます。



## スターウォーズ

---

1977アメリカ映画

監督 ジョージ・ルーカス

主演 マーク・ハミル、キャリー・フィッシャー、ハリソン・フォード、アレック・ギネス、ピーター・カッシング

「スターウォーズ」を見返すといつも思うのですが、物語の中での時間って、びっくりするほど流れていない。

言い換えると、すごく短い時間の中にいろんな事件が凝縮されたドラマになっています。

物語はエピソード3の続きってことになっています。

我々が最初に見たスターウォーズはエピソード4・新たなる希望。

冒頭の流れるタイトルにちゃんと書いてありました。

帝国軍から新型要塞デススターの設計図を盗んで逃げるレイア姫。

それを追うダースベイダー。

レイア姫はロボットR2D2にメッセージを託し、ロボットだけを脱出させて囚われてしまう。

そのロボットを拾うのがルークという青年。

ロボットには「オビ・ワン・ケノビ、助けて」というホログラムのメッセージが。

ルークは今ではベン・ケノビの名乗っている老人にその映像を見せます。

レイアを助けに行くことになる二人。

酒場で二人に雇われる宇宙船乗りがハン・ソロ。

ここから宇宙大活劇が始まります。

かなり昔の映画なのに特撮とかもすごくよくできています。

家族揃って楽しめる一作であります。

2001年アメリカ映画

製作・監督・脚本 スティーヴン・スピルバーグ

主演 ハーレイ・ジョエル・オスメント、ジュード・ロウ、ウィリアム・ハート

未来社会。

地球温暖化の影響で世界じゅうの多くの都市が水没。

飢餓が訪れている。

都市部では産児制限が行われ、生活レベルを確保している。

こうなると資源を使用しないロボットが社会を運営することになると、そういう世界が舞台。

重病の男の子がいる。

父も母もその子の看病の疲れ果てている。

ロボット関連の会社で働いている父は、精神的に参りはじめている母のために、試作品の子供のアンドロイド、オスメントさまのモニターになります。

オスメントさまは母を思う子の心を刷り込まれ、本物の子供のように母を思いはじめる。

しかし重病の子供が奇跡的に回復したあたりからおかしくなりはじめます。

子供はオスメントさまをいじめたりしはじめる。

しかし父母はそれがわからない。

子供が回復したせいでオスメントさまが暴走しはじめたと勘違いし、オスメントさまを「ヘンゼルとグレーテル」のように森に置き去りにする。

そこで遭遇するロボット狩り。

捕われたオスメントは「ロボットぶっこわしショー」の会場で、ジゴロ・アンドロイドのロウさまと出会い、自分を人間に変えてくれるピノキオの「青の妖精」を探す旅に出ます。

こういうの、童話とSFの幸せな融合、とでもいうのでしょうか。

なんかねえ、中盤からどんどんせつなくなってくる。

「ロボット」も「母」もいろんな言葉や意味に置き換えることができる。

オスメントさま、やたら巧い。

後半なんか涙うるうるでまともに見られなかったです。

どうしようもないせつないラスト。

あかんって。こんな映画作ったら。

しかし問題がひとつ。

「シックス・センス」をみたころは、お笑いのチャドさまをみたらオスメントさまに似てるって思ってただけど、この映画をみるころにはそれが逆転しちゃって、オスメントさまってチャドさまに似てるって思うようになってしまいました。

映画ファンの的にはまずい逆転です。

## オーシャンズ11

---

2001年アメリカ映画

監督 スティーブン・ソダーバーグ

主演 ジョージ・クルーニー、ブラッド・ピット、ジュリア・ロバーツ、アンディ・ガルシア、  
マット・ディモン

そもそもはかなり古い映画のリメイクです。1960年の映画。

当時人気絶頂だったフランク・シナトラさま。

シナトラ一家とも言うべきファミリーたちを大挙起用して作ったクライムサスペンスが「オーシャンと11人の仲間」。

めちゃいなたいタイトルでんなあ。

サミー・デイビス・ジュニアさまだとか、ディーン・マーチンさまだとかが出てました。

んで「オーシャンズ11」。

とんでもないスーパースターの皆さんが大挙ご出演。

ジョージ・クルーニーさまとジュリア・ロバーツさまとアンディ・ガルシアさまが同一画面におさまったり、ジョージ・クルーニーさまとブラッド・ピットさまとマット・ディモンさまがしかめっ面でエレベーターに乗っていたり。とっても豪華に、とっても楽しそうに物語が進んでいきます。

舞台はラスベガス。

有名ホテルの有名カジノを経営するのはガルシアさま。

その恋人がロバーツさま。

ロバーツさまの元夫で、カジノの金庫の大金を狙うのが主人公ダニー・オーシャン。演ずるはジョージ・クルーニーさま。

つい先日まで服役していたクルーニーさまは、映画スターにお遊びポーカーを教えている元仲間のピットさまに声をかけ、スポンサー（エリオット・グールドさまではありませんか）、爆破のプロ、ドライバー、老詐欺師、軽業師など、今回の仕事に必要なメンバーを集めていきます。

メンバーの中で一番若いのがスリのディモンさま。

画面を見ているだけでとってもゴージャス。

スターさんが集まるととっても華やかですなあ。

なんでもこの映画、クルーニーさまが仲良しのスターさんたちと共演したいからってノリで企画をスタートさせ、友達関係フル活用で驚くような安いギャラでこれだけの面子を集めたそうです。

それにしてもみんな楽しそう。

続編の「オーシャンズ12」も面白かったなあ。

## さくや妖怪伝

---

2000年トワーニ作品

監督 原口智生

主演 安藤 希、松坂慶子、丹波哲郎、嶋田久作、藤岡 弘

最初にはっきりさせておこう。私は妖怪が大好きだ。って、別に宣言しなくてもいいんですが。妖怪好きのとっかかりはやっぱり大映映画の「妖怪大戦争」あたりです。

あの映画はとっても魅力的な映画でございました。

これに関しては近いうちに必ずとりあげようと思っておりますが。

だから戦隊ヒーローものでも、「カクレンジャー」が妙に好きだし、さらにさかのぼると西洋妖怪を敵キャラに据えた「変身忍者嵐」なんかも大好きでしたです。

んで推理小説では京極夏彦さんが大好き。とにかく好き。

妖怪好きがこうじて妖怪小説なんて書いてしまうようなおばかさんです。私は。

んで「さくや妖怪伝」でございます。

主演の安藤 希ちゃんがカワイイ。

「公儀妖怪討伐士、榊 咲夜」ってかわいい声で言ったりなんかします。

最初に見た、深夜放送の「恐怖コレクション・顔泥棒」とかではあんまりかわいいとは思わなかったんだけど、今回はとってもいいです。なんかこの子、Vシネっぽい恐怖映画にいろいろ出てるみたいですが、かわいいんだから普通にテレビとかにも出ればいいのに。

安藤さま演ずる榊 咲夜は、公儀の妖怪討伐士、榊一族の血をひく少女。まあ幕府の命で妖怪を退治する人です。父は藤岡 弘さま。妖怪討伐の命を下す大老が丹波さま。安藤を助ける隠密が嶋田さま。

咲夜＝安藤さまの父、藤岡さまは河童退治に失敗して命を落とす。

安藤さまは父の命を奪った河童退治で妖怪討伐士デビューを果たす。

公儀妖怪討伐士となった安藤さまは、化け猫とか女郎蜘蛛とか怨霊武者とかを退治し、やがてボスキャラ、土蜘蛛の女王と対決することになります。

土蜘蛛の女王を演ずるのは松坂慶子さま。

かわいそうすぎ。日本アカデミー賞女優に妖怪のボスキャラやらせたらあかんやろ。なんか魔女みたいなメイクして、しかも巨大化します。

松坂慶子さまの顔のまんまで。

かわいそうすぎ。せめて全身モンスターに変身させたりんかい。顔は隠したりんかい。

と、画面をみながらつつこんでしまいましたです。

## ダーティハリー 2

---

1973年アメリカ映画

監督 テッド・ポスト

主演 クリント・イーストウッド、ハル・ホルブルック、デビッド・ソウル

「ダーティハリー2」。シリーズ最高傑作だと思っています。

前作では異常者スコルピオと対決したハリー刑事、今回は「現代のアメリカ版仕置人」みたいな奴らとの戦い。

金の力で裁判での無罪を勝ち取るような悪党実業家。

麻薬密売グループのボス。

ポン引き。

法の目をかいくぐるように悪事を重ねる悪党たちがどんどん殺されていく。犯人は白バイに乗り、警察官の格好をした男。

この「仕置人グループ」との対決が描かれます。

白バイグループのリーダーがデビッド・ソウルさま。

若い人はわからないかもしれませんが、「スタスキー・アンド・ハッチ」というアメリカものの刑事ドラマがあって、そのドラマで主演したのがデビッド・ソウルさまです。

ハリー刑事、いきなりやってくれます。

ハンバーガーを食べに空港のバーガーショップに行くと、そこで何やらもめている。

何じゃ？って感じで行くと、何とハイジャック事件が発生中。

ハリー刑事、機長に変装してハイジャック機に乗り込み、犯人たちを鎮圧してしまう。冒頭いきなりの大サービスです。

ここからは「謎の仕置人グループ」とハリーの戦いが描かれていきますが、途中、射撃の名手のソウルさまとイーストウッド演ずるハリー刑事が射撃大会で優勝を争ったり、後半にはバイクチェイスがあったりと、物語全編に見どころがちりばめられています。

以下はネタバレ。

警察官の仕置人グループを指揮していたのはハリーの上司のハル・ホルブルックさま。

彼はハリーに仲間になるよう誘いますが、ハリーは断る。

そこから仕置人グループとのバイクでの激闘があって、最後に大ワルをやっつける。

シリーズ最高傑作だと思っております。

ところでハリーさん、確か前作ラストで警官バッジを川に投げ捨てたはず。

あの描写の意味は何だったんでしょう。

今回ハリーは刑事として普通に登場。

この作品以降もバンバン登場します。

「え？ハリーって警察やめたんと違うの？」って思ったのは私だけではないはず。



## L A コンフィデンシャル

---

1997年アメリカ映画

監督 カーティス・ハンソン

主演 ケヴィン・スペイシー、ラッセル・クロウ、ガイ・ピアース、キム・ベイシンガー

資料によると、原作はかなり長い期間の物語らしいです。

昔のロサンゼルス。

ギャング時代、53年のロサンゼルスだそうですが、ギャングは出てこない。

それっぽい人は出てきますけど。

レストランで大量殺人事件が発生、元刑事を含む6人が殺されます。

被害者の相棒だった刑事クロウさま。この人はなかなかの暴力デカでございます。

彼は、ベテラン刑事スペイシーさまと事件を追う。

ピアースさまはかなり上昇志向が強い刑事。

出世のためにクロウさまがしでかした暴行事件の証人役を買ってでて、仲間たちから総スカンを食うような男。

ピアースさまの活躍で犯人が逮捕され、事件は解決したと思いきや、証人の嘘が発覚し事件は振り出しへ。

刑事どうしの確執とか、娼婦ベイシンガーさまをめぐるピアースさまとクロウさまが殴りあいしたり、とにかくいろいろな事件が起こります。

最終的にはクロウさまとピアースさまは手を組んで犯人を逮捕しようとするが、狡猾な犯人の罠にはまってしまいます。

しかし...

いかにもいかにもな犯人。

こいつが犯人やったらがっかりやなあ、と思ってたらやっぱりそいつが犯人でした。

とほほやわ。

しかもごひいきの役者さん、中盤で殺されちゃうし。

見直したのはラッセル・クロウさまです。

こんなに雰囲気のある役者さんだとは思わなかった。

ラッセル・クロウさま、ガイ・ピアースさま、ケヴィン・スペイシーさまそれぞれにいい雰囲気だしてます。犯人役のカastingが惜しまれます。

## 雲霧仁左衛門

---

1978年松竹・俳優座提携作品

監督 五社英雄

主演 仲代達矢、岩下志麻、加藤 剛、長門裕之、宍戸 錠、あおい輝彦、倍賞美津子、夏八木 勲、川谷拓三、松本幸四郎、山城新伍、石橋正次、成田三樹夫、丹波哲郎、松坂慶子、松本白鳳

池波正太郎先生原作の小説の映画化。さすが五社監督です。かなり説得力があり、面白い作品にしあがっております。雲霧仁左衛門というのは盗賊の名前。仲代達矢さま演ずる盗賊一味が雲霧一党です。雲霧一党は上に書いた出演者の中では岩下さま、長門さま、あおいさま、倍賞さま、夏八木さま、川谷さま。大商人の店に使用人として一味の者を送り込み、手引きさせるという方法で仕事を重ねている。

彼らを追うのが火付盗賊改めです。雲霧を追うのは（市川染五郎時代の）松本幸四郎さま。いやあ若い。まだ染五郎って顔しております。松本の上司が加藤さま。部下が石橋さま。雲霧一党と内通している奉行が山城さま。雲霧とは別の盗賊一味で、雲霧一味の仕事をかぎつけ、おいしいところをかささらおうとする盗賊がおります。しかしその盗賊、捕まって火盗改めに捕われる。当然口を封じるために仲代さま、そいつを狙います。この盗賊が成田さま。で、仲代が最後の仕事として選んだ大店の旦那が丹波さま。物語がここあたりまでだと普通の悪党映画なんですがね。それだけじゃない。実は仲代さまは元武士。恋人松坂さまを藩のえらいさん梅宮辰夫さまにかっさらわれ、その上公金横領の濡れ衣とか着せられてしまいます。で、松坂さまはバカ殿山口崇さまの姫になっています。仲代さまの兄が松本白鳳さま。先代松本幸四郎です。白鳳さまは無実の罪を晴らし、御家を再興することを願っている。宍戸さまは公金横領犯・仲代を追っていた藩の武士。しかし取り逃がし、今度は盗賊・雲霧を捕らえようと執念を燃やす。

さてさて。雲霧一党、綿密に仕掛けた最後の仕事ですが、大仕事のターゲットを見抜いた火盗改めの罠にかかってしまいます。一味のほとんどが殺されたり捕われたりしてしまう。

仲代さま・夏八木さま・岩下さまら数名だけが逃げ延びる。長門さま・倍賞さまら、捕われた一味のものたちの目の前に松本白鳳さまが現れます。そして自分が雲霧仁左衛門だから、部下といっしょに裁きを受けさせて欲しいといいます。一味の者、きょとん。結局白鳳さまは雲霧一党の首領として処刑されます。兄の気持ちを察した仲代さまは、兄として、兄の悲願を胸に兄弟の汚名を晴らすために藩邸に向かいます...

かなり入り組んだ物語のように見えますが、映画はそれほど入り組んでいるようには感じません。これって私の文章表現力が乏しいからこうなるのでしょうか...



## ダブルボーダー

---

1987年アメリカ映画

監督 ウォルター・ヒル

主演 ニック・ノルティ、マイケル・アイアンサイド、パワーズ・ブース

かなり強烈な映画でございますよ。今回の執筆にあたって、あっちこっちの資料調べてみましたが、面白いことに資料によって視点がニック・ノルティさまよりだったりマイケル・アイアンサイドさまよりだったり。監督はウォルター・ヒルさまですから、主役は盟友ニック・ノルティさまでしょうね。やっぱり。

しかし主役のニック・ノルティさまを完全に喰うぐらいマイケル・アイアンサイドさまが素晴らしいです。デビッド・クロネンバーグ監督の「スキャナーズ」で強烈な登場のしかたしまして、ウィリアム・シャトナーさま主演の「面会時間」って作品で変態マニャック俳優の地位を不動のものとしします。これ以降はテレビシリーズ「V」にしても「トップ・ガン」にしても「トータル・リコール」にしても「スターシップ・トゥルーパーズ」にしても、一人でおいしいところとっていく名優になっていきますです。

んで「ダブル・ボーダー」。作品ジャンルとしては「西部劇の香りのするクライムミステリータッチの戦争映画」なんだろうなあ。

アメリカとメキシコの国境地帯。国境警備をしているテキサス・レンジャーがニック・ノルティさま。このエリアに麻薬王がアメリカからもメキシコからも独立した犯罪王国を作ります。この麻薬王がパワーズ・ブースさま。「24」のシリーズ中盤の大統領役者さんでございます。

マイケル・アイアンサイドさまは特殊部隊の隊長。記録上は死んだことになっている荒くれ特殊部隊兵士のリーダーというおいしい役。この特殊部隊、ブースさまの王国を潰すために招集されたみたいだけど、何だか次第に様子がおかしくなってくる。

ブースさまの秘密口座が作られている銀行襲ったり、ブースさまの王国に潜入して書斎探ったり。特殊部隊のメンバーたちは次第にリーダー、アイアンサイドさまのことを疑いはじめる。

案の定、アイアンサイドさまは政府の命令でここに来たのではなく、ブースさまとの麻薬取引の証拠を消すために自分の地位を利用したワルだってことがわかる。ノルティさまはブースさまのかつての親友で、かつてブースさまと同じ女性を奪い合った仲。その女性をブースさまに拉致され、彼女を取り返すためにブースさまの王国へ。

ラストは「ワイルドバンチ」顔負けの撃ちあいになります。アイアンサイドさま対特殊部隊対ブースさまの部下。撃ちあいの場面はやっぱりスローモーション。ペキンパー監督顔負けのバイオレンスイズムです。なんか力技で強烈な撃ちあいにもっていかれたみたいな印象が残りますが、まあこういう流れはしかたないかもしれないなあ。

それ以上に画面から漂ってくるような乾いた空気というのか、メキシコの強烈な熱気というのか、そちらのほうの描写が素晴らしいと思いました。

## イレイザー

---

1996年アメリカ映画

監督 チャールズ・ラッセル

主演 アーノルド・シュワルツェネッガー、ジェームス・カーン、ヴァネッサ・ウィリアムス、ジェームス・コバーン

政府の証人保護プログラム、つまり裁判や警察への協力者を保護するプログラムのエージェント。証人の経歴や存在を消去する「イレイザー」がシュワルツェネッガーさま。

冒頭からいきなり手際よく証人保護をするシュワルツェネッガーさま。

これはつかみみたいなもの。

物語はFBIに協力して命を狙われることになった、政府ご用達の兵器開発会社の女性エンジニア・ヴァネッサさまと、彼女の命を守る任務を受けたシュワルツェネッガーさまが中心になって進みます。

FBIに指示されて会社から機密書類のデータを盗み出したヴァネッサさま。彼女はいきなり会社が開発していたハイテク銃で命を狙われます。いきなり登場するシュワルツェネッガーさま。ハイテク暗殺者集団相手に大活躍でございます。

こういう設定のシュワルツェネッガーさまは異常に強い。

見ていて死ぬわけないと思うので、妙に安心して見てしまいます。これがマイケル・ダグラスさまあたりだと物語の最後で死ぬかもしれないなあとか思いながら見るのでハラハラもしますが。こういう設定も逆にいかがなものかと思えます。そういう意味では同じシュワルツェネッガーさまものの「エンド・オブ・デイズ」などは私的には意外なラストだったといえるかもしれません。

さて「イレイザー」。

敵組織が強すぎる。どういうこっちゃと思っていたら、やっぱり味方の中に敵がいるパターンです。登場の瞬間から怪しいと思っていたジェームス・カーンさまがやっぱり敵の内通者。

ちなみにジェームス・カーンさまはシュワ様の同僚で、ジェームス・コバーンさまは上司って設定。ジェームス・カーンさま、なんか久々に見るような気がします。

「ゴッドファーザー」以降は「キラー・エリート」とか「ローラー・ボール」とか、それなりに映画にも出ておられましたが、ここんとことんお名前を見なくなりました。なんか、もひとつ作品に恵まれていないタイプですねえ。

さてさて、私の思い出は置いておいて、物語はビルやら車やらブッ壊しながら粛々と進みます。んでラストはよかったよかった。

私はシュワルツェネッガーさまの映画では「ラスト・アクション・ヒーロー」とか「トゥルー・ライズ」みたいに「壊れた」というか、無茶な設定の作品のほうが好きです。

あの肉体からして嘘っぽいわけだから、マジになられると辛いと思ってしまいます。

でも映画独特の嘘っぽさを楽しみたい方には逆にこの映画はおすすめかな。

## 悪魔を憐れむ歌

---

1997年アメリカ映画

監督 グレゴリー・ホブリット

主演 デンゼル・ワシントン、ジョン・グッドマン、ドナルド・サザーランド

誠にどんよりした作品でございます。

まったくもって救いがないというのか何というか。

カテゴリーとしてはホラーに属しますです。

強烈な殺人犯。

この男がガス室で死刑に処されようとしています。

この男を逮捕したのが刑事デンゼル・ワシントンさま。

この男、ストーンズの「タイム・イズ・オン・マイ・サイド」などを歌いながら死んでいきます。

なにやら怪しげな宗教をやっていた死刑囚。

怪しげな宗教は魂の離脱の可能性だとかを説いている、そういう話がありまして。

デンゼル・ワシントンさま、死刑囚の霊に狙われることになります。

相手は霊とか魂とか、そういったものですから、何でもあります。

霊がとりついた身体が別の人の身体に触れるだけで転々と憑依する対象が変わっていきます。

群集の中で、様々な人間にとりつきながらワシントンさまを翻弄する場面。

よくできてます。

細かいカット割り。

急速に動いて手ぶれするカメラ。

ワシントンさまの混乱ぶりが見事に表現されています。

んなアホな話あるわけないやないか、と思いながらも男が信じていた謎の宗教を調べるワシントンさま。

男の霊を退治する方法がわかります。

霊との最後の戦いに挑むワシントンさま。しかし霊は意外な人物に憑依してワシントンさまに戦いを挑む。

とにかく霊が誰に憑依していてどの時点から誰に移ったのかってことをよく把握しておかないとわけがわからなくなります。

物語をつくる側も、あえてそれをわかりにくくして観客を煙にまこうとしている。

こうなるとあまり物語を深読みせずに、素直に見たほうがいいかもしれません。

## マキシマム・リスク

---

1996年アメリカ映画

主演 ジャン・クロード・ヴァン・ダム、ナターシャ・ヘンストリッジ、ザック・グリニエ

ある日、自分に双子の弟がいると告げられたとしなせえ。

双子を探しに行きますよね、普通。そんな物語。

ヴァン・ダムさまは双子の弟の存在を知らされます。で、弟は恐らく死んでいるだろうってことも知る。兄は弟が暮らしていた町へ行き、弟が何をしていたのか、何故死なねばならなかったのかってことを調べはじめ。兄は何故かスナイパーだったりするんですが、その設定はとりあえずお忘れください。兄はあちこち動き回るんですが、行く先々で「帰ってきてたのか」とか「お前どの面さげて戻ってきやがった」とか言われる。私、このへんで物語をぐわわわわっと先読みして、こんな話だったら面白いだろうなって思いついた設定をメモしまくってました。

結局この映画に関しては私の想像力が勝っておりました。

ってことで、思いついた設定はすでに構想だけ存在しておりました小説にアレンジして使わせていただきます。

さて、物語は私がメモをとっている間にも粛々と進みます。

んで、アクション映画には似つかわしくないと私が思う「問題のシーン」へ。

サウナ風呂での大殺戮シーンでございます。マフィアのナンバー2、グリニエさまは兄ヴァン・ダムさまをずっと狙っているわけですが、グリニエさまと弟ヴァン・ダムさまの共通のボスが、お互いに協力しあうようにサウナ風呂で仲直りさせようとする。これを不服に思ったグリニエさま、部下を武装させてボスもろともボス派のメンバーをサウナ風呂の中で射殺します。

私、こういう場面、だめなんです。すげえどんよりしてしまう。サウナって、無防備じゃないですか。そういうところで撃ちあいとかしたら、あかん。

先日とりあげた「ダーティハリー2」ではプールで遊ぶワルを家族もろともマシンガンで射殺って場面や、エッチしているワルのボンボンとその彼女がワル射殺の巻き添えになって撃ち殺される場面なんかもありましたけど。

だめなんです。裸に近い姿の人が撃たれる場面。どんよりしちゃう。アクションなんかは、現実味なく撃ち合いとかして欲しいんです。シュワルツェネッガー主演作品とかジョン・ウー監督の映画みたいに。リアルに死んで欲しくないっていうか。絵的に美しく死んで欲しいというか。

これがホラーだとリアルに死んで欲しいんですが。勝手ですいません。

ってことで、サウナの場面とその後のエレベーターでのリアルな格闘シーンだけで、もうええわって思ってしまった。

でもなんでサウナだったんだろう。

ヴァン・ダムさま、腹筋見せたかったのかなあ。

## 黄金の七人

---

1965年イタリア映画

監督 マルコ・ヴィカリオ

主演 フィリップ・ルロワ、ロッサナ・ポDESTA

いかにもそれっぽい名前が並びましたが、その通り。イタリア映画です。

古い映画ですが、やっぱり面白い。

メンバー全員がA（アルフレッドとかアランとか）ではじまる六人の男たち。

「教授」と呼ばれるリーダー、ルロワさま。

そして教授と行動を共にするこれみよがしにいい女、ポDESTAさま。

音楽は終始、シャバダバダのイレブンPM系。

七人の男たちと一人の女が狙うのは、スイスの銀行の地下金庫に眠る金塊でございます。

「オーシャンズ11」、ご覧になりましたでしょうか。映画前半の作戦会議で、「地下にトンネルを掘って云々」という件がありましたが、その台詞の元ネタはおそらくこの映画です。

銀行強盗もの、しかも知能犯罪で、綿密な計画を立て、決して人を殺さずにお宝をいただくってパターンの映画のルーツともいえます。

ポDESTAさま、スーパーボディコンシャスのタイトみたいな服で画面をうろうろしてくれます。それだけでうれしい。

ルロワさまも実にいいです。「教授」っぽい。知性的。知能犯罪のリーダーはこういう人でないと。

コートを着て、山高帽かぶって、眼鏡かけて、葉巻くゆらせながらメンバーの仕事ぶりをリムジンから視察する。えらそうだけど、いやらしく感じない。

風格というか気品というか、そういう雰囲気があります。

さて映画のご紹介。

一味は銀行近くのマンホールから地下に潜り、地下水道だとかを爆破したりドリルで穴をあけたりしながら銀行の地下金庫の真下にたどりつき、金塊をごっそりといただくことに成功します。綿密で周到な計画をたっぷり見せてくれるのが物語前半。

後半はその金塊をめぐるのドンデン返しの連続。そして「あーあ」ってラストにつながります。

この「黄金の七人」シリーズ、いつもラストは「あーあ」です。

だから見ていて爽快だし、面白い。

ワルたちも「またやろうぜ」ってノリだから救われる。

全部で三作くらい作られたシリーズ、全部見たくなってしまいました。

ちなみに第二弾は「続・黄金の七人 レインボー作戦」、第三弾は「新・黄金の七人 7×7」でございます。

## 妖怪大戦争

---

1968年大映京都作品

監督 黒田義之

主演 青山良彦、川崎あかね、大川 修、内田朝雄

再び宣言。

私は妖怪が大好きだ。

ゲゲゲの鬼太郎も大好きだ。

京極夏彦も大好きだ。

鳥山石燕も大好きだ。うおおおお。

「大魔人」シリーズを完結させ、新シリーズとして妖怪ものに取り組んだ大映映画。

この作品は「妖怪百物語」に続くシリーズ第二弾です。

前作はちょっと怖い妖怪話でしたが、本作は明るくコミカルな物語。

ゲゲゲの鬼太郎にも通ずる楽しさに満ちた作品。

この映画が恐かったら私は妖怪にははまらんかったでしょうなあ。

物語の舞台は江戸時代。

西洋のバビロニアの遺跡から、吸血ダイモンって妖怪が復活します。

日本に渡ったダイモンは、代官を襲って殺し、乗り移ります。

代官に化けたダイモンは次々と町の人たちを殺していきます。

代官の正体がダイモンであることを見抜いたのは、池の河童。

ダイモンが池に何かを落として、それが河童に頭に当たる。

水面から顔を出した河童が見たのは代官の衣装で首だけダイモン。

なんやお前みたいな感じですが、逆にやられてしまう。

河童は日本の妖怪たちを集め、ダイモンに戦いを挑みます。

関西弁の油すましとか、C3POみたいなぬっぺっぼうとか、カラ傘とか青坊主とか。ちなみにこの映画での青坊主は一つ目ではありません。

鳥山石燕さまの妖怪画では一つ目でしたが。

ダイモン退治のためにろくろ首がうふふふふとかいいながら巻きつき、逆に首を丸結びにされてきゃああああ、みたいな笑える場面が随所に登場します。

クライマックスではダイモンは巨大化。

これじゃあ妖怪ではなく怪獣ですなあ。

巨大化した時点で大首とか見越し入道とか呼んで来たらよかったのに。

貴重な「笑える」妖怪特撮映画です。

## バットマン

---

1989年アメリカ映画

監督 ティム・バートン

主演 マイケル・キートン、ジャック・ニコルソン、キム・ベイシンガー

バットマンといえばスーパーマンと並ぶアメリカンコミックス界のスーパースターです。

舞台になるのは架空の町、ゴッサムシティ。

この町に住む大富豪がマイケル・キートンさま。

幼い頃に父を目の前で殺され、それがトラウマになっています。

悪を憎むキートンさまは、その資産を使って装甲車だとかジェット機だとか鎧だとかを作り、バットマンとして悪を退治することになります。

今回の敵役はジョーカー。ジャック・ニコルソンさま、魂の怪演。

かなり線キレのギャング。

彼らが悪事を働いているところへバットマンが登場。

バットマンは一味を片付ける。

ジョーカーは戦いの中で有毒物質の樽へ転落。

整形手術の甲斐もなく、ひきつったような顔の怪人ジョーカーが誕生します。

ゴッサム・シティへ舞い戻ったジョーカー、いきなり自分のボスを射殺。

力をつけすぎたジョーカーを始末しようとしてたんですね、ボスは。

で、ボスが警察に通報して、バットマンがきちゃってこうなったわけですね。

このボス、ジャック・パランスさまが演じておられます。

ジョーカー、またたく間に犯罪組織のボスになる。

ここからはバットマンとジョーカーの対決が物語の軸となります。

マイケル・キートンさまがんばっております。

バットマン以外ぱっとした作品に恵まれていないのがかわいそう。

ぶっちゃけ「パシフィック・ハイツ」くらいしか印象ないなあ。

第三作でバットマンを演じたヴァル・キルマーさまもひとつです。

考えてみれば、第四作で主演したジョージ・クルーニーさまが唯一の勝ち組でしょうか。

## バトル・ロワイアル

---

2000年「バトル・ロワイアル」製作委員会作品

監督 深作欣二

原作 高見広春

主演 ビートたけし、藤原竜也、前田亜季、山本太郎、安藤政信、柴崎コウ、栗山千明、塚本高史、高岡蒼佑

改めて見てみるとすごいキャストやなあ。資料見るとまた見たくなります。原作は某有名ホラー小説賞の最終選考に残りながらも、「良識派」審査員に酷評をくらって選からもれた高見広春さまの小説です。当時の審査員は荒俣宏さま、林真理子さま、高橋克彦さま。

お三方とも、小説としての完成度は認め、出版したら売れるであろうことを十分予測した上で、モラルとか倫理とか問題あるとかの観点から落選にされたそうです。その問題小説を太田出版が本にしたらベストセラー。

ある意味大傑作。

それを深作監督が映画化したんだから、面白くないわけない。私は小説を読んでから映画を見ました。原作では一人ひとりの登場人物が丁寧に書き込まれていましたが、さすがに映画では再現は不可能でしたね。映画は個々のエピソードをバツサリ切って、群像劇のような処理をされました。

内容がはっきりわかっていて、「ホラー小説の映画化」（実際はホラーじゃないですが）という観点で見ましたので、血が流れてもそんなにブルーにはならなかったです。しかし「キツう」って思ったシーンはありましたよ。①メガホンもった少女が極悪人安藤さまに惨殺される場面。②「ずっと友達」って言ってた二人の少女が殺しあって相打ちになったと思わせる場面。③なぜか裸で死んでいる二人の少年を見ながら、柴崎さまが服を直しながら意味ありげに立ち上がるロングショット。④灯台で、銃撃戦の末仲良しグループが死んでいく場面。

ここいらのシーンはけっこうどんよりしました。結末知っててもどんよりしたので、小説読んでなかったらもっとキツかったかも。

しかし、これらの全ての場面に映像的な必然性があったのではないかと思います。このへんの場面を、あまり血を見せずに処理する方法はいくらでもあった。でも深作監督はあえてそうはしなかった。こういうキツイシーンにあえてドバドバ血を見せることによって、物語の狂気が一層鮮明に浮かび上がるし、生きるということがどういうことなのかが突きつけられたような気がします。問題があると審査員三氏が酷評したはずの物語は、じっくり読むととてもいい話。

殺しあいを題材にしながら、むしろそういうことを明確に否定している。

映画もそうです。じっくり見ると。でもちょっとやりすぎだったかなあ、深作監督。



## ザ・ロック

---

1996年アメリカ映画

監督 マイケル・ベイ

主演 ショーン・コネリー、ニコラス・ケイジ、エド・ハリス

口の悪い友人が、ニコラス・ケイジさま主演作品にヒット作なし、などと言っておりました。一時期、ニコラス・ケイジさま、かなりのペースでいろんな作品に立て続けに出演していた時期があります。「フェイス・オフ」の前後の頃かなあ。「8mm」とか「スネークアイズ」だとか。残念ながらその友人の言うとおりの、大ヒット作品はないし、映画史にのこるような名作もない。例外がジョン・ウー監督の「フェイス・オフ」でしょうかね。

辛口映画評の友人も、さすがに「フェイス・オフ」だけは評価せざるを得なかったようですが、「スネーク・アイズ」なんかはデ・パルマ監督作品の割に明らかに消化不良。まあこの監督、多少の設定的な無理さは押し通して映画を撮るタイプらしく、ときどき「はあ？」みたいな映画を撮り、その上、作品の出来にも明らかに波がある人だから、そのへんのことはそもそも本人もあまり気にしてないかもしれないなあ。

さて今日ご紹介の「ザ・ロック」、その「作品にあまり恵まれていないニコラス・ケイジ」の出演作品です。

毒ガス搭載のミサイルを奪取し、アルカトラズ刑務所に立てこもった元軍人たち。彼らは戦争遺族たちのために大金を要求します。脱出不可能の刑務所は逆に要塞としては完璧。

脱走できないということは潜入できないということですからね。

FBI捜査官で化学兵器のスペシャリストのケイジさま、特殊部隊の隊員たちとともにアルカトラズに潜入し、テロリストの鎮圧と毒ガス兵器の無力化を命ぜられます。

このチームに必要な協力者がいまして。アルカトラズからの脱走に成功した男。

元英国諜報部員で今は投獄されている男、演ずるはショーン・コネリーさま。

おいしい役やなあ。

コネリーさま、CIAに陥れられた経緯があったりして、当初は協力を拒否するのですが、ついにケイジさまとともにアルカトラズに潜入する決意をします...

ぶっちゃけていいですか？

ニコラス・ケイジさま、かなりがんばっていたのに、影うすい...

ショーン・コネリーさまが巧すぎる。設定もおいしいし、存在感も段違い。中盤から物語をひっぱっていくのはニコラス・ケイジさまなのですが、画面に出てこないショーン・コネリーさまが気になってしかたない。

ということで、楽しくコネリーさま対ケイジさまの演技合戦を満喫させていただきました。

## アマデウス

---

1984 アメリカ映画

監督 ミロス・フォアマン

主演 F・マーリー・エイブラハム、トム・ハルス

原作となったのはピーター・シェーファーさまの有名な舞台劇。

この物語を初訳したのは俳優の江守徹さまです。この頃の江守さまは、もうホントにストイックに演劇ってものに取り組んでおられたところで、今ほどくだけたイメージはなかったです。

舞台版・アマデウスの初演ではモーツァルトを松本幸四郎さま、そして主人公のサリエリを江守さまが演じておられましたです。

アマデウスってのは、かの有名な作曲家、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトの「アマデウス」です。モーツァルトの毒殺説が描かれます。

映画でモーツァルトを演ずるのはトム・ハルスさま。

彼を殺したと独白を始めるのが宮廷作曲家のサリエリ＝F・マーリー・エイブラハムさま。

彼は日々神に感謝し、佳き曲ができますようにと祈るような作曲家。

そんな彼の目の前に正真正銘の天才、モーツァルトが現れる。

下品きわまりない青年モーツァルト。サリエリは彼の才能を認めながらも、彼への嫉妬心を止めることができない。天才アマデウスを描きながらも、物語の中心となるのは「天才ではない＝凡庸である」サリエリ。

苦悩と嫉妬、そして『神の音楽』に触れることのできる喜び。いろいろな感情がごちゃ混ぜになったサリエリが最後に選んだ方法は何だったのでしょうか...

回想シーンの若いサリエリ。

そして回想から醒めたら老人のサリエリ。

とてもよくできたメイクアップです。

舞台では冒頭、老人から若者までを逆にたどらねばならないってえ場面があったようですが。江守さんの演技、見たかったなあ。

舞台では特殊メイクは使えないですからね。

舞台は未見なので何ともコメントできませんが、映画も舞台戯曲もすばらしい。

見逃したことが悔やまれる舞台です。

## 吉原炎上

---

1987年東映作品

監督 五社英雄

主演 名取裕子、二宮さよ子、根津甚八、西川峰子、緒形 拳、藤 真利子、かたせ梨乃

一人の少女が吉原遊郭に売られてくる。

明治の頃の話です。

名取裕子さまが売られてくる少女役。

彼女の目を通して遊郭という未知の世界が描かれていきます。

五社監督といえば「雲霧仁左衛門」「鬼龍院花子の生涯」「陽輝楼」「2・26」などの名匠。情念どろどろの人間関係を描かせたら巧いですね。しかし私は五社監督のアクションが好きな人ですから、こういうふうにとっしり構えて人間関係描かれるとちょっとキツイです。

物語中盤から、「鬼龍院...」「陽輝楼」のように、同時進行多層構造の群像劇っぽくなってきます。んで情念の世界。どおんより。

吉原だとか、郭だとか、ただでさえどんよりしがちな題材なんですけど、名女優の皆様がたが全力投球されると、とってもキツイです。

やがて初々しかった少女はいつの間にか強烈な花魁に成長していく。

その期間をじっくり丁寧に描いていきます。

根津甚八さまがかっこいいです。

なんか紅テント時代の根津甚八さまのイメージ。

かっこよくて、でもその後崩れて落ちていくって芝居時代の役柄そのままです。

女優陣はね、みんな遊女だから眉剃ってますから、顔怖い。

でもみんな達者ですよ。

でもねえ、タイトルは「吉原炎上」だから、最後には炎上しちゃうことがわかってみんな見てるわけで。

物語最初から炎上することがわかってた吉原が炎上するのを見て、どんな感慨持てていうのかよくわかんない。ちょっと困ったラストでした。

もっと別のタイトルなかったのかなあ。

## バットマンリターンズ

---

1992年アメリカ映画

監督 ティム・バートン

主演 マイケル・キートン、ダニー・デビート、ミシェル・ファイファー

バットマンシリーズの第二弾。今回の敵キャラはペンギンとキャットウーマンです。

ペンギンを演ずるのはダニー・デビートさま。映画製作のインタビューで見ましたが、ダニー・デビートさまは、『同情されないキャラ』を心がけて演じられたそうです。

見る側のシンパシーはむしろキャットウーマンに向けられるのではないかと思いました。キャットウーマンはなかなかいい。セクシーだし、存在感あるし。でももう少し見せ場をつくってあげて欲しかったです。どっちかというペンギンの引き立て役に終始していたような印象があります。

その醜い容姿のコンプレックスから、支配欲の塊となったペンギン。

名士ぶる裏側で、破壊ペンギン軍団を操りゴッサムシティを支配しようとしています。爆弾を抱えたペンギン。コミカルだけど怖い。アメリカンコミックスの世界ですね。

マイケル・キートンさま、相変わらずうじうじしております。悩めるヒーロー。これもアメリカンコミックスの伝統なのでしょう。そういえばスパイダーマンも思い切り悩んでたし。

キャットウーマン、今ではピンでの主演キャラになってしまいました。

いい感じ。こちらはハル・ベリーさまでございます。

えっと。ここでちょっと表記上のご注意。えっと。スターのみなさんにはなんせ「さま」をつけさせていただいております。なぜかというと。

一応、私、元役者なんですよね。大阪の古い演劇人の人なんかだと、先生って普通につけちゃいます。

西山先生とか端田先生とか堀内先生とか志摩先生とか。

そうじゃないと「さん」づけ。

須永さんとか馬場さんとか柳川さんとか田中さんとか。萬子さんとか南条さんとか鍋島さんとかシュン太郎さんとかいとうえさんとか。辰巳さんはつみさん、生瀬さんはさんちゃんさんだったけど。

で。

西山先生を先生って呼び、シュン太郎さんをさんづけで呼ぶ私が、ハリウッドスターを呼び捨てにしたらあかんやろって思っ。

さまづけで統一させていただいております。

ただし、文頭のスタッフキャストは、映画本の慣例にならい、あえて呼び捨てです。

あと、個人的にね。映画のあらすじって、すげえ読みにくいなってずっと思っ。役名であらすじ書くでしよ。

このときジャックは...とか。ジャックって誰やねん、みたいな。

映画の世界を皆様にイメージしやすくしてさしあげたいなって気持ちでも書いておりますんで、邪道を承知で、演じたスターの名前であらすじ書いてます。普通、友達に映画のこと説明するとき、「そのあとマクレーンはな...」みたいな説明する人、少ないでしょ。「ウィリスさまがね...」って説明するでしょ。

井戸端会議みたいな映画感想本を目指しておりますので、逆に役名で説明したほうがわかりやすそうな場合を除き、あらすじ上での役名表記も基本はしませんので、こちらもご了承いただきたいと思っ。

## ホワイトアウト

---

2000年映画「ホワイトアウト」製作委員会作品

監督 若松節朗

原作・脚本 真保裕一

主演 織田裕二、松嶋菜々子、佐藤浩一、中村嘉津雄、石黒 賢、吹越 満

真保裕一さまのベストセラー小説の映画化です。

すげえスケールでの映画化です。

私はこの本、映画化発表のはるか前に読みました。キャスティングを聞いてなるほどね、と思いましたです。すごく原作のイメージに近い配役。

原作は『日本版・ダイハード』みたいなエンタテインメント小説。

松嶋さまと佐藤さまのイメージはちょっと違いましたが、織田さま吹越さまはイメージ通りでした。

雪に閉ざされた巨大ダムを占拠した凶悪テロリスト。

このダムの水を一気に放水すると、下流の町が壊滅してしまいます。

ダム爆破を匂わし、ダム下流の市民の命を人質に要求をつきつけます。

このテロリストにダム運転員・織田さまが立ち向かう。

織田さまは過去に遭難者の救出の際、ちょっとした判断ミスで同僚の石黒さまを亡くしてしまったという過去をもっています。

佐藤さまをリーダーとするテロリストは数人の職員と、ダムを訪れていた石黒さまの婚約者松嶋さまを人質に50億円を要求。

逃げ延びた織田さまは運転員として熟知しているダムの知識を駆使して単身、犯人に闘いを挑みます。

おおダイハード。

原作ではテロリストのリーダーの謎の行動とか、テロリストの要求が妙だとかで、推理小説っぽい展開が楽しめるのですが、映画版ではアクションに重点を置いたためか、魅力的な設定をサラリと流してしまったのが少し惜しい。

ラストも少し変えています。

ダム運転員としてはあり得る活躍だと感じた原作とは違って、映画版では大アクションが用意されています。

これはこれで面白い。お腹いっぱいになる快作でございます。

ちなみにホワイトアウトとは、雪山で吹雪とかにあったとき、視界が真っ白になって何も見えなくなる状態のことを言います。説明不要かな？

## 12モンキーズ

---

1995年アメリカ映画

監督 テリー・ギリアム

主演 ブルース・ウィリス、ブラッド・ピット、マデリン・ストー、クリストファー・プラマー

なんだかとっても微妙な映画。

人類を滅亡させた謎のウイルス。

ウイルス蔓延の原因を探るため、過去に送り出された受刑者ウィリスさま。

おお、ウイルスの秘密をさぐるウィリスさま。にゃはは。

どうやらウイルス拡散には『12モンキーズ』という組織が関わっているらしいことがわかります。

この組織のボスがブラッド・ピットさま。

ウィリスさまは未来と現代を往復しながら秘密をさぐっていきます。

ごめんなさい。

この作品に関してはネタバレさせないと話が進んでいかないので、ちょこっと書きますが。

結局、『12モンキーズ』はウイルスとはほとんど関係なかったってえオチがつきます。

ウィリスさま、無駄骨。んで最後に無駄死にしちゃう。

かわいそう。ウイルス拡散の元凶は『12モンキーズ』をかすった位置にありまして、結局、映画の結末のあとにウィリスさまを送り込んだ組織の者がその元凶を排除するんだらうな、って結末。

最後まで見かけ倒しだった『12モンキーズ』でございました。

監督のテリー・ギリアムさまは『未来世紀ブラジル』を撮った巨匠。

この映画についてはまたとりあげようと思ってます。

実は『12モンキーズ』のブラッド・ピットさまの役には、別のハリウッド大スターが予定されていたそうですが、テリー・ギリアムさまがそのキャスティングに大反対し、ピットさまに落ちついたとか。

翻訳者の戸田菜津子さんの著書にその大スターの名前が書いておりました。

著作権侵害しちゃうとやばいのでここでは書きませんが、ブラッド・ピットさまと同じ年のあの  
大スターさんでございます。

2001年アメリカ映画

監督 ジェームズ・ウォン

主演 ジェット・リー、カーラ・グギーノ

お気に入り俳優、ジェット・リーさま主演のアクション大作。パラレルワールドがあるとしなせえ。

例えば百の世界がある。で、その百の世界を把握している世界が第一の舞台。

その世界は当然、かなり発達した科学力を持っています。

パラレルワールドを行き来する手段も持っている。その世界に悪いジェット・リーさまがいます。

パラレルワールドだから、それぞれの世界にジェット・リーさまがいるわけです。

悪いジェット・リーさまはそれぞれの世界を行き来しながら、それぞれの世界のジェット・リーさまを一人ずつ殺していく。そうすればそれぞれの世界が均衡を保とうとして、死んじゃったジェット・リーさまのパワーが生き残ったそれぞれのジェット・リーさまに分散される。

生き残ったジェット・リーさまはどんどん強くなっていくわけですな。

悪いジェット・リーさまはどんどんいろんなパラレルワールドのジェット・リーさまを殺していき、全ての世界で唯一最強の存在になろうとする。

こういう世界観でございます。

最後に残ったのが、ひとつの世界で警官をしているジェット・リーさまと、犯罪者の悪いジェット・リーさま。これまでに死んでいったジェット・リーさまの力はこの二人に集中しているから、二人とも超人なわけです。

だからジャンプしてそのへんの柱を空中で蹴りながら方向転換したり、誰かをキックしながら方向転換連続キックとかできる。んなアホな。

ワイヤーワーク炸裂。すげえすげえ。

ジェット・リーさまのワイヤーアクションの素晴らしさったらないです。

個人的にはこの作品よりも「ロミオ・マスト・ダイ」のほうが好きだけど。しかしすごい。

悪いジェット・リーさまは様々なワルの手を駆使して、良いジェット・リーさまを殺そうとする。

それとは別に、パラレルワールド監視員みたいな人とかジェット・リーさまの同僚とかが入り乱れます。ジェット・リーさまの同僚は悪いジェット・リーさまの悪事を良いジェット・リーさまの仕業だと思って良いジェット・リーさまをつかまえようとしたり、ほんま、ややこしい。

最後はお約束。良いジェット・リーさまと悪いジェット・リーさまの対決となります。うんうん。この場面だけで見る値打ちあるかな。この映画。

2000年WOWWOW・松竹作品

監督 酒井信行

原作、脚本 京極夏彦

主演 田辺誠一、佐野史郎、遠山景織子、小松政夫、夏八木 勲、四方堂 亘

京極夏彦大先生の「巷説百物語」の映画化。

原作の中にこの「七人みさき」のエピソードってあったんでしょうか。

ひょっとしたら「続巷説百物語」のエピソードだったかもしれません。

この作品はそもそもWOWWOWのオリジナルスペシャルドラマとして製作されたもの。

そのドラマオンエアの先行して作られた第一エピソードがこの「七人みさき」です。

ちなみにこの後のエピソードは「赤面えびす」「福神ながし」などがあります。

さて「七人みさき」。

城下町。御行の又市（田辺さま）は、農民から書状を渡されます。

城下の悪害や祟りが書かれているわけですね。

一方、その近くの川原で水死体があがる。

村人は言います。

「これで三人目だ。あと四人、今年もあと四人、七人みさきの、ミサキ御前の祟りだ」祟りで人が死ぬ、そんな町の声。

この地にいあわせたのは怪異談収集家の山岡百介（佐野さま）。

そのとき、百介の目の前で死体に駆け寄る少女。

「これは祟りなんかじゃない、姉さんを殺したのは侍だ」と叫びます。

又市とおぎん（遠山さま）は、百介から土地にまつわる伝説を聞きます。

そして祟りの真相を知るべく、又市たちはこの領内に隠居する人形師・御燈の小右衛門（夏八木さま）のもとを訪ねます。

そこで語られる真実とは？

この後、製作されたアニメ「巷説百物語」とも原作とも違う、独自の物語。

物語の最大の特徴は、妖怪話と懐かしの「必殺」をコラボさせたような設定です。

中盤からはほとんど必殺。

とにかく面白いです。

というか、妖怪話も必殺も大好きな私ですので、やたら楽しく見られます。

この「怪」シリーズ、映画として公開されたのはこの一本のみ。

ということは「映画」としてご紹介できるのはこれ一本。

しかしまあ、そのうち残りの作品もご紹介することになると思います。

ってくらい好きな世界。

ビデオも発売されておりますので、是非ごらんくださいまし。





## バットマンフォーエバー

---

1995年アメリカ映画

監督 ジョエル・シュマッカー

主演 ヴァル・キルマー、トミー・リー・ジョーンズ、ジム・キャリー

バットマンシリーズの第三弾。

今回の敵役はまずはトゥーフェイス。

演ずるのはトミー・リー・ジョーンズさま。私はトミー・リー・ジョーンズ大先生が大好きです。

「逃亡者」や「追跡者」、オリバーストーン監督の「天と地」みたいな名作に出ていたかと思うと、「沈黙の戦艦」ではロックンローラーに化けたテロリストのボスを演じたり、この映画ではゴテゴテメイクでトゥーフェイスを楽しそうに演じたり。今ではBOSSのCMはこの人抜きでは考えられません。

こういう役者さんって大好きです。

そして物語途中から待ってましたとばかりに登場するのはジム・キャリーさま演ずるリドラー。

懐かしのテレビシリーズではナゾラーなんて名前をあてられておりましたです。

しかしすごいなあ。ジョーカー、キャットウーマン、ペンギン、トゥーフェイス、リドラー。

バットマンはキャラの宝庫です。

それぞれが魅力的なのがいいですよ。

なおかつ映画版だから、その魅力的なキャラを惜しげもなくバンバン再起不能にしたり殺したりするところが太っ腹。

これが日本のものだと、次回作のこと考えて、なんとなくあのワル、生きてて逃げ延びたのかもしれないなあみたいな消しかたするんだけど。

しかしヴァル・キルマーさまのバットマン。

ちょっと若すぎて、線が細いなあ。

おおそうじゃった。この作品から、バットマンに味方する新キャラ、ロビンが登場します。

クリス・オドネルさま。

「バーティカル・リミット」を見たとき、この人どこで見たんだっけ、と思ってなんか喉に小骨がひっかかったような状態だったのですが、このコラム書いてて思い出して、とてもすっきりしましたです。

## ロストボーイ

---

1987年アメリカ映画

監督 ジョエル・シューマッカー

製作総指揮 リチャード・ドナー

主演 ジェーソン・パトリック、キーファー・サザーランド、コリー・フェルドマン

兄弟が母とともに町に引っ越してきます。

この町ではいかにも悪そうな暴走族グループが暴れまわっています。

兄はその暴走族の女スターに一目惚れ。

それを見咎めた族のリーダーと度胸試しをし、気に入られた兄はグループの会合への参加を許されますが、実はこの暴走族のメンバー、みんなバンパイアでございまして、その会合ってのは、バンパイアグループに彼を引き入れる儀式だったのです。兄、昼間動くのが億劫になったり、弟の飼っている犬に襲われたり、いきなり空とんだり、鏡に透けて映ったりと、徐々にバンパイア化していきます。

弟にはバンパイアハンターオタクの二人の友人がおりまして。

完全にバンパイアになる前なら、親バンパイアを退治したら助かるとか言われます。

かくして、兄を助けるために三人の少年たちが大騒ぎしながらバンパイア退治です。

この作品をはじめてみたとき、結構驚きでした。どうしてこの設定に気付かなかったんだろうって。

フライトナイトも感動ものでしたが。

ラストは半バンパイアとバンパイアとの対決。

意外な「親バンパイア」の存在が明らかになるドンデン返しつき。

「スピード2」のジェーソン・パトリックさま、「24」のキーファー・サザーランドさまの若き日の姿と、「13日の金曜日・完結編」のコリー・フェルドマンが大きくなった姿が同時に楽しめる、とってもお得な映画です。

## バーティカルリミット

---

2000年アメリカ映画

監督 マーティン・キャンベル

主演 クリス・オドネル、ロビン・タニー、ビル・パクストン、イザベラ・スコルプコ、スコット・グレン

山岳アクションアドベンチャーというのでしょうか。

登山家の兄妹のオドネルさまとタニーさま。

登山中の事故で父を亡くした過去があります。

それも兄オドネルさまにとっては妹と自分の命のために父のザイルを切ったというキツイ過去なわけでございます。

数年後、妹タニーさまは山岳ドキュメンタリーの撮影チームに加わって雪のパキスタンK2へ行きます。

登山をやめた兄オドネルさまですが、妹に会うためにベースキャンプに合流。

山頂付近に嵐が近づきますが、タニーさまを含む登山家たちはK2登頂を強行します。嵐はチームを直撃。

登山家たちを襲う猛吹雪。

まずタニーさまがクレバスに落下。

ザイルで結ばれた三人のメンバーが続けて落下、その直後に大規模な雪崩。

三人はクレバスに閉じ込められてしまう。

三人を救うタイムリミットは出発から二十二時間。

それを過ぎると水分不足から肺水腫になり、三人は死んでしまう。

オドネルさまはニトログリセリンを背負って山に登り、氷を爆発させて三人を助けようと計画します。

なんでこんなにいろんなことが起こるんだろうってくらい、いろんな試練がオドネルさまら救助チームに降りかかります。

物語冒頭の父の死に方がオドネルさまとタニーさまのひとつひとつの意思決定に微妙な影響を与えます。

そしてそれが物語クライマックスにつながる大きな伏線になっています。

雪山での遭難。

そしてその救助。

それがこんなに面白いスペクタクル映画になるってのが、新鮮な驚きでございました。

## シャークテイル

---

2004年アメリカ映画

監督 ロブ・レターメン

声の出演（吹き替え） ウィル・スミス（香取慎吾）、ロバート・デ・ニーロ（松方弘樹）、レニー・ゼルウィガー（水野美紀）、ジャック・ブラック（山口智充）、マーティン・スコセッシ（西村雅彦）、アンジェリーナ・ジョリー（小池栄子）

私はこういった系の映画は苦手ジャンルに属します。アニメだけど、古いタイプのアニメじゃなくて、CGアニメです。「ファインディング・ニモ」だとか「バグズ・ライフ」、「トイ・ストーリー」系の絵です。なんか人間が出てくるととたんにリアルさが失われますよね、こういう系。

過去の作品のそんな反省があったのかなかったのか、本作では人間は全くできません。

魚をモチーフにした生き物が出てくる。モデルになる魚はあるらしいのですが、私は食べるのでできない魚はあまり詳しくないので、わからなかった。ナントカアケベラというのだそうです。主人公の魚。

役名を鮮明に覚えているわけでもなく、しかたないので吹き替えの声の出演者で説明しますです。魚の世界（リーフ＝珊瑚礁ですな）での成功を夢見る香取さま（＝ウィル・スミスさま）。彼はカーウォッシュならぬホエールウォッシュで働いています。同じ職場で働く水野さま（＝レニー・ゼルウィガーさま）は彼のことを思っているが、彼はまるで気付いていない。リーフの住人たちは鯨が来ることを恐れています。このエリアを仕切っている鯨のボスは松方さま（＝デ・ニーロさま。彼には二人の息子がいて、弟が山口さま（＝ジャック・ブラックさま。この弟は鯨のくせにベジタリアンだったりします。息子たちを心配する松方は、兄を見張り役にたてて弟が魚を食べるようにしようとする。

一方、仕事の借金でボス西村さま（＝スコセッシさま）とトラブった香取さまはお仕置中。そこに山口さまとその兄が通りかかり、香取さまは兄鯨にターゲットとして選ばれてしまうわけです。山口さまは香取さまを喰うふりをして逃がそうとするが、それを見抜いた兄鯨が香取さまを食おうとした瞬間、間の悪いことに通りかかった船の錨に当たってご臨終。

ここらあたりから物語が大きく動きます。香取さまはシャーク・キラーとして有名人にされてしまう。兄を目の前で死なせた山口さまは父に顔向けができず、家に帰れなくなってしまう。再び山口さまと香取さまは出会い、共感した彼らは共に暮らすことになる、こんな話です。

やっぱりわかりにくいなあ。声の出演者で書くと。

ただ、キャラクターのモチーフが声の出演の役者さんなんで、それはそれで笑えます。

デ・ニーロさま顔の鯨とか。アンジェリーナ・ジョリーさまの顔した魚がでてきたときは爆笑してしまいました。

## シックスセンス

---

1999年アメリカ映画

監督 M・ナイト・シャマラン

主演 ブルース・ウィリス、ハーレイ・ジョエル・オスメント、トニ・コレット

「意外な展開」「どんでん返し」の代名詞ともなっている名作でございます。

死者が見えてしまう少年。そして彼を救おうとする医師。

二人の交流が丁寧に描かれます。

でもねえ。「意外な展開」ネタ、バレバレでした。

ここからはネタバレです。見てない人は映画みてから読んでくださいね。

トップシーンからちゃんと見ておられた人ならほとんど気付いたんじゃないでしょうか。途中の伏線もけっこうあからさまだったし。

「『シックス・センス』のネタには気付かなかったけど『〇〇』では気付いた」とか、「この作品のドンデン返しは『〇〇』のラストに似てる」とか、何かにつけひきあいに出されるってえことは、それなりによく出来ているってことでしょうか。

でもねえ、普通あり得ないですよ、あのトップシーンは。で、作家的な目で見ると、レストランのシーンにしてもウィリスさまの自宅のシーンにしてもあり得ないです。それまでのドラマ展開でああいう場面が唐突に出てくるなんて。何らかの伏線だとしか考えられないですよ。だとすると、そのあり得ない場面をつないでいけば、ラストのどんでん返しが読めてしまうと、こういうことです。

ちなみにこれまで見た映画の中で、ラストシーンが読めなかった作品は...なんて紹介してしまうのがよくないんですよ。

その紹介文でその映画を見た人は、『この映画、最後にドンデン返しがあるらしいから、だまされなくて見るぞ』って構えて見るから、ドンデン返しが楽しめない。ってことで、「ラストシーンが読めなかった作品」についてはこの本の中で知らん顔してご紹介しちゃいますので、頑張って「パパが見た映画」、365本制覇してくださいね。

## シックスデイ

---

2000年アメリカ映画

監督 ロジャー・スポティウッド

主演 アーノルド・シュワルツェネッガー、トニー・ゴールドウイン、マイケル・ラパポート、ウエンディ・クルーソン、ロバート・デュバル

クローン羊が開発されましたよね。

そこからやがてクローン人間が開発されたとしなせえ。

で、クローン禁止法が施工される。

しかしクローン技術は厳然として残っている。

研究レベルでの開発も進む。そうなるとうどうなるか、という話。

シュワルツェネッガーさまはヘリパイロット。

普通に暮らしていた絵に描いたようなスケベ親父が、自宅に帰るともう一人の自分がいる。

おやや、と思っていると、バタバタとやってきたいかにも危なそうな一団。

いきなりシュワさまを殺そうとする。シュワさま逃げる。

逃げる途中でそのワルを殺しても、きっちり生き返ってまた狙われる。

クローンなんですか、こいつら。

物語が進むにつれ、様々な秘密が解明される。クローンを製造していた会社の会長ラパポートさま。

実はこいつは数年前に死んで、クローンが会長職についている。

今回、反クローン派が会長の命を狙って、ラパポートさまとシュワさまの同僚であるゴールドウインさまが殺されたわけです。

そこで組織は亡くなったその友人とシュワさまをとり違えてクローン再生してしまい、こういうややこしいことになってしまった。

組織としては会長がクローンであるということをとにかく伏せたい。

そういう事情があって、シュワさまがひたすら命を狙われるわけです。

物語後半にはあっと驚くドンデン返しつき。このドンデン返しは見抜けなかったです。あからさまな伏線はってあったのに。

ラストはシュワさま映画らしい、ヒューマンな終わり方。

こういうエンディングってほっとしてとってもいいですね。

# ゾンビ

---

1978年アメリカ映画

監督 ジョージ・A・ロメロ

主演 デビッド・エンゲ、ケン・フォーリー、スコット・H・ラインガー、ゲイラン・ロス、トム・サビーニ

中学三年くらいだったと思います。このとんでもない映画を見たの。

あまりにもとんでもない映像ばかりだったので、大幅カットされたり、着色処理されたり、部分的にストップモーション処理されたりしてのロードショーだったです。

で、この映画がロードショーした後、レンタルビデオ文化が大ブレイクしまして、カルト的な人気を博す作品となります。

当然、雨後の筍のごとく様々な後発ホラー映画を生みまして、いい意味でも悪い意味でもホラー映画史の中で未だに語り継がれる傑作でございます。基本的にはこの物語は三部作の第二作。前作「ナイト・オブ・ザ・リビングデッド」の設定をそのまま引き継いでおります。

物語の開幕から、テレビ局が大パニックになっている描写。謎の宇宙線が地球に降り注ぐ。

その光線を浴びた死者は歩きだし、生者の肉を喰らおうとする。ゾンビに襲われた者もまたゾンビとして再生し、次の犠牲者を探して歩き回るようになります。

テレビ局の女性ディレクター、その彼氏のヘリパイロット、SWAT隊員二名は都会を脱出、ショッピングセンターに立てこもります。日に日に増えるゾンビをショッピングセンターから締め出そうとトラックで入り口を塞ごうとしたとき、SWAT隊員一名がゾンビの犠牲に。

そこからは誰もいないショッピングセンターで、世界が崩壊していく様子をただただテレビで見つづける毎日が続きます。ここらあたりの閉塞感の描写が素晴らしい。

やがてショッピングセンターに目をつけた暴走族が乱入。

主人公グループ対暴走族対ゾンビの生き残りを賭けた闘いになります。

結局主人公グループは二人が生き残り、ゾンビだらけのセンターを捨てて出発することになります。彼氏にヘリ操縦を教わっていた元ディレクター、出発した直後に言います。

「燃料がほとんどないわ」 生き残った黒人SWAT隊員がつぶやく。「別にいいじゃないか」

この映画の作品世界を象徴するシーン。しかしながらテレビ初オンエアでは

「(生まれてくる死んだヘリパイロットとの間の) 子どもの父親が必要だわ」 「任せとけ」

という希望ある台詞に変更されていました。

この台詞、二度目のテレビ放映からは元の台詞に戻されていました。どちらがいいかは評価が分かれるところですね。

特殊メイク界の巨匠中の巨匠、トム・サビーニさまが暴走族役でご出演。

もちろん特殊メイクもご担当されておられます。



## 13日の金曜日

---

1980年アメリカ映画

監督 ショーン・S・カニングham

出演 アドリアヌ・キング、ベッツィー・パーマー。なんとケビン・ベーコン

えっと、目指せホラー作家目指せ推理作家なわけです。私って。

こんなこと恥ずかしげもなく堂々と書くわけですから、これまでに見たホラー映画の量って半端な量じゃないですよ。

自慢じゃないですが。

自慢じゃないですがって言ったら自慢なんだけど。

でもね、アニメやホラーが好きだって書くと、ひいちゃう人多いですからね。

この話は「湖畔の殺人鬼」もののホラーです。

というよりこの作品がこのジャンルを確立したとっていいです。

あと「仮面の殺人鬼」ものの元祖もこの作品。

ここからネタバレえ。

この作品には「仮面の殺人鬼」は登場しません。

みなさん勘違いされておられますが、「13日の金曜日」第一作は「仮面の殺人鬼」ものではなく、どちらかといえば「スクリーム」シリーズとか「ローズマリー」みたいにフーダニット（犯人は誰か）もののスプラッターホラーです。

当然殺人鬼ジェイソンは登場しません。

話の中でジェイソンという名前は登場してくるわけですが、実際の人物としてはジェイソンは回想というか、イメージの中でしか登場しません。

ここいらの構造、実は自作のホラーで使った設定でございます。

結局この映画ではジェイソン・ボリーズは犯人ではなかったわけです。

だから面白かったというか、何というか。

ほとんどの人が期待しているホッケーマスクも本作では登場しません。

第二作でも使われない。

殺人鬼ジェイソンがホッケーマスクをかぶるのは第三作です。

それまではホッケーマスクは出てこないです。念のため。

# 催眠

---

1999年東宝・TBS作品

監督 落合正幸

主演 稲垣吾郎、菅野美穂、宇津井 健

原作は松岡圭祐さまのベストセラー小説。でも原作と映画は似ても似つかぬ内容であると書いておきます。そもそも原作は、催眠術を使って人の心に病を癒す「催眠セラピスト」が、現実でありそうな複数の事件を様々な壁にぶち当たりながら解決していく様子を描いた心温まる作品。映画では主人公と主要キャラと途中の設定だけ残して、全く別の「催眠術を使ったホラー」に仕上がっていました。あの原作がこんな話になるんかいな、と、とても驚いたことを覚えています。

以下の記述はネタバレ注意です。ご了承ください。

冒頭からやってくれます。

陸上競技の練習中、自分の限界を超えて走り続け、複雑骨折してしまう選手。絵に描いたような幸せそうな老夫婦がなぜか部屋のガラス窓を破って投身自殺。老刑事宇津井さまは、まったく接点のない、いや「ミドリのサル」という被害者たちが残した言葉だけが頼りの不可解な事件の頻発に頭を痛めています。

一方、催眠セラピスト稲垣さまは不思議な少女菅野さまと出会います。普通に過ごしている少女が、突然、宇宙人に操られたように豹変してしまう。「ワレワレハ、ユウコウテキナ、ウチュウジンデス」なんていい始める。なんじゃこりゃあ、ってな感じです。

警察に「催眠と行動」みたいな講義の講師として招かれた稲垣さまは、宇津井さまと出会います。稲垣さまは、頻発する事件の背景に催眠術、それも後催眠暗示が関わっているのではないかと考えはじめる。事件に協力する稲垣さま。そして彼はそれと並行して不思議な少女と徐々に関わりあいを深めていきます。

こういう展開で菅野美穂さまが事件に関係ないわけじゃないじゃないですか。

菅野美穂さま、実は多重人格障害をわずらっていたことがわかる。そしてその人格の一つが強力な催眠術を使う人格だったことがわかって...てえ話。

後半はほとんどホラー映画。

菅野美穂さま、天井にはりついたりぐにゅうううって身体がねじれたり、とにかく大サービスです。ラストでもう少し怪物キャラしてくれたらもっとうれしかったです。

サイコスリラーみたいな前半から、ホラーの後半。

二本分楽しめる怪作。最後の最後までやってくれます。

なかなか便利な設定です。後催眠暗示って。

でもこれ以上は使えないだろうな。宮部みゆき様も使ってたし。

## オールザットジャズ

---

1979年アメリカ映画

監督・脚本 ボブ・フォッシー

主演 ロイ・シャイダー、ジェシカ・ラング

ロイ・シャイダーさまって俳優さん、けっこう好きです。

「フレンチ・コネクション」「重犯罪特捜班 ザ・セブン・アップス」あたりから注目しておりまして、「ジョーズ」「ジョーズ2」「ブルー・サンダー」と、たて続けにメジャー作品に主演。

渋いオジサマって感じのいい俳優さんです。

この人が歌って踊るっていうだけでこの映画を見るために映画館に足を運び、ビデオを買いました。

高校時代のルーズリーフノートの仕切り紙に、この映画の有名な台詞「イツ・ショータイム、フォックス（『ショータイムですよ、みなさん』と訳されていました）」っていう落書きを書いたことを覚えているので、高校時代に見た映画なんだろうなあ。

主人公のシャイダーさま（ジョー・ギデオンって役名です）、朝起きて目薬をさし、アルカセルツァーみたいな水で溶かすタイプの発泡性の薬を飲んで、顔を洗って鏡に向かって「イツ・ショータイム、フォックス」って言います。

これが彼の日課。

彼の人生そのものがショータイムなんだって意味でしょうか。人生そのものがショーなんだって意味なのでしょう。ショービジネス界で成功した彼の過去と現在が描かれます。

成功したといってもやはり本場は厳しい。彼が振付けするダンスが難解だといってなかなかスポンサーがつかなかったり。ダンスを変えたらスポンサーがつくから振り付けを変えろと言って来るプロデューサーがいたり。

そもそもこの作品は監督ボブ・フォッシーさまの自伝的作品だという予備知識をもって見にいきましたので、ボブ・フォッシーさまみたいなビッグネームでもダンスの舞台つくるって大変なんだ、って思いました。

物語はシャイダーさまが謎の女性と話しながら進みます。

舞台セットのような場所で、舞台衣装のようなかっこをした女性。

この女性の正体はラストで判明します。

クライマックスの歌と踊りは圧巻。歌詞を紹介できないのが辛いなあ。歌詞を紹介するとネタバレになってしまう。

あらすじを肝心なところで止めた意味がないし、女性の正体を伏せた意味がなくなります。ラストの歌とダンスを見るだけで値打ちがある名作であります。

ちなみに。「電話してちょうだい。ピアノ売ってちょうだい」と財津一郎さまが歌う某ピアノ買取専門店のCMで、財津さまのバックで踊るへんてこな衣装のダンサーの元ネタはおそらくこの

映画だろうと思います。

## ホワイトナイト／白夜

---

1985年アメリカ映画

監督 テイラー・ハックフォード

主演 ミハイル・バリシニコフ、グレゴリー・ハインズ、イザベラ・ロッセリーニ

「コーラスライン」って作品のなかで、こんな台詞がありました。

オーディション会場で、出番待ちのダンサーが踊り終わったダンサーに聞く。

「彼（演出家）はどんな奴を求めているんだ？」

踊り終わったダンサーは一言。

「バリシニコフ」と言います。

ダンス映画ですごいダンサーの象徴として台詞にでてくるようなダンスの達人バリシニコフさま。

ロシアからの亡命者でアメリカンダンスシアターのメインダンサーです。

その人が主演のダンス映画だからすごくないはずがない。

共演はタップダンスの名手グレゴリーハインズさま。

現実のバリシニコフさま同様、亡命したダンサーが主人公。

バリシニコフさまを乗せた飛行機がトラブルでロシアに不時着。

彼はロシアに捕らわれます。

ロシアでもう一度踊れと詰め寄る高官。

彼のダンスパートナー兼監視役は彼とは逆にアメリカからロシアに亡命したタップダンサー、ハインズさま。

二人はアメリカ大使館へ逃げ込む計画をたてますが...

途中のダンスシーンだけでも見る価値ありの佳作です。

## 将軍家光の乱心・激突

---

1989年東映作品

監督 降旗康男

主演 緒形 拳、千葉真一、加納みゆき、二宮さよ子、何と織田裕二

イチオシの時代劇です。普通ね、時代劇って、話の前半は説明じゃないですか。「享保元年、時の権力者徳川タケミチは…」ってな感じで、そこからあーだこーだがあって、ようやくチャンバラになりますでしょ。普通は。

この映画は違います。いきなりチャンバラ。

ええ？って思いますです。時代劇の冒頭って、いきなり油断しますもんで。

どこぞの温泉地で保養している若君。

その若君に突然襲いかかる謎の集団。

若君を守る家来たちはまたたく間に斬られ、若君の命は風前の灯火、と思いきや、これまた謎の野武士集団が若君を助ける。

若君は三代将軍家光の息子。

その命を狙っているのは父家光。

自分になつかず、自分に似ていない息子の命を狙う乱心将軍を京本さま熱演です。

将軍家内部にもやはり勢力争いがありましてね。

自分の息子を殺そうとする将軍はすでにご乱心あそばしておる、ってことで、若君を将軍にしてしまっ、裏で幕府を操ろう、って一派もおりまして。そういう一派が腕のたつ信頼できる野武士を集めて若君を江戸城まで無事に連れてこいと指令を出したわけでございます。

家光派・刺客のリーダーはアクション監督兼任の千葉さま。

若君派・野武士のリーダーは緒形さま。

アクション監督・千葉さま、本気の格闘シーンクリエイト。

これまでの日本映画では見たことのないアクションシーンの連続です。

キャッチコピーの「命がけだから面白れえ」という言葉に負けない命がけアンド面白さ。

戦闘シーンでいきなりアルフィーが流れる斬新さ。

ぜひチェックしていただきたい作品でございます。

## あずみ

---

2003年「あずみ」製作委員会作品

監督 北村龍平

主演 上戸 彩、原田芳雄、オダギリジョー、竹中直人、小橋賢児

戦乱で親を失った少女あずみ＝上戸さま。じい＝原田さまに拾われて育てられ、九人の少年とともに徳川の天下をおびやかす反乱武将を倒す刺客として育てられます。

やがて修行を終え、下界に下りる彼らに、原田さまから最後の修行を命じられます。

仲のよい者同士がペアを組み、殺しあう。

生き残った上戸さま、小橋さまら五人は、刺客として豊臣の臣下浅野長政（伊武雅刀さま）、加藤清正（竹中さま）らの暗殺に挑むことになるわけです。

なんでこんなに血を流さなければならないのか理解できないほど血が流れます。普通に刀をふってどさっと倒れたら、それは死んだことになるんだけど、そうはしない。うぐぐっとか言って、血をだらだら流しながら死んでいきます。

映画冒頭で十人だった若者たちは「最後の修行」で一気に五人になる。「ドリトル」小栗さまや「金八先生」佐野さま、「ウォーターボーイズ」瑛太さまは開始早々死んでしまいます。

残った「ウォーターボーイズ」金子さまや「ブラッディマンデイ」成宮さまなんかもガンガン死んでいく。小橋さまなんかもとにかくもうええやろっていうくらいズタズタにされて死んでしまう。

「バトルロワイヤル」の回でも書きましたが、とにかく嫌になるほどの血を流して、残酷な方法で主人公たちが死ぬ。

そうならないとあずみが最後に剣をとり、さらにその後、自分の運命を決める決意の必然性が希薄になる。ドラマの構造上しかたない流血なんだろうな、と思います。

主役、というか、冒頭に登場する十人に関しては、生き残る者を除いてはとにかく悲惨な死に方をします。とってもブルーになる映画でした。

めっけものはオダギリジョーさまのオカマ剣士。ものすごい存在感。とんでもないオーラを出せる怪優に成長しましたね、オダギリさま。

「仮面ライダークウガ」の頃はここまで化けるとは思わなかったです。

もひとつ、クライマックスで見せる縦方向三百六十度回転カメラ。こんな映像ありかいな、と思えるほど新鮮でした。

# 必殺

---

1984年松竹・朝日放送作品

監督 貞永方久

主演 藤田まこと、三田村邦彦、中条きよし、山田五十鈴、菅井きん、白木万理、片岡仁左衛門（片岡孝夫）、中井貴恵、朝岡雪路、芦屋雁之助、ひかる一平、鮎川いずみ、研ナオコ、浜田朱里

私が大学生の頃。ってことは劇団の研究所にいたころです。

とにかく必殺って番組は人気がありましたです。

私が面白がって見始めたのは「必殺からくり人・東海道五十三次殺し旅」の頃だったです。

この頃は、三ヶ月くらいのサイクルで藤田まことさまものとそれ以外のシリーズを交互にやっていました。次に「必殺商売人」（藤田さま・梅宮さま・草笛さま）、次が「必殺からくり人・富獄百景殺し旅」（山田五十鈴さま・芦屋鴈之助さま・沖 雅也さま）、んで伝説の「必殺仕事人」シリーズが始まると、こんな感じだったです。

「仕事人」も最初は藤田さま・三田村さまに伊吹吾郎さまでした。藤田さまも伊吹さまも刀で殺す。三田村さまは最初はノミで殺してたんじゃなかったでしょうか。これはあきらかに全員キャラかぶりです。途中から浪人ものの伊吹さまはマゲを落とし、あんまさんになって悪人の背骨を折って二つに畳む、初期の念仏の鉄（山崎 努さま）系のキャラになり、三田村さまはノミをかざしに持ち替えて初期の梅安（緒形 拳さま）系のキャラになります。

番組黄金時代は中条きよしさまのレギュラー入りあたりからでしょうね。

この映画版「必殺」は藤田さま・三田村さま・中条さまのレギュラーメンバーの頃の作品。

仕事人とは別の殺し屋組織が現れて、仕事人が一人また一人と殺されていくって話。

殺される仕事人の女元締めが朝岡雪路さま。芦屋鴈之助さま・研ナオコさま・斎藤清六さまなんかも仕事人役で出ておられます。

殺し屋組織の謎の女が中井貴恵さま。さすらいの仕事人に片岡仁左衛門さま。片岡孝夫さま時代です。

片岡大先生がとにかくおいしい。ええとこぜんぶかっさらっていくとはこういうことでしょうか。

テレビで慣れ親しんだキャラがスクリーンに出てくるってこういうことなのか、とすごく感動したのを妙に覚えております。いきなり「荒野の果て」なんか流れて、画面いっぱい三田村さまとか中条さまとかが出てくるわけですから、そりゃあ感動しまっせ。



## オリエント急行殺人事件

---

1974イギリス映画

監督 シドニー・ルメット

主演 アルバート・フィニー、リチャード・ウィドマーク、ショーン・コネリー、イングリッド・バーグマン、ジョン・ギールガッド、アンソニー・パーキンス、マイケル・ヨーク、ジャクリン・ビセット、ローレン・バコール、バネッサ・レッドグレイブ

邦画の時代劇が続きました。ちょっと時代劇気分だったんですよ。

ここからは原作ものの推理ものを何本かいきましょうね。

まずはやっぱりこの映画。

「オリエント急行殺人事件」です。

原作者のアガサ・クリスティさまですが、私はコナン・ドイルさまだとかエラリー・クイーンさまだとかディクソン・カーさまとかよりもクリスティ先生を評価しております。

掟破りすれすれのところというか、はっきり掟破りしているところなんか大好きです。

中でも「アクロイド殺し」「オリエント急行の殺人」「カーテン」はアッと驚く三大小説。

「そして誰もいなくなった」なんかも好きですが。いかん、こう書いてしまうのがいけないのでしたよね。読む人に先入観を与えてしまうから。

実際どうなんやろ。この本読んでいる人って、このへんの小説読まれているのでしょうか。

ま、いいか。

雪で立ち往生した列車の車内で殺人事件が発生。

名探偵ポアロが殺人事件の謎に挑みます。犯人は被害者と同じ寝台車に乗っていた乗客の誰か。容疑者全員に動機があり、全員にアリバイがあった...という推理もの映画の黄金パターンを踏襲した、というかそのパターンの先駆けとなった作品です。オールスターキャスト推理映画の先駆けもこの作品でしょうね。登場俳優の豪華さは半端じゃないです。

大スターたちの演技合戦。受けてたつのはポアロ＝アルバート・フィニーさま。

かなり原作を意識したメイクで登場。

私はこの後のシリーズで登場するピーター・ユスチノフさまのほうがポアロ役者としては好きな感じなんですが、原作のポアロってやっぱりフィニーさまですよ。

犯人特定のデータが出揃い、探偵の推理が形になり、容疑者を集めて探偵が「さて...」となるわけです。

それにしてもフィニーさまをとり囲むように周囲の椅子に座った「容疑者役の俳優」たち。すげえメンバー。フィニーさま、やりにくかったかもしれませぬね。

## そして誰もいなくなった

---

1974年イギリス映画

監督 ピーター・コリンソン

主演 オリヴァー・リード、リチャード・アッテンボロー、ゲルト・フレーペ、アドルフォ・チェリ、シャルル・アズナブール、ハーバード・ロム

原作ものの推理ものです。

この話はこの話であまりにも有名ですよ。

U・N・オーエンという謎の男から招待状を受け取った十人の男女。

孤島の屋敷に集められます。

しかし肝心の招待主オーエンはいつまでたっても姿を見せない。

やがて屋敷の広間に十人の出席者を告発する声が響く。

この設定はいかにも映像向きですよ。

ひとりひとりを告発する声にあわせてカメラがその人物をアップにする。

「007 ゴールドフィンガー」＝ゲルト・フレーペさまだったり、「007 サンダーボール作戦」のワル＝アドルフォ・チェリさまだったり、「狼男」＝オリヴァー・リードさまだったり、「大脱走」の脱走兵のボス＝リチャード・アッテンボローさまだったり、「ピンクパンサー」の上司～敵役＝ハーバード・ロムさまだったり。その十人が、インディアン人形の詩になぞらえて殺されていく。

そして屋敷の居間に置かれたインディアン人形もひとつまたひとつと消えていく。

とにかくキャストिंगがいかしてます。

なんかみんな悪そう。

原作版と舞台版（戯曲版ですな）ならびに映画版とでは、結末が違います。

詳細を知りたい方は原作小説を読んで、そのあと舞台戯曲を読むまたは映画を見るってことをしてください。

いくらネタバレ映画感想本でも、推理映画の結末を書く度胸はありませんです。

小説のほうは、本当に誰もいなくなります。

ほな犯人誰やねん。だから原作読んでくださいって。

しかし戯曲版では違う結末が用意されています。

そらそうやろ。

舞台で本当に誰もいなくなったらお客さんが困ります。

でも話としては原作小説のラストのほうのはるかに面白い。

推理小説の映画化ってことで作品いろいろ思い出していたのですが、クリスティ以外ってあまりないですね。

それだけクリスティの小説が映像向きで面白いってことなのでしょうね。

クリスティばかり書くのも何だから、明日は乱歩か横溝とりあげようかな。

## 犬神家の一族

---

1976年東宝・角川映画

監督 市川崑

主演 石坂浩二、高峰三枝子、三条美紀、あおい輝彦、地井武男、草笛光子、加藤 武、島田陽子、大滝秀治、三国連太郎

横溝先生の市川監督版「金田一シリーズ」第一作です。

シリーズはこの後、「悪魔の手鞠歌」「獄門島」「女王蜂」「病院坂の首くくりの家」と、ひたすらおどろおどろしいタイトルの作品が続き、平成・豊川版「八つ墓村」、リメイク版「犬神家の一族」へと続きます。

大財閥、犬神家の当主のおじいさん三国さまが亡くなります。

財産を相続できるのはそれぞれ母親の違う三人の娘、高峰さま・三条さま・草笛さま。役名は松子・竹子・梅子だったかな。

わかりやすい。

財産分割について書かれたおじいさんの遺言状の内容に問題があるということで、石坂さま演ずる金田一が犬神家へ向かう。

遺言状が発表されるや否や遺産相続権物がバンバン殺されていって、石坂さまが犯人を推理するという展開。

有名なこの小説の設定ですが、現実には、犬神老人が亡くなった年が昭和何年だったかがポイントらしい。

財産分割の民法規定が異なり、異議申し立てができるように民法が改正されたので、そもそもこの事件は起こらなかったかもしれないらしいです。

このへんのことについては「金田一さん、あなたの推理は間違いだらけ」という本に詳しいです。

長回しと細かいカット割りを混在させる市川演出が光っています。

突然インサートされるモノクロの回想映像もインパクト十分。

とにかく市川監督の技量が光る一作です。

ちなみにシリーズではこの映画だけが角川映画という扱いになっているはず。

角川映画の輝かしいスタートラインともいえる作品です。

## 理由

---

1995年アメリカ映画

監督 アーネ・グリムシャー

主演 ショーン・コネリー、ローレンス・フィッシュバーン、エド・ハリス

ほんますんません。

この映画に関してはネタバレをお許しください。

で、この映画をこれから見ようかななんて思っておられる方は、見てから続きを読んでくださいまし。

くれぐれもよろしくお願い致します。

えっと。この映画、かなり早くから期待していた一本でした。

ある本にとりあげられている原作だったから。

書かないとまるで伝わらないから、書いてしまいますが。

「サイコミステリー読本」とかいう本で、サイコミステリーの小説や映画を紹介する本です。

ってことはね、この映画、カテゴリーとしてはサイコミステリーに属する映画です。

でも、「羊たちの沈黙」みたいなわかりやすいサイコミステリーではありません。

映画を見る前に「羊たちの沈黙」がサイコミステリーであることがわかったところで、この映画の面白さは損なわれませんが、この「理由」に関しては原作がサイコミステリーの傑作であることがわかってしまったら、それだけで面白が半減してしまいます。意味わかるかなあ。

ここから先は、この映画見ようと思っていてまだ見てない人はマジ読まないでね。

主人公は弁護士ショーン・コネリーさま。

彼の元にある刑事事件被疑者から弁護の依頼が入る。

被疑者は黒人。

「おんや、まあ、おったまげただあ、有名な弁護士の先生がおらのために弁護に来てくださったかあ？ …私がこんな人間だったら無実の罪でこんなところに閉じ込められることなどなかったのですが。私が無実の罪を着せられているのはひとえに私が黒人であるからです」

なんてすらっと言ってしまいうんてりなわけです。

コネリーさまは彼の依頼を受け、彼が裁かれている事件について調べはじめる。

普通の法廷ドラマまたは推理ドラマの香りを漂わせながら物語は進みます。

もう気付きましたでしょうか。

この映画をサイコミステリーだって言うって言うということは、犯人はサイコさんでなければならぬので、そのサイコさんが誰だろうって話になって、そしたらサイコさんでもある犯人ってこいつしかおらんやん、って話になりますよね。

だからこの映画をサイコミステリーであるってブックガイドに印刷しちゃいけません。余談。そ

の本では他にも色々な小説をとりあげておりました。

「黒い薔薇（フィリップ・マーゴリン）」はまだいいとして、R・NのWって小説なんかも「この小説はサイコミステリの傑作だあ」とか書いてました。

でもこんなの書いちゃいけない。

読み終わった今にして思います。

犯人がサイコであったことがラストのドンデン返しなんですよ。

この小説。

返す返すも「あの書評読まなきゃよかった」って思いましたです。

## 悪魔の手鞠歌

---

1977 東宝作品

監督 市川崑

原作 横溝正史

主演 石坂浩二、岸 恵子、若山富三郎、仁科明子、北 浩二、草笛光子、加藤 武

「うちのうーらのせんざいに、雀が三羽とおまって、一羽の雀のいうことにはあいうことには」って手鞠唄の歌詞になぞらえて殺人が行われるという、見ていてすんげえディープな気分になる一作です。

市川版・金田一シリーズの最高傑作として推す人が多いですね。

私的にはトリックのスケールがすごい「女王蜂」のほうが好きなんですけど、女王蜂は他の作品と比べてちょっとだけ位置づけが違う。

ネタバレになるので詳しくは書けないですけど。

犯人書かないと論ずることができない話なんで。

でもまあシリーズのどの作品にしても犯人有名だから、別に犯人のこと書いたところで怒る人はいないでしょうけど。

山奥の村。

鬼首村。

その村で、殺人事件が起こる。

金田一耕介が犯人を推理する。

事件が解決する。

そんなお話。

ぜんぜん映画紹介になってないやないか。

まあ殺人事件は例の通り発生するし、またそれが横溝大先生お得意の見立て殺人だもんで、またかいな、好きやなあ、みたいな感覚で見えてしまいがちですが、この映画の良いところは石坂さま＝金田一と若山さま＝磯川警部の友情物語。

あと若山さまと岸さまのほのかな恋愛物語も泣かせてくれます。

ラストの駐車場の場面も秀逸。

このラストを見たオールド映画ファンの方は、やっぱりジャン・ギャバンさまの「望郷」のラストを思い出したのではないのでしょうか。

これについては市川監督ご本人が、「望郷」へのオマージュであるとはっきりおっしゃってられます。

パクリじゃないですよ。念のため。

## ルームメイト

---

1992年アメリカ映画

監督 バーベット・シュローダー

主演 ブリジット・フォンダ、ジェニファー・ジェyson・リー

原題は「独身・白人女性」だったと思います。

作品途中で主人公がルームメイトを募集する新聞広告に使われる文言。

主人公アリー＝フォンダさまは離婚歴のある男性と同棲中。

しかしその彼は、フォンダさまに内緒で別れた元妻と会い、身体の関係まで持っておりまして。

それを知ったフォンダさま、ブチ切れ。

彼氏を追い出して、ルームメイトを募集します。

見るからに野暮ったい女性ヘディ＝リーさまが応募してくる。

二人は意気投合。フォンダさまはリーさまをルームメイトとして選ぶ。

始めのうちはおずおずって感じだったリーさま。

しかし次第に彼女の言動に妙な部分が目立ちはじめます。

フォンダさまの部屋に勝手に入りこんだり、服を勝手に着たり。

髪を彼女と同じ色に染め、彼女と同じ髪型になり、フォンダさまの彼氏と親しく接しはじめる。

フォンダさまに追い出された彼はやがてフォンダさまとヨリを戻し、またいっしょに暮らしたいといい始める。

それに伴ってリーさまはどんどん不安定になっていきます。

これは変だと思い始めたフォンダさまはリーさまの部屋に忍び込み、リーが決して見せようとし  
ない「秘密の小箱」の中身を見ます。

そこには古びた新聞記事。

遊んでいた双子の姉妹の一方が、事故で死んでしまったってえもの。

どうやら双子の死んでないほうはリーさまらしい。

このへんでゾオっとします。

で、同時にどうしてリーさまがフォンダさまそっくりになっていったかがわかってくる。

リーさまがだんだん異常になっていくのもわかる。

こうなれば結末はどうなるか想像がつきますが、その想像に向けてリーさまの行動はどんどんエ  
スカレートしていきます。

内気そうなところから悪女っぽくなって最後に異常者までいってしまうリーさまがとにかくいい  
です。

フォンダさまと同じ色に髪を染め、フォンダと同じ服を着て、満面の笑みを浮かべるリーさまの  
顔は、悪意がない不気味さ。

夢にでてくるほど怖い。

すげえかわいい顔しているだけに怖い。

ほっとさせてその後にショックシーンを持ってくるホラーの手順もきちりふんでくれています

。

ラストはもう少し悪あがきしていただきたかったですね。13金のジェイソンみたいに。



## ウインドトーカーズ

---

2001年アメリカ映画

監督 ジョン・ウー

主演 ニコラス・ケイジ、アダム・ビーチ、クリスチャン・スレイター、フランシス・オコナー、ロジャー・カイリー

戦場で味方の部隊が全滅してしまった海兵隊員のジョー＝ニコラス・ケイジさま。  
瀕死の重傷を負います。

傷の癒えた彼に与えられた次の任務は、北米先住民ナボホ族の暗号通信兵ベン＝アダム・ビーチさまを護衛するというものでした。

ナボホ族の言語は暗号として最適だそうです。

ナボホ族の暗号通信兵は現実に存在していたそうです。

太平洋戦争下の1944年。

終戦前年ですね。

我々はそれを知っているけど、映画の中の登場人物たちはもちろんそのことを知らない。

ケイジさまとビーチさまは日本軍が占拠するサイパン島に配属されます。

ケイジさまと同じ任務を負った海兵がスレイターさま。

カイリーさまを護衛する任を負ったのは、人懐っこく、話好きのスレイターさま。

そんな彼にケイジさまは『通信兵とあまり親しくなるな』と忠告します。

実は彼らは護衛も任務ではあったのですが、もし日本軍に通信兵が捉えられた場合は、軍の暗号機密を守るため、彼らの命を奪うことも命ぜられていたわけです。

しかし戦場を走り抜けるうち、彼らの間には次第に、友情が芽生えます。

ここらの表現が巧いです。

戦争によって彼らの間に芽生えた友情は、やっぱり戦争によって引き裂かれてしまいます...

めっちゃリアルに。

ただ、とってもヒューマンな物語に仕上がっています。

ジョン・ウー監督がインタビューで語っているように、この物語には二丁拳銃も出てこないし、鳥も飛ばない。

絵空事のようなド派手なアクションはなく、リアルに撃ち・撃たれ・爆風に吹っ飛ばす描写が淡々と続きます。

アクション映画に定評のあるジョン・ウー監督が真正面から取り組んだ戦争映画。

もう少し嘘っぽい映画になると想像していました。

正直こんな映画になるとは思っていなかったです。

## タップ

---

1989年アメリカ映画

監督 ニック・キャッスル

主演 グレゴリー・ハインズ、サミー・デイビス・ジュニア、スザンヌ・ダグラス、サビオン・グローバー

私が子供のころ、サントリーのウイスキーのCMで圧倒的なリズム感というかノリというか、そういうのを披露されていたのが当時すでに大スターだったサミー・デイビス・ジュニアさま。フランク・シナトラさまに可愛がられて、シナトラ一家とか言われてました。

まあとんでもないレベルのダンサーでありシンガーだった人です。

そんなサミーさまもめっきり年をとられました。「ひええええ、これサミー・デイビス・ジュニアさまやんけ」って思ったことをとにかく覚えております。

この映画はけっこうお気に入り、中古ビデオ買ってまでして見ましたが、肝心の物語とかほとんど覚えておりません。

なんかダンス・スタジオが借金のカタになって使えなくなって、さあどうしようみたいな話だったような記憶があるんですが。

他の映画と混同してたらごめんなさい。ビデオ買ったわりに話覚えてないやんけ、とかのご批判がきそうなので、ぶっちゃけちゃいますが。

私が何度も見たのはこの映画のクライマックスのタップダンスシーンだけでござる。

もうしわけない。

物語とかぜんぜん忘れてます。しかし、すごいでっせ。

この映画のタップダンスシーンは。

主演は「ホワイト・ナイツ～白夜」でも華麗なタップを披露しておりましたグレゴリー・ハインズさま。

この人、メル・ブルックス監督の「珍説世界史パート1」では板の上にシート張ってその上に砂を薄く撒き、サンダルでタップするっていう前代未聞もののダンスを披露しておりました。

彼が今回挑戦するのはシンセサイザーとの融合タップダンス。

タップチップにマイクを仕込み、その音をワイアレスで飛ばしてシンセサイザーで音を加工してスピーカーで鳴らす。

こうなるとロックがバックでもタップの音が負けないわけですよ。

ラストのダンスシーンはとにかく何度も見ました。衝撃的だったです。

この映画を見た当時、私が勤めていたスポーツクラブにタップが踏める外人エアロインストラクターがいて、その人に見せようと思って無理してビデオ買ったのを思い出しました。

結局見せるまでに会社が倒産して会えなくなったけど（爆）

## ナイル殺人事件

---

1978年アメリカ＝イギリス映画

監督 ジョン・ギラーミン

主演 ピーター・ユスチノフ、ミア・ファロー、ロイス・チャイルズ、ジェーン・バーキン、アンジェラ・ランズベリー、オリヴィア・ハッセー、ベティ・デイビス、マギー・スミス、ジョージ・ケネディ、デビッド・ニーブ、ジョン・フィンチ

原作はもちろんアガサクリスティ女史でございます。

「オリエント急行殺人事件」に続いて、オールスターキャストで製作されたポアロものの第二弾。

ポアロ役はアルバート・フィニーさまからピーター・ユスチノフさまにバトンタッチされております。

原作のアクの強いポアロはフィニーさまに近いイメージなんだけど、ポアロ役としてじっくりするのはユスチノフさまかなあ。

根拠とかなないんだけど。原作は「ナイルに死す」。ちゃんと読んでいないので原作と映画とで話の内容とか変わってたら気付かないです。悪しからず。

冒頭からミア・ファローさまが怪しい。

とっても怪しい。

大富豪のイケズ女、ロイス・チャイルズさまに彼を奪われ、彼と富豪女をつけまわすストーカーチックな女。

目つきも悪く、いつキレてもおかしくない雰囲気。

やがてその大富豪女が客船の中で殺されてしまいます。

動機面では誰がどう考えてもミア・ファローさまが犯人だと思えないんですが、ミア・ファローさまは富豪女が殺される直前にキレて元彼を銃で撃っています。

幸い元彼は大事には至らなかったわけですが、キレた女ってことで客船の乗客が彼女を隔離、交代で見張りをしていたわけだから彼女は犯人ではない。

元彼は撃たれてヒーヒー言ってたわけだし、客のほとんどはその大騒ぎの渦中にいたから殺人事件を起こす暇なんてない。

んじゃ犯人は誰なんよ。

大富豪の殺された時間を誤認させるトリックが使われたのでしょうか。

いやいや、とってもいい感じのトリックが使われておりますです。

トリックは映画でご確認くださいませ。

今回はネタバレしなくてすみませんでした。ちょっとほっとしております。

## 里見八犬伝

---

1983年角川映画

監督 深作欣二

主演 薬師丸ひろ子、真田広之、千葉真一、志穂見悦子、京本正樹、萩原流行、夏木マリ、目黒祐樹、寺田 農

先日、会社でかかっているラジオで、ジョン・オバニオンさまの「里見八犬伝のテーマ」が流れていました。

おお、懐かしいってことで思わずとりあげてしまいました。

物語は滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」を下敷きにした鎌田敏夫さまの「里見八犬伝」が原作。しかし私世代の方は坂本九さまがナレーションされていたNHKの人形劇「新八犬伝」を思い出されたのではないのでしょうか。

物語を全部説明しないといけないのかなあ。

映画の中でも、物語の導入にあたる部分は軽い説明にとどめていました。

悪の帝国を作ろうとしている玉梓＝夏木さま、元藤＝目黒さま。

里見家に滅ぼされた一族の怨霊でございます。

里見家への復讐をはかる彼らは、里見の静姫＝薬師丸さまの命を狙います。

一方静姫を守り、里見家のために命をかける運命の下に生まれた八人の侍＝八犬士ってのがおりまして、その八人が静姫とともに玉梓らと戦う。

ざっとこんな話なんです、細かい伏線とかエピソードとかがいっぱいあります。

さすがに。

馬琴版は長大な物語だし、鎌田版もノベルスたっぷり上下刊でしたから。

犬坂毛乃＝志穂見さまと蛇の化身＝萩原さまがそれぞれ両性具有であったとか、犬江親兵衛＝真田さまと静姫の恋だとか、犬塚信乃＝京本さまの話だとか、いろんなエピソードがあるんですが、とにかく二時間前後の映画の尺では消化できなかったみたい。

それぞれの話がみな消化不良でした。

人形劇では中心キャラだった犬飼現八が、玉梓一派の手下で、いきなり正義に目覚めるという中途半端な役どころになってたりしました。

ちなみに。私が芝居を志したのは、「金八先生」とこの作品。

原作を読んで感動しまくり、この小説が映画化されるなら端役でいいから出たい、と思ったのが実は劇団入団の動機だったりします。

現実には端役でも出れなかったけど。

しかししかし。

この後、劇団に入った私は、角川映画、角川春樹さま監督・原田知世さま主演の「愛情物語」にエキストラ出演しまして、因縁の角川映画にめっちゃ小さな貢献を果たしてめっちゃ小さなりベンジをすることになるのであります。

懐かしい話やなあ。

## 皇帝のいない八月

---

1978年松竹映画

監督 山本薩夫

主演 渡瀬恒彦、吉永小百合、三國連太郎、高橋悦史、山本 圭、山崎 努、佐分利 信、大地 貴和子

先日レンタルショップの日本映画・旧作のコーナーで「皇帝のいない八月」を見つけました。

かなり前に見た映画ですが、すごく面白かったのでよく覚えておりますです。

自衛隊の一部部隊がクーデターを起こす話。

そのクーデターの作戦名が「皇帝のいない八月」です。

クーデターの首謀者が渡瀬さま。

その妻が吉永さま。

吉永さまには婚約者山本さまがいたわけですが、渡瀬さまが吉永さまをレイプして略奪婚したみたいな形になっています。

幹部自衛官で吉永さまの父・渡瀬さまの元上官が三國さま。

三國さまはクーデターの情報を入手し、内閣調査室の高橋さまとともにクーデター鎮圧に奔走することになります。

武装して蜂起する山崎さまの隊と、ブルートレインに爆弾を仕掛け、乗客の命を盾に内閣と交渉しようとする渡瀬さまの隊。

山崎さま隊は鎮圧され、渡瀬さま隊は追い込まれる。

吉永さまは渡瀬さまを追ってブルートレインに乗り込んでいます。

たまたまそれを見かけた山本さまも車内へ。

首相・滝沢 修さまは武力で鎮圧することを決定する。

渡瀬さま隊は政府に右翼の大物・佐分利さまを首相とした内閣を発足させることを要求。

列車は自衛隊に包囲する廃線に誘導され、クーデター鎮圧作戦は最終局面を迎えますが...

ブレイクする前の風間杜夫さまがほとんど台詞のない端役で出演しています。

時期的につかこうへい劇団に在籍している頃でしょうね。

今は亡き渥美 清さまもブルートレイン乗客役で特別出演。

噂だけでしか聞いたことのなかった「内閣調査室」が映画で描かれているのをこの映画ではじめて見ました。

名優高橋悦史さまが内調エリートを熱演されておられます。

この高橋さまの役柄が私の自作小説のなかでの内調メンバーのモデルになっております。

1957年アメリカ映画

監督 ビリー・ワイルダー

主演 チャールズ・ロートン、マレーネ・デートリッヒ、タイロン・パワー

原作はアガサ・クリスティさまの「検察側の証人」。

法廷ものの傑作です。

クリスティさまは演劇にも深い理解がある作家さんでして、「ブラックコーヒー」「ねずみとり」「蜘蛛の糸（蜘蛛の巣だったかな）」「検察側の証人」など、傑作戯曲を多数著しております。

戯曲の中でほぼ最高の完成度をもった作品がこれ。

「ねずみとり」も評価高いですが、私は「検察側の証人」のほうが好きかなあ。

推理ものの舞台劇を得意とした戯曲家には他にフレデリック・ノットさま（「暗くなるまで待って」とか「ダイアルMをまわせ」の原作戯曲の作家です）とかロベール・トマさま（舞台では「罨」「泥棒家族」とかが有名）なんかの名前がよくあがりますが、ビッグネーム作家の戯曲版というとやっぱりクリスティさまになるでしょうね。

今回はあらすじ書くのやめておきます。

下手に書いて妙なヒントとか出すのいやだし。クリスティさまって意外性を追求しておられた作家ですから、物語の中の意外性とかあらすじで触れないわけにはいかないだろうし。

デートリッヒさまがとにかくいいです。

美しく、妖艶。

私はデートリッヒさまはこの一本しか見てないですけどね。

タイロン・パワーさまもなかなかいい芝居してます。

それよりも何よりも弁護士役のチャールズ・ロートンさまの名演技がこの映画のポイントなんじゃないかなと思います。ミステリーファンならずとも是非見ていただきたい、モノクロ時代の傑作推理映画です。

ラストのドンデン返し。

さらにもう一回、ドンデン返し。

すげえすげえ。ミステリー映画のお手本みたいな傑作でございます。

# 大脱走

---

1963年アメリカ映画

監督 ジョン・スタージェス

主演 スティーヴ・マックィーン、ジェームス・コバーン、チャールズ・ブロンソン、リチャード・アッテンボロー、デビッド・マッカラム、ジェームス・ガーナー、ドナルド・プレゼンス

懐かしいですなあ。この映画は小学生くらいの子に見ました。

すごく楽しんだことをよく覚えております。

かなり何度もテレビの洋画劇場とかでオンエアされておりましたが、最近はこちらあたりの年代の映画って、ほとんど放送しなくなりましたですね。衛星のほうではやってると思いますが。

第二次世界大戦下のドイツ軍側捕虜収容所でのお話。

アメリカイギリスの軍人たちは、もし捕虜になってしまったら脱走して敵軍を霍乱することが重要な使命でした。

で、ドイツ軍はちよろちよろ脱走を繰り返している捕虜たちを一ヶ所に集めて、まとめて管理しようとする。

マックィーンさまはその収容所でそれこそちよろちよろ脱走を繰り返しているお調子もののアメリカ兵。

つかまる度に独房に放り込まれ、そこで壁にむかってキャッチボールをするような男。

大脱走を計画するリーダーはアッテンボローさま。

彼は収容所の宿舎から近くの森まで繋がるトンネルを掘り、百人以上を脱走させるというとんでもない計画をたてます。

トンネル掘りのプロがブロンソンさま。

しかし彼は過去の脱走で掘ったトンネルが落盤した恐怖感から、閉所恐怖症になってたりします。

ニセパスポートを作るプロがプレゼンスさま。

細かい作業が堪えて失明してしまいます。彼の目となって一緒に行動するのがガーナーさま。

豪華キャストが、楽しそうにさえしながら脱走計画を実現させます。

最後まで逃げ切るのは誰でしょうか。

長い映画ですが、よくできているので時間を感じさせません。名作でございます。



## ウイロー

---

1988年アメリカ映画

監督 ロン・ハワード

主演 ワーウィック・デイビス、ヴァル・キルマー

とってもファンタジー映画。

魔女が支配する国。

予言によると、魔女を滅ぼす赤ん坊が生まれるという。

魔女の軍隊は赤ん坊を探して殺そうとします。

予言通りに生まれた腕に痣のある赤ん坊は、安全のため母の手から離されます。

迫る追っ手。

赤ん坊は間一髪のところ、乳母の機転で枯れ枝の船に乗せられて川に流されます。

枯れ枝が流れ着いたのは小人の国。

そこに住む魔法使い志望の男の名がウイロー。

村人たちは子供を生まれた国に戻そうと旅にでます。

その旅の途中でマッドマーティガン＝キルマーさまと出会う。

妖精が出てきて、鼠に姿を変えられた良い魔法使いが出てきたり、騎士と戦ったり。

獣人や怪物まで登場する、サービス満点の冒険ファンタジーです。

映画見ながら友人とメールしてたら、「ウイロー？子供の日に食べるお菓子かいな」という関西人らしいボケかましてくれました。

それはちまきやちゅうねん。

そういえばういろう長いこと食べてないなあ。

クライマックスのSFXはなかなかの見ごたえです。

けっこうハラハラドキドキの活劇シーンが続きますので、見ていて疲れるくらい。

ロン・ハワード監督、やはり巧いですね。

映画のついでに昔話。深夜放送で「シネマ大好き」って番組がありました。

私がまだ劇団やってた頃です。

その中でファンタジー映画ばかりとりあげた特集があって、毎回一文字ずつ出されるキーワードをつなげると、当時公開間近だったこの映画のタイトルになりました。

その特集シリーズのテーマ曲は当時人気だったTMネットワークの「チルドレン・オブ・ザ・センチュリー」。

こういうエピソード聞くと時代、感じちゃうでしょ。

懐かしいなあ。

## 半落ち

---

2004年東映・「半落ち」製作委員会作品

監督 佐々部清

原作 横山秀夫

主演 寺尾 聰、柴田恭平、樹木希林、石橋蓮司、嶋田久作、伊原剛志、西田敏行、鶴田真由、田辺誠一、國村 隼、高島礼子、本田博太郎、吉岡秀隆、原田美枝子

2004年の日本アカデミー賞の最優秀作品賞・最優秀主演男優賞受賞作品です。

「半落ち」「完落ち」というのだそうです。

容疑者の自白状況ですよ。

完全に自白状況になるのを「完落ち」、完全には自白をしていない状況が「半落ち」。

アルツハイマー病に冒された妻を殺したと自主してきた男・寺尾さま。

それを取り調べる刑事・柴田さま。

殺害から自首まで、空白の二日間がある。

その二日間に何があったのか。

警察も検察のそこに何があったのかを知ろうとします。

担当検事・伊原さまは寺尾さまの供述を不自然に思い、調書には信頼性がなく捏造であると主張して警察との対立姿勢をとりますが、上層部・西田さまから圧力がかかったりします。

どこの世界にもこういうことがあるんだなあ。

寺尾さま・検事の伊原さま・そして依頼を受けた弁護士の國村さま。

役者が揃います。

ここからは法廷推理サスペンス。

原作がいいのでとにかく目が離せない映画に仕上がっています。

さすがアカデミー賞最優秀作品賞。

出演者も豪華。こんな濃いメンバー、映画でないと実現しないでしょうね。

寺尾さま、とってもいいです。だんだんお父上様に似てきました。

あ、お父上様って、宇野重吉さまです。

若い頃はもひとつパツとしなかったですが、大都会・西部警察で大ブレイク。

しばらくお見かけしない時期が続いて、最近また精力的にご活躍されておられます。

そういえば市川染五郎さまもだんだんお父様、松本幸四郎に似てきましたですね。

血は争えないもんだなあって思います。

## ブローケン・アロー

---

1996年アメリカ映画

監督 ジョン・ウー

主演 クリスチャン・スレイター、ジョン・トラヴォルタ、サマンサ・マシス

「核兵器の紛失」を表す米軍内の暗号が「ブローケン・アロー」である。

映画の中でそう紹介されていました。

核弾頭と搭載したステルス戦闘機の演習飛行。

その飛行中、トラヴォルタさまが突然核弾頭を不発モードで投下させます。

同乗のスレイターさまは「何すんねん」ってなもんですが、非常脱出装置を作動させられ、戦闘機から放り出されます。

スレイターさまは、奪った核を使って政府を恐喝しようとするトラヴォルタの野望を阻止すべく、女性パークレンジャー・マシスさまとともにミサイル奪還を狙います。

三基の核弾頭のうち一基は米軍が回収。

残る二基はトラヴォルタさまが握ります。

頑張りやさんのスレイターさま、一度はトラックごとミサイルを奪いますがすぐに奪いかえされ、廃鉱山で強烈な銃撃戦。

トラヴォルタさまはこの鉱山でミサイル一基の起爆装置を作動させ、爆破します。

残るミサイルは一基。

果たしてスレイターさまは核ミサイルを取り戻すことができるのでしょうか。

さすがジョン・ウー監督って感じの面白さ。

トラヴォルタさまはこの後「フェイス・オフ」で、スレイターさまは「ウインド・トーカーズ」で再びジョン・ウー監督とコンビを組みます。

トラヴォルタさまがいいですね。

ワルい顔しています。

物語的には「フェイス・オフ」のほうが好きですが、この映画もたっぷり楽しませてくれます。二丁拳銃あり、手りゅう弾の爆風で吹っ飛ぶアクションあり、ヘリぶっこわしあり、肉弾アクションあり。

サービス精神満載。

この作品みて、「フェイス・オフ」みて、「M12」見ればもうジョン・ウー監督の虜ですぜ。ご注意なされませ。

## 燃えよドラゴン

---

1973年アメリカ映画

監督 ロバート・クローズ

主演 ブルース・リー、ジョン・サクソン、ジム・ケリー、アーナ・カプリ、シー・ケン、アンジェラ・マオ

「だああああああん、だだん、ほわああああっ。たととん、だああああああん、だだん、ほあっ、ほあっ」

今、きっと皆様の頭の中にはブルース・リーさまの声が聴こえていることでしょう。

聴こえてへんか。

この映画の公開は小学校五年生のころ。

中学にあがったばかりの兄が、映画にはまるきっかけとなったのがこの映画。

私も兄の影響で、ランドセルかついで半ズボンはいたドラゴンやってみました。

駄菓子屋でヌンチャク買ったし。

で、同級生相手にドラゴンごっこやって、その子泣かして先生にばれてビンタされて。

そうだよなあ、ドラゴンは弱いものいじめしないよな。

以前、関西のローカル番組でやりましたが、昭和三十五年生まれから昭和四十五年生まれあたりの女性は、みいんなUFOが踊れるそうです。

で、昭和三十五年生まれあたりから昭和四十年生まれあたりの男性は、ほとんどの人がヌンチャク使えるそうです。ほんまかなあ。

とりあえず私は使えますが。

武術の達人リーさま。

インターポールが追っている麻薬王ハン（ケンさま）は年に一度武術トーナメントを開きます。

リーさまはインターポールの命を受けてそのトーナメントに選手として出場し、ハンのアジトに潜入し、悪事の証拠をつかもうとする。

細部が違ってたらごめんなさい。

アクション場面は鮮明に覚えているんですが、ストーリー一部分の詳細はあんまり覚えてないですねえ。

トーナメントでは妹（アンジェラ・マオさま）の仇、オハラと当たって妹の仇をとったりします。

やがてスパイであることがばれたリーさまは公開処刑されそうになりますが、仲間がハンに捕らえられて監禁されていた囚人たちを解放、大乱戦になり、そんな中でリーさまはハンとの激闘の末、倒す。

トーナメントに出場するのはジョン・サクソンさまやジム・ケリーさま。

ハン的情婦はアーナ・カプリさま。

ハンのボディガード役で後にGメン香港ロケでの常連になるむっちりムキムキ、ヤン・スエさまが出演しています。

ヤン・スエさま、顔はごついがすっげえジェントルな人です。

って私が昔お世話になった倉田保昭先生主催のアクションクラブの人が言ってました。

ヤン・スエさま、今何されてるんでしょうね。

## 片腕ドラゴン

---

1971年香港映画

監督 ジミー・ウォング

主演 ジミー・ウォング

昨日ご紹介した「燃えよドラゴン」の大ヒットをうけて、それこそ雨後の筍のように大量の香港カンフー映画が日本公開されました。

まず公開されたのはブルース・リャンさまの「帰ってきたドラゴン」。

その次くらいに公開されたのがこの「片腕ドラゴン」。

で、「怒れタイガー」。

ここらあたりくらいまでは名画座っぽい劇場ではなく、ロードショー劇場での公開でございました。

ここからもかなりあったけど、きりがないのでここでは書きません。

ジミー・ウォングさまは良い道場のカンフーの達人。

その道場は悪い道場ともめています。

ひょんなことから道場同士のいがみあい激化します。

良い道場のほうが強いんで、悪い道場は劣勢。

卑怯な手を使って挽回をはかる。

さらに悪い道場はあちこちから用心棒を集める。

この用心棒がすごい。

沖縄拳法の達人。

この人はなぜか牙が生えていて長髪。ぎゃああとかわいいながらジャンプして天井近くの棧にとまったりする。化け猫みたい。

ラマ僧。

念仏をととなえると、身体じゅうが風船でふくらませたようにふくれて、体中の急所が隠されるそう。

ヨガの達人。

インドの人風の小男。いきなりヨガのポーズをとって、逆立ちしたかと思うと、逆立ちしたまま足で戦う。なんか勘違いしたカポエラのような感じ。

あとキックボクサー。

戦い前にいきなり踊りはじめるのはお約束。

こんな悪党用心棒たちに立ち向かうのは、沖縄拳法の達人に腕をチョップで切り落とされた片腕のジミーウォングさま。

終始、「んなアホな」「ありえへんって」を連発しながら楽しめる痛快カンフー大作です。

ちなみに私はこういうツッコミ入れながら見るような映画大好きでございます。

# イヤー・オブ・ザ・ドラゴン

---

1985年アメリカ映画

監督 マイケル・チミノ

主演 ミッキー・ローク、ジョン・ローン

ごっつええ感じで数珠つながりができつつありますなあ。

「燃えよドラゴン」「片腕ドラゴン」、んで「イヤー・オブ・ザ・ドラゴン」。

ドラゴンつながりを残しつつ、カンフー映画の世界から脱出できました。

あとは監督つながりでもミッキー・ロークさまつながりでもジョン・ローンさまつながりでも自由自在。

楽でいいからしばらくこの数珠つながり作戦使ったれ。

さて「イヤー・オブ・ザ・ドラゴン」。

何のこっちゃない、「辰年」のことです。

えっと、十二支を使って年を表すってのは日本とか中国とか韓国あたりにしかないものなんですよ。

物語の舞台はアメリカ。

チャイナタウンの支配権をめぐる新旧のチャイニーズマフィア同士の争いと警察との攻防が軸に描かれます。

まったくもって残念ながら、ここがいいとかこの場面がすごいとかのインパクトのある印象がほとんど残っていない映画です。

申しわけないですが。

ミッキーロークさまの主演ものだとやっぱり「ナインハーフ」を推す人が多いだろうし、ジョンローンさまものだと圧倒的に「ラストエンペラー」のほうがいいだろうし。

だけれども何故かこのビデオ持っております。

どうしてなのかなあ。

途中の微妙さ加減が気に入ったのかなあ。

物語途中から、警察官のミッキー・ロークさまと次世代マフィアのジョン・ローンさまを交互に描く手法をとってありまして、見る側はロークさまとローンさまの双方に肩入れしながら物語の推移を見守るって具合になります。

そんなこんなで、主人公二人のどちらにも思い入れした観客は、ラストのインパクト満点の対決シーンを目撃することになります。

題材も雰囲気もものすごく良いんですが、なんかどっかが弱い、不遇な作品でございます。

## 新生トイレの花子さん

---

1998年東映映画

監督 堤 幸彦

主演 前田 愛、野村佑香、長野 博、高島礼子、荻島真一

「学校の怪談」とか、「トイレの花子さん」とか、ジャパンホラーが相次いで製作された時期がありました。

ちょっと前もそんな時期で、今は沈静化してる感じですね。「リング」とか「呪怨」とか「うずまき」とかの時期があって、そのあと「渋谷怪談」とか「ひとりかくれんぼ」とかがあって。

「呪怨」の大ヒットで勢いづいたジャパンホラームーブメント、今は「ボイス」「筆筥」からはじまる韓流ホラーに押されがち。

さて。

前作の「トイレの花子さん」、見ましたが、そもそもそんなに怖い作品ではなかったです。

というか、前作は「トイレの花子さん」をモチーフにした少年の成長物語でした。

学校の怪談は恐怖映画というよりはSF Xホラーだったし。

しかしこの「新生トイレの花子さん」はどっちかというところ「恐がらせる」造りをしています。

ある学校で「トイレの花子さん」の噂が全くながれない学校がある。

何故なら花子さんを見たら誰かが死ぬから。

十一年前に中学校で一人の少女が行方不明になります。

その妹前田さまが中学に入学するところから話がはじまります。

前田さまは靈感が強かったりします。

見てしまうんですね。

トイレ。

教室でのコックリさん。

校舎裏の祠。その中の日本人形。

学校じゅうに流れる噂。

そしてそして、前田さまの担任の長野さまが「見て」しまって、病院へ入院。

そこへ臨時で講師が派遣されてきます。

行方不明になった前田さまの姉の友人、高島さま。

この先生がまた見えるわけですね。

前田さまが引き込まれそうになるトイレの中の異空間。

高島さまは花子さんなんていないと断言します。

騒ぎを起こしているのは、花子さんではない、学校の中にある「何か」。

きゃああああああああ。

後にスーパーディレクターになる堤監督の作品です。



緊迫感あふれるカメラワークはこの時点ですでに一級品のレベルです。  
あまり期待しないで見ましたが、思わぬ掘り出し物でした。

## ピースメイカー

---

1997年アメリカ映画

監督 ミミ・レダー

主演 ジョージ・クルーニー、ニコール・キッドマン

開幕早々、ロシアで列車同士の衝突事故。

衝突した列車のうち一方に核弾頭を積んでおり、核爆発が起こります。

この知らせをプールでのトレーニング中に聞いたのが核密輸対策本部の博士キッドマンさま。

キッドマンさま泳ぎ下手。

ストロークがいまいち。基本姿勢ももひとつやなあ。

って、どうでもいい場面で水泳のコーチモードに入ってしまった。

キッドマンさま、その爆発事故の対策本部の指揮を任せられます。

で、そのサポートにつく「ロシア事情に詳しい将校」がクルーニーさま。

かなりやり手の軍人さん。

クルーニーさまはかなり早い段階でこれは単なる事故ではなく、核弾頭の盗難事件であると推測しています。

わずかな手がかりをもとに彼らはドイツに飛びます。

かなり強引な方法で情報を入手。

爆弾盗難グループの一味に命を狙われたり、ドイツの秘密警察に追われたりします。

そこから二人はトルコへ。

衛星からの画像で、核弾頭を運ぶ強奪集団のトラックを発見。

クルーニーさまはヘリ部隊を編成して、トルコからロシア国内の陸路を走るトラックを攻撃。

トラックに載せられた弾頭を回収しますが、弾頭が足りない。

弾頭は金目当てで弾頭を強奪したグループに入り込んでいたテロリストの手へ。

核爆発の危機は回避できるのでしょうか。

かなり細かい設定。

場面も目まぐるしく変わります。その場面ごとに盛り上がりとかがあって、かなり忙しい。

しっかり見ていないと話がわからなくなります。しかしそれだけに面白いです。

クルーニーさまがとにかくいいですね。

少しずつ自分の判断で行動をはじめキッドマンさまも素敵です。

ロシア～トルコ～アメリカ。

弾頭が少しずつアメリカに近づいていく描写も秀逸。

ポイントポイントで時間との勝負みたいな設定もあります。

かなり楽しませていただきましたでございます。

## 僕の彼女を紹介します

---

2004年韓国映画

監督 クァク・ジョエン

主演 チョン・ジヒョン、チャン・ヒョク

究極のラブストーリー。

って感じですかね。

チョン・ジヒョンさまは婦人警官。

チャン・ヒョクさまは女子高の講師。

ジヒョンさまは非番の日、ひたたくり犯人を追いかけていたヒョクさまを犯人とまちがえてつかまえてしまいます。

それが出会い。

次はヒョクさまが繁華街の見回りに警察の協力を要請。

ジヒョンさまがヒョクさまのパートナーとして青少年犯罪を見回ることに。

そこで二人は覚せい剤の密売人らしき男を発見。

腰がひけ、逃げ出そうとするヒョクさまをむりやり同行させるためにジヒョンさまはヒョクさまの手に手錠を。

かくして二人は手錠でつながれたまま密売人を追うことになります。

麻薬取引現場での銃撃戦。

なんとか応援の機動隊が到着。

やれやれ。

しかし鍵がない。

止むなく二人は朝までつながれたまま過ごすことに。

そこから二人のラブラブ生活が始まります。

まるでプロモビデオのように軽くエピソードが重ねられていきます。

これが狙いなのか技法なのかわけわからずにやっているのかよくわからなかったです。

途中とっても大事なエピソードがありまして。

洗い物をするジヒョンさまをからかおうとしてヒョクさまが紙ヒコウキを投げるエピソード。

ヒョクさまがジヒョンさまに本をわたすエピソード。

あと風が吹く草原でのエピソード。

その後、姫と王子の寓話を話すシーン。

これら大事なシーンが最後の大盛り上がりにつながります。

ラブラブはいつまでも続かない。

二人に試練が訪れます。

果たして二人にとっての奇跡は起こるのか。

予想通り、やっぱりラストの風車の場面では涙が止まらなかった。

ええ話見せてもらいました。

むっちゃ泣いた私ですが、ラストの「映画○○○○」もどきのシーンはちょっといただけいなあ。（見られた人は○の中に入る映画のタイトルわかるでしょうが）

余談。字幕版だったから涙ポロポロですみましたが、吹き替えだったら号泣だったらうなあ。

## エンゼルハート

---

1987年アメリカ映画

監督 アラン・パーカー

主演 ミッキー・ローク、ロバート・デ・ニーロ、リサ・ボネ、シャーロット・ランプリング

ちょっと前の「イヤー・オブ・ザ・ドラゴン」からミッキー・ロークさまつながりで、「エンゼルハート」。

ジョン・ローンさまから「ラスト・エンペラー」についてベルトリッチ監督または坂本龍一さまにつながる方法もあったのですが、とりあえずデ・ニーロさまにつなげたかったんで。

しかし申し訳ございません。

この映画に関してはネタバレをお許しくださいます。

ネタバレしないように書いたら多分わけわからん内容になると思いますので。

原作は禁断の書、ウィリアム・ヒョーツバーグ先生作の小説。

主人公はミッキー・ロークさま演ずるハリー・エンゼルという名の私立探偵。

彼は何か過去の記憶を失ってたりします。

彼のもとに謎の依頼人がやってくる。

ルイ・サイファーという男。

ハリーはサイファーに負債を負っている一人の男の居場所を探す依頼をうけます。

色々調べていきましたら、彼が行く先々で殺人事件が起こる。

犯人は誰なのか。

タイトルが「エンゼルハート」となりやああんた、主人公のハリー・エンゼルのハート。

ん？って思うじゃないですか。

んでルイ・サイファーでござんしょ？

さらに無神経なことに、パンフレットとかテレビ予告編とかで、血まみれの手で怖い顔したミッキーロークさまがバンバン出ておりました。

はあ？映画を見ながら、まさかパンフレットやテレビ予告編であの場面見せておいて、こんな結末じゃあないだろうな、って予想した結末だったので大変がっかりしました。

ここからネタバレでっせ。

ルイ・サイファーってのはお察しの通り、ルシファーのこと。

悪魔の魔王の名前です。

魔王がミッキー・ロークさまの私立探偵に依頼するわけですから、魔王が探している人はミッキー・ロークさま本人です。

ロークさまは人さがしをしながら自分を探していたわけです。

魔王はロックさまに自分との契約を思い出させるために人さがしの依頼って形をとったわけですから。

魔王ルシファーへの負債となるとやっぱり魂しかないわけだし、そうなるなら「エンゼルハート」は主人公が悪魔に捧げる「悪魔との契約の代償としての心臓」を意味することは想像できるし、んで怖い顔のミッキー・ロックさまの写真見てるわけですから、「記憶を失った、その失った部分に秘密があって、その秘密の部分が暴走したら怖い男になるんだ、ミッキーさまは」って想像ついちゃう。

ダメですよ。こんなネタバレタイトルつけちゃ。

んで、あんな大事な場面をテレビで流したりしちゃ絶対にだめ。

パンフレットに載せるのもだめ。

意外な物語が全然意外じゃなくなっていました。

とほほです。

## ヒート

---

1996年アメリカ映画

監督 マイケル・マン

主演 ロバート・デ・ニーロ、アル・パチーノ、ヴァル・キルマー

数珠つなぎです。「エンゼルハート」からデニーロさまつながりで、「ヒート」。  
パチーノさまとデ・ニーロさまは、「ゴッドファーザー・パート2」以来の共演になるそうです。

しかし「ゴッドファーザー・パート2」ではパチーノさまは二代目のマフィアのボス。  
デ・ニーロさまは回想シーンでの若き日の先代ボス。

回想シーンではパチーノさま演ずるマイケルは五歳くらいの少年のところまででしたから、当然  
撮影は完全に別だったと思います。

同じ映画にクレジットされてはいるものの、同じシーンには出演していない。

それどころかこういうケースだと撮影現場で顔さえあわしていないかもしれないです。  
で、ヒート。

デ・ニーロさまもパチーノさまもゴッドファーザーで大きく飛躍した役者さんです。  
その二人の因縁の共演。

デ・ニーロさまは犯罪のプロ。

絶対につかまらない、尻尾もつかませない仕事を繰り返す銀行強盗。

パチーノさまは執念で彼を追う刑事。

開始早々嫌な予感がしましたが、その予感は的中してしまいました。

ダブル主役のお二人さん、完全別撮りでドラマが進行していきます。

そらそうやわな。芸術的な仕事を繰り返す犯罪者と刑事が同一フレームのおさまるシーンのほう  
がむしろ映画的な不自然さをもっていると感じられるわけで。

デ・ニーロさまはデ・ニーロさまで銀行強盗の準備とか進めるし、パチーノさまはそれを阻止し  
ようと動き回るし。

で、物語中盤、銀行強盗が決行され、ちょっとした不手際からデ・ニーロさまのチームと警官隊  
が撃ちあいになるあたりで二人は接近。

とはいってもここでも強盗チームと警官チーム、細かくカメラが切り替わるだけで同一のフレー  
ムには収まってくれません。

銃撃戦はとっても激しい。何でも映画史上に残るほどの数の銃弾が使用されたそうです。

逃げるデ・ニーロさま。追うパチーノさま。

二人はダイニングレストランで再接近。いよいよ同一フレームにおさまってくれるのかと思いま  
したが、ここでもカットの切り替えのみ。

同一画面上には登場しない。

ここまで徹底されると、この二人仲悪いの？とか思ってしまいます。

メイキングビデオによると、この二人、ちゃんと同じ場面で撮ってたそうです。

別撮りとかじゃなくて。

まあ二人とも演技派の大スターですからね。

当人同士がそう言わなくても、周囲が気をつかうんでしょうね。

カット数から台詞の秒数とかアップの大きさとか。どとらかが多かったり少なかったりしないように。

まあこんな撮りかたもありなんだろうな。って思いましたです。

公開当時、二人は顔を会わさないで映画を完成させたって噂が流れた怪作でございます。

次はパチーノさまつながり。「スカーフェイス」をご紹介します。



## スカーフェイス

---

1984年アメリカ映画

監督 ブライアン・デ・パルマ

主演 アル・パチーノ、スティーブン・バウアー

数珠つなぎです。「ヒート」からパチーノさまつながりで、「スカーフェイス」。

私が少年のころは、「スカーフェイス」って言ってました。

顔に傷があるって意味ですね。

有名なアル・カポネの顔に傷があったことから、カポネのことをスカーフェイスって言ってました。

で、「スカーフェイス」。

パチーノさま演ずるギャングが成り上がって行って、やがて凋落していく様子を描いたマフィア一代記って感じです。

パチーノさま、最初から最後までキレまくり。

映画の中で鼻から入れていたドラッグって、実は本物だったんじゃない？って噂がとぶほど、キレてます。

パチーノさま渾身の力演って感じでしょうか。

デ・パルマ監督の演出はそれまでの作品と比べると、独自性を押さえた感じ。

デ・パルマ監督、この作品あたりから、急に普通の演出をするようになります。

演出手法が認められ、実験的な演出をする必要がなくなったのか、ビッグネームになりすぎて冒険ができなくなったのか。

両方だろうなあ。

冒険精神が健在なのは、「スネーク・アイズ」の冒頭でとんでもない演出をしていたことで証明されております。

映画のラストで、パチーノさまの豪邸の内部で画面に大写しになった数台の防犯カメラのモニター画面が、侵入する殺し屋を映す場面がありましたが、「え？これってスプリットスクリーンの手法の変形版やんけ」って思ってしまいました。

ってことで、延々デ・パルマ監督の話が続きそうなので、次もデ・パルマ監督作品で。

「ミッドナイト・クロス」行きましょう。

## ミッドナイトクロス

---

1982年アメリカ映画

監督 ブライアン・デ・パルマ

主演 ジョン・トラヴォルタ

数珠つなぎです。「スカーフェイス」からデパルマ監督つながりで、「ミッドナイトクロス」。私的にはブライアン・デ・パルマ作品では、初期の作品群のほうが好きです。

「殺しのドレス」だとか「愛のメモリー」だとか「ボディダブル」だとか。

「スカーフェイス」とか「ミッション・インポッシブル」、「スネーク・アイズ」あたりのデ・パルマ監督が巨匠になってからの作品はあまり好きじゃないです。

「ミッドナイト・クロス」はかなり初期の作品です。

トラヴォルタさまが演ずるのは映画の音響マン。

風の音を録音するために夜中に、録音機材抱えて屋外で音の素材を探している。

と、そこで一台の車が事故を起こし、大破してしまいます。

トラヴォルタさまの機材は偶然にも事故の一部始終を録音しています。

やがてこれは本当に事故だったのだろうか、という疑惑がもちあがります。

ここらあたりの描写が実にスマートでサスペンスフル。

いろいろな事実が浮かび上がり、さまざまなあだこうだがありまして。

んで。

んで。

んで、ラストは夜空を彩る花火の下、360度旋回カメラ。

うおおおお。

ちとウンチク。

デパルマ監督って、重症のヒッチコック信者であることは有名な話ですよ。

花火が効果的に使われているところなんか、ヒッチコックの映画で見たような気がしませんか？

そもそも「殺しのドレス」の冒頭シーンは「サイコ」からのいただきものですね。

「ボディダブル」は「めまい」「裏窓」モチーフだし。

デ・パルマ監督の初期の作品を見て、ヒッチコック作品での元ネタを探って見かた、いいかもしれなそうですね。

## スターウォーズ・ジェダイの復讐

---

1983年アメリカ映画

監督 リチャード・マーカンド

主演 マーク・ハミル、ハリソン・フォード、キャリー・フィッシャー、ビリー・ディー・ウィリアムス、アレック・ギネス

レゴブロックって、とんでもない世界に突入しておりますですね。

一番突出しているのは「レゴ・スターウォーズシリーズ」だと思っています。

スターウォーズの場面の再現をレゴでやってしまおうと、そういう勢いなんですね。

そのシリーズの中にジャバザハットの宮殿ってものがありまして、その中にはちゃんと「捕まって超ビキニ着せられたレイア姫」の人形もついておりました。

ちょっと笑いました。

さて映画の話。

この話もさすがにキャラ名で書いていったほうがわかりやすいと思いますので、今回はキャラ名であらずじ書きますね。

前作でジャバ・ザ・ハットに売られたハン・ソロ船長（ハリソン・フォードさま）を救いに、ルーク（マーク・ハミルさま）が宮殿にやってきます。

そこにはソロを助けに来て捕われ、ビキニ姿で鎖でつながれているレイア姫（キャリー・フィッシャーさま）もおります。

ルーク、いきなりフォース使いまくりです。

豪快にジャバー味を退治して撤収。

帝国軍との最終決戦に臨みます。

帝国軍は新衛星型要塞「スターデストロイヤー」完成間近。

せっかく第一部でデススターぶっ壊したのに。

またぶっ壊さないといけないです。

そのスター・デストロイヤーに帝国皇帝が現れます。

ルークは前作で明らかになったダースベイダーの秘密を確かめに老師ヨーダのもとへ。

ヨーダと亡きオビ・ワン・ケノビ（アレック・ギネスさま）の魂に導かれ、ルークは父ダース・ベイダー＝アナキン・スカイウォーカーとの対決を決意します。

さてさて。

スター・デストロイヤーは強力な防御シールドで守られていて、ハン・ソロたちはそのシールドを発生させる設備のある惑星に降り、その設備を爆破して防御シールドを無力化させようという作戦を立てます。

設備爆破チームはハンソロの指揮。

スター・デストロイヤー攻撃チームはランドー（ビリー・ディー・ウィリアムスさま）。

ルークは父との決着をつけるため、帝国軍に投降する。

お得意の複数メインキャラ並行描写です。

ここではやはりダース・ベイダーの動きが物語全体のキーになります。

しかしそれにして映画後半で一気に物語が収拾にむかって加速していくドラマ構造は見事ですね

。

改めてすごい作品だなあと思ってしまいましたです。

## スパイダーマン 2

---

2004年アメリカ映画

監督 サム・ライミ

主演 トビー・マグワイア、キルステイン・ダンスト、アルフレッド・モリーナ、ジェームス・フランコ

前回ちょこっとレゴの話を書きましたが、今日とりあげるスパイダーマンもレゴブロックのキャラとして販売されております。

電車のシーンだとか、最後の実験室だとかがブロックで再現できるというやつで。

スパイダーマンだとかドック・オクなんかの人形もついておまして。

いやほんま、すごいすごい。

前作から引き続き、主人公のマグワイアさまは悩み続けております。

ヒーローであることを悩むヒーローですな。

あんまり真剣に悩まれても見ていて困るんですが。

しかもスパイダーマンってすげえ貧乏。

マンションの家賃ためたり、バイトをクビになりそうになったりしております。

舞台女優の彼女の芝居は一度も見ていない。

そのせいか二人の仲はギクシャク。

さてさて。

今回の敵役はアルフレッド・モリーナ＝ドック・オクです。

「知性をもった四本の触手」をつけた科学者。

実験途中で、触手の行動をコントロールするマイクロチップが破損してしまい、触手に操られる悪人になってしまいます。

当然実験は大失敗だけど、ややこしいことに実験のスポンサーが前作、スパイダーマンに父ウイリアム・デフォーさまを殺されたフランコさま。

ちなみにフランコさまはマグワイアさまの親友でございます。

んで、フランコさまはモリーナさま＝ドック・オクにスパイダーマンをいけどりにして連れてこないなんて依頼したりするわけですね。

猛スピードで走る列車での戦い。

スパイダーマンは力つきて倒れ、ドック・オクに拉致されてフランコさまのもとへ。

スパイダーマンはフランコさまに素顔を曝し、そしてドック・オクへ最後の戦いを挑みに行く。

素顔をさらして戦うヒーロー。

いいんだか悪いんだかちょっと判断つかないですが。

バットマン2でマイケル・キートンがバットスーツに素顔で戦うってえ場面がありましたが、うむむ。

どうだかなあ。

サム・ライミ監督、めっきり巨匠になってしまいました。

ホラー映画「死霊のはらわた」でデビューしたときはこんな巨匠になるとは思いませんでした  
です。

「死霊のはらわた」に出てたブルース・キャンベルさま、めっちゃ太ってドラマ「バーン・ノ  
ーティス」にレギュラー出演されてました。

めっちゃびっくりしてもた。

## 暗殺者

---

1995年アメリカ映画

監督 リチャード・ドナー

主演 シルベスタ・スタローン、アントニオ・バンデラス

実に珍しい設定ですよ。

殺し屋スタローンさま。

シャロンストーンと共演した「スペシャリスト」でもこんな感じの設定だったような記憶がありますが、基本的にはスタローンさまもシュワルツェネッガーさまもあんまりワルキャラはやらないですからねえ。

おやおや。スタローンさまの殺し屋？

あら珍しや、って思って見てたら、物語が進むうちにだんだん善人になっていきます。

スタローンさま、殺し屋のくせにターゲットの女性に逃げろとか言う奴です。

なんでそういう状況になったかってえと、スタローンさまの目の前に、同じ標的を狙う別の殺し屋が現れたからです。

この別の殺し屋がバンデラスさま。

どうやらスタローンさまに仕事を指示する元締めが、フタマタかけていたようなんですね。

で、ターゲットの女性をかばったり一緒に逃げたりします。

バンデラスさま、女を狙いつつもスタローンさまを狙ったりして、ややこしい。

セリフの吹き替えの関係かどうかわかりませんが、妙に軽い殺し屋です。

「ひえー」とか「ひょおー」とか言うし、殺し屋のわりにポカ多そうだし。

こんな奴にスタローンさまが負けるわけなからう、と違ってたら、やっぱりねえ、って結末。

というか、最初から最後までバンデラスさまが優位に立つ瞬間がほとんどなかったように感じました。

もちょっと強そうなキャラに設定してあげるたらよかったのに。

バンデラスさまかわいそう。

## フロム・ダスク・ティル・ダウン

---

1996年アメリカ映画

監督 ロバート・ロドリゲス

主演 ハーヴェイ・カイテル、ジョージ・クルーニー、クエンティン・タランティーノ、ジュリエット・ルイス、トム・サビーニ、ジョン・サクソン。

友人とレンタルショップに行ったときのこと。

「『ファイト・クラブ』見た？」って言われて、「同じ監督の『ゲーム』なら見た。結末が意外で面白かったぞ」って言いまして、そこから結末が意外だった映画を何本か教えてあげてたらいきなりこの映画のことを思い出しました。

当然、ブチ誉めして「絶対見ろ」って言いました。

私はこの映画、高く評価しております。

ただ、あまり真剣に見たら腹がたつ映画ですよ。

缶ビールとポップコーン片手に見るような映画です。

かなり残酷な描写があるので、血を見たら気分が悪くなりような方はご遠慮いただいたほうがいいかも。

ビデオのパッケージに印刷されていたコピー「この展開は誰にも予想できない」という文章が全てを物語っています。

とりあえずまだ見ていない人のために、「映画史に残る衝撃的なあのシーン」以降の展開には触れません。

刑務所から脱獄した男、クルーニーさま。

脱獄の手引きをしたのは弟のタランティーノさま。

彼らはその足で銀行強盗を働き、銀行員を人質にとってメキシコ国境へ向かいます。

途中の店でテキサスレンジャーと店主を惨殺。

タランティーノさまはここで手に重傷を負います。

二人はモーテルに立ち寄る。

クルーニーさまは国境を越えた後のことを打ち合わせするためにメキシコのギャングと連絡をとりに出かける。

その間に性倒錯者のタランティーノさまは人質のおばちゃん銀行員をこれまた惨殺。

部屋は血の海。大変な惨状。

このモーテルにたまたま立ち寄ったのがキャンピングカーに乗ったカイテルさま一家。

娘はジュリエット・ルイスさま。

かわいい。引き取って育てているアジア系の息子もいます。

カイテルさまは元神父。

妻に先立たれています。

妻は自動車事故で車に閉じ込められ、数時間苦しんだ後に死んだ、と説明されます。

神は妻を救済してくれなかった。



即死ではなく、数時間苦しんだ末に死んだ。

この事件がもとで彼は『神』の存在に疑いをもってしまって苦悩しています。

この家族の部屋に極道兄弟が乱入。

銃で脅され、悪党たちはカイテルさまの運転するキャンピングカーに隠れてまんまと国境越えを果たします。

メキシコギャングと待ち合わせした店がストリップ小屋みたいなバーみたいな店。

この店の看板に「フロム・ダスク・ティル・ダウン（日の入りから明け方まで営業）」と書いてある。

この言葉がタイトルになっております。

店に入るときに兄弟は店の客ひきといざこざを起こしています。

店のあんちゃんたちが兄弟とカイテル一家を取り囲んで...

このあたりで約一時間。そして「予想できない展開が待つあのシーン」につながる。

（ちなみにすっげえヒントが出演者欄に書いてあります。これ見ただけでわかる人は絶対この映画みたほうがいいですぜ）

次回からはまた数珠つなぎ。次回は「裏窓」です。

## 裏窓

---

1955年アメリカ映画

監督 アルフレッド・ヒッチコック

主演 ジェームス・スチュワート、グレース・ケリー、レイモンド・バー

久々数珠つなぎです。

ヒッチコック監督の傑作。

冒頭いきなりとんでもない俯瞰カメラからずずずういっと視点が降りてきて、マンションの一室の描写になる。

こちらへすでにヒッチコック監督のセンスが光ってますね。

マンションにいるのは足を骨折してギブスをはめられたカメラマン、スチュワートさま。

あまりにもやることがないので、部屋から見える向かいのマンションの住人たちを望遠レンズつきのカメラでのぞいていたりしてます。

この覗き見て設定はこれ以降の映画でいろいろと使われています。

最近紹介した「暗殺者」ではターゲットになる女性が同じマンションに住む住人の部屋に隠しカメラを仕掛けてたし、「フラットライナーズ」では自分とカノジョとの行為を録画する奴なんかもいました。

まあこれも覗きの亜流だろうなって思います。

「裏窓」で重要なのはまず距離感。

そして自分が動くに動けないもどかしさ。

この二つの要素がからみあって、後半のとんでもないサスペンスな展開につながります。

おっと物語の紹介忘れてましたね。

向かいのマンションの生活をのぞいているカメラマン。

夫婦喧嘩やら浮気っぽい現場やらを覗いてウッシッシって言ってる間はよかったのですが、「ん？これって殺人かも...」って現場を目撃してしまいます。

しかし肝心の瞬間は見えない。

だから確証がもてない。

相手は見られていることに気付いてない様子。

さあどうする。ここで「触らぬ神に祟りなし」としてしまえる主人公ならよかったんですが、そこは正義感のかたまりのような古き良き時代のアメリカ人。

なんとか証拠を探そうと思立ちます。

さてどうなるか。物語の続きはビデオでお楽しみください。

ちなみに犯人を演じているのはレイモンド・バー。

あら懐かしや。往年の刑事ドラマ「鬼警部アイアンサイド」の車椅子警部アイアンサイドを演じていた人です。

「...この人歩けるんや」って思ってしまいました。

たまたまでしょうが、レイモンド・バーが歩いて、主人公が車椅子ってのが、なんか屈折しているように感じて面白かったのを覚えております。

と、ここですごいことに気付きました。

あっ、そうなんや。「スネークアイズ」の冒頭の長回しの元ネタって...

ってことで、次回ももう一回ヒッチコック。

「ロープ」。

おそらくそこから「スネーク・アイズ」につなげて、ニコラス・ケイジにつながるんだぜ。きっと。

って思われないうちに別のつなぎかた考えておきます。

実は「裏窓」からレイモンド・バーにつなげようと思って失敗したのです。

レイモンド・バーってアイアンサイドしか見ていないことに気付かして。

ちなみにちなみに、デ・パルマ監督の「ボディ・ダブル」で、主人公が双眼鏡で向かいのマンションを覗いて殺人事件に巻き込まれてしまうって展開の元ネタはこの「裏窓」。

さらに主人公が閉所恐怖症って設定は「めまい」が元ネタとみえました。

## ロープ

---

1962年アメリカ映画

監督 アルフレッド・ヒッチコック

主演 ジェームス・スチュワート、ファーリー・グレンジャー、ジョン・ドール

映画数珠つなぎです。

前回の「裏窓」からヒッチコック監督つながりで「ロープ」。

ヒッチコック監督作品はとても面白い映画が多く、どの作品につなげてみてもよかったのですが、とりあえず私は演劇経験者ですから、密室劇ってことでこの作品を選びました。

今回の執筆にあたって、いろいろな方のヒッチコック監督作品の感想を読みましたが、「裏窓」と「ロープ」に関してはやっぱり評価高かったですね。

ヒッチコック監督作品では「鳥」「サイコ」を思い浮かべる人が多いし、「北北西に進路をとれ」だとか「知りすぎた男」、「ダイヤルMをまわせ」なんかも評価高いです。

そんな名作ばかりの中で、どちらかという地味な「裏窓」や「ロープ」が高評価を得ているのがうれしいですね。

「鳥」「サイコ」はヒッチコック監督作品としては亜流です。

「北北西...」とか「知りすぎた男」は少し派手な印象がありますよね。

このへんの作品はいずれ改めてとりあげようと思っています。

さて「ロープ」。

部屋で男が殺される。

犯人は死体を部屋の中央に置かれたでっかい衣装ケースみたいな箱に隠します。

犯人は完全犯罪に憧れる屈折した優等生青年。

死体が入った衣装ケースを囲んで人々を招いて、自分自身の頭脳の優位性を立証しようって趣向なわけですね。

部屋にいろいろな人がやってきます。

殺された人の友人だとか、いろんな人がやってくる。

で、その人どこやねんみたいな話になって、やがて少しずつ真相が明らかになっていく。

まあかいつまんで言えばこういう話なんですけど、この映画のすごいところは、カットなしで物語が進んでいくところ。

すごいですよ。

そういう映画だって聞いて知っていましたが、本当にカットがないんです。

撮影現場、大変だったらしいです。

カットなしで撮影が進行するわけですから、役者の動きにあわせてカメラが動かなきゃいけないもので、映画を撮影しながらセットを建てこみしたり解体したりしたそうです。

撮影中のフィルムチェンジなどのやむを得ない個所は、役者の背中を大写しにしたりして、切り抜けています。

ごまかしているといったほうがいいかな。

フィルムロールチェンジのタイミングでカットが入ります。

カットらしいカットがなかっただけに、カットが入ってびっくりしました。

で、映画やったんや、って気付きました。

舞台を見ているような緊迫感。

面白かったです。

今回はフィルム長回しつながりで、やっぱりデ・パルマ監督の「スネーク・アイズ」。

申し訳ございませんが他に思いつかなかったです。ってことで、数珠つなぎはデ・パルマ監督作品に戻ります。

## スネーク・アイズ

---

1999年アメリカ映画

監督 ブライアン・デ・パルマ

主演 ニコラス・ケイジ、ゲイリー・シニーズ、ジョン・ハード、カーラ・グギーノ

今日も映画数珠つなぎ。

前回の「ロープ」からワンカット長まわしつながり「スネーク・アイズ」。

前にも書きましたが、ブライアン・デ・パルマ監督はとびきりのヒッチコックファンです。

デビューしたてのころはヒッチコック監督作品を強く意識した作品を数多く撮っております。

デ・パルマ監督自身、あるインタビューで「ヒッチコック監督はおよそ考えつくすべての映像手法を実践している」と述べたそうです。

なるほどねえ。その通りかもしれない。

デ・パルマ監督、それだけヒッチコック監督を評価してるってことですよ。

これまでと話がだぶるかもしれませんが、デ・パルマ作品の元ネタをサクサクっとご紹介。

有名どころですが、「殺しのドレス」の元ネタは「サイコ」。

「ボディダブル」は「めまい」「裏窓」がベースになってるのは前にご紹介しました。

他にも「愛のメモリー」だとか「ミッドナイトクロス」だとか、印象深い作品がいっぱいありましたが、これはまたの機会に。デ・パルマ特集もそのうちやりますからね。

で、「スネーク・アイズ」。

かなり最近の作品なんで、前に書いたような実験的手法はあまり使っていませんが、圧巻は冒頭13分のノーカット長まわしです。

「ロープ」ではカメラは部屋から出なかったですが、こちらはスティディカムカメラを駆使して、ボクシングの試合が行われているスタジアム内を、動く動く。

ある意味「ロープ」よりもすごいかもしれない。

しかしやっぱり13分くらいが限界だったのかなあ、って思います。

肝心のストーリーがほとんど書けなくなりました。

えっと、ニコラス・ケイジさまは刑事。

かなりワルの刑事です。彼がたまたま見に行ったボクシングの試合で、政治家が撃たれます。

これを調べていくうちに米軍がからんだ複雑な暗殺計画がみえてくる。

ケイジさまは暗殺の黒幕を探しますが...って話。

縦横に張り巡らされた伏線。

細かいプロットを検証していくと次第に事件の輪郭が浮びかがるという作品構造はけっこう楽しめます。

ただ、ここまでのいろんな設定をつめこまなくても、と思うのは私だけでしょうか。

数珠つなぎ、ここで離れ業。

「スネーク・アイズ」から要人暗殺つながり、次回は「エネミー・オブ・アメリカ」いきまし

よう。

## エネミー・オブ・アメリカ

---

1998年アメリカ映画

監督 トニー・スコット

主演 ウィル・スミス、ジーン・ハックマン、ジョン・ボイド

前回の「スネーク・アイズ」から要人暗殺つながりで「エネミー・オブ・アメリカ」。

「JFK」とか「ダラスの熱い日」につなげるってパターンもあったんですが、こちらの二本は温存しておきます。

作品冒頭、下院議員が暗殺されます。

野鳥の生態を観察するためのカメラに、その一部始終が記録されてしまいます。

暗殺の首謀者が国家安全保障局のえらいさんだったから大変です。

テープを奪還しようと監視衛星使うわ、発信機使うわ、何でもあります。

こんな手段使われたら絶対に逃げられないですよ。

「踊る大捜査戦・ザムビー2・レインボーブリッジを封鎖せよ」でも出てきましたが、今のハイテクを駆使すれば、個人のプライバシーなんかあってないようなものです。

最近のドラマでも、街頭の監視カメラとか、衛星画像なんかが当たり前に出てきたりしています。

こうなると私が〇〇さんと遊んでるだとか、ネットカフェで巨乳タレントの画像ダウンロードしまくってるとか、そういうことってその気になれば簡単にわかるんだろうな。

怖い怖い。

さて映画の続き。

この議員暗殺事件アンド証拠テープ奪還騒動に巻き込まれるのが弁護士ウィル・スミスさま。わけわからん間にそのテープを持っていたわけです。

ウィル・スミスさまがそのテープを持っていることはあっさりとわかってしまいます。

相手は国家の機密を握る人たちです。

こういうことは朝飯前。

スミスさま、自宅にも職場にも近づくことができない。

物語中盤から出てくるジーン・ハックマンさまがとにかくいいです。

ハックマンさま、今、ノリノリですなあ。

困っておろおろしているだけだったスミスさまに戦う方法を授ける元CIAのエージェント。

でもとにかく迷惑そうなのがいい。

ラストは物語の冒頭部分で軽く張ってあった伏線が見事に生きるアツとおどろく結末が用意されています。

次回はウィル・スミスさまつながりで「MIB」いきましょう。



## メン・イン・ブラック

---

1997年アメリカ映画

監督 バリー・ソネンフェルド

主演 ウィル・スミス、トミー・リー・ジョーンズ

「エネミー・オブ・アメリカ」からウィル・スミスさまつながりで「メン・イン・ブラック」。何度も書いていますが、私はトミー・リー・ジョーンズさまって役者さんが大好きでございます。

ハリソン・フォードさまの「逃亡者」でフォードさまを執拗に追いかける刑事役を演じていたかと思うと、オリバー・ストーン監督と組んでベトナム戦争ものの佳作を撮ったり、サミュエル・L・ジャクソンさまとは軍事法廷もの、さらに「依頼人」でも渋い弁護士役を演じていました。

でもでも。

セガールさまの「沈黙の戦艦」ではロックンローラーに化けたテロリストのボス。

「バットマン・フォーエバー」では顔半分を赤く塗って怪人「トゥー・フェース」。

「ブローン・アウェー」では爆弾テロリストなんかやってました。

要するに、どんな役でもやる役者。

映画出まくっていた頃の緒形拳みたいやなあ、と思っております。

さて「メン・イン・ブラック」。

エイリアンはすでに地球に入ってきている。

しかも移民レベルの人数が入植している。

そのエイリアンたちを管理し、取り締まっているのがMIBという秘密機関。

この秘密機関のエージェント、ウィル・スミスさまとトミー・リー・ジョーンズさまの活躍を描きます。

主演のウィル・スミスさまって実はラップ界のトップスターなんですってね。

知らなかったです。

そらマシンガントークとかもできるわな。

でもウィル・スミスさまよりいいところもっていくのは当然トミー・リー・ジョーンズさま。

でもそれよりも目立ってたのはやっぱりクリーチャー。

こいつは仕方ない。SF X映画の宿命でございます。

次回は続編。「メン・イン・ブラック2」。

2002年アメリカ映画

監督 バリー・ソネンフェルド

主演 トミー・リー・ジョーンズ、ウィル・スミス、ララ・フリン・ボイル

SFXコメディ「メン・イン・ブラック」の続編です。

地球に移住してきたエイリアンの管理を行う秘密機関MIBの物語。

トミー・リー・ジョーンズさまもウィル・スミスさまも相変わらずいいです。

今回は敵役エイリアンにララ・フリン・ボイルさまを配しています。

今回一番おいしいところをもっていったのは彼女ですわな。

ボイルさま、超セクシーな格好で画面内をうろうろしてくれます。

前作のラストで、エージェントとしての全ての記憶を消去されたジョーンズさま。

今では田舎町の郵便局長として働いています。

スミスさまはMIBの中心メンバーとして忙しく活躍する毎日。

そんな中、変身能力のあるエイリアンが地球に侵入。

エイリアンは雑誌の下着広告のモデルの姿に変身します。

自分の惑星が絶滅の危機に瀕している。

他の惑星にあるエネルギーを奪えばそいつらは助かるわけです。

エネルギーを奪おうとする好戦的な変身宇宙人から逃れようと、地球にやってきたエイリアン。

そのときは若き日のジョーンズさまの機転でエネルギー源争奪戦の舞台が地球になることはなかったわけですが、二十数年経って、そのエネルギー源は地球上のどこかに隠されていたことがばれてしまった。

スミスさまは記憶をなくしたジョーンズさまのもとを訪ね、記憶復元装置を使ってそのエネルギー源に関する情報を聞き出そうとします。

一方のエイリアンはMIB本部を占拠して、当時の担当エージェントのジョーンズさまを探しだそうとします。

果たしてMIBは地球の危機を救うことができるのでしょうか。

とってもデリシャスでゴージャスな作品になりました。遊び心も随所に見えてて、楽しい限りです。

次回はちょっと趣向を変えまして、シリーズものを数珠つなぎでご紹介。

次回は「ジュラシック・パーク」をご紹介です。

## ジュラシック・パーク

---

1993年アメリカ映画

監督 スティーヴン・スピルバーグ

主演 サム・ニール、ジェフ・ゴールドブラム、ローラ・ダーン、リチャード・アッテンボロー

マイクル・クライトンさま原作の大ベストセラー小説をスピルバーグ監督が映画化。

これで面白くないわけがないですわな。

私的にはキャストがイケてるので、この映画はお気に入りです。

考古学者役のサム・ニールさまは、「オーメン3」のダミアン役。

他にも「マッド・ハウス」とかのチープなホラーに出ていた人です。

数学者役のジェフ・ゴールドブラムさまは「ザ・フライ」で蠅男になってしまう科学者を演じた人。

主演男優二人がホラー映画を足がかりにして出てきた人ってのがなんかいい感じです。

名監督リチャード・アッテンボローさまが役者としていい芝居しているのも見逃せないですね。

有名すぎる映画なんでいまさらあらすじもないでしょうが、一応おさらい。

アッテンボローさま演ずる社長は、現代のハイテク技術で恐竜を現代に甦らせ、テーマパークを作ろうとしています。このテーマパークの名前がジュラシック・パーク。

オープンにさきがけて、考古学者ニールさま、植物学者ダーンさま、生態系に関連する数学理論を提唱する数学者ゴールドブラムさまらが招かれ、パークの推薦をしてほしいという依頼をうけます。

恐竜再生の理論はすげえ科学的。

樹液の化石である琥珀に閉じ込められた蚊の体内から恐竜のものであろう血液を取り出し、DNAを分析・復元して恐竜を甦らせるわけですな。

いきなりブロントサウルスが登場。

CGの見事さにうなってしまいそうになります。

一行はサファリパークみたいな車に乗って、モデルコースを見学。

恐竜はでてきてくれません。

中毒症状を起こして死にかけのトリケラトプスを見たくらい。

しかし事件が起こるわけです。

パークのコンピューターシステム開発者がアッテンボローさまを裏切り、恐竜のDNAを売ろうとする。

DNA持ち出しのために彼はパーク内の全システムを停止させるわけですが、それがもとで区画ごとに管理されていた恐竜たちが勝手に動き始めるわけです。

システムエンジニアは自動車のスリップ事故がもとで肉食恐竜エリアに迷い込み、ディフォロサウルスの餌食になります。

ティラノザウルスの檻の前でシステム停止になってしまった学者たちご一行さま、当然の流れ

でティラノザウルスに襲われます。

ガムリムスの群れを襲うティラノザウルスとか、見せ場がいっぱい。本当によくできてます。

一行はパークのビジターセンターに逃げ込みますが、そこに現れたのはヴェロキラプトル。

こいつがなかなか頭がいい。危機一髪の連続。ハラハラどきどきの連発。

傑作と太鼓判を押させていただきますだあ。

## ロスト・ワールド ジュラシック・パーク

---

1997年アメリカ映画

監督 スティーヴン・スピルバーグ

主演 ジェフ・ゴールドブラム、ジュリアン・ムーア、ピート・ポルスウエイト、リチャード・アッテンボロー

大人気シリーズの第二弾。

今回はサム・ニールさま演ずる考古学者グラント博士やローラ・ダーンさま演ずる植物学者は出てきません。

今回の主役はジェフ＝ザ・フライ＝ゴールドブラムさま。

この人、SMA Pの香取君に似てると思うのは私だけでしょうか。

ちょっと無謀な研究者、ジュリアン・ムーアさまを連れ戻すために再び「恐竜の島」に降り立ったゴールドブラムさま。そこで見たのは恐竜を捕らえて見世物にし、儲けようと考えている人たち。

捕らえられた恐竜たちをゴールドブラムさま一派が逃がしますが、ティラノザウルスの襲撃を受け、危うく殺されそうになります。

彼らを助けたのは皮肉にも恐竜を捕らえようとしていたハンターたち。

しかしハンターたちは肉食恐竜たちに一人また一人とやられていきます。えらいこっちゃ。

そしてとうとうハンターたちはティラノザウルスの捕獲に成功。

アメリカに輸送します。

ところがどっこい、ティラノザウルスは輸送船の乗組員たちをみんな食べちゃって、夜の町を彷徨する。

前半の「恐竜の島」でのサスペンス描写。

後半の大都会をねり歩くティラノザウルス。

メリハリが効いていてすごく面白い構成になっています。

欲をいえばどっちつかず。島だけの物語にするか、島の描写を軽めに扱って、恐竜ゴーストウ大都会の物語にするか、はっきりしぼって撮ったほうがよかったような気がします。

登場恐竜も豪華。

前作から引き続き登場のティラノザウルス、ヴェロキラプトルのほか、今回は草食恐竜が充実。

ステゴザウルスとかパラサウロロフスとかパキケファロサウルスなんかも出てきます。

次回ははいよいよシリーズ最終作、「ジュラシック・パーク 3」です。

## ジュラシックパーク3

---

2001年アメリカ映画

監督 ジョー・ジョンストン

主演 サム・ニール、ウィリアム・H・メイシー、ティア・レオーニ、アレックス・ニポラ、ローラ・ダーン、トレバー・モーガン

大ヒット映画の第三作。

復活させられた恐竜たちの住処となった島。

その近くでパラセーリングを楽しんでいた少年エリック＝モーガンさまたちが消息をたちます。

両親は立ち入り禁止になっている島に入り、息子を救出しようとする。

ほとんどだまされて島に同行することになったのが第一作でひどいめにあった考古学者のサム・ニールさまと助手ビリー＝ニポラさま。

到着早々、捜索隊はスピノサウルスの出迎えをうけます。

今回はこのスピノサウルスが敵役。

いきなり第二作の主役、ティラノザウルスと大格闘の末、スピノサウルスはティラノザウルスをやっつけてしまいます。

今回の敵は手強い。

少年を探すうち、助手ビリーはヴェロキラプトルの巣を見つけ、そこから卵を失敬してしまったりする。

そのせいで一行はヴェロキラプトルに追われることになります。

何人もの犠牲をだしながら、少年を救出。

ほっと一息ついたところにまたスピノサウルスが登場。

必死で逃げ込んだところはプテラノドンの鳥かご。

いやあ、念入りにいろんな苦難を与えてくれます。

命からがら逃げ出したら今度はまたまたスピノサウルス。

こいつはしつこい。

そしてやっぱりヴェロキラプトル。

今回新登場するスピノサウルス、現時点でのジュラシック・パーク登場恐竜のなかで最強の一匹でございます。

## 少女たちの遺言

---

1999年韓国

監督 キム・テヨン

主演 パク・イジェン、イ・ヨンジン

この作品、テレビのオンエアをみたものだし、ましてや日ごろあまり見ない韓国映画ですので、今回は役者さん名ではなく作中のキャラクター名であらすじ書きますね。

この映画、韓国ホラーでございます。

韓国の女子高校の様子がていねいに描かれます。

映画前半はとっても学園ものです。

でもなんだかどんよりした空気が流れまくっています。

物語はテレパシー能力のある少女、ミナを中心に進みます。

でもどうして主人公にテレパシー能力を設定したかがよくわからないですね。

彼女は同級生二人の禁断の関係を知ります。

シウンとヒョシン。

とりあえずややこしいので陸上部とコーラス部、とご理解ください。

二人は同性愛の関係。

でれでれしている女子高生が情感たっぷりに描かれます。

ここらあたりがちょっと鼻につく。

さわやかべたべたの学園ドラマが急激にホラーとなるのは作品後半。

学校の身体検査の日、コーラス部少女が屋上から投身自殺。

ミナは二人の交換日記を手に入れる。

んでいろいろなことを知ってしまうわけですな。

んで感じてしまうわけですな。

この感じるって部分を強調したいんなら、ちょっとそういうアンテナの鋭い子、って設定にすればいいと思ったんですが。

クライマックスがちょっといい感じで怖い。

雨の学校。

放課後、何故か全ての出入り口が閉まってしまう。

誰も出入りできなくなる。

コーラス部が体育館で練習している。

その体育館に...出るんです。

きゃあああああ。

校内大パニック。ここらへんのパニックの映像は「キャリー」っぽい。

いきなり天井からのカメラに切り替わって、逃げ惑う生徒の姿と、その中にとりのこされるミナと陸上部少女。

この場面は「スネーク・アイズ」の暗殺直後の俯瞰ショットにそっくり。

霊からの視線でカメラが動き回る描写は「悪魔を憐れむ歌」だとか「ウルフェン」、「プレデター」で見たような画像でした。

ガラス張りの天井一面に自殺したコーラス部少女の顔が巨大化して覗くっていう悪趣味な場面は「妖怪百物語」を参考にしたのかなあ。

まあこれまでのホラー映画の文法を踏襲してるというか何というか。

お約束って言うと言葉が悪いかもしれないけど。

かと思うと最後は陸上少女とコーラス少女がでれでれしている場面がきれいに描かれて終わり。

ここらはなんだか若手の映画監督の思い入れたっぷり画像って感じがしました。

結局、ええとこどりの粋を脱していないですね。

「僕カノ」もそういうところあったけど。「シュリ」なんかはええとこどりしながら見事にそれを超えた作品に仕上がっておりましたが。

もうひと工夫すればもっと面白くなったろうに。

残念です。

次回は「ラスト・アクション・ヒーロー」いきましょう。



## ラスト・アクション・ヒーロー

---

1993年アメリカ映画

監督 ジョン・マクティアナン

主演 アーノルド・シュワルツェネッガー、オースティン・オブライエン、チャールズ・ダンス、フランク・マクレイ、トム・ヌーナン、アート・カーニー

その他にもF・マーリー・エイブラハムにシャロン・ストーン、ロバート・パトリックなんかがかメオ出演しております。

えっとねえ、みんな少なからずあると思うんですよ。

映画を見てて、映画の中の世界に行ってみたいなあって思う瞬間。

ジュラシック・パークの世界だとかスパイダー・マンの世界とか。

で、それを売りにしているテーマパークがユニバーサル・スタジオなわけで。

みんなそう思っているからあれだけ入場者がいるわけで。

そんな夢を豪快に映画にってしまったのがこの作品。

ディック・スレイターというアクション・ヒーローがいます。

映画の中の映画で主演・アーノルド・シュワルツェネッガーってちゃんとクレジットされます。

フィルムチェックの劇場内の試写に呼ばれた少年オブライエンさま。

そこで劇場の映写技師からチケットを渡されます。

それは技師がインドの魔法使いから譲ってもらったという魔法のチケット。

そのチケットの魔力で、少年は映画の中に入り込んでしまいます。

映画の中にいるのは警察署長マクレイさまや片目が義眼の殺し屋チャールズ・ダンスさま。

署長マクレイさまのいる警察署がいかしてます。

警察署前では取調べをいかにも終えたようなシャロン・スローンさまが煙草すってたり、ターミネーター2の変身ターミネーターが警官の格好で怖い顔して出ていったり。

それだけではなく全編にいろいろなネタ満載です。

E Tネタありジュラシック・パークネタありアマデウスネタありターミネーターネタあり。

最後にはシュワルツェネッガーさまが本人役を演じたりします。

物語は、映画の中の世界から現実の世界へ。というのも、魔法のチケットの存在に気付いたスナイパー＝ダンスさまが、チケットを奪って現実の世界へやってきちゃう。

しかも別の映画の「死神」だとか、スレイター映画の敵役まで連れてきちゃいます。

スレイターと少年も彼らを追って現実の世界へ。

戦いの場は現実の世界にシフトします。

果たして二人は現実の世界を救えるのでしょうか。

なんか映画への愛情が画面のあちこちからにじみ出ています。

アクションではらはらするんだけど、同時にほのぼのできる不思議な映画です。

## レイダース・失われた聖櫃

---

1981年アメリカ映画

監督 スティーヴン・スピルバーグ

主演 ハリソン・フォード、カレン・アレン、ポール・フリーマン

ちょっと懐かしい作品です。

製作総指揮 ジョージ・ルーカスさま、監督 スピルバーグさま。

豪華な作品ですな。

モーゼの十戒を収めて運んだという聖櫃。

この失われた聖櫃をめぐるナチスドイツと考古学者ジョーンズ＝フォードさまが争奪戦を繰り広げます。

遺跡の中に仕掛けられた盗掘者を防ぐ仕掛けの数々。

行く手を阻む毒蛇の群れ。遺跡から出るとナチスが待ち構えている。危機一髪の連続。

発掘された聖櫃はナチスの手に入り、その考古学的価値を求めていたジョーンズは、聖櫃のもつ神秘の力がナチスに悪用されないように、今度はアメリカ代表みたいな立場で戦うことになります。

とってもよくできたアクションアドベンチャー作品。

さすがルーカスさま。さすがスピルバーグさま。

いいところで流れるテーマ曲もよくできています。

トラックバトルから船のバトル。

ハリウッド的活劇が続きます。最後はルーカスさま組お得意のSF Xが炸裂。

いやあ、おなかいっぱいでございます。

このインディジョーンズ三部作で、主演のハリソン・フォードさまは人気スターの仲間入りを果たし、スターウォーズ前期三部作出演者のなかで数少ない勝ち組となりました。

キャリー・フィッシャーとかマーク・ハミルって何してるんだらう。

って思ってしまいました。

## ディープリュー

---

1999年アメリカ映画

監督 レニー・ハーリン

音楽 トレバー・ラビン

主演 トーマス・ジェーン、サフロン・バローズ、サミュエル・L・ジャクソン、マイケル・ラパポート、ジャクリン・マッケンジー、ステランス・カースガード、L・L・クール・J

アルツハイマー病に効果のある薬を開発している研究者のバローズさま。

スポンサーのジャクソンさま。バローズさまは鮫の脳を遺伝子操作して脳内蛋白質量増やし、それをアルツハイマー患者の脳に投与するという実験を行っています。

まあ小難しい理屈はまあいいですが、その副作用でとんでもない知能を持った鮫が生まれたわけです。

スポンサーのジャクソンさまが実験の進行状況を確認しに来た日、突然その鮫たちが反乱を起こす。

知能を持った鮫でございます。

研究所のメンバーたちは一人、また一人と鮫の餌食になっていきます。

果たして職員たちは生き残ることができるのでしょうか。

昔はコンピューター制御のハリボテ。

今はCG。

スピルバーグ監督の出世作「ジョーズ」と比べると隔世の感がありますですね。

CG技術の向上が、よりキツくてエグい画像を可能にしました。

ただ、このCGってやつは両刃の剣みたいなところがありまして、今回の映画のクライマックス画像についてのみ言えば、ちょっとやりすぎ。

あまりにもリアルさにかけるような気がしました。

中盤までは素晴らしい出来ただけにちょっと残念です。

音楽担当のトレバー・ラビン（トレバー・レイブンというそうです。正確には）、スティーブ・ハウ脱退後にイエスに加入したギタリスト。

すごいなあって思ってしまいました。

## パルプフィクション

---

1994年アメリカ映画

監督 クエンティン・タランティーノ

主演 ジョン・トラヴォルタ、サミュエル・L・ジャクソン、ユマ・サーマン、ブルース・ウィリス

色々な意味で衝撃的だった、タランティーノ監督の出世作。

映画で通常使われる時間軸の常識をぶっとばして、物語が進行します。

トラヴォルタさまとジャクソンさまのふたり組のチンピラ、八百長を命じられたボクサー・ウィリスさま、トラヴォルタさまと浮気するギャングのボスの妻サーマンさまらの物語が、通常的时间経過という枠を外して再構成されます。

どちらが先でどちらが後かわからないですが、上遠野先生の「ブギーポップは笑わない」を読んだときと同じような衝撃を受けましたですねえ。

「ブギーポップ...」も、通常的时间軸を無視して、登場人物ごとの物語が綴られていって、最後に物語の全体像が明らかになる、という手法を使っておりましたが。

この映画はもっと徹底している。

ありゃ、ありゃ、ありゃといった感じで時間がポンポン飛ぶ。

「呪怨」もそんな感じでしたわいな。で、タランティーノ監督のこの前の作品「レザボア・ドッグス」もそういう手法を使っておりましたです。

ちなみに「レザボア・ドッグス」も「ブギーポップは笑わない（映画版）」も、当然、ご紹介予定でございます。

トラヴォルタさまがとにかくいいです。「ソード・フィッシュ」「フェノミナン」「マッドシティ」あたりで振り返って、「パルプ・フィクション」「ブローケン・アロー」「フェイス・オフ」と、快進撃を続けております。「ゲット・ショーティ」とか「将軍の娘」なんかも評価高いですよ。 「サタデー・ナイト・フィーバー」でのトラヴォルタのバス・ストップ・ダンスに感激した私世代の人にとって、この人に快進撃は自分のことのように嬉しいのではないのでしょうか。

「サタデー・ナイト・フィーバー」もとりあげたいなあ。

ということで、「ジュラシック・パーク3」で途切れた数珠つながりは「パルプ・フィクション」から再開。実は前頁の「ディープ・ブルー」からサミュエル・L・ジャクソンさまつながりです。「ジュラシック・パーク」から「オーメン3」とか「ザ・フライ」につなげようと思ってましたが、とりあえずこの二本はまたの機会に。

次回は時間軸を無視した作劇つながりで、「ブギーポップは笑わない」いきます。

## ブギーポップは笑わない

---

2000年メディアワークス・博報堂・東映ビデオ作品

監督 金田龍

原作 上遠野浩平

主演 吉野紗香、黒須麻耶、酒井彩名、清水真実、高野八誠、螢 雪次朗、酒井香織、寺脇康文

憎っくき「電撃小説大賞」の受賞作、上遠野浩平先生の小説の映画化。

憎っくき、と書いたのは数年前の同賞に拙作を応募して第一次選考でボツったからでございます。

これくらいで憎っくきなんて書いてたら、かなりの文芸賞に憎っくきってつけないといけなくなります。

原作小説、悔しいけどかなりよくできています。

この賞で評価されるとかなりのものなんだろうなって思います。

残念ながらこの賞むけの新作書けてないですが、近いうちリベンジしなけりゃいけないなあと思っています。

さて「ブギーポップ」。これは特定の時間経過を、複数の視点で描いた作品。

ともすればややこしくなりそうな設定ですが、金田監督は原作に忠実に、それでいてわかりやすく映像化しています。

高校で起こる女学生連続失踪事件。

そこで囁かれるブギーポップという謎の人物の噂。

恋。

失恋。

いろんな情報が断片的に出され、それらすべてが強烈なベクトルとなってクライマックスにつきすすみます。

これねえ、ネタを明かしてしまうと原作も映画も面白くなくなってしまう、というか映画の前半部分が面白くなくなってしまうので、ストーリーはこれ以上書きません。

吉野紗香さまと黒須麻耶さまがとにかくいいです。

前半をみているときの「わけのわからなさ」の謎が一気にとける快感。

原作に負うところが多いとはいうものの、原作のポイントをしっかり押さえながら、若者たち（こんな書き方するからおっさんって言われるんだろうな）のみずみずしい日常（またこんな表現してからの）を描き込むことにも成功した監督の力量もなかなかのもの。

もうちょっと評価されてもいいなと思うファンタジー系作品です。

さて数珠つなぎ。さあ困った。しかし大丈夫。文学賞受賞作つながりで「パラサイト・イヴ」いきます。

## パラサイト・イヴ

---

1997年作品

監督 落合正幸

原作 瀬名秀明

主演 三上博史、葉月理緒菜、中島朋子

前頁の「ブギーポップは笑わない」から、文学賞グランプリ受賞作品の映画化作品つながりで、「パラサイトイヴ」。

これも憎っくき「角川ホラー大賞」の受賞作の映画化。

今は「日本ホラー小説大賞」って名前になっていると思います。

この小説がグランプリとった頃はまだこの文学賞は「角川ホラー大賞」って名前だったと思うのですが。

というのも応募したんですよ。この賞に。

この年に。

めっちゃ前になりますけども。

私の小説のタイトルは「パーティの夜」。

殺人が伝染するって話。

見事に第一次選考ボツでございました。

この題材でもう少し怖い話考えついたので、書き直そうと思っているのですが。

さて「パラサイトイヴ」。イブで検索かけても出てこない。

どうしてなんだろうと思ってよく考えたら、「イヴ」でした。正式なタイトルは。

人間の体の中のミトコンドリア。

こいつが反乱を起こすという話。

三上博史さまは科学者。交通事故で死んだ妻・葉月さまは生前、腎臓バンクに登録していたため、遺体にメスを入れられることになります。

三上さまは、腎臓提供の条件として肝臓をもらいうけ、自身の研究室で培養をはじめます。

この培養された肝臓をミトコンドリアが操り、恐怖がはじまります。

落合監督には申し訳ないですが、この作品は明らかに小説のほうが面白い。

ラストも小説と原作ではかなり違う。

ミトコンドリアは体内で熱を発生させる機能を持っている。

んでもって、自分の敵の体内のミトコンドリアに干渉して、敵を発火させることができる。って設定。

この自然発火のシステムがちょっと説明不足でした。

映像的にもあんまりリアリティがない。

自然発火ものでは「炎の少女チャーリー」だとか「クロスファイア」なんかも見ましたが、話として一番面白かったのは「炎の少女チャーリー」で、映像的に面白かったのは「クロスファイア

」かな。

次回数珠つなぎは、もうお分かりですね。自然発火つなぎで「炎の少女チャーリー」でございます。

## 炎の少女チャーリー

---

1984年アメリカ映画

監督 マーク・L・レスター

原作 スティーブン・キング

主演 デビッド・キース、ドリュー・バリモア、ジョージ・C・スコット

「パラサイト・イヴ」から、自然発火つながりで「炎の少女チャーリー」。  
超人気作家のスティーブン・キングさまの原作「ファイアー・スターター」の映画化です。  
物語としては面白いし、よくできています。

しかし原作の空気がどれだけ映画で表現できたかが疑問ですね。

パイロキネシスといいます。念力発火といきましょうか、意思の力で火をつける能力のことです。

念動力はテレキネシス。予知能力はプレコグニション。あとテレパシーとかテレポーテーションなんかは有名ですが。

パイロキネシスって超能力のなかでは若干地味ですな。

念動発火能力を持つ少女チャーリー。

彼女の力を利用しようとする大人たち。

彼女をひたすら庇ってきた父を失い、彼女の力は最大のパワーで開放されてしまいます。

なんか気持ち的にはテレビドラマの「必殺」とか「水戸黄門」見てる感じ。

とにかく「炎の少女」の映画なんだから、炎出まくりじゃないとだめっしょ、ってなノリで炎出まくる。

待ってました、うおおおおおって感じですよ。

祭りだ祭りだ、炎祭りだあ。

などとふざけている場合ではない。

「パラサイトイヴ」は静かに青い炎が燃え上がる感じ。

「クロスファイア」は内から赤い炎。

この映画は火の玉が飛びまわります。

発火シーンが派手で一番インパクトあったのがこの映画。

残念ながら「パラサイトイヴ」も「クロスファイア」もこの映画のはるか後の作品ですが、映像的インパクトはこの映画を越えることはできていません。

とりあえずクライマックスだけでも見ていただきたい映画ですが、悲しいかな古い映画なので、DVDとか見つからないかもしれませんね。

次回数珠つなぎ、本来はスティーブン・キングさま原作作品つながりで「シャイニング」なんですけど、その前に「クロスファイア」やらせていただきたいと思います。



## クロスファイア

---

2000年東宝映画

監督 金子修介

原作 宮部みゆき（鳩笛草・クロスファイア）

主演 矢田亜希子・伊藤英明・原田龍二・永島敏行・桃井かおり

自然発火能力つながり。昨日の「炎の少女チャーリー」から「クロスファイア」です。

原作は一本の短編と、その続編の長編小説。

宮部さんのインタビューによると、ホラーにならずSFにならずの超能力小説を書きたかったとのこと。

パイロキネシス少女の物語は短編集「鳩笛草」に所収の「燔祭」で登場します。

映画はこのお話と、その後の長編「クロスファイア」のエピソードを解体して再構成したようなお話。

当然、映画オリジナルのエピソードやキャラもでてきます。

感情が高まると周囲を発火させてしまう超能力を持った女性、矢田さま。

恋もせず、静かに、隠れるように暮らしています。彼女は少女時代に友達を焼死させてしまったという過去をもっています。

それからはごくごく限定された相手に、「能力」を使って恨みに近いトラブルを解決してあげたりしています。

そんな彼女に目をつけたのが「ガーディアン」と名付けられた秘密組織。

超能力をもった世直し集団とでも言いましょうか。

自分が請け負ったトラブル解決のために動いていた矢田さまの前に、超能力を駆使して悪人たちを始末する原田さまが現れます。

しかし矢田さまは「ガーディアン」のことを信用できないでいます。

やがて「ガーディアン」は矢田さまをつけねらうようになり、彼女は超能力秘密組織と戦うことになってしまう。

クライマックスの映像がすごい。

さらにその後、思わず「やったあ」と叫びたくなるようなラストシーン。

あまりにも悲しい原作ラストをイメージしていたので、このラストには救われました。

そらそうやわな。小説のラストはあまりにも小説的であり、映画的には処理しにくいラストだったので。

しかし主人公が「ガーディアン」のメンバーに恋心を抱く設定は残して欲しかったと思いました。

二本の小説を合体させたしわよせがこういうところででてきて、楽しみだったエピソードがカットされておりましたです。

矢田亜希子さまを見たくて借りたビデオですが、思っていたより面白く、楽しめましたです。

数珠つなぎ的にはここから宮部みゆきさま原作の「理由」につなげたかったのですが、こちらは別の機会に。

宮部先生原作の「模倣犯」はもうとりあげたような気がするから、「炎の少女チャーリー」に戻して、スティーブン・キング先生原作につなげようと思います。

その前に...北野版「座頭市」をとりあげます。

## 座頭市

---

2003年オフィス北野・バンダイビジュアル、FM東京、電通、テレビ朝日、斎藤エンターテイメント作品

監督 北野武

主演 ビートたけし、浅野忠信、柄本 明、大楠道代、夏川結衣、岸部一徳、石倉三郎、橘 大五郎、大家由祐子、ガダルカナルタカ

「世界のキタノ」の座頭市でございます。

北野監督、すっかり巨匠ですね。すごく風格があって画面に奥行きのある絵を撮られます。

盲目の座頭、市（たけしさま）がある町にやってくる。

市は野菜売りの女（大楠さま）の家に身をよせている。

浪人・服部（浅野さま）は病気の妻（夏川さま）のために町の親分・銀蔵（岸部さま）の用心棒、というか刺客というか、そういうことをしております。

一方、家族を押し込み強盗に皆殺しにされた、おきぬ（大家さま）おせい（橘さま）姉弟は家族の仇を探している。

ある日、市は通っていた賭場でいかさまを見破り、賭場の用心棒みたいなちんぴら達を皆殺しにします。

おきぬおせいの姉弟も、お座敷で女装の弟にいやらしいことをしようとしたお客を姉が殴ってしまいます。

かくして市・姉弟そろって銀蔵一派に追われることになります。

力でねじ伏せるように勢力を拡大してきた銀蔵一派。

追われる市。追う用心棒。

決戦のときは刻一刻と迫ってきますです。

途中、意外な人物が重要な役だったことがわかったりして、けっこう面白い。

物語の進行とシンクロするように、市・姉弟・服部の過去が描かれます。

丁寧に作っているし、わかりやすい。

クライマックスのバイオレンスシーンも素晴らしい。

こんなに才能ある人もいるんだなあ。

## シャイニング

---

1980年イギリス映画

監督 スタンリー・キューブリック

主演 ジャック・ニコルソン、シェリー・デュボール、ダニー・ロイド、スキヤットマン・クロウザー

数珠つなぎ復活。「炎の少女チャーリー」から自然発火つながりの「クロスファイア」をはさんで、スティーブン・キング先生原作つながりで「シャイニング」いきたいと思います。

過去、数々の名作を世に放ってきたスタンリー・キューブリック監督の作品。

作家のニコルソンさまは、冬の間雪で外界と隔離されるホテルの管理人の仕事を手に入れます。このホテルがやばい。

霊がうようよしている。ニコルソンさま、除々にその精神を冒され始めます。

一方、ニコルソンさまの息子は霊と交感できたり、臍げにこれから起こることを感じたりできる能力「シャイニング」の持ち主。

少年はホテルの料理人クロウザーさまと仲良くなり、自分と母親の身の上に不吉な何かが起ころうとしていることを薄々感じている。

で、ニコルソンさま、満を持してキレるわけですね。

斧を手に家族を殺そうとします。

妻・少年、逃げる。

ニコルソンさま、追う。

ここらの描写、サスペンスたっぷりですごくよくできています。

ステディカムカメラを駆使した、低高度で地面をなめるように動き回るカメラ。

この追いかけっこの映像もインパクトたっぷり。

ジャックニコルソンさま、ちょっとやりすぎに近い名演技。

いろんなレビューで性悪演技だとか酷評されておりましたが、私はあんまり嫌いじゃない。

ことこの「シャイニング」に関して、評価は真っ二つ。

キューブリック監督の演出もニコルソンさまの演技もはっきり好き嫌いが別れているようです。

このキューブリック監督版「シャイニング」を一番嫌ったのは原作者のスティーブン・キングさま。

キング先生はそもそも映画大好き人間だし、そもそも「自分の原作作品で納得いく映画を撮ってもらったことはほとんどない」と公言していましたからね。

この映画のあと、スティーブン・キングさまは自らの「製作総指揮・監督」で、再映画化しております。

そんなに嫌だったのかなあ。この作品。

さてさて。数珠つなぎ次回はスティーブン・キング原作作品つながりで「キャリー」でございます。

## キャリアー

---

1976年アメリカ映画

監督 ブライアン・デ・パルマ

主演 シシー・スペイセク、パイパー・ローリー、ジョン・トラヴォルタ、ウィリアム・カット、ナンシー・アレン

ブライアン・デ・パルマ監督、初期の傑作です。

初期のスティーブン・キングものの映画化のなかでも、かなり成功した部類に入ります。

初期のスティーブン・キングもので映画化されたのは「キャリアー」「クジョー」「ペット・セメタリー」「チルドレン・オブ・ザ・コーン（死の収穫）」「クリスティーン」「ミザリー」「イット」「スリープ・ウォーカーズ」「死霊伝説（セイラムズ・ロット）」「炎の少女チャーリー（ファイアー・スターター）」、前頁でとりあげた「シャイニング」、わすれちゃいけない「スタンド・バイ・ミー」あたりでしょうか。

ここらの作品はほとんど見ておりますが。

この「キャリアー」は青春学園ホラーみたいな部類に入るのでしょうか。

今回の執筆に先立ってちょっとレビューなんかも読みましたが、やっぱりほとんどの人はこの映画をホラーとは位置付けてはいない。

クライマックスでホラーっぽい要素はでてくるものの、これは超能力少女のかわいそうな物語&復讐物語です。

容貌にコンプレックスをもつ少女キャリアー（スペイセクさま）は母（ローリーさま）と二人暮らし。

母は父と離婚し、狂信的なキリスト教信者になっています。

キャリアーは同級生よりかなり遅れて始まった初潮を機に、少しずつ特殊な能力が備わりはじめる。

クラスの悪ガキたち（トラヴォルタさまやアレンさま。豪華な悪ガキですな）はプロムのパーティーにキャリアーを参加させます。

パートナーは学園のスターみたいなウィリアム・カットさま。

プロムクイーンにキャリアーが選ばれるように仕向ける。

でもこれはワナ。クイーンの表彰台の上に豚の血が入ったバケツを仕込み、それをキャリアーにぶっかけて笑いものにしようとたくらんでいたのです。

そんなこと知らないキャリアー、最初はオドオドビクビクしていたのに、パーティの日が近づくにつれ、すこしずつその気になってだんだんかわいくなっていく。

ここらのスペイセクさまの表現力はとにかくすごいです。

さすがホラー映画（ジャンルのにはやっぱりそう呼ばれるでしょうね）でありながらアカデミー主演女優賞にノミネートされた演技ですね。

さてパーティで豚の血をぶっかけられたキャリアー、怨念超能力パワー全開。

ここで満を持してスプリットスクリーンの大放出。

このシーンだけでもビデオ買って見る価値あり、と太鼓判おす映画史に残るスーパー演出。

これはとにかく見ていただきたい。

スペイセクさまここでも名演技。

体育館を火の海にし、トラボルタの乗った車を大破させ、血まみれで家に戻る。

家では母がキャリーを殺そうとする。

キャリーは悪魔の娘になったと思い込んでいるわけです。

あまりにも救いのない結末。

最後の最後のオチは蛇足かな。

13金の手法だし。

ちなみに原作でキャリーは体育館を火の海にするどころか、町ひとつ燃やしちゃいます。

女の子をバカにしたらえらいめにあいますよ。

次回数珠つなぎはスプリットスクリーンつながりで、市川崑監督の「女王蜂」です。

## 女王蜂（ネタバレ注意）

---

1978年東宝作品

監督 市川崑

主演 石坂浩二、中井貴恵、高峰美枝子、岸 恵子、司 葉子、仲代達也、萩尾みどり、沖雅也、加藤 武

市川版金田一耕介シリーズの集大成にして最高峰、だと私は勝手に思っています。

えっと、今日に関してはネタバレさせないと話が進まないのので、石坂金田一シリーズをこれから見ようかなとか思っておられる人で、原作読んでいない人は読まないでくださいまし。

いきなり犯人書きます。

といっても「この作品の」犯人は書きませんが。

過去三作（「犬神家の一族」「悪魔の手鞠歌」「獄門島」）の犯人役が主要な役で再び集結。（上の出演者一覧とそれぞれの作品の出演者見比べたらそれぞれの作品の犯人わかんと思います）ここらあたりが集大成の集大成たるゆえんです。

でも犯人は別の人物。

ここから先はネタバレですよ。

ご注意ください。この市川監督の金田一シリーズでは、一貫して「悲しい女の犯罪」というか、「女が女であるが故の犯罪」を描いているような気がします。

「母の犯罪」とでもいいでしょうか。で、この作品はどうかというと、これ以降の「病院坂の首くくりの家」平成版「八つ墓村」にも通ずるその一貫性をただ一作だけ守っていない作品です。だからそれまでの金田一シリーズで構成してきたルールを破ることによって、それ以降に通ずる新しい世界を構築したかったのかなと、封切り当時はそう思って「この映画は集大成なんや」って勝手に思っていたら「病院坂...」が元のパターンででてきてちょっとがっかりしたことをよく覚えています。

肝心の物語が書けなくなりました。ご勘弁くださいまし。

ただ、この作品のトリックはけっこうすごいです。

アリバイトリックあり、暗号解読トリックあり、密室トリックあり。

けっこういけてます。

市川監督がデ・パルマばりのスプリットスクリーンを使うのは物語中盤。

お茶会での殺人のシーン。これにもびっくりしました。

次回は原作ものの作品つながりで、高木彬光先生原作の「白昼の死角」いきます。

## 白昼の死角

---

1979年角川映画作品

監督 村川 透

主演 夏八木 勲、岸田 森、竜崎 勝、中尾 彬、エドワード・J・オルモス、丘 みつ子、島田陽子、佐藤 慶、千葉真一、天知 茂

資料見ないでキャストすらすら書けました。

高校のころに読んで大感激した小説の映画化です。

角川映画で、横溝正史先生・森村誠一先生に続いてとりあげられたのが高木彬光先生。

映画とドラマでほぼ同時期にこの小説が映像化されました。

映画版は夏八木 勲さま、テレビ版は渡瀬恒彦さまが主人公の鶴岡七郎を演じました。

主題歌はどちらもダウン・タウン・ブギウギ・バンドの「欲望の街」。

思い出の曲だし、思い出の映画です。

東大に通う四人の学生（夏八木さま・岸田さま・竜崎さま・中尾さま）たちが、独自の投資・資産運用理論で一般投資家から大金を集めます。

しかしマスコミや警察・大学にバッシングされて資産運用が破綻。

代表の隅田（岸田さま）は焼身自殺を遂げます。

この事件を機に、鶴岡は表向きは個人金融業、しかし裏では経済犯罪を重ねる天才詐欺師として生まれ変わるようになります。

仕事の度にメンバーを変え、同じ手口は二度と使わない。

その手口も実に鮮やか。

仕事に仕上げに自分が「善意の第三者」として登場する悪辣さ。

仕事のメンバーは中尾さま・竜崎さま・オルモスさま・千葉さまのほか、元「ミスター幸楽」藤岡琢也さまなんかも登場します。

だまされるメンバーも豪華。

佐藤 慶さま、長門 勇さま、成田真樹夫さま、小池朝雄さまに当時の角川書店代表・角川春樹さままで登場します。

詐欺の手口にしても作品そのものにしても、かなり駆け足で描いた感は否めないです。

原作が重厚でとんでもない分量の作品なのでこれはしかたないかもしれません。

連続ドラマの時間数でやっと原作全体を網羅できた感じ。

映画の尺ではちょっと足りなかったかもしれないなあ、と同情してしまいます。

詐欺の手口とかはぜひ原作または映画でご覧いただきたいですね。

本当によく練られた詐欺です。

私ならぜったい騙されるだろうなあ。

贅沢をいえば、隅田編と詐欺編と最後の仕事～取り調べ編の三部作くらいにしたらもっと見応えのある作品になったかもしれないですね。惜しいです。



次回はこの映画にハリウッドからご出演されたエドワード・J・オルモスさまつながりで、ちょいB級が香るアニマルホラー「ウルフェン」をご紹介します

## ウルフェン

---

1981年アメリカ映画

監督 マイケル・ウォドレー

主演 アルバート・フィニー、ダイアン・ヴェノーラ、トム・ヌーナン、エドワード・J・オルモス、グレゴリー・ハインズ

昨日の「白昼の死角」から、出演のエドワード・J・オルモスさまつながりで「ウルフェン」です。

あ、いや、別に私はこの人のファンとかではないですよ。

「白昼の死角」に出ていたことは知ってて、名前もよく覚えておりましたです。

でですね、「ウルフェン」見に行ったときに、どっかで見た兄ちゃんやなあってパンフレット見たら、エドワード・J・オルモスさまだった、とそれだけの話です。

ぶっちゃけ洋画につなげたかっただけでござる。

舞台は現代のアメリカ。

公園で死体が発見されます。

その死体は明らかに人間の仕業とは思えない傷がありました。

そなん、この時点で犯人は人間じゃないこと確定してるじゃないですか。

普通の捜査しても無駄やがな。と、つつこむ私の声は登場人物には聞こえない。

で、噂のオルモスさまはインディアンの男。

彼は先人たちの教えで、狼が事件にかかわっていることを匂わせる。

で、事件をひき起こしていたのは人知を超えた能力をもった狼だった。

で、狼たちは自然破壊につながる開発推進派の人を殺していったと、こういう話です。

タイトルが「ウルフェン」だったので、てっきり狼男ものだと思って見に行った映画ですが、ちょっとでかい狼が出てきただけ。

でもラストシーン、大都会に狼の群れが突然現れ、突然消えてくってのが幻想的でよかったです。

ときどき切り替わる狼視線。

「プレデター」より「悪魔を憐れむ歌」よりこの映画のほうが製作年度が古いだらうから、CG処理の敵目線ってのはこの作品が最初かもしれません。

改めて出演者チェックしてびっくり。

アルバート・フィニーさまとかグレゴリー・ハインズさまとか出ていたんですね。

「ラスト・アクション・ヒーロー」で切り裂き男演じたトム・ヌーナンさまなんかも出てるし。ちょっと癖のある豪華キャストって感じですね。

次は数珠つなぎをちょっとお休みして、ウエズリー・スナイプスさま主演の「ブレイド」いきましよう。

## ブレイド

---

1998年アメリカ映画

監督 スティーブン・ノリントン

主演 ウェズリー・スナイプス、スティーブン・ドーフ、クリス・クリストファーソン、ドナルド・ローグ、ウド・キア、トレイシー・ローズ、アーリー・ジョバー、N・ブッシュライト

ウェズリー・スナイプスさまの「ブレイド」です。

バンパイアと人間との間に生まれた男「ブレイド」が、バンパイア族と戦いを繰り広げる物語。映画のカテゴリーとしてはホラーよりもアクション映画ですな。冒頭はかなりええ感じのホラーでした。

なんかいかにも危なそうな女とドライブするアホ男。女に連れられて食品冷凍庫へ。中はまるでクラブ。みんな踊りまくっている。そこに集まっているのはこれまたいかにも怪しい奴ら。「んだよてめえら」みたいな感じで出ようとしたら突然血のシャワー。男、おろおろ。クラブの客、陶酔の表情。

男以外は全員バンパイアだったわけですな。パニックになって逃げ出そうとする男の前に立つのは「ブレイド」。

かっこええ。ここからはアクション一直線。刀・銃・銀の杭でばったばったとバンパイアを倒していきます。

話が進むと、どうやらバンパイアにもいろいろいるみたいなことがわかってきます。人間との共存をはかろうとする穏健派（ウド・キアさま）と、人間なんてやっちまえみたいな強硬派（ドーフさま）。

もちろんブレイドのターゲットは強硬派。でも強硬派は穏健派のボスを拉致して惨殺し、バンパイア界の主導権を握る。

こうなりゃ戦うだけだぜ、頑張れブレイド、と素直に楽しんでしまいました。

筋肉モリモリに磨きがかかったスナイプスさま。ええ感じです。アクションシーンもSFXもかなりの出来栄えです。

すげえすげえ。

ちょっと感動したのはバンパイアのボスを演じていたウド・キアさま。

この人、私が小学生のころ、アンディ・ウォーホールさま監修の伝説のホラー映画「悪魔のはらわた」でフランケンシュタイン博士を、「処女の生き血」でドラキュラ伯爵を演じた怪優でございます。

おひさしぶりって感じでした。「悪魔のはらわた」も「処女の生き血」も面白かったですよ。私のように屈折した映画ファンなら泣いて喜ぶ映画です。これもそのうちご紹介しますです。

次回は「ロミオ・マスト・ダイ」ざんす。

## ロミオ・マスト・ダイ

---

2000年アメリカ映画

監督 アンジェイ・バートコウリアク

主演 ジェット・リー、アリーヤ

けっこう忘れられない映画です。

昔通っていたジムで、最初に仲良くなった人が大の映画ファンでございまして、そのジムの忘年会で超熱く推薦されたのが一連のジェット・リーさま作品。

その頃、私はジェット・リーって誰だか知らなかったです。それが映画見るうちに香港時代のリー・チンチェイさまだってわかって、かなりすっと思いましたです。「少林寺」に出演していましたね、この人。

ジェット・リーさまなんてモダンな名前名乗るからわかんないんですよ。そのジェット・リーさま作品で、最初に見たのがこの作品。

ジェット・リーさまはこの映画がハリウッド映画初主演になります。「マトリックス」のVFXチームとがっぷり組んだハードアクション。

弟を殺された元刑事が、事件を探るうちにマフィアの抗争に巻き込まれる。というのも、この元刑事の父はチャイニーズマフィアのボスで、黒人マフィアと抗争を繰り広げているおっちゃん。そら巻き込まれるわな。ジェット・リーさまは黒人マフィアのボスの娘、アリーヤさまと行動をともにしながら、弟が殺された理由を探ります。

物語の随所に当然のようにアクションシーンが挿入されます。その一つ一つがすごくいいですね。

最初は軽いアクションで、後半に行くにつれてだんだんハードなアクションになっていきます。クライマックスの黒人マフィアたちとの戦いのシーンがすごい。悪玉を蹴りながら空中で方向転換して一度蹴った奴をももう一度蹴り直すとか朝飯前ですよ。あと消防用ホースを使ったアクションも秀逸。

ラストはチャイニーズマフィア側のカンフー使いとの対決。これもすごい。それぞれの場面が価値あるアクション。こういう映画も珍しい。

ちなみにタイトルの「ロミオ・マスト・ダイ」ってのはクライマックスでの悪役の台詞。ジェット・リーさまに銃を向けてこの台詞を言うわけです。「色男は死ね」と訳されておりました。

次回は「フライト・ナイト」です。

## フライトナイト

---

1985年アメリカ映画

監督 トム・ホランド

主演 ウィリアム・ラグズデール、ロディ・マクドウォール

これまた思い出たっぷりの映画です。劇団時代にすっげええええええ大好きだった子がいまして、その子と見に行った最初で最後の映画がこの映画。

実は二本立てで、ジャッキー・チェンさまの「ポリスストーリー」と「フライトナイト」を二本立てで上映するなどという暴挙を行っておりました。その子はカンフー映画ファン。私はホラー映画好き。まるで二人のためのような組み合わせ。暴挙もたまには役に立つ。おぞましいシーンで、その子は私の腕にひしと抱きつき、私、ますますその子にほろり。なんて思い出の映画。ほとんどセピア色の記憶の向こうにある思い出でございます。

さて「フライト・ナイト」。

恐怖映画マニアの高校生ラグズデールさま。彼のお気に入りマクドウォールさまがホストをつとめる「フライト・ナイト」という番組です。フライト・ナイトってのは「恐怖の夜」と訳します。

物語の中のマクドウォールさまは、かつてバンパイアハンターの役どころで一世を風靡したんだけど、今は過去の栄光をくいつぶしている感のある「あの人は今」的な俳優。

実際のマクドウォールさまと妙にだぶるところのあるキャラですよ。この人、子役からはじまって「猿の惑星」で主役をはれる役者になって、でもそこからはイマイチ役にめぐまれていないっぽいイメージがあります。

しかしこの作品、水を得た魚のような名演技です。

ラグズデールさまは、隣家へ引越してきた男が美女の首にかみつく姿を目撃してしまいます。まさか彼は吸血鬼ではなからうか。困った彼はテレビの中のバンパイアハンター役者、マクドウォールさまに相談します。

あほなこと言いなはんな、と思いつつも彼の話が本当かどうかを確かめてくれることになったマクドウォールさま。

何気なく覗いた鏡に姿が映らなかった隣人。えらいこっちゃ。ここらの運びはとってもスマート。

なんだかチープなホラーとしてはじまった映画は、徐々にSF Xホラーとして加速していきます。見終わった感想が「ああ疲れた」って言うてしまうくらいクライマックスは盛り上がります。実はけっこうお気に入りの作品です。

さて次回は数珠つなぎに戻る前にちよいとより道。「十二人の怒れる男」まいります。

## 十二人の怒れる男

---

1957年アメリカ映画

監督 シドニー・ルメット

主演 ヘンリー・フォンダ、リー・J・コップ、エド・ベグリー、マーティン・バルサム、E・G・マーシャル、ジャック・クラグマン、ジョン・フィードラー

原作はレジナルド・ローズさまの舞台劇です。

かなり有名な舞台劇です。私の劇団の同世代の役者さんは、ほとんどみんな口をそろえて「死ぬまでにこの舞台やりたい」って言ってました。でもあまりとりあげられない芝居です。

何故か。そうとう難易度が高い台本なのです。

劇書房っていうオフブロードウェイの芝居の台本ばかりを翻訳して出版していた出版社さんがありまして、そこの出す本はそうとうレベルが高いものばかりでした。映画化されたものでいうと「真夜中パーティー」とか「アマデウス」とか「小さき神のつくりし子ら（愛は静けさの中に）」とか「黄昏」とか。

半端な役者さんなんか手がだすとえらいめにあうような本ばかり。その中でも特に難易度の高い作品が「十二人の怒れる男」。そこそこのレベルの役者さんが十二人揃ってはじめてできる芝居です。

しかしやっぱり舞台台本よりも圧倒的に映画のほうが評価が高かったです。舞台上演の際は映画をご参考に、みたいなノリでした。

物語は十二人の陪審員が評決を打ち合わせするというもの。容疑者は少年。

十二人のうち十一人までは少年は有罪であるとほぼ決めつけています。

「さっさと有罪に決めて家に帰ってビールでも飲もうぜ」みたいな空気が漂っています。しかしただ一人、少年の有罪に異を唱える男がいる。この陪審員をヘンリーフォンダさまが演じます。陪審員の決定は全員一致が原則。十一対一で有罪対無罪の説得合戦がはじまります。

フォンダさま、裁判で明らかになった証言や証拠を検証しはじめます。次第に証言者の発言の信憑性が損なわれていく。それと同時に十一人の陪審員の意見が次第に割れはじめる。果たして十二人の陪審員たちはどのような裁定を下すのでしょうか。

ヘンリーフォンダさまがとにかくいいです。しかしそれだけではなく、十二人の登場人物一人ひとりが非常に丁寧に描かれています。

私世代の人のほとんどは、陪審員制ってのがどんなものなのか、この映画で知った人も多いはず。

ラストもとっても素晴らしい余韻を感じさせてくれる作品です。

さあて、次回は、数珠つなぎに戻りまして「狼男アメリカン」のご紹介でございます。

## 狼男アメリカン

---

1981年アメリカ映画

監督 ジョン・ランディス

特殊メイク リックベイカー

主演 デビッド・ノートン、ジェニー・アガター、グリフィン・ダン、ジョン・ウッドバイン、ブライアン・グローバー

数珠つなぎ前回はウルフエンでございました。そこから狼ネタつながりで「狼男アメリカン」でござす。監督はジョン・ランディスさま。私が高校生の頃の映画です。

というのも、同級生の子がこの映画の狼男の変身シーンを真似してネタにしていたのを覚えてるからです。

この映画の直前に「ハウリング」って狼男映画がありまして、日本公開はこっちのほうが後だったので、この映画「二番煎じ」みたいな印象をもたれていました。

変身シーンは、この「狼男アメリカン」のほうがよくできています。これまでの狼男映画とは違い、特殊メイクと特撮で変身プロセスを見せてしまったってのがまず画期的。

その上で「ハウリング」は薄暗い部屋での変身だったのに対し、「狼男アメリカン」はこうこうと電灯がともる室内で鮮やかな変身シーンを見せた。もうそれだけで「狼男アメリカン」に軍配があがってしまいます。

まあそもそもこの作品の特殊メイクのリック・ベイカーさまは、「ハウリング」の特殊メイクのロブ・ポーティンさまも師匠にあたる人だから、まあこっちのほうがよくできていて当たり前なんです。

イギリスの人狼伝説が伝承されている地方を旅した大学生二人。彼らは狼に襲われます。

一人は噛み殺され、もう一人は狼にかまれてしまう。狼は地元のハンターに殺されます。しかしこいつの死体が人間だったからびっくり。

わしを襲った奴は狼男じゃったんじゃろうか、などと思いながら主人公はアメリカに戻る。やがて主人公に深夜の徘徊癖がはじまります。

全裸で動物園とかで寝てたりするわけですな。やがて彼の目の前に死んだ友人が現れる。狼男に殺された人の魂は、狼男が死ぬまで成仏できない、と言います。

あんたを殺した狼男は死んだやん、といたいところですが、主人公が狼男になり、狼男の血が絶えていないから俺は死ねない、とこういうわけです。

ハイライトはやっぱり変身シーン。今や御大・リックベイカーさまの特殊メイクがみどころ。かなりいけてます。

さてさて、次回からちょいと変則パターンで数珠つなぎしていきます。とりあえず次回はジョン・ランディス監督つながりで「トワイライトゾーン」。ただし、これはエピソードごとに四回にわけてまいります。ご容赦くださいませ。

## トワイライトゾーン・超次元の体験・第一話

---

オープニング「本当に怖いもの」・第一話「偏見の恐怖」

1983年アメリカ映画

監督 ジョン・ランディス

主演 ビック・モロー、ダン・エイクロイド

今日からシリーズで、「トワイライト・ゾーン」をご紹介します。映画は三十分くらいのショートストーリー四話で一つの映画になっております。

監督はジョン・ランディスさま、スティーヴン・スピルバーグさま、ジョー・ダンテさま、ジョージ・ミラーさまと、当時上り調子の監督ばかり。

今日はジョン・ランディス監督のパートのご紹介。

エピソードタイトルは、あるサイトに載っていたものですが、恐らく元ネタになった「ミステリーゾーン」のエピソードタイトルだと思います。

オープニングはダン・エイクロイドさまが主演。CCRのミッドナイトスペシャルを歌いながら田舎道を走る車。

車の中の会話は懐かしのテレビドラマ談義へ。んで話題はトワイライト・ゾーン（ミステリーゾーン）のものになります。あの話が面白かったとかこの話が恐かったとか、ああだこうだ。

んで、エイクロイドさまが言います。「本当に怖いものって見たことあるかい？」

この言葉が出たら結末はおわかりですよ。

そして第一話。ビック・モローさまの遺作となった物語。ガチガチの人種差別主義者、モローさま。この男がいきなり別の世界に飛ばされるわけです。

まずユダヤ人としてナチに追われる。次にベトコンとしてアメリカ兵に狙い撃ちされそうになる。そしてまたユダヤ人になって強制収容所行きの列車に乗せられる。

おお、怖い怖い。主演のビック・モローさまはこの映画の撮影中に、劇用ヘリの墜落事故に巻き込まれ、他界します。撮影していたのはモローさまがアメリカ軍ヘリからの機銃掃射からベトナム人の子供を助けようとする場面だったらしいです。

もし事故がなければ、かなりヒューマンな内容の作品になる予定だったようです。

ちなみに、このエピソードを監督していたジョン・ランディスさまは、この後、この件で裁判を争うこととなります。

次回数珠つなぎは、第二話監督スピルバーグさまの出世作「E. T.」をご紹介します、さらにその翌日に「トワイライト・ゾーン」第二話」をご紹介します。



E. T.

---

1982年アメリカ映画

監督 スティーヴン・スピルバーグ

主演 ヘンリー・トーマス、ディー・ウォレス・ストーン、ドリュー・バリモア、ロバート・マクノートン、ピーター・コヨーテ

スティーヴン・スピルバーグさまのフィルモグラフィーってけっこうすごいですよね。ちゃんとは調べてないけど。

初監督はデニス・ウィーバーさま主演で「激突」でしたね。

「激突」はそもそもテレビドラマございまして、その後「続・激突・カージャック」で劇場用映画監督デビューします。

で、彼の名前を不動のものにしたのが「ジョーズ」であるのは万人の認めるところ。

しかしこのへんの作品群はストーリーテリングの巧みさと、サスペンス描写の上手さを実証したものであって、スピルバーグさまの全体像を見せるだけのものではなかったような気がします。私の考えるスピルバーグさまの世界というのは、「カラー・パープル」や「シンドラのリスト」などのヒューマン世界と、「インディ・ジョーンズ」や「ジュラシック・パーク」に代表されるエンターテインメントの世界、そして「フック」や「E. T.」に代表される少年の視点を大事にした世界。

ちなみに「未知との遭遇」はエンターテインメントとヒューマン世界の間かな。

で、E. T. の話。

地球に探索に来ていて親宇宙人とはぐれてしまった子供宇宙人と主人公エリオット（ヘンリー・トーマスさま）少年の友情物語。

とっても感動的でとても面白い作品です。

当時の女子高生や女子大生は「E. T. ってカワイー」とか言ってたくせに、「あんたE. T. に似てますよね」って言うと激怒したりしていました。それってかわいくないって意味とちゃうの？

あと、この映画の公開のころ、ちょっとビジュアル的に難のある、ET似の素人さんがたが、「ETのものまねです」とか言ってテレビに出演されておられました。

うん。ETの物真似とかいわれても...

見てて恥ずかしいから、そういうテレビのでかたしていただきたくなかったでございます。

それより何より、ドリュー・バリモアさまが出ていたってのが驚きでございます。

## トワイライトゾーン・超次元の体験・第二話

---

### 第二話「真夜中の遊戯」

1983年アメリカ映画

監督 スティーヴン・スピルバーグ

主演 スキャットマン・クロウザーズ

スティーヴン・スピルバーグの監督パートです。

前回、「E. T.」をとりあげましたが、その作風に通ずる作品です。

ただ、「E. T.」のような子供の視線ではない。

後にスピルバーグ監督ご自身が「フック」で取り組む、「大人が忘れてしまった子供の視線」を描いた作品です。

作品が描くのはさらにその先。

「老人が忘れてしまった子供の視線」です。

しかし、そのスタンスは極めて優しさに満ちておりますです。

まるで根無し草のようにあちこちの老人施設を渡り歩くおじいさん、スキャットマン・クロウザーさま。

彼がやってきたのはみるからに灰色の老人施設。ほんまに灰色。

別に灰色のカラー処理しているわけではないです。でも本当に暗く、沈んでいるムード。

施設のルールに縛られ、どんよりした毎日を過ごしています。

クロウザーさま、みんなにちょっとした魔法をかけます。

施設のルールをみんなで破ろう、消灯時間を破って夜中に集まり、みんなで遊ぼうと声をかけます。

沈んでいる老人、この言葉で俄然元気になります。なんか忘れていた「遊び心」を呼び戻されたような雰囲気。

しかし、どこにでもいる頑固じじい。

わしゃそんな話には乗らんぞ、とへそをまげています。実はこのおじいさん、息子夫婦とうまくいってないらしい。

しかし真夜中、本当に魔法がかかる。

消灯時間を破って集まったおじいさんおばあさん、集まって何をするの？って話になります。

遊んだらいいんだ、というクロウザーさま。その言葉通り遊びはじめた老人たちは、何と子供に戻ってしまいます。

子供が遊んでいることに驚いた頑固じじい、施設の職員を連れて部屋に行くと...

ここから先の物語の展開も素晴らしいです。

ネタバレ防止のため書きませんが。

この作品にしても、日本版「ミステリーゾーン（トワイライトゾーンですかね、今では）」とでもいうべき「世にも奇妙な物語」にしても、怖い怖い話ばかりではなくこういうハートウォーミングな話が入ってくるのがいいですね。

この話、私はけっこう好きです。

さてさて、次回は第三話の監督、ジョー・ダンテ監督の出世作「ハウリング」でございます。

## ハウリング

---

1981年アメリカ映画

監督 ジョー・ダンテ

主演 ディー・ウォーレス、パトリック・マクニー、デニス・デューガン

あまりにも有名な狼男映画。ニュースキャスターのウォーレスさまは猟奇殺人事件を追っております。で、犯人と名乗る男から呼びされます。犯人、彼女の目の前で「人間ではないもの」に変身します。で、ウォーレスさまは襲われちゃいます。幸い彼女は助かりますが、なんせ「人間ではないもの」の変身シーンを見ちゃったわけだから、精神が錯乱してるってことにされて保養施設に行くことになるわけですが、この保養施設が、「人間ではないもの」の巣窟だったわけでございますな。

この映画、あまりに製作のタイミングが悪かったですよね。

公開が「狼男アメリカン」とあまりにも近いタイミングだったので、この映画の狼男の変身シーンのインパクトが全部そっちに吸い取られてしまいました。結果残ったのは「変身シーンが印象的な狼男映画、但し、特殊メイクは『狼男アメリカン』には劣る。ユーモアセンスもジョン・ランディスさまに軍配」、みたいな評価です。ってずっと思ってたんだけど、実は複雑な事情があったみたい...

そもそもジョー・ダンテさまという人、ホラーの大御所、ロジャー・コーマンさまのお弟子さん。

特殊メイクを手がけたのはロブ・ボーティンさまって人。この人は「狼男アメリカン」の特殊メイクを担当したリック・ベイカーさまのお弟子さん。ベイカーさまが「狼男アメリカン」の特殊メイクを担当することになって忙しいもんで、この作品のほうの特殊メイクを門下生のボーティンさまに任せたってことらしいです。で、完成した「ハウリング」を見て、ランディスさまとベイカーさま、びっくりして「狼男アメリカン」を取り直したそうです。そういう意味では、「狼男アメリカン」のほうがよくできてて当たり前ですわな。予算も全然違ったみたいだし、お師匠さんが特殊メイク担当してるし、「ハウリング」見て撮り直したわけだし。

すでに懐かしの名画、オリヴァー・リードさま版狼男とか、そのコンセプトを引き継いだ「狼男アメリカン」、このへんの映画とこの作品が決定的に違うのは、変身が本人の意思で行われるという点です。これまでの狼男映画は、主人公には変身する意思なんてないんですよ。

満月とかを見ると本人の意志に関係なく変身してしまう。狼男に変身している間の記憶はない。この狼男の基本構造をぶっこわしたのがこの映画の狼男描写でございます。

とりあえず、変身する人が、自分の「怒りの意志」で変身するというのがこれまでの狼男ムービーにはなかった要素です。主人公の身にふりかかった悲劇って構造が壊れて、恐怖の変身人間「狼男」から逃げる主人公って構造になっております。

物語の最後でニュースキャスターを演じるヒロインも狼女に変身してしまいます。これも本人が変身しようと思ったわけで、自分の番組のカメラの前で、狼男の存在を明らかにするために変身

するんす。

衝撃的だったけど、このラストのオチがちょっといやでした。

とにかく、しっかりとした特殊技能スタッフがそろえば低予算でも十分に傑作が仕上がる、といった好例でございます。

第三話「こどもの世界」

1983年アメリカ映画

監督 ジョー・ダンテ

主演 キャサリン・クライラン

ジョー・ダンテ監督のパートです。ランディスさま、スピルバーグさまはまあ別格として、ジョー・ダンテさまにジョージ・ミラーさまってすごく微妙ですよ。ランディスさまにしてもスピルバーグさまにしても、「あのランディスさま」「あのスピルバーグさま」って具合に、名前だけで通用する監督です。でもジョー・ダンテさまは「ハウリングの...」という言葉が必要だし、ジョージ・ミラーさまも「マッド・マックスの...」って言わないとわかりにくい。今ではハウリングだとかマッド・マックスだとかのタイトルあげてもわからない人多いだろうけど。

この「トワイライト・ゾーン」の直前に、ジョン・ランディス監督とほぼ同時期に同じ題材（狼男もの）に取り組んだジョー・ダンテ監督。ランディス監督に招かれ、この大作の後半パートを任されることになります。

自分の仕事に自信をなくしかけている女教師キャサリン・クライランさま。

彼女がドライブの途中で立ち寄った家。ごっつい不思議な家でございます。

妙にピリピリしている両親。テレビに向かったまま動かない女の子。そして純真だが傲慢なその弟。

とにかく両親は弟の機嫌をそこねないようにえへらえへらしている。

招かれた夕食のメニューはスイーツ系。

なんじゃこりゃ。

クライランさまはこんなんじゃ栄養が偏るわよ、みたいなことを言います。

弟、「え？ そうなの？」みたいなことを言いまして、「どうして教えてくれなかったの？」みたいなことを両親に言う。

なんなんじゃこの家族。

次第にこの家族の秘密が見えてくる。弟には「力」がありまして、おしゃべりがすぎる姉の口をなくしてしまったり、家族をテレビアニメの中に封じ込めたり、そういうことができるのでございます。

「力」を持っているがゆえに家族からさえ恐れられ、教えられなければならないことを知らない少年。

クライランさまは少年のために何ができるのでしょうか。

ハウリングで変身スーパーSFXをみせてくれたジョー・ダンテ演出。

今回もSFX炸裂。

しかしそのわりにはヒューマンなオチがつきます。

もうすこしドギツイ話になってもよかったかもしれないなあ、というのは私の勝手な考え。  
さて今回は最終話の監督、ジョージ・ミラー監督の大出世作「マッド・マックス」をご紹介します。

## マッドマックス

---

1979年オーストラリア映画

監督 ジョージ・ミラー

主演 メル・ギブソン、ジョアン・サミュエル、ヒュー・キースバーン、スティーブ・ビズレー

連日ご紹介させていただいております、「トワイライトゾーン」の四人の監督の大トリ。

ジョージ・ミラー監督の大ヒット作でございます。

ある雑誌のインタビューで読みましたが、実はジョージ・ミラー監督、カーマニアなどではなく、逆に車とかスピードとかが恐くてしかたないらしいです。つまり、高速で走る車だとか飛行機だとかが恐くてしかたないから、恐怖の対象としてそれらを捉えた結果、これだけインパクトのある映画が撮れるんだってことなんでしょうね。

近未来。

メル・ギブソンさま演じるのは警察官。マグナム銃とショットガンで武装した警察官です。

追跡用車両で車で逃げ回る悪党を追跡するわけです。

ギブソンさまは暴走族チックなワルを追跡している途中、そいつを轢き殺してしまいます。そこから、暴走グループのお礼参りがはじまります。

悪党たちの行動は次第にエスカレートしていきます。その魔手は家族にまで及びはじめます。

家族の身の危険を感じたギブソンさま、妻と子供を避難させようとしますが、その甲斐もなく殺されてしまいます。

ここから物語はどんどん加速度がついていきます。ギブソンさまの復讐がはじまります。

オーストラリアの広大な道路があって初めて実現した疾走感といいましょうか。

スピード感といいましょうか。

こんなに恐いカーチェイスはあまりないし、こんなに緊迫感のあるスピード感はそうそうでないと思います。

やはりスピード、恐いんでしょうね、ジョージ・ミラー監督。

ちなみにマッドマックスは第三作まで作られていますが、第一作と第二・第三作は作品世界がまるで違います。

第一作は近未来の警察映画ですが、第二第三作は世界秩序崩壊後を描くSF映画でございます。

第一作に感動しても第二作はちょっと作品世界が違うのでご注意あれ。

リーサル・ウェポンも1と2以降ではリッグス刑事のキャラが変わっちゃってましたが。

さて次回の数珠つなぎは「トワイライトゾーン」最終話のご紹介です。



## トワイライトゾーン・超次元の体験・第四話

---

### 第四話「二万フィートの戦慄」

1983年アメリカ映画

監督 ジョージ・ミラー

主演 ジョン・リスゴー

短編集の配置のコツってものを聞いたことがあります。短編集ってものはですね、最初に一番良い作品を持ってきて、二番目に良い作品を最後に持つてくる。あとは全体のバランスをみながら残りの作品を並べる、というわけです。

このトワイライトゾーンに関しては、うーん、どうなんやろ。

私的には、このジョージ・ミラー監督のエピソードが一番良い出来だったと思います。

ランディスさまの話はちょっと消化不良。そらそうやわな。主役俳優が撮影中に死んでしまったわけですから。この話をトップにもつてくるのが納得いかないんだけど。スピルバーグさまの話は出来すぎ。間違いなく良い話なんだけど。間違いなく良くできているんだけど。

ダンテ監督の話。うむむ。これも面白いんだけど、あとに残るものがなあ。で、ジョージ・ミラー監督のエピソード。

この話で映画全体が締まったように思います。間違いなく一番面白いのはこのエピソード。

これはあくまでも私の意見ですが。

いきなり画面をひしゃげさせて、飛行機の乗客、ジョン・リスゴーさまの不安感を見事に表現しています。リスゴーさまは高所恐怖症のスピード恐怖症。しかも閉所恐怖症っぽくも見えます。とにかく飛行機に乗ってパニック状態に陥っています。呼吸は荒く、ガタガタ震えて、絵に書いたような大変な状況でございます。

「うー気分悪い」って外を見ると、飛行機の翼の上に誰かが乗っている。「大変や、整備士乗せたまま飛んでまっせ」「んなアホな」外を見るとやっぱり誰もいない。「気のせいでっせ」

こうなるとリスゴーさま、孤立無援です。また外を見る。また翼の上に人影。それだけではなく、どうやらその影、飛行機の翼のエンジンに悪さをしているみたい。しかし機内の客室乗務員は全然相手にしてくれません。

窓の外をふと見ると、ゴブリンが覗いてるうううう。うぎゃあああああ。

怪談の定石をふむ憎い演出。古典的ですが、それがゆえに効果的。ジョージ・ミラー監督の演出もさることながら、ジョン・リスゴーさまの名演技に負うところが大きいかもしれません。この傑作エピソードで映画は終わります。

不思議感覚をたっぷり残して。と、思ったら、最後にもう一度ダン・エイクロイドさまが登場。

思わずニヤリとさせてくれるエンディングです。

次回は、「ハリー・ポッターと賢者の石」いきます。

## ハリー・ポッターと賢者の石

---

2001年アメリカ映画

監督 クリス・コロンバス

原作 J・K・ローリング

主演 ダニエル・ラドクリフ、ルパート・グリント、エマ・ワトソン、トム・フェルトン、リチャード・ハリス、マギー・スミス、ロビー・コルトレーン、アラン・リックマン

J・K・ローリングさまの世界的ベストセラーの映画化第一弾。

ハリー・ポッター（ラドクリフさま）は両親の顔さえ知らずに親戚に預けられ、けっこう不遇な少年時代を送っております。

彼の父は魔法使い。彼が生まれてすぐに悪い魔法使いに殺されています。

ポッターが十一歳の誕生日を迎える日、ホグワーツの魔法学校からの迎えハグリット（コルトレーンさま）がやってきます。

学校へ向かう汽車の中で知り合った友人、ロンとハーマイオーニー（グリントさまとワトソンさま）たちと魔法学校に入学。

ポッターに味方するダンブルドア校長先生（ハリスさま）、先生（スミスさま）、そしてあからさまに怪しいスネープ先生（リックマンさま）。

学校での生活。魔法や毒薬の授業、箒での飛行訓練。

箒での飛行の才能を認められたポッターはラグビーみたいな箒に乗ったスポーツの選手に選ばれたりします。

さてさて、学校にはなんだか秘密がある。

まあね、魔法学校ですからいろんな秘密があるのは当たり前かもしれん。

「学校の用事」でハグリットが貸し金庫から何かを出すのですが、その後、その貸し金庫が襲われたことが明らかになります。

やがて学校の一室に置かれている「賢者の石」を探す冒険の物語になります。

どうやら誰かが賢者の石を手に入れようとしているようです。

この秘密をめぐってハリーが大活躍することになります。

SFXもすごくよくできているし、細部にまでこだわったプロップ選びや台本、伏線が行き届いたストーリーテリングがとてもよくできています。

想像していた以上に楽しめました。

## フライトナイト2 バンパイアの逆襲

---

1988年アメリカ映画

監督 トミー・リー・ウオーレス

主演 ロディ・マクドウォール、ウィリアム・ラグズデール、トレーシー・リン、ジュリー・カーメン

「ウエルカム・トゥ・フライトナイト」。

あんまり期待しないで見に行くと、想像以上に面白かったSF Xモダンホラーの快作「フライトナイト」の続編。

この台詞は、前作ではロディ・マクドウォールさま、クリス・サランドンさまが一回ずつ言った台詞。

今回はジュリー・カーメンさまがこの台詞を言いますが、三人のなかで一番かっこいい。

前作でやっつけられた兄バンパイアの仇をうつため、妹バンパイアがまたしてもラグズデールさまの隣家に引っ越してきます。女バンパイアってのがいいですね。

今回はオカマのローラーバンパイアだとか虫を食う大男だとかスケベ狼男だとかを配下に従えております。

この四人、揃ってエレベーターに乗る場面がありますが、絵的にすごくかっこいい。

ファッショナブルとか何とか。かなりいけてます。

んで、隣にバンパイアがまた越してきたことがわかったラグズデールさま、またしてもバンパイアハンター役者、マクドウォールさまのところへ協力要請。

例によっていやがるおっさんを口説き落とし、またまたバンパイア退治となります。

やっぱりラストは大SF X大会。

やってくれます。

今回ラグズデールさまの彼女役で登場したのがトレーシー・リンさま。

彼女もけっこうがんばっております。

さてさて、次回から数珠つなぎに戻ります。次回から映画版「世にも奇妙な物語」の各エピソードをご紹介します。

2000年東宝作品

監督 落合正幸

主演 矢田亜希子、鈴木一真、大杉 漣

ストーリーテラー・タモリ

数珠つなぎでございます。

「トワイライトゾーン」からテレビ原作のオムニバスドラマつながりで、今日から四回に分けて「世にも奇妙な物語・映画の特別編」をご紹介します。

1990年から続いているフジテレビの怪物番組。

当初はレギュラー番組として製作されていましたが、現在は春秋の番組改変期に登場する、視聴率が取れるすげえ番組になっております。

落合監督のメガホンによるこの作品は、雪山がらみの都市伝説を扱ったとってもホラーな一編。レギュラー番組時代にも雪山ネタはけっこうありまして、草刈正夫さま主演の「食べ過ぎた男」だとか渡辺裕之さま主演の「歩く死体」なんかが印象に残っております。

どこまでネタバレさせていいのかわからないですが、「食べ過ぎた男」は「遭難者の夢」オチ、「歩く死体」は「主人公の恐怖の原因は主人公自身」オチです。

となるとこの話は？ってことになりますが、雪山がらみの都市伝説といえば、渡辺裕之さま主演作っぽい話か、こういう話かのどっちかになりますよね。

複合技パターンなんてのもそのうち出てくるかもしれませんね。

さて次回は「世にも奇妙な物語・映画の特別編・第二話」をご紹介します。

2000年東宝作品

監督 鈴木雅之

主演 中井貴一、奥菜 恵

ストーリーテラー タモリ

昨日の続き、「世にも奇妙な物語・映画の特別編」です。今日は第二話の「携帯忠臣蔵」。

「王様のレストラン」「ショムニ」で監督をつとめた鈴木雅之さまの作品。

この人は「世にも」では「代打はヒットを打ったのか」というとってもブラックな傑作を残している監督です。「世にも」シリーズはホラー系、ハートウォーミング系、コメディ系、不条理系、シュール系、オチに命をかけている系など、さまざまな作品があるすぐれたオムニバスドラマシリーズです。この「携帯忠臣蔵」はカテゴリーとしてはコメディに属する作品です。しかし私はけっこうじいんとしてしまいました。

最近になって大石内蔵助さまという人の人物像に関しては、様々なキャラクター設定がされるようになりました。かつての「忠臣蔵」の人間描写にはない、人間味あふれる人物像です。

かつて二時間ドラマでビートたけしさまが演じた大石や、NHK大河ドラマで緒形拳さまが演じた大石なんかはその代表だとよく言われますが、優柔不断で女好き系キャラでございます。

「四十七人の刺客」の高倉健さまの大石も、「もののふ〜」みたいな感じではなく、狡猾な「智将・大石」のイメージでした。

さて「世にも」映画版。とっても優柔不断で、できれば討ち入りなんてしたくないバージョンの大石。

中井貴一さまめっちゃ巧い。彼の目の前に、何故か突然携帯電話が現れる。

「何なのじゃ、これは」みたいな感じでおっかなびっくり携帯を手にする大石。

不思議なことにこの携帯、ちゃんと機能している。

次第に大石は誰ともわからぬ携帯の相手と話をし、友情めいたものを感じはじめ、ついには討ち入りを決意します。

ラストは討ち入り当日。これから討ち入りをすることを電話の相手に告げ、彼は静かに携帯を降り積もる雪の上に置く。なんだか涙がでそうになってしまいました。

こっちは大石がその後本懐をとげ、切腹するということまで知っているわけですから。

電話の相手は八嶋智人さま。

彼はラストまで出てきません。

で、何故彼が大石に電話したのか、何故携帯が大石の目の前に現れたのかがわかる、という構成になっています。

ある意味読めてしまったラストですが、ちょっといい話系のコメディ系の「世にも」としてはなかなかいい出来だったのではないかと思います。

次回は第三話のご紹介です。

2000年東宝作品

監督 星 譲

主演 武田真治、石橋蓮司

ストーリーテラー・タモリ

シリーズでお伝えしております、「世にも奇妙な物語」映画版の第三話。

ホラー、コメディときて第三話はサスペンスです。

引退したチェスの名人が武田さま。

彼は謎の老人からの挑戦を受けます。

しかもそのチェスは現実とリンクしているらしい。

武田さまの駒がとられると、彼の回りにいる人がやられていく。

そういうルールです。

名人は自分の全能力を使ってチェスに挑みますが...

石橋蓮司さまがなかなかいい味だしてます。

この人は新劇出身。緑魔子さんって女優さんのご主人で、第七病棟という劇団の代表です。

三十年近く前にこの劇団初の地方公演を見に行きましたが、この時点で頭薄かった。

前半部はやたらスリリングでよかったんですが、途中でおやっと思って、結末は予想通り。

ちょっとシナリオに問題ありかな。

今回の話はいずれも途中から結末が読める作品ばかりでした。

テレビ版の特番は最近、結末が読めないものが増えてきたので、ちょっと残念。

結末が読めてしまうと、こういうサスペンスものは全然印象に残らなくなるから不利ですよ。

「携帯忠臣蔵」のようにハートウォーミング系コメディだと先が読めても印象に残るし、「雪山」みたいなホラーだとクライマックス画像にインパクトがあれば強烈に残るのですが。

四作のなかで一番不利な作品でした。

ちなみに。チェス題材、ハリーポッター公開前でよかったですね。

順番が逆だと悲惨な結果になっていたかも。

2000年東宝作品

監督 小椋久雄

主演 稲森いずみ、柏原 崇

ストーリーテラー タモリ

いよいよ「世にも奇妙な物語・映画の特別編」最終エピソード。

この作品はあまり映画むきの素材ではないように思います。

ラブ・ストーリーを映画版に入れたいという製作サイドの意向で入れられた一編のようです。

稲森さまと柏原さまはつきあっていて、結婚を考えています。

二人は結婚式場の新サービス「結婚シミュレーター」を体験することになります。

こいつは結婚後の二人の生活を擬似体験できるという新サービス。

さてさて二人の恋の行方は...

という恋愛物語。

このようなSFチックな設定のお話に恋愛の要素が入ってくるのはある意味反則ですよ。

前に書いたスピルバーグ監督の「A. I.」なんかもかなり反則。

こちらはSFのつもりで見ているから油断しています。

そこにかかなり純度の高い恋愛ものだとか親子の愛情ものだとかを突きつけられると、それだけで条件反射的に泣けてしまいます。

この話もラストはかなりハートウォーミングなお話になっておりました。

うん、よかったよかった的なオチでございます。

ただ、オムニバス映画的には、この作品をラストに持ってきたのは賛否の別れるところではないかなと思います。

前半二作品の印象が強すぎて、後半の作品の印象が残りにくい。

「携帯忠臣蔵」あたりをラストにもっていったほうがよかったんじゃないかなって思います。

さてさて。次回は「ブレイド2」だあ。

## ブレイド2

---

2002年アメリカ映画

監督 ギレルモ・デル・トロ

主演 ウェズリー・スナイプス、クリス・クリストファーソン、ルーク・ゴス、レオノア・ヴァレラ

人間とバンパイアの間に生まれたバンパイアハンター「ブレイド」の戦いを描く悶絶ハイパーホラーアクション第二弾。

相変わらずやってくれてますスナイプスさま。

前作でバンパイアに噛まれ、バンパイア化する前に自殺したことになるはずのクリス・クリストファーソンさま。

彼は実は死んでいなくて、バンパイアに拉致されていたってことになってました。

クリストファーソンさまを奪還したブレイドのもとに現れたのはバンパイア王国からの使い。

バンパイア王国は休戦を申し入れてきます。

バンパイアはそもそもウイルス感染者であり、吸血は唾液を介した感染なんだという吸血理論が説明され、そこに新種のウイルスが蔓延しつつあることが明かされます。

新種のバンパイア「リーパーズ」が登場、リーパーズはバンパイア、人どちらも襲い、仲間を増やす新種族。

この「リーパーズ」を倒すため、ブレイドは「自分を倒すために訓練を積んだ暗殺バンパイアチーム」と手を組むことになります。

前作で戦っていたブレイドとバンパイアが手を組んで戦うわけです。

しかし「リーパーズ」のボスが言う。

「お前は敵か、味方か。敵の敵は味方か、敵か」

彼の言葉通り、途中からバンパイアグループの裏切りめいた行動が見え始める。

やがてこの計画のとんでもない裏が明かされます。

ブレイドの怒り爆発。

いぐわあああああ。

相変わらず派手でございます。こいつはホラーではなくやっぱりアクション。

「リーパーズ」のバンパイアの吸血シーンはホラーだけど。なんせ下顎が左右にカパッと割れて吸血しますもんで。

しかし、ブレイドが敵バンパイアにブレンバスター食らわせるのには笑ってしまった。

しかし...

ブレンバスターは違うやろ。

今回はエイドリアン・ライン監督作品、「ジェイコブズ・ラダー」です。



## ジェイコブズ・ラダー

---

1990年アメリカ映画

監督 エイドリアン・ライン

主演 ティム・ロビンス、エリザベス・ペーニャ、ダニー・アイエロ、マット・クレーブン

ベトナム戦争ものの傑作でございます。でもかなり屈折しています。

ティム・ロビンスさま演ずるのは出征兵で、ジェイコブって名前。

彼の所属する部隊が、奇襲をうけ、大打撃をこうむります。

ジェイコブ自身も腹に重症を負います。

帰還した彼は、自分たちを攻撃した部隊がアメリカ兵だったことに気づき、何故そうなったのかを探りはじめる。

やがて、ベトナムで強力な幻覚作用のある麻薬が兵士に投与されていた可能性があるという事実を知るわけですが...

かなりサスペンス色の濃い作品。

途中にインサートされる不気味な映像は何を意味するのか。

強烈なラストで全ての謎がとけるというドラマ構造。なかなかいいです。

作品の評価は両極ですね。

おもんないという声と、すげえ考えさせられたって声と。私は大好きなんですけど、この映画。

映画全体の雰囲気「フラットライナーズ」に似てますね。

ちなみにこの映画、キリスト教世界をかなり意識したものになっているそうで、アメリカの人とかが見れば「ははーん、そうか」みたいな話らしいです。

ジェイコブは聖ヤコブのことらしい。

んで、「ジェイコブズ・ラダー」（ヤコブの螺旋階段と訳すのかなあ）という言葉も実際にあるそうです。

そういう目でもう一回見ようかな。

次回はこの作品起点で数珠つなぎいきます。

とりあえずエイドリアン・ライン監督つながりで、「危険な情事」いきましょう。

## 危険な情事

---

1987年アメリカ映画。

監督 エイドリアン・ライン

主演 マイケル・ダグラス、グレン・クローズ

前回の「ジェイコブズ・ラダー」から監督のエイドリアン・ラインさまつながりで、「危険な情事」。

けっこう話題になった作品です。

幸せな家庭を持っているダグラスさま。

奥さんと子供が家を留守にしている数日の間、彼は仕事がらみの女性、クローズさまと浮気を乐しみます。

男にとってその行為はただの遊び。

しかし女性にとってはそうではなかった。

そんな感情のズレが、とんでもないホラーな状況を生み出します。

次第にエスカレートしはじめる彼女の感情。

感情とともにその行動もエスカレートしはじめます。

ストーカーの恐怖って、この映画あたりで認識されるようになったのでしょうか。

最後はとんでもなく哀しい結末。

グレン・クローズさま、すごくいいですね。美しさ、かわいさ、危うさ、狂気、それらすべてを完璧に演じきっています。彼女の演技があったからこそ、リアルな恐ろしいこの作品が光ったのだと思います。

全国の男性諸氏。悪さはほどほどにね。

さて次回は、マイケルダグラスさまつながりで「ゲーム」いきましょう。

## ゲーム

---

1997年アメリカ映画

監督 デビッド・フィンチャー

主演 マイケル・ダグラス、ショーン・ペン、デボラ・カーラ・アンガー

昨日の「危険な情事」からマイケル・ダグラスさまつながりで、「ゲーム」。

この記事書くにあたって、マイケル・ダグラスさまとデビッド・フィンチャーさまのフィルモグラフィ調べましたが、いやあ、二人とも素晴らしい仕事しております。

数珠つなぎお休みしてひたすらこの二人の仕事をご紹介しようかなって思うくらいです。

さて「ゲーム」でございます。

マイケル・ダグラスさまが演ずるのは大富豪です。しかしかなり性格が悪い。

「三人のゴースト」のビル・マーレイさま系のひねくれ大富豪でございます。

その彼にプレゼントが贈られます。弟のショーン・ペンさまからのプレゼント。

それは「ゲーム」の招待状なわけです。「ゲーム」の内容は一切知らされない。

ゲームとやらが開始されていることだけはわかるわけですが、そのゲームってなんやねん、みたいな話。

謎のゲームが進行しているようだが、本人には自分のまわりで起こっていることのどこからどこまでがゲームなのかがわからないというイライラ系のサスペンスが進行していきます。

そしてクライマックスではとんでもない悲劇が起こってしまいます。

しかししかし...とんでもないドンデン返し。

しかしドンデン返しがあることを説明してしまえば面白くないので、今日はタイトルに若干ネタバレと書きましたです。

サスペンス、スリル、謎解き、そして最後は驚きの結末。

こんな着地点があるんだ、ととてもびっくりした一作です。

デビット・フィンチャー監督ものだってことでもかなり構えて見ていましたが、逆の意味で予想外でしたね。

次回の数珠つなぎはデビッド・フィンチャー監督特集でまいりたいと思います。

でもしかし。その前にオリバー・ストーン監督の「プラトーン」まいります。

元の映画ブログの紹介順なんだけど。どんな映画がどんな順番で出てくるのかわからない感じ、ようございませよ？

## プラトーン

---

1986年アメリカ映画

監督 オリバー・ストーン

主演 チャーリー・シーン、ウィレム・デフォー、トム・ベレンジャー

ベトナム戦争を描いたオリバー・ストーン監督の傑作。

新兵チャーリー・シーンさまの目を通して、アメリカにとって悲惨で最悪だったベトナムの惨状を丁寧に描写します。

オリバー・ストーン監督自身も出征経験があるとのこと。

そうでないこんなとんでもない映像は作れませんですよ。

クライマックス、爆撃でできた窪みに累々と死体が転がっている描写がありました。

ベトナム戦争経験者の現風景としてこんなイメージが刷り込まれているのかもしれませんが。

チャーリー・シーンさまが配属された部隊はトム・ベレンジャーさま演ずるバーンズ軍曹とウィレム・デフォーさま演ずるエリアズ軍曹がいがみあっています。

強引で力強く、兵士たちのヒーローでもあるバーンズ。

ヒューマニストであり、それでいてマリファナに溺れている人間味あふれるエリアズ。

戦いかたでたびたび衝突する二人の亀裂は、ベトコンへの協力が疑われる現地民への対応をめぐる決定的なものとなります。敵軍の情報を得るために捕虜を殺すことも辞さないバーンズ。それに反発し、軍に告発すると息まくエリアズ。

この対立が悲劇を招く。次第に悪化していく情勢。

不利な情勢につけこんで、バーンズはエリアズに銃口を向ける。

バーンズに撃たれながらも生きていたエリアズ。逃げる敵兵に囲まれ、背後から何発も撃たれて絶命します。

それを退却するへりからただ見ることしかできない戦友たち。どうしようもない戦争の現実がここにあります。

戦況はさらにさらに悲惨なものになります。部隊ごと全滅の危機。

味方兵士がどんどん死んでいく。

極限状況でそれぞれがどう行動するのか。

それが生死を分けることになります。とつてもブルーになる映画。

しかしそれが現実にあった戦争をもとにしているから余計に救いが無い。

このようなとんでもない戦争があった事実はやはり受け入れなければならないのだろうと思います。

今回はSF。「インビジブル」です。

## インビジブル

---

2000年アメリカ映画

監督 ポール・バーホーベン

主演 エリザベス・シュー、ケビン・ベーコン、ジョシュ・ブローリン

こいつはまたとんでもない作品です。

透明人間ものが、SF X技術の革新的飛躍によってこんなに恐くて面白い映画になりました。

監督のバーホーベンさまは「スターシップ・トゥルーパーズ」だとか「氷の微笑」とかすごい映像を撮っております。

身体が次第に消えていくとんでもない映像はインパクトたっぷり。

天才科学者ベーコンさま。

彼は猿を透明化する実験に成功。

研究成果をあせった彼は、自らにその新薬を投与します。

しかし透明化まではしたものの、元に戻れなくなってしまったからさあ大変。

やがて彼は女性にいたずらをしたりしますが、それだけですむはずはないですね。

誰にも見られずに何でもできたら、さあどうするって話です。

私はねえ、あれしてこれして、ナニしてソレして。

って考えてたら、ほとんどやることはベーコンさま演ずる科学者セバスチャンといっしょだったりして。

っていうわかりやすい行動を起こす天才科学者さんです。

やっぱり普通の人考えるような形で悪事はエスカレート。

こんな科学者の末路は、ご想像の通りでございます。

SF Xがとてもよくできているので、物語や人物造形のまずさが助けられています。

もう少し主人公の描きこみをしっかりしたらもっと面白くなったと思うんですが。

ちなみにこの作品の原題は「HOLLOW MAN」。「インビジブル」ってどこからでてきたんでしょうか。

次回は「エボリューション」をご紹介します。

## エボリューション

---

2001年アメリカ映画

監督 アイバン・ライトマン

主演 デビッド・ドゥカブニー、ジュリアン・ムーア、オーランド・ジョーンズ、ショーン・ウィリアム・スコット

今日はSF X・SFコメディの「エボリューション」。ご機嫌な映画ですよ。

アリゾナ州の砂漠に隕石が落下します。

生物学者ドゥカブニーさまと地質学者のジョーンズさまは、そこで採取した液体から地球上の生物とは異なる塩基をもつDNAを発見します。

再び調査のため現場を訪れた二人。しかしそこには博士ムーアさま率いる軍の調査隊。二人は軍に追い払われてしまいます。

さて詳細な調査の結果、そのDNAは地上の生物の数十、数百、いや数千世紀分の進化を数時間でしてしまうようなとんでもないDNAでございました。ドゥカブニーさま、DNAの危険性をムーアさまに注意しますが、聞き入れてもらえません。

単細胞だった生物はヒルのような生き物から虫状になり、やがて爬虫類から両生類、翼竜、やがて類人猿へと進化。

調査を行う過程で、当初軍の意向に沿って行動していたムーアさまは次第にドゥカブニーさまに同調するような立場となっていきます。

DNAの進化を恐れた軍は、隕石と新生物の調査を打ち切り、殲滅という強攻策を実施しようとしています。

「あーあ」ってな感じで実験室に戻る博士たちですが、偶然、エイリアンは炎に触れると爆発的な速度で増殖することがわかって全員大慌て。

というのも、軍はナパーム弾を使用して隕石ごとエイリアンを焼き払おうと考えていたからです。

博士たちの苦労も空しく、エイリアンは巨大化して大暴れ。

地球の命運は博士たちの行動に委ねられることになってしまいます。

「Xファイル」のドゥカブニーさまと「ハンニバル」のムーアさま。

どちらもヘラヘラ笑えない役柄だったせいか、彼らのコメディはけっこう新鮮。それを見るだけでも何か珍しいものを見たような気になるのは私だけでしょうか。

ちなみに途中でかかるご機嫌なナンバーはワイルドチェリーの「プレイ・ザット・ファンキー・ミュージック」。この曲大好きです。

## フラットライナーズ

---

1990年アメリカ映画

監督 ジョエル・シュマッカー

製作総指揮 マイケル・ダグラス

主演 キーファー・サザーランド、ジュリア・ロバーツ、ケビン・ベーコン、ウィリアム・ボールドウィン

製作総指揮、マイケル・ダグラスさまだから数珠つなぎの一本に入れてもいいのですが。

物語冒頭、キーファー・サザーランドさまが登場、「今日は死ぬにはいい日だ」とつぶやきます。

。

この映画の作品世界を象徴するような場面です。

サザーランドさま、ロバーツさま、ベーコンさま、ボールドウィンさまとあともう一人。この五人は医学生。

ただ、ベーコンさまは医学生のくせに救急患者を治療したりして停学処分になっています。

サザーランドさまは臨死体験実験を計画しています。

「哲学も宗教もダメになった今、死後の世界を解明できるのは科学だけだ」そう言う彼は、強制的に心停止状態をつくりだし、その後蘇生させることによって死後の世界を覗こうとします。

医学生たちは最初の実験で臨死体験に成功したサザーランドさまに続き、次々と臨死を体験します。

しかあし。みんな連れてきちゃうわけですよ。死後の世界から。いろいろなものを。

こう書くとほとんどホラーみたいな印象をもたれると思いますが、違うんですよ。

それぞれの学生が心の中にもつ罪の意識みたいなものが幻となって責めつけるわけでございます。

。

それを克服する方法は一つしかない。罪の意識そのものを消さなければならない。

少年時代に女の子に怪我をさせた罪の意識に責めつづけられていた学生は成長した本人に謝りに行ったりとか。

しかししかし。謝る相手が死んでいたらどうするんだよ、謝れねえじゃねえかって自暴自棄になる学生が一人。

罪の意識から開放されるために彼が選んだ方法とは...

すごく面白かったのに、何故かとても評価の低い作品。

どうしてなんだろう。

確かにどんよりはしているんだけど。そんなに悪くはないです。むしろ大好きな世界。

当時若手だった主演グループもみんな頑張っております。

とりあえず見ていただきたいと思う一本です。

さてさて、次回は数珠つなぎに戻ります。「ゲーム」のデビッド・フィンチャー監督の出世作「セブン」をご紹介します。

## セブン

---

1995年アメリカ映画

監督 デビッド・フィンチャー

主演 ブラッド・ピット、モーガン・フリーマン、ケビン・スペイシー

デビッド・フィンチャー監督を大人気映像作家に押し上げた傑作。

大抜擢をうけた「エイリアン3」でみせた宗教観をSFからサスペンスにフィールドを移し、とても面白い映画を作られましたです。

聖書に書かれている「七つの大罪」。その罪を模した殺人が起こっていきます。

大食、強欲、色情、嫉妬、などなど。それぞれの被害者は、たとえば「大食」だと、ごっつい太った人が、銃か何かで脅されながらひたすら食べつづけて死んだ、みたいな殺されかたをするわけでございます。

この事件を捜査するのがブラッド・ピットさまとモーガン・フリーマンさま。

わずかな手がかりを追って二人は捜査を進めます。そんな二人の目の前にいきなり自首してくる犯人。

不敵な余裕を見せています。しかしその時点で死体は五つ。

犯人は発見されていない第六の被害者の場所に案内すると言います。

そして自分を「その場所」に連行する者としてピットさまを指名します。

どういふこっちゃ。

そういうこっちゃ。

犯人が自首してくるまでにとんでもない伏線があります。それだけ見逃さないようにね。

ミステリアスな作品構造。ムードたっぷりの雰囲気。充実の演技陣。

しかししかし。ラストがちょい弱いかな。

というのも結末読めてしましまして。

でも読めていてもひっぱっていける演出はさすがですね。

そういえばケビン・スペイシーさまが出てたこと、気がついてなかったです。

次回の数珠つなぎ。デビッド・フィンチャー監督の大抜擢作品、「エイリアン3」をご紹介します。



## エイリアン 3

---

1992年アメリカ映画

監督 デビッド・フィンチャー

主演 シガニー・ウィーバー、チャールズ・ダンス、ランス・ヘンリクセン

当時無名だったデビッド・フィンチャーさまが監督された作品です。

フィンチャー監督には悪いですが、敵が悪すぎました。

第一作のリドリー・スコット監督は「エイリアン」の演出で大ブレイクしまして、その後「ブレードランナー」「ブラック・レイン」「G.I.ジェーン」「ハンニバル」など、面白い作品を撮り続けている監督。

第一作は有利なんですよ。みんなエイリアンのこと知らないし。

で、第二作はジェームス・キャメロン監督が撮りました。大バトルアクション大作になりましたね。

そして第三作。どんより重い。フィンチャー監督の後の作品につながるような重くて暗い作品世界。

前作で生き残ったリプリー＝ウィーバーさまと少女ニュート。冷凍睡眠の二人を乗せたシャトルは囚人惑星に墜落、前作でリプリーが命懸けで守った少女はあっけなく死んじゃいます。

こういう強引な設定変更、「リング2」みたい。「らせん」というか。

囚人惑星だから武器なんかない。そこへきてリプリーの乗ったシャトルにエイリアンが乗ったもんだからさあ大変。

しかもしかも、リプリーの身体の中にはエイリアンの幼生がいる。

はーっ、ショック～、ショーク！

なんだか宗教的な気高さすら漂う作品。とっても微妙な世界なんで、この作品はシリーズの中で最も賛否がわかれているようですね。

私はめっちゃ単純な男なんで、やっぱりうおおおおっとか言いながら見られる2が一番好きです。

次はデビッド・フィンチャー監督作品「パニック・ルーム」のご紹介です。

## パニック・ルーム

---

1995年アメリカ映画

監督 デビッド・フィンチャー

主演 ジョディ・フォスター、フォレスト・ウィテカー、クリステン・スチュワート。なんとニコール・キッドマンがノンクレジットで声の出演

デビッド・フィンチャー監督も、この作品の頃には円熟した演出を見せるようになってきました。

「エイリアン3」「セブン」「ゲーム」のような押しの強さが消え、まろやかな映像を撮っております。

言い方を変えると、個性が弱まったってことです。

「パニック・ルーム」っていうのは、緊急避難用の小部屋のこと。

寝室の本棚の裏とかに出入り口があって、そこに逃げ込むとそこに自分達が隠れていることがわからない。

しかも室内からは外部の様子がモニターできる。

電話も装備されている。こんな「パニック・ルーム」がある豪邸を購入し、娘と引っ越してきたのがジョディ・フォスターさま。

引越し当日、疲れ果てて寝ております。

そこに賊が侵入してくる。何せ引越し当日のことでございます。「パニック・ルーム」の中の電話回線はまだつながっていない。警備会社の監視システムも準備できていない。

しかし賊の侵入に気付いたフォスターと娘は、パニック・ルームに逃げ込みます。

こうなるとパニックルームの存在はむしろ微妙なものになります。

外部との連絡はとれない。逃げ込まれたところを見られてしまったので、賊は出入り口の前から動かない。

賊の目的はどうやらパニック・ルームの中にあるらしい。

どうやら豪邸の前の持ち主が悪人さんで、そこにとんでもない置き土産をしているらしいことがわかりますが、部屋にこもっているフォスターさまはそのことを知らないわけです。

完璧なパニックルーム。

その部屋の仕掛けが完璧であればあるほど事態はややこしい方向に進みます。果たして二人の運命やいかに。

ジョディ・フォスターさまいいですね。「ダウントウン物語」や「タクシー・ドライバー」のころはまだまだ子供だったのに。

ってことは私も同じように年とったんだなあ。

ジョディ・フォスターさまってほとんど同世代だから。

## サドン・デス

---

1995年アメリカ映画

監督 ピーター・ハイアムズ

主演 ジャン・クロード・ヴァン・ダム、パワーズ・ブース、レイモンド・J・バリュー、ホイットニー・ライト

この映画の監督、ピーターハイアムズさまは私のお気に入りの監督さんでございます。

一時期、ハイアムズ監督はヴァン・ダムさまと組んで面白い作品を撮っておりました。これはそんな時期の一本。

ヴァン・ダムさまは元消防士。

妻と別れて子供達と離れて暮らしています。

業務中の事故がもとで職を離れ、今はスタジアムの警備員をやっております。

そんなヴァン・ダムさま、スタジアムで行われるアイスホッケーの試合に子供たちえを招待するんですな。

しかしその日、スタジアムのVIPルームがテロリストに占拠されてしまいます。

このテロリストを演ずるのが「ダブル・ボーダー」で麻薬王を演じていたパワーズブースさま。びっくりしちゃいました。物語はブースさま一味とヴァン・ダムさまの戦いを軸に描かれます。

ヴァン・ダムさま、強い。とっても強い。

こんなに強い消防士そうそういないでしょうなあ。

ブースさまはVIPルームの要人を人質に大金を入手しようとしている。人質の命だけではなく、会場のあちこちに爆弾が仕掛けてあって、そいつの時限装置を解除してまわるヴァン・ダム。ここいらの構造は「ダイ・ハード」にとっても似ております。

そしてこの作品もやっぱり、ラストの対決にむけて物語がひたすら進んでいくことになります。監督のピーター・ハイアムズさまはもともと撮影屋さんだったようで、印象的なカメラワークがいたるところにでてきます。

それを見るだけで十分楽しめます。

とにかく職人的な監督さんなんで、いろんな作品を演出されてますが、かなり上質な娯楽作品に仕上がっています。

さて次回は「スターウォーズ・エピソード2・クローンの攻撃」をご紹介します。

## スターウォーズ・エピソード2・クローンの攻撃

---

2002年アメリカ映画

監督 ジョージ・ルーカス

主演 ユアン・マクレガー、ナタリー・ポートマン、ヘイデン・クリステンセン、クリストファー・リー、サミュエル・L・ジャクソン

スターウォーズシリーズの第5作目。エピソード順では二作目にあたります。

前作で女王だったパドメ＝ナタリー・ポートマンさまは女王の任期を終え、議員として政治の場に残っています。

その彼女の命を狙う動きがある。ヨーダらジェダイの騎士たちは彼女に護衛をつけるわけです。

その護衛がオビワン＝マクレガーさまと、アナキン＝クリステンセンさま。

二人のジェダイ騎士の活躍によって暗殺は未然に防がれます。暗殺者の残した手がかりを追うオビワン。彼はある惑星でアンドロイド兵の量産工場を発見、しかし捕らえられてしまいます。

彼を助けにいったアナキンとパドメも捕らえられてしまう。

マスター・ウインドウ＝サミュエル・L・ジャクソンさまらジェダイ騎士団は三人の救出に向かいます...

SFXにしても何にしても、時代を経るにつれて完成度が増していきますですね。旧三部作とエピソード1～3を見比べると、SFX技術の差は歴然でございます。

これだけはしかたないですね。今度機会があったらエピソード1から時代順に見直そうかなって思っています。

2に関して言えば、物語の構成もよくできているし、ハラハラドキドキの連続。

シリーズで一番好きな作品です。

次回は「ペリカン文書」をご紹介します。

1993年アメリカ映画

監督 アラン・A・パクラ

主演 ジュリア・ロバーツ、デンゼル・ワシントン、サム・シェパード、ジョン・リスゴー

今回の記事は若干ネタバレです。ご注意ください。

ジョン・グリシャムさま原作のサスペンスの映画化です。

ジョン・グリシャムさまといえば「ファーム」「依頼人」など、やたら面白い作品を発表し続けているヒットメーカーです。

この映画もやたら面白い。

最高裁判事が謎の死をとげます。

女子大生ロバーツさまはその事件の謎を推理した論文を書きます。

しかししかし。それ以来彼女の周囲で事件が起こる。

ここまで書けばわかると思いますが、その論文は最高裁判事を謀殺した犯人にとって都合の悪い内容だったわけで。

ってことはそういうことで。

そのものズバリだったわけです、その論文。

で、犯人にしてみれば、その論文を読んだ人間は危険でしかたない。

さらにさらにその論文を書いた人間はもっと危険。

彼女に黒幕がいるとしたら、もっともっと危険。

犯人グループはロバーツの後ろに誰かがいるのではないかと、そういう攻めかたもしてきます。

こんな女にあれほど危険な論文など書けるわけないってことでしょうか。

このストーリーがひらすらジュリア・ロバーツさま視線で描かれます。

ってことはさっき書いたような筋書きが少しずつ明かされていくサスペンス。

かなり楽しめると思います。

次回はなかり懐かしい映画。

テレンス・ヤング監督の「レッド・サン」です。

## レッド・サン

---

1971年フランス映画

監督 テレンス・ヤング

主演 チャールズ・ブロンソン、ウルスラ・アンドレス、三船敏郎、アラン・ドロ

当時大人気だったアメリカのチャールズ・ブロンソンさま、フランスのアラン・ドロ

ンさまに加えて世界の三船さまがご出演でございます。んで監督は初期007や「アマゾネス」のテレンス・ヤングさま。作品的にドロ

ンさまは悪役。アンドレスさまもあんまり目立つ役ではないです

から、三船さま・ブロンソンさまの映画です。こいつは。

ブロンソンさまとドロ

ンさまは列車強盗。

彼らが襲った列車にたまたま乗っていたのが日本からの大使。ドロ

ンさまは「帝からアメリカ大

統領への献上品の刀」を奪って逃げます。強盗の途中でドロ

ンさまとブロンソンさまは仲間割れ

。というかドロ

ンさまが裏切ります。ブロンソンさまはドロ

ンさまの手下に爆弾を投げつけられ

、倒れていたところを日本チームに捕らえられる。

この刀の護衛役で、刀を取り返す任につくのが三船さまでございます。

捕らえられたブロンソンさまは強制的に刀奪還の案内役を命ぜられる。で、ドロ

ンさまを追うこ

とになります。

二人でちんたらドロ

ンさまを追う。途中、分け前をもらって分かれたドロ

ンさまの手下なんかと

出くわしたりしながら、三船さまブロンソンさまは荒野を進む。

娼婦宿でドロ

ンさまの女、アンドレスさまを拉致。ブロンソンさまはアンドレスさまの身柄と引

き換えに「自分の分け前」と「献上品の刀」を返すようドロ

ンさまの手下に要求します。

取引場所は廃屋となった教会。ああしかしやっぱり簡単にはいかない。教会はネイティブアメリ

カンの奇襲をうけてしまいます。さあどうなるか。

この物語展開で、ドロ

ンさまが最後まで生き残るわけではないし、三船さまが無事にお役目を果た

すわけもない。

となるときっとこうなるだろうなあと思ったとおりの結末で、ある意味清々しいです。

途中、ネイティブアメリカンにつかまったアンドレスさまが拷問を受ける場面がありまして、そ

の場面で「濡れ革」ってのがでてきました。

革を濡らして首にきちきちに巻く。そのまま炎天下にほったらかしにしてたら、乾くにつれて革

が縮み、じわじわ首がしめられていくって拷問です。

悶えるアンドレスさまにオーバーラップする太陽。おおレッドサン。ほんでレッドサンかいな。

アンドレスさまが三角木馬で拷問されたら「三角木馬」ってタイトルになったんでしょうか。

んなわけないやろ。

次回は韓国映画の傑作、「シルミド」です。

## シルミド

---

2003年韓国映画

監督 カン・ウソク

主演 ソル・ギョング、アン・ソンギ、ホ・ジュノ、チョン・ジョエン、イム・ウォニ、カン・ソンジン、カン・シニル

衝撃の問題作ってのはこういう映画のことを言うのでしょうか。

シルミドってのは島の名前。前北朝鮮最高指導者・金日成（キムイルソン）の暗殺計画をめぐる韓国684特攻隊の反乱を実話に基づいて描く問題作。

韓国で「ある計画」のために死刑囚たちが集められます。彼らが集められる島が「シルミド島」です。彼らは金日成を暗殺する部隊として命がけの教育を受けることになります。最初はおめごとばかり起こしていた寄せ集め部隊。実際に仲間を失いながら訓練を重ねる二年のうちに、彼らは驚くべき成長をとげ、精鋭暗殺者部隊が誕生します。

しかし部隊が目的遂行のため北朝鮮に出発するまさにそのとき、作戦の中止が決定されます。延期ではなく中止。こうなるとこの精鋭部隊の存在そのものが邪魔になってくるわけです。この部隊を作った諜報部にとっては。

彼らは韓国の同胞たちに抹殺されそうになりますが、その計画を察知した部隊は、武装蜂起するわけです。

すごくよくできたストーリー。これが実話ということに驚かされます。この作品の映像化にはかなりの妨害や脅迫なんかがあったようですね。

訓練兵同士の友情。訓練兵と教育兵との友情。司令官と訓練兵との友情。友情、友情、友情。涙ちょちょ切れませ。

物語後半、暗殺者訓練兵は武装蜂起を決め、自分達の教育兵を殺すことを選択します。その頃、教育兵は訓練兵を殺す命令を受ける。

やはりそれぞれに思うことがある。二年間寝食を共にするわけでもんね。相手を殺す選択もある。手元が狂ったふりをして相手を逃がす選択もある。相手を撃ち、そのあと死体となった相手の傷口を押さえながら、いつまでもそこでその遺体を抱いているという選択もある。あまりに哀しい友情です。

ラストはラストで泣かせてくれます。日本人って、こういう玉砕系の物語好きですよ。田原坂とか白虎隊とかひめゆりの塔とか特攻隊とか。

この映画の主人公たちも、逃亡ではなく、最後は任務遂行＝玉砕の道を選びます。しかし計画半ばにして進退窮まり...

なんかすげえ泣けたってことは私も日本人なんだなあ。

次回は「グレムリン」のご紹介です。

## グレムリン

---

1984年アメリカ映画

監督 ジョー・ダンテ

主演 ザック・ギャリガン、フィービー・ケイツ、コリー・フェルドマン

「ハウリング」で認められたジョー・ダンテ監督が、「トワイライト・ゾーン」の翌年に撮った映画です。作風はどっちか作風は「トワイライト・ゾーン」に近いかな。優しいけど怖い映画。

有名な映画なんで、ほとんどの人があらすじ知っていると思いますが、おさらいです。

大学生ギャリガンさま。なんかぱっとしない系の子です。彼女がケイツさま。

ギャリガンさまのお父さんはわけのわからない、どう見ても使い道のないようなグッズを開発している発明家。この発明家父さんが、ギャリガンさまへのクリスマスプレゼントを探してチャイナタウンへ行き、不思議な生き物を手に入れます。これが「モグワイ」と呼ばれる生き物。

ギャリガンさま一家はこいつに「ギズモ」と名前をつけて飼いはじめます。この生き物を飼う約束は三つ。「決して日光に当てないこと。水につけないこと。夜中十二時を過ぎてからは食べ物を与えないこと」。

お約束ですが、このルールがひとつずつ破られていって、えらいことになるわけですわ。

とりあえず水につけると増殖する。光に当てると死んでしまう。そしてこいつは夜中に食物を与えると、かわゆいモグワイくんから子鬼（グレムリン）のような怪物に変身してしまうってえシロモノだったわけです。

夜中に物を食べ、グレムリンに変身したこいつらは水に飛び込み、大增殖。夜の街を暴れ回ってさあ大変。

とても面白いアニマル(?)ホラーでございました。

次回は久々数珠つなぎ。マイケル・ダグラスさま特集で「ダイヤルM」いきましょう。



## ダイヤルM

---

1998年アメリカ映画

監督 アンドリュー・デイビス

主演 マイケル・ダグラス、グウィネス・パルトロー、ヴィゴ・モーテンセン

久々数珠つなぎでございます。ここまでは「ゲーム」のデビッドフィンチャー監督の作品をちょこちょこっとご紹介させていただきました。今日からマイケル・ダグラスさまのお仕事をご紹介しますです。

私がマイケル・ダグラスのことを知ったのは小学生のころでした。「刑事コロンボ」とか「警部マックロード」「FBI」なんかやってた時期です。「ニューヨーク捜査線」みたいなタイトルの連続ドラマに主演しておりました。

カール・マルデンさまとの競演でした。若手時代ですよ。

そんなマイケル・ダグラスさま、今ではすっかり大御所です。さて「ダイヤルM」。

元ネタは有名なヒッチコックさまの映画。さらにその原作はフレデリック・ノットさまの舞台劇です。

ダグラスさまは妻の殺害を計画しております。その計画がどんな流れで遂行されるか、そしてどんな予期せぬトラブルが発生するのか。そして事態はどのように動くのか。

けっこう緊迫感あふれた作品に仕上がっております。

しかし惜しむらくは原作がフレデリック・ノットさまで、ヒッチコックさまの大傑作のリメイクだってことです。

もう、ヒッチコックさまの作品を越えることはほとんど不可能。それくらい謎解きが鮮やかだったし、面白かった。

本作は結末をかなり変えています。ヒッチコックさま作品の推理小説的ともいえそうな結末から、サスペンス系のラストに変わっておりますが、よかったのか悪かったのか。

さてさて、今回はアニメ作品。

「ポケットモンスターアドバンスジェネレーション・烈空の訪問者・デオキシス」です。

## 劇場版ポケットモンスターアドバンスジェネレーション・烈空の訪問者デオキシス

---

2004年ピカチュウプロジェクト

監督 湯山邦彦

声の主演 松本梨香、大谷育江、日高のり子、うえだゆうじ

アニメ作品でございます。

ポケットモンスターってみんなどの程度知識あるんでしょうか。テレビ東京で高視聴率を維持しつつづけている怪物番組の映画化。ポケットモンスターという不思議な生物のいる世界での物語。なんかこの物語の作品世界って説明しはじめるとひたすら長くなります。

幻のポケモンってのがいる。空にいる奴にレックウザってのがおりまして、そいつが人間世界にやってきて大暴れする。レックウザってのは宇宙人みたいな生物を探しているわけですね。その生物がデオキシスって名前です。デオキシスとレックウザが大バトルを繰り広げます。でもデオキシスってやつは人間界に何か用事があるらしく、なかなか街を離れようとしません。

それだけに被害は拡大していくばかり。デオキシスの目的は何なのでしょう。ってデオキシス視点であらすじ書きましたが、実際の物語はアニメと同じ主人公サトシ少年の目線で進行します

。

私、なんだかんだいいながらポケモン映画けっこう見てたりします。

ポケモン映画では、最初の作品「ミュウツーの逆襲」がとにかくよくできていたので、その他の作品の採点は辛くなります。どの作品も面白く、こども向けアニメとしては一定の水準はクリアできているのですが、第一作が傑作すぎたので、どの作品もちょっと弱いように感じてしまいます。

今回は「タワーリング・インフェルノ」です。

## タワーリング・インフェルノ

---

1974年アメリカ映画

監督 ジョン・ギラーミン

主演 ポール・ニューマン、スティーヴ・マックウィーン、ウィリアム・ホールデン、ロバート・ヴォーン、リチャード・チェンバレン、ロバート・ワグナー、フレッド・アステア、ジェニファー・ジョーンズ、アンソニー・パーキンス

災害パニックものの大傑作。そもそもは同時期にかたやニューマンさま、かたやマックウィーンさまの主演で二本のビル火災映画が企画されていたのですが、それを合作にしておとうとワグナーとフォックスが大英断を下して完成した傑作。登場人物を羅列するだけでスペースいっぱいになる勢いの豪華キャストです。

社長ウィリアム・ホールデンさまが「グラスタワー」という超高層ビルを建てます。設計はポール・ニューマンさま。しかし社長の義理の息子、リチャード・チェンバレンさまが手抜き工事を指示したため、ビルのあちこちの配電盤から出火。

折りしもビルでは落成披露パーティーが開かれていて、ロバート・ヴォーンさまだとかアンソニー・パーキンスさまだとかロバート・ワグナーさまだとかフレッド・アステアさまだとかジェニファー・ジョーンズさまだとかが火災に巻き込まれてしまいます。

消火活動に取り組むのはマックウィーンさま率いる消防チーム。しかし高層すぎて地上からの消火活動は不可能。

手抜き工事がひどくて非常消火のシステムも機能していない。

やむを得ず消防はビル屋上の貯水槽を爆破して消火することになりますが...

火攻め水攻め。スペクタクルのフルコースでございます。超豪華キャスト集結で、もっと適当な描かれかたするかなとも思われた配役陣にもそれぞれにおいしいところが用意されており、ドラマとしても丁寧に作られています。

かなり長い映画ですが、面白いので長さを感じさせないです。必見の超大作でございますぞ。

次回は「ブルースブラザーズ」でございます。

## ブルース・ブラザーズ

---

1980年アメリカ映画

監督 ジョン・ランディス

主演 ジョン・ベルーシ、ダン・エイクロイド、レイ・チャールズ、ジェームス・ブラウン

かなり昔に見た映画でございます。

ベルーシさま若いし元気。エイクロイドさまも若い。二人は孤児院で育った義兄弟。ロックンロール好き。

その孤児院が閉園の危機にさらされ、二人はロックンロールでひとヤマあてて孤児院を再建しようとする。

このメンバーがけっこう豪華です。日本映画だと、それっぽい役者を配するところですが、やっぱりロックンロールの国ですねえ。現役バリバリのミュージシャンを集めてバックバンド役をやらせたりします。ギタリスト・スティーブクロッパーさまが実は超有名なメンフィスギターの名手だってあとから聞きまして、驚いた覚えがあります。

そんな本物のロックをバックに、ベルーシさま・エイクロイドさま、歌う歌う。踊る踊る。

ラストには警察との追っかけっこまであります。楽しくて面白い映画です。ちなみにコーンさんとトムさんのバブルガムブラザーズのデビューしたころのパフォーマンスは、そのほとんどがブルース・ブラザーズからのいただきものらしい。ってことは音楽ファンのほとんどの人が知っている有名な話でござんすね。

次回は「映画版ウルトラマンティガ・ファイナルオデッセイ」でございます。

## ウルトラマンティガ・ファイナルオデッセイ

---

2000年映画ウルトラマンティガ製作委員会・円谷プロ作品

監督 村石宏實

主演 長野 博、吉本多香美、高樹 滯、芳本美代子、川地民夫

平成ウルトラマンシリーズの最初のシリーズにして最高傑作。と、私が一方的に思っているウルトラマンティガ。

本作はテレビシリーズ「ティガ」と「ダイナ」の橋渡し役となるエピソードです。

そのそもティガは超古代遺跡から甦った巨人なわけです。シリーズ第一話で登場した「ゴルザ」「メルバ」最終回前後に登場した「メンジユラ」「ゾイガー」「ガタノゾーア」あたりの怪獣は、超古代生物です。

ティガは光の巨人。ガタノゾーアは闇の怪獣。ティガはこのガタノゾーアにやられて光の力を失い、こどもたちの光の力を得て復活、怪獣を倒す。

これが最終回のエピソード。しかし変身アイテム・スパークレンスは砂となって消え、ダイゴ＝長野さまはウルトラマンではなくなります。それから数年。ダイゴとレナ＝吉本さまは結婚間近。平和に暮らしております。そんなとき、超古代の遺跡が発掘され、そこからカーミラ＝芳本さま、ダーラム、ヒュドラの三体の巨人が復活。彼らは発掘現場付近に結界をはり、ダイゴの前に現れ再び変身せよとせまります。光を失ったダイゴは黒いティガとなる。

そしてそれが闇の世界をもたらすと、こういう話でございます。そして超古代のころはダイゴとカーミラは恋人同士だったとかの話をする。人類を助けたければ再び変身せよってなことを言う。

ダイゴはレナに再び必ず戻ると告げ、遺跡に向かう。吉本さま叫ぶ。「ダイゴおおおおおお」。

ウルトラセブン以来封印されていた、主役と女性隊員の恋愛再び。セブンが高く評価されているのと同様、二人の恋愛エピソードもポイント高い。

ドラマに深みを与えています。高樹さま＝イルマが超古代の巫女の末裔だったとか、超エネルギーマキシマオーバードライブだとか、ドラマでの設定もそのまま出てきますので、できれば予習をして見たほうがいいかも。

ちなみに次作「ダイナ」レギュラーの木之元 亮さま、布川敏和さま、つるの剛士さま、山田まりあさまらも「若き日の…」みたいな役で特別出演しております。

さてと。次回はフランシス・フォード・コッポラ監督の「レインメイカー」です。

## レインメーカー

---

1997年アメリカ映画

監督 フランシス・フォード・コッポラ

主演 マット・ディモン、クレア・デーンズ、ダニー・デビード、ジョン・ボイド、ミッキー・ローク、ロイ・シャイダー

あまり期待しないで見始めたのですが、けっこう面白かったです。「レインメーカー」ってのは弁護士を指す言葉だそうです。雨のようにお金を降らせるような仕事をするって意味らしい。途中、「うんと儲けて札束の雨を降らせようぜ」みたいな台詞がありましたが、どうやらその表現がタイトルになっているようです。ジョン・グリシャムさまの「原告弁護人」の映画化。ディモンさまは駆け出しの弁護士。というか物語途中で司法試験に合格するから、ロースクールを卒業して、法律事務所で実務の仕事をしながら法律の勉強してる若い衆ですわ。司法試験合格と事務所のボス、ロークさまが脱税やらで告発されるのが重なり、デビードさまとともに独立します。ディモンさまは保険会社を相手取っての保険金不正未払い事件で弁護士デビュー。その件と並行しながら彼自身が心ひかれる女性デーンズさまのDV事件への取り組みが描かれていきます。

保険会社の顧問弁護士がボイドさま。社長がシャイダーさま。おお、いぶし銀のようなキャスト。

コッポラ監督クラスになると、とんでもないところでとんでもない役者さんをポコッと使うから、油断できません。理想に燃える若い弁護士が、人間的に成長していく姿が描かれます。

ディモンさまがうまい。裁判が進行していくにつれ、だんだんと弁護士という仕事が板についていく様子が見事に表現されています。法廷シーンの緊迫感も素晴らしいし、原告被告どちらに有利に裁判が進行しているのかがとてもわかりやすく描かれています。なかなかの佳作。

しかし、ロイ・シャイダーさまにはさすがに気付きましたが、ミッキー・ロークさまにはぜんぜん気付かなかった。字幕だったらおそらく気付いただろうけど。声に特徴がある人なんで。エンドロールで名前みつけて、あわてて巻き戻してミッキー・ロークさま探しました。年とっちゃったんですね。よく考えたら私よりはるかに年上だもんなあ。

さて次回は邦画。「海猫」いきます。

## 海猫

---

2005年東映・テレビ朝日・「海猫」製作委員会作品

監督 森田芳光

主演 伊藤美咲、仲村トオル、佐藤浩一、ミムラ、三田佳子、白石加代子

突然婚約者に婚約解消を言い渡された女性、ミムラさま。

どうやら彼は亡くなった彼女の母（伊藤美咲さま）のことが原因で別れを決意したらしい。彼女は祖母三田佳子さまに母のことを聞きだします。物語は母の回想として進行します。

漁師町にお嫁にやってきた伊藤さま。夫は佐藤さま。その弟が仲村さま。

とりあえず佐藤さまと伊藤さま、します。まあ夫婦ですからね。するでしょう。粗野で純朴な夫。しかしあまりにも漁師イズムがこびりついております。船が苦手なのに夫婦での昆布漁を強制する夫。そこから夫婦生活の足並みが少しずつ乱れてきます。

そんな伊藤さまを優しくサポートするのが佐藤さまの弟、仲村さま。精神的に追い込まれている彼女に、「あなたの目は海猫そっくりだ」いやあ、ほろっときますわな、こんな言われたら。そんな弟の励ましもあって伊藤さまご懐妊、女兒を出産。育児・漁・昆布の加工。

伊藤さま、徐々に所帯じみてきます。仲村さまに「俺は嫌だ、アニキがあんたを抱いた」だとか言われて、ますます追い込まれていきますです。佐藤さまは佐藤さまで浮気してたりします。佐藤さま、します。何度も、します。

やがて伊藤さま、仲村さまに会いに行く。伊藤さまと仲村さま、します。んで佐藤さまと伊藤さま、します。

画面に美しく描かれる透明感あるエッチ。それがやがて「娘が婚約破棄されるような事件」に発展するわけです。

森田監督、こういう映画になるとすごく普通。「39」とか「黒い家」とか「模倣犯」とかでもこういうオーソドックスな演出すればいいのに。

ちなみに本作、R指定。十五歳以下はご家族とご覧くださって規制がかかっております。このR規制の基準ってよくわからないなあ。

エッチが映画のテーマになってたらこうなるんでしょうか。一般映画で、もっと強烈なエッチシーンいくらでもあるんですが。

さて次回は久々数珠つなぎ。マイケル・ダグラスさまつながり。

製作者としてのマイケル・ダグラスさまをご紹介。「フェイス・オフ」いきましょう。

1997年アメリカ映画

監督 ジョン・ウー

製作総指揮 マイケル・ダグラス

主演 ジョン・トラヴォルタ、ニコラス・ケイジ

数珠つなぎでございます。大御所マイケル・ダグラスさまの仕事を紹介するシリーズです。この映画、ジョン・ウーさまの作品としてひたすら有名でございますが、この作品の制作総指揮を担当したのがなんとマイケル・ダグラスさま。

プロデューサーとしてもいい仕事しますよね。

物語のあらすじを見た瞬間、なんじゃこりゃって思いましたが、実際に映像をみると、これがなかなかよくできてます。破天荒な設定ですが、説得力のある物語作りに成功しております。

ニコラス・ケイジさまは悪の権化。狙撃にテロに麻薬密売なんでもござれの悪のボス。トラヴォルタさまは刑事。

トラヴォルタさまは過去に最愛の子供をケイジさまに射殺されたという悲惨な過去をもっています。執念でケイジさまを追う刑事トラヴォルタさま。彼は遂にケイジさまの逮捕に成功します。さあここで警察はとんでもないことを考えます。捜査員をケイジさまに変装させ、刑務所に潜入。ケイジさまの部下に接触して、重要な捜査情報を聞き出す。この計画は最低限の関係者しか知らない極秘作戦。この捜査の担当に抜擢されたのはトラヴォルタさま。

憎きケイジさまの顔の皮膚を移植され、整形させられて刑務所に潜入。ここで計算違いが起こります。

逮捕時に瀕死の重傷を負い、生死の境を彷徨っていた「顔を剥がれた」ケイジさま、突然奇跡の蘇生。「トラヴォルタさま潜入プロジェクト」の関係者のほとんどを惨殺し、顔のない悪人ケイジさまは逆にトラヴォルタさまの顔を手に入れます。かくして刑事トラヴォルタさまは悪人ケイジさまの顔で刑務所に、悪人ケイジさまは刑事トラヴォルタさまの顔で警察官として闊歩することになります。

ケイジさまの顔のトラヴォルタさま、刑務所を脱獄。悪人ケイジさまとして悪の巣窟に見をよせることとなりますが...

さすがジョン・ウーさま。すげえ面白い映画です。お得意のガンアクションや決闘アクションも充実。ペキンパー監督ばりのスローモーション・バイオレンスシーンのバックに流れるのは「虹のかなたに」。すげえセンスです。撃ち合いの途中、障害物を隔てて敵と主人公が語り合うジョン・ウー監督作品お馴染みの場面。

今回の障害物は鏡。せえので打ち合いが再開。鏡ごしに撃ち合う二人。自分が銃を向けているのは鏡に映った自分の顔。しかしそれは本当は敵の顔。なんかすげえわかりにくい説明かもって心苦しいのですが、とりあえず見ていただければわかると思いますんで。是非是非ごらんくださいませ。



さて、明日のご紹介はアンジェリーナ・ジョリーさま主演の「トゥームレイダー」です。

## トゥームレイダー

---

2001年アメリカ映画

監督 サイモン・ウエスト

主演 アンジェリーナ・ジョリー、ジョン・ボイド、イアン・グレン、クリス・バリー、ノア・テイラー

「五千年に一度の惑星直列。そのときにトライアングルが呼び覚まされる。お前はその瞬間を目撃するんだ」娘にそう言い残して消息を絶った父。

それが冒険の始まりなわけですね。

アンジェリーナ・ジョリーさま演ずるのは、まあ言えば女性冒険家。

んで大富豪。父はボイドさま。この二人は実際に実の親子です。

惑星直列が始まったその日に、彼女の大邸宅の隠し部屋に置かれていた時計が動き始めます。その時計の中には不思議な飾りが隠されていました。そのことをある人物に相談したら、すぐに弁護士と名乗る男がコンタクトをとってきて、さらにその夜、特殊部隊一個小隊規模の賊が大邸宅に押し入り、時計の飾りが奪われます。

そして惑星直列の開始にあわせて届けられた父からの手紙。

どうやらその飾りは時を操り、想像もつかないほどの「力」を手にするのできる「トライアングル」を探す鍵になっているらしい。

父の手紙、そしてさらに書斎の古書に巧妙に隠されたもう一つの手紙。そこから謎を解き、カンボジアの奥地に完全武装で乗り込むジョリーさま。

ここからはとんでもないSF活劇がひたすら加速していくことになります。

女インディ・ジョーンズみたいなお話です。

やはり途中からとんでもない特撮活劇になります。

なんか中盤の雰囲気「シンドバッド黄金の航海」みたいになるのは舞台がカンボジアだからでしょうか。しかしアンジェリーナ・ジョリーさまのふとももいいです。

続編が楽しみですわ。

さてさて、次回は「ゴッドファーザーパート3」です。

## ゴッドファーザー PART III

---

1990年アメリカ映画

監督 フランシス・フォード・コッポラ

主演 アル・パチーノ、アンディ・ガルシア、ソフィア・コッポラ

歴史的名作、「ゴッドファーザー」の完結編となります。第一作・第二作はもうご紹介しました  
ですよ。

第三作だけがまだご紹介してなかったわけですが、こいつはちょい微妙な作品です。

第二作から二十年近く経ってから製作された第三作。なぜこんなに時間が経ってから第三作が映  
画化されたのかって話ですが、こんな噂がありまして。そもそもは二部作だったそうです。

で、コッポラさま、豪遊だとかで破産してしましまして。そんな借金返済のために制作された映  
画だったと、そんな噂でして。なんだい、借金のために作った映画なのかい？こいつは。

ま、いいか。

ってことで、この映画は第一作・第二作と同列に語ってはいけないと私は思っています。

冒頭はドン・マイケル・コルレオーネが永年の教会への寄付を称えられ、叙勲をうける場面から  
はじまります。

前作で子供だった娘はもう「女性」の年齢となっています。この娘をコッポラ監督の実の娘、  
ソフィア・コッポラさまが演じています。

教会への寄付を繰り返したりの善行をアピールしていますが、コルレオーネファミリーはやっぱ  
りマフィアでございまして。若く、勢いのあるファミリーの追い込みとかがあるわけです。新勢  
力の台頭といいますか。

そして自らの老いもある。ファミリーの今後を誰の手に託すのか、みたいな心配もしなければな  
らないわけです。そして主人公マイケルが心配した通り、第二作で崩壊しはじめていた「家族  
の絆」はますます崩れはじめ、「コルレオーネファミリー」そのものが崩壊をはじめます。そし  
て最後はとんでもなくブルーな結末です。

でもこれってコッポラファミリーそのものですよ。若い映画人たちに追い上げられ...って感  
じで、破産にまで追い込まれて。

なんかとっても哀しい気分になってしまう作品でしたです。

さて次回は大林宣彦監督の「ふたり」をご紹介します。

## ふたり

---

1991年ギャラック、ピーエスシー、NHKエンタープライズ作品

監督 大林宣彦

主演 石田ひかり、中嶋朋子、富司純子、尾美としのり

大林監督の「新尾道三部作」の一本。ちなみに「尾道三部作」は「転校生」「時をかける少女」「さびしんぼう」でございます、『新』のほうは、この「ふたり」が三部作に入っていることくらいしか知りません。

前の三部作は全て見ました。いずれ劣らぬ傑作。「転校生」は二回、「時をかける少女」は一回、「さびしんぼう」は二回、それぞれ確実に泣けるところがあります。この「ふたり」にも確実に泣けるところがある。いいですね。こういう映画。

石田さまは高校生。

演劇部所属。絵に描いたようなドジ子ちゃん。ある日彼女は、危ない奴に襲われてしまいます。

そんな彼女を助けたのは彼女の姉、中嶋さま。

よかったよかった。でもなんだか様子がおかしい。見ていてかみ合わないような違和感があって、その違和感はだんだん大きくなってきます。

でも映画の中の登場人物はその違和感をおかしいとは思っていない様子。

おやおや。石田さま、大学生尾美さまにデートに誘われます。

そのデートで中嶋さまとも知り合いの尾美さまに、石田さまは言います。

「姉は事故で亡くなりました」。ひええええ。

実は中嶋さまは事故で死んでいます。しかし石田さまは何かあるたびに姉が出てきてサポートしてくれていることに気づいています。あるとき、石田さまの呼びかけに中嶋さまは姿を現す。そこから石田さまは何かあるたびに中嶋さまに問いかけることになります。

文化祭がやってくる。姉が主役を演じた作品が再び演じられることになります。しかし石田さまは主役を演ずることはできず、舞台のスノコで雪を降らせる役。

ここで劇中劇の主題歌「草の想い」が歌われます。この歌がけっこう印象的で、大好きです。

CDレンタルしましたがな。

さてそんな「ふたり」にも別れのときがやってくるわけで。泣けまっせ。しっとり泣いていただきとうございます。

大林監督作品は大好きですね。

色彩的な個性が強いから、拒否反応示す人とかいるかもしれないですが。

尾道三部作改めて見ようかなって思っております。

今回は「スターゲイト」です。

## スターゲイト

---

1994年アメリカ映画

監督 ローランド・エメリッヒ

主演 カート・ラッセル、ジェームス・スペイダー、ジェイ・デビッドソン、ビブカリンド・フォース

けっこう記憶が鮮明だから、何度かビデオで見た作品だろうと思います。

でも詳細の設定がかなりあやふやだから、おそらく吹き替えなし字幕なしで原語で見たんだろうと思います。

そういう映画のみかたをしていた時期に見た作品なんでしょうなあ。時期でいうと「英語は絶対勉強するな」って本で英語を勉強していた時期です。

だから「多分」とか「恐らく」とかのノリで書きますので、ご容赦くださいませ。

えっと、砂漠で遺跡が発見されます。その中から巨大な円形の物体が現れます。オーパーツですな。円周には不思議な象形文字。その解読を命ぜられたのがジェームス・スペイダーさまでございます。彼はすごく短い時間でその文字を解読します。その物体は、別の宇宙につながる門「スターゲイト」だったわけです。軍が中心となって調査隊が結成されます。そのリーダーがカート・ラッセルさま。調査隊が戻れなくなるとは困るということで、天才言語学者スペイダーさまも同行することになります。

ゲートは外宇宙の惑星につながっています。そこは砂漠のピラミッドの中。そして彼らはまるで人間の現地の人々とコンタクトをとることになります。やがて現地の人々が「神」と恐れる生命体が現れます。金属製の鳥の顔を持ち、空を飛ぶ生命体。

スペイダーさまは現地の人と対話を試み、やがて少しずつ色々なことがわかってきます。アッと驚くその事実とは...

ってな話。

外宇宙の惑星にたどり着いたのにエイリアンが出てこないってどういうことよ、って思いながら見ていましたら、そんな疑問を全て払拭してくれるようなオイシイ設定が用意されておりました。やるじゃねえか。

SFXもけっこうよくできてるし、楽しめました。もう少し物語にひねりが効いているほうが好きですが。

さて次回は「ウォーターボーイズ」です。

## ウォーターボーイズ

---

2001年フジテレビ,アルタミラピクチャーズ・東宝・電通作品

監督 矢口史靖

主演 妻夫木 聡、玉木 宏、三浦哲郁、近藤公園、金子貴俊

男のシンクロ。実はこの作品のモデルになった埼玉の高校のドキュメントをかなり早い時期に見てましたので、この映画の設定そのものにはあまり驚かなかったです。

しょぼい水泳部のある高校。そこにシンクロ指導経験者の女性教諭が転任してきて、男子シンクロを学園祭でやりましょうって話になります。

リーダーの妻夫木さまが奮闘してメンバーを集め、とりあえず五人のメンバーが集まります。

妻夫木さまはこの時点で主役級。その後の大活躍は言うに及ばずですね。

玉木さまはその後ドラマ版「ウォーターボーイズ」、月九「ラストクリスマス」を足がかりに大スターになりましたし、金子さまはドラマ「ウォーターボーイズ2」、「あずみ」からいまではバラエティを中心に大活躍。そういう意味ではこの「ウォーターボーイズ」ってシリーズは、元気が良い系の若手俳優の登竜門みたいになっている感があります。「ごくせん」もそうですが。やっぱりラストのシンクロシーンは大迫力だし、とんでもなく感動できるインパクトがあります。

シンクロ指導は「水の道化師・トゥリトゥネス」というパフォーマンスグループを率いておられる不破 央さまです。この人の力量があっちはじめてこれだけの完成度をもったシンクロシーンが完成したんだろうと思います。

次回は「少林寺」をご紹介します。

## 少林寺

---

1982年香港映画

監督 チャン・シン・イエン

主演 ジェット・リー、ユエ・ハイ

香港武術トーナメント歴代のチャンピオンが総出演だそうです。

アクションシーンとかは豪快ですね。ブルース・リーさま、ジャッキー・チェンさまは別格としても、香港ものの「アクションのためのアクション」を見慣れていた私が久々に見た、本物の武道家のアクションです。

とりあえず「技術と実力に裏打ちされたアクション」って感じですよ。

本作がデビュー作にあたるジェット・リーさまも、当時は当然ながらワイヤーなんぞ使わずに、生身のアクションで頑張っておられます。

隋末期の中国でのお話。そらそやわな、少林寺の話ですから。

ジェット・リーさまの父は、将軍の暴虐と圧政に抵抗し殺されてしまいます。息子は命からがらそこから逃げ出し、少林寺に逃げ込みます。やがて彼は入門し、拳法の修行を積む。次第に少林寺の技を身に付けていくわけですね。ここらあたりで様々な技が紹介されます。虎拳、螳螂拳、鷲拳、酔拳などなど。

武器もいろいろ。紐の先に銛がついたような武器だとか、長い棒だとか、くねくね曲がる系の薄い刀だとか。それぞれ名前があるようですが、中国拳法の武器とか詳しくないし、唯一知ってる武器のサンセツコンも詳しいご紹介はパス。

さて、将軍が少林寺に攻め込んできます。攻め込んでくるまでにいろいろなエピソードがあるわけなんですが、とにかく攻めてくる。少林寺の修行僧たち、迎え撃つ。このクライマックスシーンがもお最高。

武術の達人が演ずるアクションですので、非常に技術的難易度の高いシーンの連発でございます。こういう系統の映画のお約束ですが、善が勝ち悪は滅びる。ちょいとほんのりほっとする場面なんかで物語は終わります。

ジェット・リーさま若いです。なんかすっげえ若くてかわいい顔してます。

思わぬ収穫でございました。

さて次回は「スターウォーズ・エピソード3・シスの復讐」です。

## スターウォーズ・エピソードIII・シスの復讐

---

2005年アメリカ映画

監督 ジョージ・ルーカス

主演 ユアン・マクレガー、ナタリー・ポートマン、ヘイデン・クリステンセン、イアン・マクダーミド、サミュエル・L・ジャクソン、クリストファー・リー

大人気シリーズの最終エピソードでございます。しかしながら前作までの物語展開を全て踏まえ、その上で後半三部作につなげなければならないって制約がありまして、なんともおさまりの悪いお話になってしまっております。

というか、このクラスの映画になると、ホームランでなければ納得できないですよ。二塁打でも三塁打でも満足できない。そういう意味では前作のエピソード2（クローンの攻撃）が場外ホームランだったので、となると前回と同程度のホームランでも不満が残る。しかたないですよ。

映画が始まるとすでに戦争が始まっております。前作での分離主義者＝ドロイド軍と共和国軍＝クローン軍の戦争。この戦争でクローン軍の指導者、パルパティーン議長（マクダーミドさま）が誘拐され、オビワン（マクレガーさま）とアナキン（クリステンセンさま）が救出に向かいます。そこで二人を待ち受けていたのはドロイド軍のグリーパス将軍とドゥークー伯爵（リーさま）。グリーパスは逃亡、アナキンはドゥークーを倒し、議長を救出します。この功績によってアナキンは議長と急接近。

ヨーダ（声・フランク・オズさま）、マスターウインドウ（ジャクソンさま）らジェダイ評議会はアナキンが政治利用されることを危惧しています。議長はアナキンにジェダイ評議会の内情を探れと言い、ジェダイ評議会は議長の様子をスパイし、報告せよと命じます。やがてそれがアナキンをダースベイダーに変えてしまうこととなります。

観客みんながアナキンがダースベイダーになってしまうことを知っています。そして旧三部作を見た人はアナキンの息子（ルーク）やオビワンが惑星タトゥイーンに住むことも知っています。ジェダイの騎士たちはヨーダとオビワンを除き、全滅することもわかっているわけです。でもあえてそういう観客が知っている部分を描かなければならないので、話が説明臭くなってしまいます。新三部作の完結にして旧三部作の序章。しかたないことかもしれません。

クライマックス、帝国軍成立から一気に加速する物語は見事。オビワンとアナキン、ヨーダと帝国皇帝のライトセーバーでの戦闘シーンは大興奮ものです。

ただ、前作のヨーダの戦闘シーンを見たときのインパクトには及ばなかったです。残念。

さて、次回はリュック・ベッソンさま製作・ジェット・リーさま主演の「キス・オブ・ドラゴン」のご紹介です。



## キス・オブ・ザ・ドラゴン

---

2001年アメリカ映画

監督 クリス・ナオン

アクション監督 コリー・ユエン

原案 ジェット・リー

製作・脚本 リュック・ベッソン

主演 ジェット・リー、ブリジット・フォンダ、チェッキー・カリョ

ジェット・リーさま主演の映画は無条件に見たくなります。同い年だし。

導入部がいかしてます。中国からパリにやってきた刑事リーさま。ホテルに入る。バーへ、さらに男性トイレに誘導され、そこでボディチェック。ボスが会いたがっていると言われ、ホテルの厨房へ。そこで狂ったように男を殴り続けるアブナイボス。これがカリョさま。

ここらでジェット・リーさまが刑事であることとか、彼がカリョさまに「協力」するためにパリにやってきたことが明かされます。カリョさまはそのホテルで何をしているかということ、中国人マフィアのような男のマーク。その中国人は部屋の外にボディガードを配しながらコールガールとエッチするような男。で、カリョさまのグループは男の部屋に数台の隠しカメラを設置して、録画したりしています。それぐらいきついマークがついているってことでしょうか。中国人マフィア、カメラの前でコールガールに刺されちゃいます。ボディガードを蹴散らし、部屋に飛び込むリーさま。しかし、彼からやや遅れて部屋に入ったカリョさま、刺された中国人と刺したコールガールを射殺し、リーさまも撃とうとします。

冒頭二十分で撃たれるジェット・リーさまではありませんなあ。ジェット・リーさま、窓から逃走、カリョさま一味をボコボコにしながら、録画したビデオを持って逃げます。

状況がほとんど説明されないままスーパーアクションが展開する。ジェット・リーさまものってこういう作品多いような気がします。「ザ・ワン」もそんな感じだったですよ。

って、冒頭シーンだけでかなりスペース使いましたが、アクションもいいし、脇のブリジット・フォンダさまなんかもすごくいいです。ラストシーンも泣きそうになっちゃった。

映画のあちこちにブルース・リーさまへのオマージュみたいな場面がでてきて、こういうのもなんか日本人的には好きだなあ。

フランスが舞台だけあって、なんか全編意味もなくファッショナブル。って感じるのは私だけでしょうか。なんか「ニキータ」とか「レオン」とか見たときと同じような「いぐわあああああ」感を満喫させていただきました。

さてさて、次回は「親指スターウォーズ」をご紹介します。

## 親指スターウォーズ

---

1999年アメリカ映画

監督 スティーブ・オーデカーク

スターウォーズのパロディ映画なんですが、なんだかなあ。コメントに困ります。

会社の友人が、「親指スターウォーズ面白いっすよ」とか言ってたので、けっこう期待してみたのですが、どうなんやろ。結論から言いますと、明らかにイマイチ。

スターウォーズのパロディってことで見たわけですが。

登場人物すべてが親指でございます。

その親指に目と口を入れ込み合成加工しまして、お話を進めていきます。発想と努力は買いますが、物語が明らかに面白くない。というか、スターウォーズの物語を親指劇に作り直しただけ、みたいなお話。ところどころにパロディなんかも入るんですが、ちょい下品で面白くないかな。

ハンソク役の親指(!)の口が歪んでいるのにはちょっと笑えましたが。

チューバッカ変。ヨーダかわいくない。C3POもR2D2もちょっとなあ。

ラスト近くでとんでもないドンデン返し。というか、これってドンデン返して言うのかなあ。

ダースベイダーはルークの父親じゃなかったってオチ。せやからどやねん。

まあね。パロディものの親指ドラマでムキになることもないんですが。

どうせなら元ネタ完全にぶっ壊す勢いで徹底的にパロディに徹したほうがよかったのではないかと思います。

さてと。次回はもひとつついでに「親指タイタニック」です。

## 親指タイタニック

---

1999年アメリカ映画

監督 スティーブ・オーデカーク

「親指スターウォーズ」に続いてとりあげます。このシリーズはほかにも「ブレアウィッチプロジェクト」ネタなんかもあるようです。

さて「親指タイタニック」。よく考えてみたら、本家のタイタニックのほうをまだご紹介できておりませんので、パロディ版のほうをごちゃごちゃ書くのはいかなものかとは思いますが。

「親指スターウォーズ」と同じ製作年度とは思えないほど、こちらのほうがよくできております。スターウォーズはパイロット版だったのかなあ。適切な例えかどうかわかりませんが、スターウォーズのほうは「スターウォーズ好きの映像学科の大学生の卒業制作」みたいな感じ。

タイタニックのほうは、「その同じ人が卒業後商業映画第一作目を撮りました」みたいな感じ。ネタバレがいやなので内容についてはふれませんが、導入部、おばあさんが回想に入るあたりとか、ディカプリオさま役の親指がタイタニック号のチケットを賭けて勝負するあたりだとか、本家では超有名な船首での場面だとか、そこでテーマ曲が流れるあたりだとか、けっこうパロディものとしてもよくできています。

これはけっこう楽しめました。まあ私はレンタルショップでレンタルして見たわけではなく、テレビオンエアを見たわけでした、レンタルビデオで迷ったあげくにこの作品を選んだとかだったら怒っていたかもしれないです。それくらい微妙な作品である、と言っておきましょうね。

さて次回は...

やっぱりタイタニックいっとかないとまずいような気がするので、「タイタニック」片付けておこうと思っています。

## タイタニック

---

1997年アメリカ映画

監督 ジェームス・キャメロン

主演 レオナルド・ディカプリオ

「親指タイタニック」の元ネタでございます。パロディネタを先にとりあげて、元ネタほったらかしてえのはいかなものかと思ひまして、あわててとりあげます。

これね、究極のラブストーリーかもしれないし、海洋スペクタクルかもしれない。前半から中盤はややベタベタめ障害乗り越えネタのラブストーリー。しかし中盤以降はいかにもジェームス・キャメロン監督っぽいスーパーアクションスペクタクルに様変わりします。

ターミネーターシリーズ、エイリアン2、トゥルーライズなど、面白いアクション映画を撮りつづけているキャメロン監督の面目躍如ってところです。

タイタニックの物語は歴史的事実ですし、この映画のおかげで今では誰でも知っている物語ですよ。豪華客船タイタニック号が処女航海で冰山と衝突し、沈没してしまいます。映画はタイタニック号の出港から沈没、さらに凍りつくような寒さの海に投げ出された一部の乗客たちが救出されるまでを描きます。このパニック描写とサバイバルが物語の縦糸。ベタベタのラブストーリーを演ずるのは貧しい画家志望の青年ディカプリオさまと金持ちの娘。娘の婚約者を巻き込んだ三角関係が物語の横糸。

かなり尺の長い映画だし、人間関係もけっこう入り組んでいるのですが、力技で乗り切ったような印象です。

キャメロン監督は、お気に入りの役者さんをけっこう繰り返して使います。

マイケル・ビーンさまは「ターミネーター」のあと「アビス」「エイリアン2」に起用されていますし、ランス・ヘリクセンさまも「ターミネーター」「エイリアン2」で登場。

こんなもんかなって思ってたなら、「エイリアン2」のシガニー・ウイバーさまが「アバター」に登場。サム・ワーシントンも「ターミネーター4」に続いて「アバター」に...って書きそうになって間違いに気づきました。「ターミネーター4」はキャメロン監督じゃなかったですよ。

「タイタニック」では「ターミネーター2」でジョン・コナーの養母役の人が、船室に閉じ込められて子供を寝かしつけながら死んでいく母親役を演じています。とっても印象的。もっと集中して何度も見たら、もっと色々な発見あるかもしれませんね。

さあて。

今回は久々数珠つなぎいきましょうね。ジェームス・キャメロン監督シリーズは改めてやるとして、今回はマイケル・ダグラスさまフィルモグラフィの続き。「ウォール街」行きましょう。

## ウォール街

---

1987年アメリカ映画

監督 オリヴァー・ストーン

主演 チャーリー・シーン、マイケル・ダグラス、マーティン・シーン、ハル・ホルブルック

久々の数珠つなぎでございます。マイケル・ダグラスさまのフィルモグラフィーから、「ウォール街」をご紹介します。

オリヴァー・ストーン監督は「プラトーン」で一躍人気映像作家になった人。「プラトーン」「7月4日に生まれて」「天と地」など、ベトナム戦争を意識して題材に取り上げている人です。

「ウォール街」は「プラトーン」の翌年発表された作品。

「プラトーン」のオリヴァー・ストーン監督がベトナムの次に選んだ戦場は「ウォール街」だった、って感じのコピーが乱れ飛びました。

チャーリー・シーンさまは若く野心ある証券マン。彼が顧客として狙っているのがマイケル・ダグラスさまです。ダグラスさまは証券業界に裏の影響力を及ぼす人物。かなり悪どい仕事なんかも平気でやる男。チャーリー・シーンさまは父親（本当にマーティン・シーンさまが父親役）から違法な方法で情報を聞き出し、ダグラスさまに認められます。チャーリー・シーンさまは父が経営する航空会社の株をダグラスさまに勧めます。ダグラスさまの力で経営を再建させようって考えです。しかしダグラスさまには別の思惑があって...って感じの話。

中盤の株の売買シーンの盛り上がりは素晴らしい。大好きなスプリットスクリーンの技法が活かされています。ウォール街の物語がこれほどすさまじい「闘いの映画」になるなんて思ってもいなかったもので、びっくりしました。

余談ですが、実は私は大阪の北浜の証券取引所を舞台にした小説（当時は舞台の戯曲でしたが）のネタがありましたが、この映画を見て「こらあかん、勝たれへん」って感じで書くのをあきらめた思い出があります。

マイケル・ダグラスさまのフィルモグラフィー、とりあえずこれで一旦休止。数珠つなぎはまた新しい題材でスタートしようと思っております。マイケル・ダグラスさまのもの他にも良い作品いっぱいあるので、それはそれで思い出した時点でご紹介していきましょうね。

次回はトビー・フーパー監督の「スペース・バンパイア」です。

## スペース・バンパイア

---

1985年アメリカ映画

監督 トビー・フーパー

主演 ピーター・ファース、マチルダ・メイ

監督のトビー・フーパーさまについて少々。1974年「悪魔のいけにえ」で「それまでのホラー映画の常識をぶっ壊す演出」をして彗星のごとくデビュー。次回作「悪魔の沼」で大すべり。テレビ映画の「死霊伝説」、典型的B級ホラー「ファンハウス」を経て「ポルターガイスト」を監督します。でもこの映画は実はプロデューサーのスピルバーグさまが撮ったんじゃないかなんて噂がまことしやかにささやかれたりしましたです。

それくらいトビー・フーパーさま色が薄い作品でした。その後この「スペース・バンパイア」を監督することになります。「スペース・バンパイア」と翌年の「スペース・インベーダー」は、良い意味でも悪い意味でも「ポルターガイスト」で仕事をしたスピルバーグさまの影響が出ています。娯楽に徹しているというか何というか。満を持して発表した「悪魔のいけにえ2」でさえも、トビー・フーパー監督のキレた感じがかなり押さえられて、普通っぽいホラー映画になってました。

さて「スペース・バンパイア」。ハレー彗星の接近とともに謎の宇宙船が地球にやってきます。その中に三体の人間（型生物って表現すべきでしょうね）が安置されています。研究のために施設に収容されますが、そいつらが蘇生して大暴れ。そいつらは何と、人間の精気を吸い取るスペース・バンパイアで、精気を吸い取られた者はゾンビとなって次の犠牲者を探すのだあ～

トビー・フーパーさま、久々に頑張ってます。「悪魔のいけにえ」以来の名作かもしれません。って書いたら私も「ポルターガイスト」をスピルバーグさまの作品だって認めることになるけど。マチルダ・メイさまがいいです。彼女のきれいなおっぱいを見るだけでも価値ありの一作。

今回は「ラストサマー」いきますよ～

## ラストサマー

---

1997年アメリカ映画

監督 ジム・ギレスピー

主演 ジェニファー・ラブ・ヒューイット、サラ・ミッシェル・ゲラー、フレディ・プリンゼ・ジュニア

「ラストサマー」、脚本がウエス・クレイブン監督の「スクリーム」の脚本家ケビン・ウイリアムソンさまです。

「スクリーム」は実によくできておりました。しかし本作、果たしてどうでしょうか。

原題は「I know what you did in last summer」。「私はお前達が去年の夏何をしたか知っている」って感じ。

どこまで書いていいんでしょうか。主人公の四人は、他人には決して明かすことのできない「あること」をやってしまいます。一年後、四人のもとに脅迫文が届く。「私は去年の夏...」って文章。こわいこわい。四人のやったことが、半端じゃなくヤバいことなだけに恐怖はつのるし、誰にも相談できないわけです。なかなかうまくできているお話ですが、ラストのドンデン返し「スクリーム」ほどではなかったあたりが減点対象かな。

それなりにうまくできてはいるのですが、なにぶん「スクリーム」が出来すぎていましたので、なかなかそいつを越えることができないのかもしれないかもしれません。ドンデン返しの意外性では、第二作の「ラストサマー2」のほうがよくできてたかかもしれません。

次回は「ダイハード3」のご紹介です。

## ダイハード3

---

1995年アメリカ映画

監督 ジョン・マクティアナン

主演 ブルース・ウィリス、ジェレミー・アイアンズ、サミュエル・L・ジャクソン

人気シリーズ「ダイハード」の第三作。ブルース・ウィリスさま演ずるマクレーン刑事は、嫌だ嫌だと言いながら大事件に巻き込まれ、嫌だ嫌だと言いながらその事件を解決するパターンをこれで三度目くりかえしていることになり、ダイハードファンでも「これはちょっとおかしいやろ」と思い始めた時期の映画です。

しかしねえ。なんだかなあ。「ダイハード」って私的にはすごく好きな作品だったわけです。

第一作についてはまたとりあげようと思っておりますが。この映画はホームラン。

で、第二弾の「ダイハード2」。これもけっこう楽しめました。前作には及ばないものの、三塁打くらいは行ってましたです。

製作サイド、この二本の成功に気をよくしたのでしょうか。続く第三弾。こいつがちょっとねえ。とりあえず設定がよくないです。第一作、第二作でマクレーンがあれほど命がけで守ろうとした妻のホリーが出てこないところが減点。さらにその妻と離婚してるってところがさらに減点対象。いきなり幻滅したのをよく覚えています。

地下鉄を使ったりヘリを使ったりで盛り上げようとする気持ちは十分つたわるのですが、あまりにも弱い。第一作、第二作とどうしても比較してしまうからでしょうかね。物語の展開もやや乱暴で唐突な感じが否めません。

この第三弾がこれまでの二作に比べて「弱い」ってのは、これに続く第四弾が長く製作されなかったことから明らかかもしれませんね。

さて次回は日本アニメ映画の八月の新定番。「火垂るの墓」でございます。



## 火垂るの墓

---

1988年新潮社作品

監督 高畑勲

原作 野坂昭如

声の出演 辰巳 努、白石綾乃、山口朱美、端田宏三、酒井雅代、野崎佳積、松岡与志雄

一時期、毎年のように終戦記念日前後にオンエアされていた傑作アニメです。最近はBSとかで放送されているのでしょうか。

空襲で母を失った清一と節子の幼い兄弟が、必死で生き抜こうとする姿を描いた感動作。

母を失った兄妹は親戚を頼りますが、戦時中のことです。露骨に邪険にされる。二人の配給物資も横取りされます。二人が「お国のために働いていない」という理由で。

やがて二人は親戚宅を出て、防空壕で暮らしはじめます。餓えや病気と戦いながら、それでも必死に生きようとします。涙ちょちょ切れ。戦時中を描きながら戦闘場面は出てきません。あの戦争の本土大空襲は戦闘行為ではなく一方的な攻撃でしたからね。

あの戦争での「銃後」を描いている作品だからこそ共感を得ることができるのでしょうか。

原作の野坂昭如先生について少し。野坂先生は、戦時中神戸に疎開されていたそうです。その神戸で野坂先生とよく遊んでいた（いじめていた、でしょうか）のが父や叔父。

父や叔父の会話の中にとときどきノザカって人の名前が出てきていたのですが、それが野坂先生だとは高校生くらいになるまでわからなかったです。父の本棚に野坂先生の神戸大空襲を題材にした小説があったことが思い出されます。

もひとつプチネタ。この作品は神戸が舞台。だから登場人物たちは関西弁を話します。そこで大阪のベテラン役者さんたちが声優として参加されることになったようです。

声の出演欄の端田先生。若い頃直接演技指導をしてくださったり、お酒の席で親しくお話してくださったりしていただいた人ですが、実はこの人、関西では五本の指に入るような実力派俳優さんです。当時の教授はそんなこと知らずにヘラヘラしてましたが。この映画の声の出演欄見るたびに端田先生のこと思い出します。

さて次回は「マトリックス」です。

## マトリックス

---

1999年アメリカ映画

監督 アンディ・ウォシャウスキー

主演 キアヌ・リーブス、ローレンス・フィッシュバーン

こいつは書くの難しい作品でしてね。

見られた人はおわかりかと思いますが、物語が多重構造で入り組んでおります。えっとね、重力の法則を無視して、壁を足がかりに空中で回転したり、とんでもない距離をジャンプしたりする人の一団がいるとしなせえ。そしてその一団を追う黒スーツ黒サングラスの男達があります。逃げる一団追う一団、どっちも超人。この人たちどうしてこんなことができるのよ、って思ったところから物語が始まります。

主人公のネオ＝リーブスさまはふとしたことからこの二つのグループの戦いに巻き込まれてしまいます。平穏だった彼の日常は粉々に粉碎されてしまう。黒サングラスの一団に拉致されてわけのわからんまま体内に発信機しかけられたりします。わけわからん。で、重力を無視した女の人がいる集団に招かれます。で、そこで色々と作中の世界のカラクリを知ることになります。なんとこの世界の我々の毎日は仮想現実で、われわれは夢の中を現実として認識しているのだ、とライダーのフィッシュバーンさまからそういう説明を受ける。

そういう世界の物語。真の現実とは未来社会のカプセルの中であるなんて、すごくどんよりしてしまいますねえ。ってことは我々が現実と認識しているこの世界で派手に撃ち合いとかやっても、現実世界ではその間寝ているだけ。こういう作品世界での物語でございます。静と動のギャップがけっこう面白いです。しかしこの作品、仮想現実なんだから何でもあり。これぞ特撮班の腕のみせどころ。

アクションがかなりいいです。それだけ見たくて何度もビデオ見ましたです。とくに後半のキアヌ・リーブスさまはすごくいいです。マジかっこええ。必見でございます。

さて次回は「イージー・ライダー」のご紹介でございます。

## イージー・ライダー

---

1969年アメリカ映画

監督 デニス・ホッパー

主演 ピーター・フォンダ、デニス・ホッパー、ジャック・ニコルソン

60年代から70年代にかけて映画に革命を起こした「アメリカン・ニューシネマ」。そのムーブメントの中心的名作がこの「イージー・ライダー」でございます。若き監督のデニス・ホッパーさま、主演俳優のピーター・フォンダさまにジャック・ニコルソンさま、そしてもちろん役者としてのデニス・ホッパーさま。彼らを一線級の役者に持ち上げたのがこの作品でございます。バイクでアメリカを走るフォンダさまとホッパーさま。やがて彼らの仲間にニコルソンさまが加わる。

ロックとバイク。そしてマリファナ。そんな彼らの行動は一部の住民たちにとっては目障りなものでしかなく、彼らはやがて暴力をもって排除されることとなります。

中盤から後半にかけて急速に救いがなく、暗く、重い内容になります。これがアメリカン・ニューシネマ世代が抱えていた「病んだアメリカ」に対する不安のあらわれなのではないでしょうか。私がこの作品のシナリオを読んだのは小学生のころ。さらにこの映画を最初に見たのも小学生時代か、中学生のころでした。

わかるわけないっつーの。そんな深いところなんて。

ロックを理解できない少年時代の私は、勝手にこの作品に「わけのわからない映画」の烙印を押して、記憶の向こうに追いやっていました。まあ当然でしょうね。今見たら全然違う印象持つでしょうね。今の私はこの映画のバックで流れるザ・バンドもステッペン・ウルフもジミヘンも知ってるし。

さて次回は「ラスト・ワルツ」をご紹介します。

## ラスト・ワルツ

---

1978年アメリカ映画

監督 マーティン・スコセッシ

主演 ザ・バンド（ロビー・ロバートソン、リック・ダンコ、レヴオン・ヘルム、リチャード・マニユエル、ガス・ハドソン）、ドクター・ジョン、ニール・ヤング、リンゴ・スター、ジョニ・ミッチェル、ボブ・ディラン、マディ・ウォーターズ、ニール・ダイヤモンド、ロン・ウッド、エリック・クラプトン

1976年（だったかなあ。映画公開の二年くらい前だったって記憶があるんですが）に行われたザ・バンドの解散コンサートの模様のライブフィルム。名匠マーティン・スコセッシ監督が、メンバーに直接インタビュー。その様子も収録されています。

ザ・バンドってウエストコースト系の音になるんでしょうか。なんか、都会系の音じゃない、田舎系の音のイメージが強いバンドです。この映画見るまではバンドの曲って「ザ・ウェイト」と「ステージ・フライト」くらいしか知らなかったです。それにしてもすげえゲストです。長いバンド活動の集大成の日に集まったのは長豪華アーティスト。誰がどんな曲歌ったか覚えていないくらいすごい。確かニール・ヤングさまは「ヘルプレス」、ニール・ダイヤモンドさまは「ドライ・ユア・アイズ」を歌ってました。ジョニ・ミッチェルは歌っている場面は鮮明に覚えているんだけど、何だっけ。「コヨーテ」だったかなあ。

圧巻はゲストみんなで歌う「アイ・シャル・ビー・リリースド」。ザ・バンドのファンじゃなくても楽勝で感動できますよ。

映画から数年経って、メンバーの一人が言っていたそうですが、映画関係の話はロビー・ロバートソンさまとスコセッシ監督が二人で進めていたらしく、ロビーさま以外のメンバーは蚊帳の外みたいな撮影だったようです。ってことで、どうしてもロビーさまがええかっこしてしまう内容になってしまったようです。まあそういうこともあるんでしょうね。

さて、次回のコラムは...

「レイジング・ブル」のご紹介です。

## レイジング・ブル

---

1980年アメリカ映画

監督 マーティン・スコセッシ

主演 ロバート・デ・ニーロ、ジョー・ペシ

「ゴッドファーザー・パート2」で若き日のドン・コルレオーネを演じ、アカデミー助演男優賞を獲得したデ・ニーロさまが、今度は主演男優賞を見事勝ち得た作品です。マーロン・ブランドさまが強烈な演技を見せたドン・コルレオーネ。その青年時代だから、ブランドさまが演じたコルレオーネのイメージを大事にしながら演じなければなりません。デ・ニーロさまはみごとにそれをやってのけたわけです。

みんな「誰や、この役者」みたいな感じでした。スコセッシ監督の名作『タクシー・ドライバー』を経てデ・ニーロさまはこの作品にめぐりあいます。実在のボクシング世界ミドル級チャンピオン、ジェイク・ラモッタを演じます。作品冒頭でいきなり啞然とします。「誰、これ」みたいな感じ。現実のジェイク・ラモッタのフィルムかと思いました。これがデ・ニーロさまだってわかってさらに啞然。デ・ニーロさ、あは、四ヶ月で二十キロ以上も体重を増やしたそうです。役者魂やなあ。でもこのままおでぶさん俳優になってまうんや、デ・ニーロさまって。そう思ったら次の作品でまた元のデ・ニーロさまに戻ったからさらにびっくり。デ・ニーロさま伝説の名演技です。

デ・ニーロさまはこのあと「ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ」でもう一回、今度はフケデブにチャレンジしてくれております。さてさて、デ・ニーロさまの太る痩せるだけがクローズアップされてしまいがちなこの作品ですが、スコセッシ監督のボクシングシーンの息がつまるような演出も素晴らしいし、とても面白い作品にしあがっております。古い映画ですが、ゆっくりと堪能していただきたい一本です。

さて次回は...「ラストサマー2」をご紹介します。

## ラストサマー 2

---

1998年アメリカ映画

監督 ダニー・キャノン

主演 ジェニファー・ラブ・ヒューイット、フレディ・プリンゼ・ジュニア、ブランディー・ノーウッド

あの悪夢のような事件から一年。定番ですなあ。ホラー映画の続編ものはたいていこんなはじまりかたしますよね。あの事件以来、主人公ヒューイットさまは殺人鬼の幻影に悩まされ続けています。彼女を励ますルームメイト。そんな女主人公二人のもとに、人気DJからの電話。いきなりバハマへのプレゼントクイズにチャレンジ。見事正解。それぞれが彼氏を連れてダブルカップルでバハマ旅行でございますが、恐怖の影、ひたひた。

台風接近。孤立した島に一件だけ建っているホテル。

ホテルスタッフも、最低限の人数だけを残し、本島に引き上げてしまいます。

四人さまはご自由におくつろぎください的なことになってしまいます。

で、お約束。怪しい殺人者の影再びでございます。

クライマックス、犯人がその正体をあかす場面が実に衝撃的。この場面はここ数年のサスペンス・ホラー映画のネタ明かしのなかでベストファイブに入るだけのインパクトをもったシーンでございます。第二弾ものは評価が微妙な作品が多いなかで、犯人がわかる場面の衝撃度は第一弾をはるかに凌いでおります。お楽しみいただけると思いますよお。

さて次回の作品は。「仁義なき戦い」でございます。

## 仁義なき戦い

---

1973年東映作品

監督 深作欣二

主演 菅原文太、松方弘樹、金子信夫、木村俊恵、梅宮辰夫

ヤクザ映画の常識をぶっ壊した深作欣二監督の傑作でございます。

原作は飯干幸一さま。脚本は名匠笠原和夫さまです。ここまでのヤクザ映画ってのは、着流しを着て、晒し巻いて長ドスもって仁義を切って殴り込みってヤクザ映画が多かったように思います。この「仁義なき戦い」って言葉はもちろん原作の飯干さまがつけたタイトルですが、観念（八徳に数えられる題目のひとつ）としての「仁義」もなく、現実に礼としての「仁義」もない戦い。これは言い換えると、思想もポリシーもなく、形式もこれまでのヤクザの戦いではない、そういう戦いなのだとして最初に宣言されたような感じですね。

復員兵、広能＝菅原さまたちは闇市で暴れまわる、弱肉強食の世界に生きています。やがて彼ら一派は揃って暴力団に入る。彼らを選んだ組は山守＝金子さまの組。そこでまあとにかくいろいろとあるわけですね。組のために誰その命（タマ）にとってこいだとか、そいつが刑務所に入っている間にあれやこれやといろんな陰謀めぐらす奴がいたり。結局、菅原さまは刑務所で義兄弟になった梅宮さまを失い、さらに信じていた闇市時代からの仲間、松方さまにも裏切られることになります。そしてその松方さまもボロ雑巾のように殺されてしまう。菅原さまには狙った人間の目星はついているわけです。ラストシーン。松方さまの葬式に菅原さまは赴く。

「こんなん（葬式）やってもらってうれしいんかのう」

そう言って菅原さまは祭壇に向かって銃を乱射します。その葬式の喪主こそが松方の命を狙った男なわけです。

「タマはまだ残っとりますよ」

そう言い捨てて去る菅原さま。うおおお。かっこええ。

任侠路線にかげりが見えはじめた東映を一気に活気づかせた実録路線。そして物語は第二部へ続きます。

次回は続編。「仁義なき戦い・広島死闘編」のご紹介です。

## 仁義なき戦い・広島死闘編

---

1973年東映作品

監督 深作欣二

主演 菅原文太、北大路欣也、金子信夫、千葉真一、成田三樹夫

この作品は「仁義なき戦い」の第二部ではありますが、物語の筋的には番外っぽい話になります。このへんの裏事情は「笠原和夫シナリオ集」なんかに詳しいです。

「仁義なき戦い」第一部が製作され、すぐさま第二部の企画がスタートします。しかし有名な「広島戦争」を正面から描くのはためられる。で、深作監督と笠原さまとで相談して、闇市時代の伝説のヒットマンというか狂犬というか、そういう存在だった男を主人公に作品を作ったのがこの作品です。

山中＝北大路さまは、元特攻隊の死に損ないみたいな人だったらしいです。しかし東映の製作サイドの意向で第一部でやった闇市の再現は予算の関係で勘弁してほしいということになり、さらに主人公の広能＝菅原さまを出さないわけにはいかないの、そもそものモデルとは別の世代の人になってしまいました。ってことは山中の背負う戦争の影が希薄になり、そのためにキャラが不鮮明になったようです。この男を、「お国のために死に損なって、その死に場所を探してヤクザの世界に迷い込んだ」みたいな構造で見直すとわかりやすかったのですが、映画ではほとんど線キレの殺人マシンでございました。

えっと。若くてキレやすい男、山中＝北大路さま。飯場（えっと、建築現場のことです）のメシ屋で無銭飲食。金がないから働いて返すという。店のねえちゃんが「金はええから出て行ってくれ」というと、「わしゃあ乞食じゃあないき」って暴れる。飯場を管理していた大友＝千葉さまにボコボコにされ、以来大友の命をつけねらう。冷静に考えるととんでもない話です。でもこの大友てえのがすごい荒くれなんで、観客は北大路さまに肩入れするわけですね。広能＝菅原さまも要所要所に出てくるんですが、「必然性ないんとちゃうのん？」みたいな感じ。山中はヒットマンとして重宝され、しかしやがて抗争の駒として使い捨てにされます。最後は逃げ込んだ町すべてが警官隊に包囲され、民家で拳銃自殺するという悲惨な結末です。

粗い画面のフィルムを使った夜のシーンが、妙に生々しくて印象に残っております。

でもまあ、ねえ。どうなんやろ。良い意味でも悪い意味でも「第二弾」って感じです。

次回は「仁義なき戦い・代理戦争」のご紹介です。



## 仁義なき戦い・代理戦争

---

1973年東映作品

監督 深作欣二

主演 菅原文太、小林 旭、金子信夫、成田三樹夫、梅宮辰夫、松方弘樹、田中邦衛

名脚本家・笠原和夫さまが、いやだいやだと言いながら逃げ回っていた「広島戦争」を題材にやれ、と東映からの指示をうけて書き上げたシナリオを、アクション職人・深作監督が見事に作品に仕上げました。「広島戦争」を二作にわけて描けてのは東映製作部からの指示だったようです。ってことで、この作品だけはいかにも「続く」みたいな終わりかたをします。

代理戦争ってのはねえ、んっと。むかしで言う、北ベトナムと南ベトナムの戦争みたいなものを言うんでようなあ。あれってアメリカと旧ソ連の代理戦争だったわけでしょ？これも同じ。戦争するのは、広能＝菅原さま・打本＝加藤武さま一派と山森＝金子さま・武田＝小林さま・榎原＝田中さま。この二派でございます。しかし広能側には神戸の有力組織が、山森側には広島の有組織がついて、神戸側組織の広島進出とそれを阻みたい広島側、みたいな図式もあるわけです。神戸側のえらいさん役で梅宮辰兄いさまが眉をそって登場。おなじく松方さまのお父さんが肺病を患う広能の舎弟役で再登場。二人とも一部で死んだ人ですからねえ。ゾンビみたい。

このエピソードあたりになりますと、主役のみなさんそれぞれに組を構えるくらいになっておりますので、直接抗争には参加しません。その分、渡瀬恒彦さまなんかの当時の若手ががんばっています。小林 旭さま、成田三樹夫さまがすごくいいです。成田さまこんなにかっこよかったんですよ。私世代の人でも「探偵物語」の成田さましか知らない人多いけど。

さて、今回は「仁義なき戦い・頂上作戦」のご紹介です。

## 仁義なき戦い・頂上作戦

---

1974年東映作品

監督 深作欣二

主演 菅原文太、小林 旭、金子信夫、梅宮辰夫、松方弘樹、田中邦衛、山城新吾、宍戸 錠

「広島戦争」の後半部分。とにかく抗争・抗争。暴力沙汰のオンパレードでございます。広能＝菅原さまと組んでいた打本＝加藤 武さまは次第に腰がひけはじめています。山森＝金子さまのほうも、武田＝小林さまが中心になって戦争を指揮しております。戦争の激化を黙って見ている警察ではありません。警察は頂上作戦にでて、暴力組織の解体をはかります。頂上作戦ってのは、抗争の駒となった容疑者を逮捕するんじゃなくて、組長クラスを「凶器準備集合罪」だとか「殺人教唆」とかの罪で逮捕すること。

アル・カポネが告発されたのが脱税だったって話と似ているような気がします。今でこそ「暴対法」とかが整備され、組織暴力への対応ができるようになりましたが、当時はこれくらいしか「頂上作戦」の材料がなかったような気がしますね。

ラストシーンがとにかく良いです。広能＝菅原さまと武田＝小林さまはともに「頂上作戦」で逮捕されます。冬の拘置所。裸足にスリッパ履きで、細かく足を動かして寒さをこらえる広能と武田。命を狙いあっていた二人が拘置所で再会します。そこで交わされる寒々とした会話。「自分達はもう戦うことはできない。口だけ達者になって文句を言うだけだ」そう語り合う。命がけで戦いつづけてきた二人のヤクザの、これが到達点ということでしょうか。

菅原さま・小林さまがいいですね。おおそうだった。前作でまた死んでしまった松方さま、今度は眉をつぶして線キレのヤクザを怪演しておられます。

あと、前作から登場の大友勝利。第二作で千葉真一さまが演じておられたこの極悪キャラ、宍戸 錠さまが円熟したキレキレヤクザを演じておられます。それはそれで必見かもしれません。次回はよいよ最終作「仁義なき戦い・完結編」のご紹介です。

1974年東映作品

監督 深作欣二

主演 菅原文太、北大路欣也、小林 旭、金子信夫、梅宮辰夫、松方弘樹、田中邦衛、山城新吾、宍戸 錠

シリーズでこの作品のみ脚本が笠原和夫さまではなく、高田宏治さまです。だからかどうかわかりませんが、ちょっと流れる空気がこの作品だけ違うように感じるのは私だけでしょうか。

前作「頂上作戦」でヤクザとして生き続けることの限界を感じた広能＝菅原さまと武田＝小林さま。それぞれがそれぞれの形で自分のヤクザ人生に幕をひこうとします。小林さまは若い世代（北大路さま）に組の全権を託し、引退しようと考えています。しかしそれには抗争相手、菅原さまと手打ちをしなければならない。小林さまは菅原さまにカタギになるよう申し入れます。ちょうど時を同じくして、菅原さまはかわいがっていた若い舎弟を抗争で亡くしたりして、引退を決意します。自分の子分たちを仲の良い上部組織の人間に託して引退ってことになります。しかしねえ、またいろいろとあるわけです。自分の影響力を残したまま引退したい勢力とか、敵対勢力とかが北大路さまの新親分襲名を阻もうとする。第一部からずっと登場してきた主要キャストなんか襲撃されたりしてバタバタやられたりします。

結局暴力の連鎖は止まらないわけで、この襲撃が次の抗争の火種になっていくんだらうなあ、みたいな終わりかたをします。

これまで全然書かなかったですが、この「仁義なき戦い」シリーズでは、広島原爆ドームが非常に象徴的な使われかたをしています。舞台となる広島象徴なのか、暴力の象徴なのか、広能らを生んだ戦争の象徴なのか。彼らの生きかたを対比させるための「戦後」の象徴なのか。まあそれはそれぞれに考えてシリーズを通しての深作監督のメッセージを読み取っていただきたいと思います。

## GODZILLA・ゴジラ

---

1998年アメリカ映画

監督 ローランド・エメリッヒ

主演 マシュー・ブレデリック、ジャン・レノ

「USAゴジラ」のご紹介です。この「USAゴジラ」、地上波初オンエアのとき、ハワイ沖で日本の船舶系高校の実習船が米軍潜水艦と衝突するって事件がありまして、オンエアが延期になりました。

物語前半でゴジラが船を沈没させる場面があったので、不相当と判断されたようです。

物語はねえ、普通にゴジラ。放射能の影響で巨大化したイグアナ（だろうなあ）が、アメリカに上陸します。で、そいつを退治しようとする物語。

ブレデリックさまは生物学者。彼が持っていたゴジラのデータが、彼女のテレビレポーターの手に流れてしまって、ブレデリックさまはゴジラ討伐チームから外されてしまいます。しかしその後、ゴジラが妊娠（！）していることに気づき、フランスから秘密裏に派遣されてきた特殊部隊のレノさまとゴジラの巣を探しに行くことになります。

ゴジラ素早すぎ。ジャンプとかするし。ちょっとちゃうやろって思いながらみんな見てたんじゃないでしょうか。

のっしのっしって感じが欲しいですよね。ゴジラなんだから。大量に孵化したミニゴジラ。日本のもののようにミニラだとかゴジラジュニアみたいなキャラではありません。例えていうなら、そう、ジュラシックパークのヴェロキラプトル。中盤はほとんどジュラシックパークみたいなノリの映画になります。おおよ。

こういう映画はあんまり面倒なこと考えずに、キャハキャハ言いながら見たほうがいいのかもかもしれませんね。

さて次回は「その後の仁義なき戦い」いきます。

## その後の仁義なき戦い

---

1979年東映作品

監督 工藤栄一

主演 根津甚八、原田美枝子、宇崎竜堂、松崎しげる、松方弘樹、小池朝雄、成田三樹夫、小松方正

この映画は封切り映画館で見ましたから三十年くらい前のことになりますねえ。中学生か高校生くらいだったと思います。友人と映画を見に行こうってことになって、友人たちは「ビッグ・ウェンズデー」見たいって言って、私はこの映画と松田優作さまの「俺たちに墓はない」の二本立て見たいって言って、結局映画館の前でわかれて一人で見た記憶があります。

出演者のなかでも、小池さま・成田さま・小松さまはもう故人ですし、「俺たちに墓はない」の松田さま・志賀 勝さまも故人です。なんか時の流れを感じてしまいます。

なんかタイトルから「仁義なき戦い」シリーズとして、深作監督のシリーズと同列に語られてしまいがちですが、全く別物。ヤクザの世界を描いてはおりますが、実録抗争ものではなく、ヤクザという世界を背景にした青春映画だと思ってもらったらいいです。世界としては金子監督の「ちんぴら」とか「ちょうちん」なんかに近いような気がします。

ヤクザの世界に身をおく若者、根津さま・松崎さま・宇崎さまの三人の友情と青春、そして死を情感をこめて描きます。最初に命を落とす宇崎さまの最後がリアルに哀れだったり、松崎さまがキャバレーで歌ってそれが芸能スカウトの目にとまり、歌手としてデビューしたり。

だんだんと落ちぶれていく根津さまが松崎さまに金を借りに訪れ、スター松崎さまが狼狽するとか。根津さまの末路はなんだか前衛的に処理されています。しかしあくまでも工藤監督のメインテリトリーであるテレビ的な処理だったような気がします。

とりあえず、「仁義なき戦い」シリーズとしてではなく、シリーズとは全く別ものの青春ヤクザ映画として見ていただければいいかと思います。

## 機動戦士ガンダム

---

1981年日本サンライズ作品

監督 富野由悠季

声の出演 古谷 徹、池田秀一、鈴木洋孝

いまだにディープなファンをもつ「機動戦士ガンダム」の映画版です。初オンエアのときはあまり評価されなかったアニメですが、再放送を重ねるたびに人気があがっていき、遂に映画化。それと前後して作品に登場したモビルスーツ（まあ人が乗り込んで操縦するロボットですな）のプラモデルも強烈な品切れ状態が続く事態となりました。ちなみに私が好きなモビルスールはマ・クベ将軍のガンでございます。

えっと、人類は宇宙に進出します。人工のスペースコロニーってのを浮かべ、そこで生活しております。そんな世界で戦争が起こる。コロニーの一つが独立を宣言し、ジオン公国を建国します。物語はそんな世界で進みます。ジオン軍に攻め込まれたコロニーの民間人たち。ジオンの目的はそのコロニーに寄港していた地球連邦の宇宙戦艦ホワイトベースと、開発されたモビルスーツ。

アムロという名の少年が今にも破壊されようとしているモビルスーツに乗り込み、敵を粉砕します。ジオンの攻撃でホワイトベースのクルーのほとんどが活動不能となり、ホワイトベースは新兵と訓練兵、さらに民間人の少年少女らだけで出港することになります。物語はホワイトベースの大気圏突入、そして着陸地から大陸を横断しながら、南米の補給基地に向かう彼らを描きます。

ジオン側の国王の息子、ガルマ・ザビが登場するのはこのエピソードのみ。次回はもう少し登場人物を紹介していきましょうね。

次回は「機動戦士ガンダム・哀戦士編」をご紹介します。

## 機動戦士ガンダムII 哀・戦士編

---

1981年日本サンライズ作品

監督 富野由悠季

声の出演 古谷徹、池田秀一、鈴木洋孝

前回ご紹介した「機動戦士ガンダム」の第二弾です。前作で大気圏に突入した戦艦ホワイトベース。戦いの中で敵将ガルマ・ザビを倒し、ジオン軍から吊い合戦を仕掛けられます。ここでちょこっとキャラ紹介ときましましょうね。主人公はアムロ・レイ。ガンダムのパイロットです。ロボットアニメの主人公のわりに甘ちゃんでわがまま。彼は実は民間人組。このアムロの幼馴染がフラウ・ボウ。モビルスーツ・ガンキャノンのパイロットはカイ。ガンタンクのパイロットはハヤト。みんな民間人組。

あと、テキパキ系美少女セイラやブリッジを任されることになるミライも民間人です。最初から軍人だったのは艦長代行のブライトとパイロット、リュウくらいのものでしょうか。この他に補給部隊のマチルダ、その婚約者のウッディあたりが主要キャラ。

ジオン軍の攻撃はけっこう熾烈。ランバ・ラル、ハモン、シャアなんかが次々と攻撃してきます。戦いのなかでマチルダ・リュウ・ウッディなどが犠牲になります。戦いながらホワイトベースは南米の補給基地に向かい、補給を受けたあと、新たなる戦場、宇宙へ。

物語は第三作「めぐりあい宇宙編」へ続きます。

## 機動戦士ガンダムIII めぐりあい宇宙編

---

1982年日本サンライズ作品

監督 富野由悠季

声の出演 古谷徹、池田秀一、鈴木洋孝

「機動戦士ガンダム」の第三弾です。戦艦ホワイトベースは再び宇宙へ。今回は敵軍ジオンのキャラ紹介。

ジオン公国の国王はデギン・ザビ。長男ギレン、次男ドズル、長女キシリア、三男ガルマ。第一部で戦士したのはこの三男。ガルマの親友はシャア。彼はガルマが死んだときに彼を守りきれなかった罪で左遷されておりまして。しかし第二作の後半でキシリアの計らいで戦列復帰。

シャアにはドラマがありまして、実は彼はジオン公国の開祖、ジオン・ダイクンの息子で、本名はキャスバル・レム・ダイクンでございます。ちなみにシャアの妹は民間人からホワイトベースクルーに登用されたセイラです。

ジオン・ダイクンから王位を奪ったのがザビ家ございまして、シャアはザビ家に復讐をしようとしているわけでありまして。

さてさて、シャアがある施設から引き取ってきたのがララア。ララアはニュータイプ。ニュータイプってというのはエスパーみたいなものでしょうか。勘が鋭い、予知能力がある、人によっては念動力を使ってレーザー砲台を動かして攻撃できたりもします。そしてニュータイプ同士は交感することができる。シャア、アムロも実はニュータイプ。そして第三部の最大のヤマ場はアムロとララアの敵味方を超えた交流の物語であったりするわけで。さらにさらに、シャアのザビ家への復讐物語とか、ミライとホワイトベースクルーの中尉の恋愛物語だったりとか、とにかくこれまでの話の中での細かい設定がすべて集約されていくような作りになっております。後半一気に物語が動くのは、初回オンエア時に低視聴率が原因で放送打ち切りになったかららしいです。

しかしながら、劇場版制作にあたって新たに書き加えられたシーンだとか書き直されたシーンなんかもあって、テレビシリーズファンも楽しめる内容になっております。

さてさて、今回は、「ポルターガイスト」でございます。



## ポルターガイスト

---

1982年アメリカ映画

監督 トビー・フーパー

主演 クレイグ・T・ネルソン、ジョベス・ウィリアムズ、ヘザー・オルーク、B・ストレート

カテゴリーとしては文句なしにホラー映画に入るべきなんだろうが、それほど怖くない。むしろサスペンスアドベンチャーみたいな仕上がりになっています。前にも書きましたが、なんせ「悪魔のいけにえ」のトビーフーパーが監督で、しかもタイトルが「ポルターガイスト」だもんで。やっぱり製作総指揮のスピルバーグ様の影響でございましょうか。

ネルソンさまは住宅販売会社の超有能セールスマン。とんでもない成績あげたごほうびに、会社から邸宅をドカンとプレゼントされます。さあそこからが怖い怖い世界の始まり始まり。娘のヘザー・オルークさまがテレビのオンエア終了後の砂嵐の画面をじっと見てたり、いきなり家が揺れたり。

特に印象に残っているシーンは、ピエロの人形のシーンですね。この場面はホラー・サスペンス映画のショックシーンばかりを集めた映画「ザッツショック」（そのまんまやんけ）でもとりあげられていました。

クライマックス・シーンのショック映像はイマイチ。作り物まるだしだったので、あんまり盛り上がりませんでした。

主演の子役、ヘザー・オルークさまはこのシリーズの第三作を撮り終えた後、急死しました。

そういう意味では呪われた映画でもあります。

さあて。次回は「ウルフ」です。

1994年アメリカ映画

監督 マイク・ニコルズ

主演 ジャック・ニコルソン

怪優、ジャック・ニコルソンさま主演の狼男映画。封切り当初、ロードショー案内を見ただけで「この映画見たーい」って思ったのをよく覚えております。

なんだかんだで時間があわず、映画館で見るタイミングを外してしまいまして、ビデオリリースされてすぐにレンタルで見たことだけを覚えております。しかししかししかし。うむむ。

私的にはアカデミー賞俳優ジャック・ニコルソンさまが、どういう狼男演技を見せてくれるのかってすごく楽しみだったんですが、あまりたいしたことなかったです。って書いてしまっているのでしょうか。

ジャック・ニコルソンさまといえば、「シャイニング」で亡霊にとりつかれておお暴れする役をやってるし、「バットマン」存在そのものが悪、みたいな怪人を演じておりました。ってことで、なんか見飽きております。この人のバケモノ演技。

それくらい「シャイニング」と「バットマン」の演技が強烈で印象深かったってことにはなりますが。でも狼男ものにしてみればもっといくらかでも面白い作品ありますから、採点は辛くなってしまいます。

まあ主演が天下のジャック・ニコルソンさまですから、見て損はしないと思いますが、あまり深いメッセージとかは込められていないような気がします。

さあて。今回は、「ザ・フォッグ」のご紹介です。

## ザ・フォッグ

---

1979年アメリカ映画

監督 ジョン・カーペンター

主演 エイドリアン・バーボー、ハル・ホルブルック

ジョン・カーペンターさまといえば、ハロウィンシリーズだったでしょうか。

なんか、ホラー好きを卒業してからかなり時間が経つので、わからなくなってきちゃった。

私がホラー好きになった理由をご説明しましたでしょうかね。大学生の頃、特殊メイクアーティストになりたかったんですよ。

ロブ・ボートンさまとか、トム・サビーニさまとか、スクリーミング・マッド・ジョージさまとかの。

特殊メイクだけを見る感じでホラーばかり見てた時期とかもありましたです。ジョン・カーペンターさま作品というと、特殊メイク的にはあまり評価は高くない作品が多いかな。どちらかというとシチュエーションで恐がらせるタイプの監督さんだって印象があります。作風でいうとダリオ・アルジェントさま系かな。ジョージ・A・ロメロさまは特殊メイクを大事にしますけど。ま、ええか。「ザフォッグ」の話。

霧とともに「奴ら」がやってくる。100年前に難破した船の乗組員たちが、亡霊となって街の人々に復讐します。なぜ亡霊がこの街にやってくるのかという謎解きが、ホラーシチュエーションと並行して描かれます。霧とともに現れる亡霊。それだけでけっこういけてる状況ですわなあ。

出演者の一人、ハル・ホルブルックさまはあの「ダーティーハリー2」でイヤな上司を演じていた人。その後、刑事コロンボの作家リンクさま&レビンソンさま作の単発ドラマで印象的な演技をしていました。

さて、今回は「チャイルド・プレイ」のご紹介です。

## チャイルド・プレイ

---

1988年アメリカ映画

監督 トム・ホランド

主演 アレックス・ビンセント、キャサリン・ヒックス、クリス・サランドン、ブラッド・ドゥーリフ

「フライト・ナイト」のトム・ホランド監督の作品。

主人公(?)のチャッキーはこの作品でジェイソン(13金)・フレディ(エルム街)・マイケル(ハロウィン)クラスの人気ホラーキャラになります。ド外道の殺人犯が死んでしまいます。しかしその魂が人形に乗り移ってしまいます。かくして、かわいい人形の顔して性格が殺人犯で、しかも包丁持って勝手に動き回る人形が生まれます。

ってことで、「フライト・ナイト」同様、この作品は特殊メイクよりもSFXに重点が置かれたホラーってことになりますわなあ。ごっつい形相して、包丁持って追いかけてくるチャッキーってキャラは、夢に見るほど強烈で怖い。この作品があまりにすごかったので、この「チャイルド・プレイ」はシリーズ化されます。

さて、次回は「ダイナソー」でございます。

## ダイナソー

---

2000年アメリカ映画

監督 ラルフ・ソンダグ、エリック・ソンダグ

声の出演（吹き替え） 袴田吉彦、江角マキコ

ここ数年のディズニーのアニメのクオリティの高さは目をみはるばかりですね。ディズニー作品が初めてコンピューター画像に進出したのは「トロン」だったと思います。当時はビデオで作成したCGアニメをフィルムに焼き直してやっていたそうです。今はどうしているのでしょうか。実写の背景に全く違和感なくCGアニメの恐竜を乗せる技術は素晴らしいと、素直に驚きましたです。

物語の舞台は6500万年前の白亜紀の世界。地球に巨大な隕石が飛来します。あたりは焼き払われ、恐竜たちは住み処を追われ、新天地を求めて旅にでることになります。主人公はイグアノドンのアラダー（袴田さま）。

彼はキツネザルに育てられた恐竜。新天地を求めて旅に出ることになります。その途中で、イグアノドンの群れと出会い、彼らの言う「伝説の楽園」を目指します。

CGの恐竜なのに一匹一匹に表情があって、顔もそれぞれ違う。最近のCG技術ってこんなに凄いや、と素直にびっくりです。でもまあ、爬虫類なのにこんな口の動きかたはせんやろ、とつこんでしまいそうになりました。とにかく、なごやかな気分で家族で楽しめる一本です。

今回は「トリック劇場版」をご紹介します。

## トリック・劇場版

---

2002年トリック劇場版製作委員会・テレビ朝日・東宝作品

監督 堤 幸彦

主演 仲間由紀恵、阿部 寛、野際陽子、山下真司、芳本美代子、生瀬勝敏、竹中直人、ベンガル、石橋蓮司、伊武雅刀

「池袋ウエストゲートパーク」「ハンドク」「ケイゾク」などで根強い人気の堤 幸彦監督の連続ドラマの劇場版です。

売れないマジシャンの仲間さま。超常現象なんてありえないという大学教授阿部さま。刑事生瀬さま。マジシャン山田＝仲間さまの母・野際さまなどなどレギュラー組はそのままです。

超エリートたちの集まりで「徳川家の隠し財産」が隠されているらしいことがわかり、エリートたちはその力を駆使してその財宝の行方を追います。何故かエリートたちと一緒にいたのが上田教授＝阿部さま。

財宝が見つかったらムフフなどと考えております。自らの本の出版の取材で糸節村を訪れた上田はそこで山田＝仲間さまと出会う。彼女は「村が滅びる」といった伝説に縛られ、不安な毎日を過ごしている村人たちの前で「神」を名乗って村は滅びないとか言って、村民を勇気づけてほしいと、そういった青年団（山下さま・芳本さま）の依頼で糸節村へ行っております。

仲間さまは村人の前で奇跡（マジック）を見せて彼らの信頼を勝ち得るって計画を立てていたのですが、仲間さまと同じように三人のマジシャン（竹中さま・ベンガルさま・石橋さま）が神候補として現れております。

仲間さま、本当の神を名乗りつづけるために三人のマジシャンとマジック対決をすることに。実は阿部さまと合流した仲間さま、阿部さまの言葉から「徳川家の隠し財産」がこの糸節村にあることを見抜いています。財宝を手に入れるために何とかして「神」として認められなければならない。阿部さま・仲間さまは果たして「神」と認められるのでしょうか。そして財宝を手に入れることができるのでしょうか。

ドラマの軽さはそのままに、トリックと複雑な物語設定がグレードアップ。しかし物語の尺の長さや製作費が最高のトリックたり得るってことにはならないようで。トリックの面白さでいうと、もっと面白いものがありましたです。

もっととんでもないトリックを期待していたのですが。ちょっと残念でした。

さて、次回はハリソン・フォードさま主演の「K19」です

2002年アメリカ映画

監督 キャスリン・ビグロー

主演 ハリソン・フォード、リーアム・ニーソン、ピーター・サースガード

製作総指揮がハリソン・フォードさま。

最近のプロデュース業もやられてるんですね。驚きました。

1961年、ソ連の原子力潜水艦K19の物語。艦長に任命されたのはボストリコフ＝フォードさま。副艦長のポレーニン＝ニーソンさまは前艦長。軍のえらいさんたちが出席する訓練で失態を演じ、替わってやってきたフォードさまが自分の上にやってきたもんで当然、対立します。ニーソンさまは設備や整備が問題で戦える状態ではないと主張します。しかしフォードさまは乗組員の士気の問題だと思っているようです。強引なフォードさまの指示に従い、クルーたちはつぎつぎと困難な訓練をこなしていきます。しかし潜水艦の原子炉に異常が発生、艦内に放射能による汚染が広がり、原子炉の爆発という最悪の事態が予想される状況になります。乗組員たちは必死に原子炉の修理を試みます。

やたら冷たいフォードさま。部下をかばっておたおたするニーソンさま。こんな上司おったわなあ、なんて思い出してしまいました。当然私はニーソンさまの肩をもちますねえ。ほんま、いやなあ。こんな上司。

最後にはいい話になって終わるわけですが、私の嫌いな上司も最後にまともな人になっていただきましたかったです。その人、今でもその会社におられるはずです。元同僚の皆様、心よりお見舞い申し上げます。幸せになってね。

次回は柴咲コウさま主演の「着信アリ」です。

## 着信アリ

---

2003年「着信アリ」製作委員会作品

監督 三池崇史

主演 柴咲コウ、堤 真一、吹石一恵、石橋蓮司、岸谷五朗

「着信アリ」のご紹介です。

ある日、自分の携帯に自分の携帯から着信が入る。着信日時は数分から数日先。電話の向こうからは自分の叫び声。きゃああああ。とりあえずありえない。しかしその人、その時間（数分先から数時間先のその着信履歴にあった時間）に、携帯の留守録に残っているのと同じ言葉を残して死んでしまうわけです。自分自身からの死の予告電話。こわいこわい。

柴咲さまは女子大生。合コンとかで携帯番号ヘラヘラしながら交換するような、フツーの子です。柴咲さまの友人の一人に変な電話がかかります。自分の携帯から。着信日時は二日後。その二日後、その子は死んでしまう。死ぬ直前の彼女は誰かに電話をかける。アドレスデータの中から次の犠牲者が選ばれます。おおこわい。柴咲さまの周囲に現れる謎の男、堤さま。彼の妹はこの一連の「死の予告電話」の犠牲になっています。やがて柴咲さまの親友、吹石さまに予告の電話。そしてそれが噂になってしまって、「呪われた彼女の命を救え」みたいなテレビ番組に出演することになって、でも結局吹石さまは死んでしまって、その直後柴咲さまの電話が鳴って...

物語中盤、病院の場面あたりから「ジェットコースターホラー」みたいな感じになります。ショックシーンの連続。見ていて疲れるくらいドッキリシーンが続きます。でもここから先、あちこちにあからさまに張られた伏線进行处理するためだけの話づくりになっちゃったようなのが残念。

えっとねえ。「リング」の場合は個々の事件と事件の原因について、かなりうまく処理できていました。「呪怨」も、劇場版ビデオ版どちらもそのへんの処理ができていたように思うんですね。物語的な必然性というか、物語の適正なベクトルの向きと大きさというか。

「ボイス」見たときにも思いましたが、今回の作品も「電話をかけていた霊」がそこまでしてやりたかったこと、つたえたかったこと、やって欲しかったことは何なのかがよく見えてこなかったです。ホラーだから必ずしもそのへん厳密にしなくてもいいんだらうけど。

さあて。次回は千葉真一さま主演の「直撃地獄拳・大逆転」をご紹介します。



## 直撃地獄拳・大逆転

---

1974年東映作品

監督 石井輝男

主演 千葉真一、郷 鉄治、佐藤 允、中島ゆたか、志穂美悦子、丹波哲郎、安岡力也。ゲスト出演が山城新吾、嵐 寛寿郎

カルト的な人気を誇る石井輝男監督の名作(?)でございます。しかし。うむむ。面白いのか面白くないのかよくわかりませんなあ。ギャグは全般的にお下劣です。下ネタがすごく多い。タランティーノさまやジョン・ウーさまなんかは石井監督のことをかなり評価しているようです。アホっぽくていいんだけど、それはちゃうやろって感じが否めない。いいように言うと、チャウ・シンチーさまの「少林サッカー」みたときの感じ。ありえねーって感じ。

パンチされて目玉が飛び出したり、腹部パンチで内臓はみだしたり、殴られて首が一回転したり、とにかくとんでもない。

甲賀忍者の血をひく千葉さま。保険会社の依頼で、宝石強奪事件にかかわることになります。相棒は金庫破りの郷さま、元刑事の佐藤さま、あとルパンでいう峰不二子キャラの中島さま。強奪された宝石を取り戻すはずが、ドジを踏んだために犯人に逃げられてしまいます。強奪された依頼主は保険会社を通さずに独自に犯人と接触。宝石を取り戻すためにかかった費用を保険会社に請求してきます。保険会社のえらいさんが丹波さま。その秘書が志穂美さま。千葉さまはこの筋書きがちょっとおかしいと思いはじめます。案の定、依頼主はマフィアの一味で、宝石強奪は仕組まれたもの。なんや、保険金詐欺やないの。

怒った千葉さまたちは、ミッション・インポッシブル真っ青のアクロバットでマフィアのアジトから宝石を盗む計画をたてます。

さてさてどうなることやら。千葉さま・志穂美さまときてアクションがでてこないわけがない。後半は悶絶スーパーアクション炸裂です。それなりにけっこう楽しめました。でも好きな世界ではないなあ。

次回は松田優作さま監督・主演「ア・ホーマンス」です。

1986年東映映画

監督 松田優作

主演 松田優作、石橋 凌、手塚理美、片桐竜次、ポール牧、小林稔持

かなり昔に見た映画です。封切りを見に行きましたから三十年近く前になってしまうんですね。劇団時代。そのころ私は小学校巡演班におりまして、名古屋の小学校まわっているときにオフの日があって、この映画と「悪魔のいけにえ2」の二本立て見に行きました。しかしどんな組み合わせやねん。

新宿の街が舞台です。でも我々が知っている新宿ではないような気がします。なんか無国籍というか、無機質というか、そんな街として描かれています。

松田さまが演じるのは、そんな新宿にフラリとやってきた過去の記憶を持たない男。自分たちのシマに突然現れた謎の男の存在に脅威を感じ、彼に近づくはみだしやくざが石橋さま。二人はやがてお互いに友情のようなものを感じはじめます。石橋さまの組の組長は対立する組織に撃たれてしまいます。組のナンバー2のポール牧さまは報復をせずに、その組織との手打ちばかりを考え、石橋さまの気持ちは少しずつ組から離れていきます。やがて悲劇が起こり、そしてクライマックス。詳細を書けないのが残念。強烈なラストが用意されております。

私が役者・石橋 凌さまを見たのはこれが最初。皆様ご存知だと思いますが、石橋さまは「魂こがして」「ノクターンクラブ」などのヒットを飛ばしたロックバンドARBのヴォーカリストでございます。今ではハリウッドスターですよ。重松清さま原作のNHKドラマ「ビタミンF」での「ゲンコツおやじ」の演技は忘れられません。あと、亡くなったポール牧さまの存在感がすごい。惜しい人を亡くしました。

おおそうじゃった。松田優作さまが監督・主演です。こうやって作品を見ると、この人の才能も素晴らしいものだったんだなあって思います。この人も早すぎる死が惜しまれます。

次回はジョン・ランディス監督の「スパイ・ライク・アス」です。

## スパイ・ライク・アス

---

1985年アメリカ映画

監督 ジョン・ランディス

主演 チェビー・チェイス、ダン・エイクロイド

クレジット見てたらフランク・オズさまだとかテリー・ギリアムさまなんか出演してました。驚き。

私、実はコメディとか苦手系です。とくにサタデー・ナイト・ライブ系っていいでしょうか。エディ・マーフィさまとか、チェビー・チェイスさまとか。ここいらの人ってとっても苦手系です。何本か見てるんですが、あまりピピッとこないです。残念ながら。

そういえば昔の映画なんかでも、コメディ系の人って極端に苦手だったことを思い出しました。ボブ・ホープさまとかディーン・マーティンさまとかジャック・レモンさまとか。

さてさて。ジョン・ランディス監督の映画です。

ダン・エイクロイドさまとチェビー・チェイスさまの主演。

閑職に追いやられている二人のスパイ。エイクロイドさまとチェイスさまでございます。この二人にとんでもない命令が下されます。実はアメリカ軍は、軍事通信衛星の画像を解析し、ソ連(!)のミサイル発射基地の位置を知ってしまうわけです。そこで彼らの任務は、ソ連に潜入し、軍からのミッションを遂行すること。

しかし彼らはおとり。彼らとは別のチームがその任務にあたっているわけですが、失敗して殺されても惜しくない者をおとりに使おうってえことで彼らに白羽の矢があたったわけです。さてさてどうなりますか。

中盤からやたらスケールがでかくなりますが、そこはやはりコメディ。あんまり真剣に見ないで、楽しもうと思って見たほうがいいんでしょうねえ。こういう作品の場合。

今回はキム・ベイシンガーさま主演の「ブレス・ザ・チャイルド」です。

## ブレス・ザ・チャイルド

---

2000年アメリカ・ドイツ合作

監督 チャールズ・ラッセル

主演 キム・ベイシングー、C・リッチ

なんともカテゴリー分けがしにくい映画だなあ。映像だけを追いかけるとホラーとかオカルトのジャンルになると思います。

しかし物語の筋そのものはサスペンス。この映画の予告編見た人はたぶんモンスターホラーあたりをイメージすると思います。私もテレビオンエアの予告編見てホラーだと思いましたから。キム・ベイシングーさまはシングルのキャリアウーマン。ただ、キャリアの部分はほとんど描かれないまま物語が進んでいきます。ベイシングーさまの妹が、別れた男との間にできた娘を置いて姿を消します。

しかたがないからベイシングーさま、母親代わりに育てることになります。娘はすくすくと成長。五歳くらいになります。このころ、ニューヨークで幼児を狙う連続誘拐殺人事件が発生します。狙われた子供たちの誕生日はすべて同じ。ああら不思議。

それと並行して、行方不明だったベイシングーさまの妹がいきなり姿を見せ、自分は結婚するという。そして相手がわの男性が娘もひきとってくれるので娘を返してほしいと言ってきます。急にそんなこと言われても。娘の気持ちを聞きましょうよ、みたいなことを言うベイシングーさま。でも妹は強引。どうやら娘がいなければ結婚が御破算になりそうな裏がありそう。ベイシングーさまの心配通り、娘は拉致されてしまいます。

娘の行方を探すうちにベイシングーさまの目の前に現れる「元神父の刑事」。彼はあるカルト教団を探っています。

で、ここらで話の全体像が見えてくるわけですね。結局娘は教団が「キリストの再来」だと信じている存在だったわけですし、事実少女には不思議な能力がありまして。教団は娘を自分たちの手元におき、世界を握ろうとしている、みたいな話です。

ベイシングーさま、物語中盤から幻を見ます。それが翼をもった悪魔だったり、髪の毛が蛇のゴゴンメデューサだったり。もちろんCG処理されておりました、リアルに作っているのですが、物語には直接関係ない、あくまで幻ですから、そいつらと戦うとかの場面はありません。SF Xファン的には戦って欲しいのですが。

ってわけで、なんかすごく中途半端なサスペンス。サスペンスで走るなら悪魔とかは出て来なくていいし、娘の特殊能力もいらんんじゃないかって思いました。

さて、今回は邦画。「おこげ」の登場でございます。

## おこげ

---

1992年イントグループ映画製作委員会作品

監督 中島丈博

主演 清水美砂、村田雄浩、中原丈雄、深沢 敦

なんだかとっても微妙な映画。面白いんだか面白くないんだか最後までわからなかったです。

「おこげ」というんだそうです。同性愛者、「おかま」にくつつく女性のこと。おかまにくつつくからおこげ。へえ～って感じで見てましたが、自作小説の取材で知り合って、まだ交流のあるゲイの人にいわせると、「そんな人ありえへん」ってことらしいです。あと、彼曰く、ゲイの人は自分のことを「オカマ」とか「ホモ」とかは呼ばないらしい。「誇りをもってゲイと呼ぶ」らしいです。そんなんに誇りもつなよってつっこみましたが。ちなみに私が知ってるそういう人って女しゃべりする人ほとんどいません。ただし、ゲイバーとかに勤めている人は女しゃべりするみたいですね。

この映画のことは情報誌で『新しい愛の形を描く人間ドラマ』って紹介されていましたが、どこがどう新しいのかわからなかったです。同性愛そのものは古くは紀元前ギリシアローマあたりでも流行してたわけだし、戦国時代も同性愛あたりまえだったし。(ってその子が教えてくれました)主人公清水さまは、友人家族と海水浴に出かけます。そのファミリーが行った海岸が、そういう趣味の人が集まる海岸、ゲイビーチだったってことで、清水さまはそこで口づけを交わすゲイのカップル、村田さまと中原さまと知り合います。清水さまは男性と交渉をもつことができないでいます。少女時代に父親にキスされたことがトラウマになっています。物語は清水さまと村田さまの肉体を介さない交流と、村田さまと中原さまの肉体を介する交流を並行して描きます。って書いていっても、どこがこう面白いのかわかんない。でもなんかほのぼのとしちゃいました。不思議な映画です。ゲイの友人はどう思いながら見たんだろう。今度聞いてみます。

ちなみに映画でゲイバーのママを演じていた深沢 敦さまはその世界では有名なゲイの人。(らしいです)

さて次回はエディ・マーフィさまの「48時間」をご紹介します。

## 48時間

---

1982年アメリカ映画

監督 ウォルター・ヒル

主演 ニック・ノルティ、エディ・マーフィ

今日とりあげる映画は「48時間」。

テレビショー「サタデー・ナイト・ライブ」で、マシンガントークで有名になった人気コメディアン、エディ・マーフィさまの映画デビュー作。でもこの作品ではまだまだ彼本来の面白さがでていないようです。エディ・マーフィさまそのもののキャラが爆発するのは「ビバリーヒルズ・コップ」あたりだと思うのですが。ニック・ノルティさまは同じウォルター・ヒル監督の「ダブル・ボーダー」のほうがかっこいいし。

というか、ニック・ノルティさまとエディ・マーフィさまという、強烈な二人の個性をうまく生かしきれなかったような、消化不良のような感覚が残ります。

冒頭、いきなり服役しているワルが仲間の手引きで脱走します。ノルティさまはかなりはみだし系の刑事。この脱走犯の元共犯者で、これまた刑務所に服役しているマーフィさまから情報を入手しようとしています。しかしマーフィさまは、自分を仮出所させてくれたらその時間の中で犯人逮捕に協力すると言います。実はマーフィさま、脱走犯と組んでゲットした大金を隠していて、脱走犯が自由になってしまうとその金を持っていかれてしまうという事情があるわけです。かくして二人はマーフィさまの仮釈放「48時間」の間に脱走犯を逮捕せねばなりません。

「48時間」、原題も「48 hours」なのに、タイトルのわりには「時間」そのものを表記してサスペンスを盛り上げようととかしていないですね。「24」とか「リング」みたいにはっきり時間を意識させたほうがよかったと思うのですが。

ちなみにエディ・マーフィさまが登場するシーンで、彼がヘッドホンステレオを聴きながら歌っていた曲は、今は大御所スティングさまがポリスでデビューした頃の曲「ロキサン」（本当はログズビーヌって表記が正解なんだろうなあ）です。ここらでも時代を感じてしまいます。

さてさて。次回はニコール・キッドマンさまの「誘う女」いきます。

## 誘う女

---

1995年アメリカ映画

監督 ガス・ヴァン・サント

主演 ニコール・キッドマン、マット・ディロン

あんまり面白くないかもしれないなあと思って見はじめたら、けっこうよくできてて、気がついたらかなり集中して見てしまいました。ガス・ヴァン・サント監督はこの映画の翌年、ヒッチコックの「サイコ」をリメイクします。

かなり癖のある映像を撮る人ですね。でもそのわりに分かりやすい。

野心に燃える美貌のマスコミ志望の女性、スーザン＝キッドマンさま。彼女はとにかくマスコミ方面の仕事がしたくてしかたない。露骨な売り込みで地元の小さなテレビ局の事務員として採用されますが、入社したあとはこれまたあからさまに自分をキャスターとした企画書を出しまくって、まんまとお天気キャスターになりおおせます。夢は世界に通用する花形キャスター。しかし彼女はすでに結婚していて、夫は彼女にベタ惚れ。そしてできれば彼女に家庭に入ってもらいたいと思っていて、子供なんかも欲しいと思っています。

彼女にとってそんな夫が少しずつ邪魔に感じられてくる。そうなるともうどうしようもない。彼女は「学生の意識調査」と称して三人の学生に近づきます。男子学生の一人と肉体関係を結び、夫殺害を依頼して...

実話を基にした物語。冒頭で新聞記事などが大書きになり、これから始まる物語が説明されます。そこからは「関係者の証言」の積み重ねでドラマが構築されていきます。ここらの手法はとても面白い。

ニコール・キッドマンさまがすごくいいです。こんな人にならだまされちゃうかなあ。

今回は特撮です。大森一樹監督の「ゴジラVSキングギドラ」いきます。

## ゴジラVSキングギドラ

---

1992年東宝作品

監督 大森一樹

主演 中川安奈、豊原功補、小林昭二、西岡徳馬、チャック・ウイルソン

私的には問題作。特撮はいいから、物語の筋だけ見ていただいたらいいかと思います。

基本はタイムマシンもの。物語の時間の流れ無視してわかりやすく書きましょう。まず未来のアメリカ。日本の経済が発達しすぎて、アメリカよりも影響力をもつ国になってしまいます。そこでアメリカのえらいさんが陰謀を企てる。タイムマシンで作業員を送り込むわけです。アメリカは日本をゴジラの脅威から開放してやろうという論法でやってきます。南の島に恐竜の生き残りがいて、そいつが核実験の放射能をあびてゴジラになるという。だからタイムマシンでその時代に戻り、核実験が行われるまでにその恐竜を別の場所にワープさせよう。そうすればゴジラは生まれませんよって話。若いルポライター豊原さまがなぜかそのプロジェクトのクルーに選ばれます。過去に戻って恐竜をワープさせ、現代に戻る。

ゴジラの影は消えたけど、その代わりにキングギドラが突如現れたってことになります。未来人はコントロールしようがないゴジラの代わりに、コンピューターで行動を制御できるキングギドラを使って日本を破壊し、未来の日本の経済力を落としてしまおうと考えていたわけです。

ん？冷静に考えると矛盾だらけ。タイムパラドックス起こるじゃんか。タイムマシンが帰ってきたのは「ゴジラがない現代」。ここでのゴジラは平成になって「ゴジラ」でスーパーXや「ゴジラVSビオランテ」でビオランテと戦ったゴジラのことです。ゴジラがない現代の人なのにゴジラが消えたとかいうのはおかしいし、キングギドラが突如現れるってのもおかしい。キングギドラは核実験の段階で出現していないとおかしい。さらに現代の人が過去においてスーパーXやビオランテと戦ったゴジラはいないわけだから、自衛隊兵器庫にスーパーXはまだあるんちゃうん、とか。おかしいっっちゃうねん。突如キングギドラが登場したらあかんのです。過去に干渉したら、その干渉の結果、変わった時間軸にもどるはずだから。って、タイムマシン論を熱く語ってしまいました。

で、転送した恐竜はその行き先で原子力潜水艦にぶちあたって結局ゴジラになっちゃう。なんじゃそれ。でも作っているほうは一生懸命。まあいいか。許してつかわす。

次回も特撮です。「ウルトラマンティガ・ウルトラマンダイナ・光の国の戦士たち」いきますです。



## ウルトラマンティガ・ウルトラマンダイナ・光の国の戦士たち

---

1998年円谷プロ作品

制作総指揮・円谷一夫

監督 小中和哉

主演 つるの剛士、山田まりあ、木之元 亮、布川敏和、杉本 彩、亀山 忍

映画そのものの説明の前にウルトラマンダイナの作品世界の説明。お話は前シリーズの「ウルトラマンティガ」の数年後って設定。後に映画化される「ウルトラマンティガ・ファイナルオデッセイ」で若手パイロットとして布川さまが、そのチームリーダーとして木之元さまが出てましたし、その当時山田まりあさまは女子高生だったって設定でした。

で、ティガ世界の数年後ってのがテレビシリーズの世界。しかしテレビシリーズの最後でダイナ＝つるのさまは敵ボスキャラ怪獣・グランスフィアを倒すために玉砕し、つるのさまは死んだ父の幻影とともに宇宙の彼方に飛んでいってしまうという続編の作りようのない終わり方をしてしまいましたので、このお話はダイナがグランスフィアと戦う以前のお話ということになります。科学者杉本さまが、強力な戦艦プロメテウスを設計し、それが建造されます。参謀亀山さまがその計画を推進しております。しかし杉本さまは宇宙人に操られていました。戦艦は宇宙人にとり込まれ、強力なロボットに変形して暴れまわるわけです。そのロボットに挑むのがつるのさまが変身したウルトラマンダイナ。

ロボットを倒したものの、宇宙人が宇宙船と同化・合体してモンスターに変身。ダイナは活動不能の状況に追い込まれます。こんなに強い宇宙人なら最初からロボットとか使わずに変身して戦ったらよかったのに。ダイナが倒された場面を中継で見ていた子供たち、ウルトラマンティガの最終回のように、「ぼくたちも光になって戦うんだ」とか言って光になる。そしてそして、ティガが再び現れるのであったあ。

残念ながらテレビシリーズの延長線上のお話で、名作「ウルトラマンティガ・ファイナルオデッセイ」の完成度にもテレビシリーズ「ウルトラマンティガ」最終回にも及びません。

みんながんばってるんだけど。残念。

ちなみに参謀役の亀山 忍さまは私が一時期在籍していたプロダクションの所属俳優。若いころ一度飲んだことがあるんだけど、もう忘れてるだろうな。この亀山さまは元阪神の亀山選手の双子の弟さんでございます。

さて次回予告。ジョン・バダム監督の「アサシン」をご紹介します。

## アサシン

---

1993年アメリカ映画

監督 ジョン・バダム

主演 ブリジット・フォンダ、ガブリエル・バーン、ダーモット・マロニー、アン・バンクロフト、ハーヴェイ・カイテル

原題は「Point of no return」。1990年のフランス・イタリア合作の「ニキータ」のリメイクです。

ドラッグストアに押し入ったマギー＝フォンダさま。ヤクでフラフラの状態のなか通報で駆けつけた警官を殺し、死刑を宣告されます。彼女はその裁判所で大暴れするようなキャラです。刑が執行され、フォンダさまは死ぬ。法の上では。目覚めた彼女の目の前に現れたのはボブ＝バーンさま。政府のために働けと言われます。フォンダはその申し入れを拒むことができないわけですね。おお、「シルミド」の世界。わけのわからないまま、武術や銃、立ち居振舞い、コンピューターやテーブルマナー、コンピューター知識などを叩き込まれます。バーンさまは彼女を政府の女性諜報員として養成しようとしているわけです。やがて彼女はそれら全てを身につける。暗殺者＝アサシンの誕生でございます。レストランで男を射殺。ホテルの部屋を爆破。ライフルで狙撃。彼女は次々と諜報員としての仕事をこなしていきます。そんななかで彼女は恋におちる。彼と二人きりでいるときにもおかまいなしに入ってくる指令。恋と仕事の板ばさみ。彼女は諜報員の仕事からの引退を決意して最後の仕事にとりかかりますが...

もうしわけありませんが、どちらもちゃんと見たはずなのに、「ニキータ」と「アサシン」、どっちがどっちかわからない。めっちゃ混同しています。ほとんど同じ時期に見たからかなあ。ちなみにタイプでいうと、ブリジット・フォンダさま演ずるのマギーちゃんのほうが圧倒的に好きでございます。

## ニキータ

---

1990年フランス・イタリア合作

監督 リュック・ベッソン

主演 アンヌ・パリロー、ジャン・ユーグ・アングラード、チェッキー・カリョ、ジャン・レノ、ジャンヌ・モロー

お話の筋は昨日の「アサシン」と同じ。「アサシン」のクレジットにも「原作・リュックベッソン・ニキータ」って書いてました。コピーして貼ろうかなって思うくらい話が同じ。私は「ニキータ」～「アサシン」の順番で見ました。けっこう続けて見たから、こうなると先に見た「ニキータ」のほうが有利。「アサシン」見ながら、「なあんや、ほとんどニキータといっしょやないの」なんて思っていました。リメイクだからしかたないんですが、もう少し独自の撮り方あったもよかったんじゃないかって思いました。でも記憶に残っているのは後に見た「アサシン」のほうです。だってブリジット・フォンダさまかわいいんだもん。

でもこの「ニキータ」のアンヌ・パリローさまもけっこうかわいい。この映画で圧倒的に印象的だったのは「始末屋」。

なあんか、この始末屋の場面だけ悪夢のようにどんより残ってしまいましたです。しかしとりあえず、この「ニキータ」がなければ「アサシン」のなかったわけで。今回「アサシン」はちゃんと見直しましたので、この「ニキータ」もちゃんと見直ししなきゃいけないなあって思っています。

さて。次回「キンダーガートンコップ」です。

## キンダーガートン・コップ

---

1990年アメリカ映画

主演 アーノルド・シュワルツェネッガー

「キンダーガートンコップ」。「ターミネーター」「ゴリラ」「コマンドー」みたいな、筋肉体力パワー俳優だったシュワルツェネッガーさまの転換期にあたる作品です。

「キンダーガートン・コップ」「ジングル・オールザウエイ」、あと「ツイーンズ」あたりでコメディータッチの作品がこなせるスターになったシュワルツェネッガーさま。ここからは「トゥルー・ライズ」「ラスト・アクション・ヒーロー」などの本人は大真面目なんだけどはたから見ると滑稽、なんて傑作を連発させます。それでいて「ターミネーター2」とか「イレイザー」みたいなこれまでの路線の延長のような作品にも出演。肉体派のライバル、スタローン、バン・ダム、ラングレインあたりを大きく引き離し、やがてやがて政界進出を果たすことになるわけですね、これが。

さてその「キンダーガートン・コップ」。肉体派刑事シュワルツェネッガーさまが犯人逮捕のために、重要証人の護衛を兼ねて幼稚園の先生になってしまうというとんでもない話。あのキャラが幼稚園の先生ってのが強烈ですよ。幼稚園の先生、というか幼児の皆様方と接することの大変さは、自作小説のなかでサクッとふれておりますが。

めっちゃ大変やねんよ。

この映画、滑稽でいてそれでいてスリリングでアクションがふんだんに入ってる。けっこう面白い作品にしあがっております。

さあて。今回は「男たちの挽歌」です。

## 男たちの挽歌

---

1986年香港映画

監督 ジョン・ウー

主演 チョウ・ユンファ、ティ・ロン、レスリー・チャン

いぐああああ。すげええ。香港時代のジョンウー監督作品でございます。ジョン・ウー監督という人のことをこの作品で知った人も多いんじゃないでしょうか。同時に、「香港の小林旭・チョウ・ユンファさま」をこの作品で知った人も少なくないはず。チョウ・ユンファさまはアメリカ進出しましたが、いまいちブレイクできなかったですね。やっぱり香港スターはアクションできてなんぼ。ブルース・リーさまにしても、ジャッキー・チェンさまにしても、ジェット・リーさまにしてもね。

さて「男たちの挽歌」。

香港ノアールという一大ムーブメントの火付け役となった傑作でございます。香港ノアールってのは香港製のマフィアもの、ギャングものの総称。派手な撃ち合い、とんでもない規模の爆破シーン、カッコいいを乗り越えて気障でありえないに近いシチュエーション。ええなあ。

チョウ・ユンファさまとティ・ロンさまはギャング。いっしょにビッグになろうぜ系の二人です。そんな中、ロンさまがパクられます。ユンファさまはロンさまを売った男に単身お礼参り。その銃撃戦で彼は足を撃たれ、足をひきずらなければ歩けなくなります。ロンさまの弟レスリー・チャンさまは刑事。ギャングの弟だと知られ、重要な捜査から外され続けています。やがてロンさまは出所。ギャング界は自分の格下の男が顔役の座につき、ユンファさまはその顔役から小遣い銭をもらって生計をたてています。ユンファさまはギャングの世界への返り咲きを狙っている。ロンさまは堅気になろうともがく。そしてそれが壮絶な戦いの引き金になるのであった。うおおおお。

チョウ・ユンファさまって小林旭さまみたいって思ってたら、ジョン・ウー監督は本当に日活映画ファンだったらしいですね。やっぱりなあ。

さて次回は宮崎アニメ「魔女の宅急便」のご紹介です。

## 魔女の宅急便

---

1989年徳間書店、ヤマト運輸、日本テレビ作品

監督 宮崎 駿

声の出演 高山みなみ、佐久間レイ、山口勝平、戸田恵子、信沢三恵子、三浦浩一、関 弘子、加藤治子

ジブリアニメですなあ。実はジブリアニメ、かなり苦手な人です。このさあ、意味もなくほのぼののところがさあ、なんかさあ、困るんだよね。

魔女の少女が旅を通じて成長していく姿を描く感動のドラマ。うん。いいんだよ。それでいいんだ。ってえか、ジブリアニメとかディズニー映画とかで、ほのぼののしちゃう自分が許せないって感じるタイプです。

ホラーとかサスペンスを見て、ハラハラドキドキする自分は許せるし、感動大作恋愛大作で泣いてしまう自分も許せるんだけど、なんかほのぼののしちゃう自分って許せないです。俺この映画で感動できるほど良い人間じゃねえんだ、とか勝手に思うタイプだし。ってことで、宮崎アニメはほのぼののしないように、いつも構えて見てしまいます。

魔女の娘キキは、魔女の世界のしきたりに従って旅に出ます。

町でパン屋の夫婦に部屋を間借りさせてもらい、宅急便を開業し、町の人たちと交流しながら成長していきます。

よかったやん。成長したらええやん。

って構えてしまっでごめんなさい。素直に見ることのできないダメな男です。

アニメの画質の良さはすばらしい。アニメって進化しましたよね。私世代が楽しんで見ていた「マジンガーZ」とか「海のトリトン」だとか「デビルマン」だとか、今見ると実にショボイ。技術の進歩を痛感しますです。ちなみに制作に名前を連ねているヤマト運輸。これをみて「ははあ」と思いました。そうやなあ。「宅急便」ってヤマト運輸さんの商標ですもんね。となるとキキが連れている黒猫のジジは宅急便の看板のネコなんだ。って、変なところで感心していました。本編で感心せんかい。

次回は「8mm」のご紹介です。

1999年アメリカ映画

監督 ジョエル・シューマッカー

主演 ニコラス・ケイジ、ホアキン・フェニックス、ジェームス・ガンドルフィーニ

ニコラス・ケイジさま主演のサスペンス。私はこの映画見えています。間違いなく見てる。見てるんだけどお。かなり印象薄い。面白くなかったわけではないんですが、悲しいくらい印象に残っていない。

時期的には「スネークアイズ」と同時期に見ました。ビデオ屋さんで、「スネークアイズ」と「8mm」どっちを見ようか迷った記憶があります。結果、面白かったのはやっぱりデ・パルマ監督の「スネークアイズ」。私の記憶の中ですごく不遇な立場にある作品です。

ニコラス・ケイジは刑事だったと思います。探偵かもしれんなあ。ルポライターかもしれない。なんせ謎を追いかける側の人です。

ってここまで書いて、あまりにも不親切な記事だなと思って、ウィキペディアで調べましたら、ニコラス・ケイジさま、探偵でございました。

彼が実際に起きた殺人を録画した8ミリフィルムを手に入れてしまうことが事件の発端だったような、そうじゃなかったような。ここまで設定の記憶があやふやな映画も珍しい。

で、ウィキペディアで調べましたら、実際の殺人が記録されたスナッフフィルムに関する調査依頼を彼が受けたことが事件の発端だったようです。

でも頼みの綱のウィキペディアもこのへんまでしか書いてないんですわ。

ウィキペディアにも見放された悲しい映画なのね、これ。

それというのも理由がありまして。かなり怒りながら、なおかつかなり激しいツッコミ入れながら見ていたことだけは覚えているのですよ。確かケイジさまが容疑者を特定するに至る論理にかなり無理があった。ええーって推理。で、犯人の意外性とかもあまりなかった。「犯人がこいつやったら、おもしろいなあ。こいつやったらあまりにもおもしろいから、こいつではないやろな」って思っていた人が犯人でした。そらないやろって思ったことだけ覚えています。

まあこんなことばかり書いていてもしかたないので、皆様機会がありましたらたっぷりお楽しみくださいませ。

さて次回は、「トゥモローネバーダイ」のご紹介でございます。

## トゥモロー・ネバー・ダイ

---

1997年イギリス・アメリカ合作

監督 ロジャー・スポティスウッド

主演 ピアース・プロスナン、ジョナサン・プライス、ミッシェル・ヨー

007シリーズ第18弾。ほんまようやりますなあ。ショーン・コネリーさま、ジョージ・レイゼンビーさま、ロジャー・ムーアさま、ティモシー・ダルトンさま、で、このあとのダニエル・クレイグさま。そんなもんでしたっけ。ボンド役者って。あと一人か二人おったような気もしますが。本作はプロスナンさま版ボンドの二作目になります。

第三次世界大戦を勃発させ、そのスクープをわがものにしようとするメディア王プライスさま。ボンド＝プロスナンさまがこのメディア王に挑みます。今回のボンドガールはミッシェル・ヨーさま。登場のしかたが実にインパクトたっぷり。

そもそも第三次世界大戦になりそうになったのは英国艦が中国軍に攻撃されたからでありまして、中国側もイギリスと同じようにプライスさまのところに諜報員を送り込んでいたわけですな。それがミッシェル・ヨーさままでございます。中国の諜報員だから何でもありでございます。すくなくともアジア系の人にはどんなとんでもないアクションをするかわからないってイギリスの人は思ってるんだろうな。あのねえ。アジア人ってみんなニンジャなんかじゃないし、カラテ使えるわけでもないんですが。まあええか。

007って、盛り上がるわりには悪漢が死ぬところはイマイチって思っているのは私だけでしょうか。「ロシアより愛をこめて」の二人（ロバート・ショーさまとその上司のおばさん。二人とも強烈でした）の悪漢との対決シーンがあまりにもすごかったので、どうしても比べてしまいます。けっこう頑張ってた「黄金銃をもつ男」のクリストファー・リーさまも、今思えばあっけなかったし、リチャード・キールさまにすっかり食われてしまったクルト・ユルゲンスさまもクリストファー・ウオーケンさまもソフィー・マルソーさまも、けっこうあっさりやられています。これってどうなんやろ。今回のジョナサン・プライスさまはどんな死に方するんでしょうね。結果はDVDでお確かめください。

次回は邦画です。「黄泉がえり」です。



## 黄泉がえり

---

2002年TBS作品

監督 塩田明彦

主演 草彅 剛、竹内結子、石田ゆり子、哀川 翔、山本圭壱

普通に考えると、ホラーな状況だと思うんですよ、百パーセントホラーです。死んだはずの人が甦るわけですから。でもね。その死んだ人が、自分が一番愛していた人だとか、自分を一番愛してくれていた人だったら、その状況はホラーじゃないです。スティーブン・キングさまが「ペットセメタリー」で描いた世界を逆手にとったようなお話。「ペットセメタリー」は愛した人がモンスターになって帰ってくるって設定のホラー。ジョージ・A・ロメロさまの「ゾンビ」でも、愛する夫がゾンビとなって甦って、その夫に抱きついたら肩口食われちゃった、みたいな悲しい女性のシーンがありました。

福岡で死者の甦り現象が次々と報告されます。その甦りにはちゃんとした意味があるわけですが、映画ではちょっと説明不足。原作にはそこいらの設定がかなり詳しく書き込まれています。以下はネタバレ注意です。まだ見てない人はここから先読んだらだめですよ。主人公の竹内さまは実は死んでいて、甦った人です。哀川 翔さまもそう。他にもたくさん甦った人がいます。その人たちは、自分たちはやがて消えてくのだってことに気づいています。甦ったつかの間の時間。その時間の間に、生きている人には何ができるのか、死んだ人は何が残せるのか。そういったことが丁寧に描かれていきます。私も実は亡くなった父に会いたかったりします。父が甦ったら、あのことこのこと、謝りたいことたくさんあります。死を選んだ友人にも会いたい。会って、力になれなかったことを謝りたいです。

映画ではみんなそんな小さな感情をたくさん抱えながら、生きていきます。やがて「その日」がくる。甦った人たちが一斉に消える日です。甦った人たちは自分がその日に消えることに気づいています。これはこれで辛いなあ。なんか、この世に残したいろんな感情が爆発しそうな気がする。

映画はこの「黄泉がえり」現象にはっきりとした説明をつけないまま終わります。

このお話はあくまでもファンタジーですが、涙なくしては見られない素敵な作品にしあがっています。柴咲コウさまが歌う主題歌もまた涙を誘いますねえ。あと田中邦衛さまがすごくいいです。是非ご覧いただきたいと思います。

さあて。次回は「バック・トゥ・ザ・フューチャー」でございます。

1985年アメリカ映画

監督 ロバート・ゼメキス

主演 マイケル・J・フォックス、クリストファー・ロイド、リー・トンプソン、クリスピン・グローバー

今では知らない人のほうが珍しいスピルバーグさまプレゼンツの超大作。時間を題材にしたコメディータッチのSFアクションムービーです。USJのアトラクションの元ネタとしてもひたすら有名な傑作です。

ドク＝ロイドさまがタイムマシンを発明します。スーパーカー「デロリアン」を改造し、ビジュアル的にもカッコいいタイムマシンが誕生するわけです。マーティ＝フォックスさまはダメダメ系高校生。調子は良いがギター以外の取り柄がない。「Chicken」なんて呼ばれると逆上して喧嘩でも決闘でもやってしまう単細胞青年。父はダメ親父。幼馴染ビフにこき使われる弱虫。ロイドさまとフォックスさまは何故か仲良し。タイムマシン完成後の実験をしていたところ、テロリストに襲われ、ロイドは撃たれてしまいます。デロリアンに逃げ込んだフォックスさまはテロリストから逃げるために車を走らせます。そこでタイムマシンが作動し、フォックスさまは過去の世界へ。父と母が初キスを交わした卒業パーティの直前にタイムスリップします。しかししかし。フォックスさまは母に一目ぼれされてしまいます。もし卒業パーティで二人がキスしなければ、自分は生まれないことになってしまいます。かくしてフォックスさまは、自分の父母のキューピットになるべく奔走することになります。

出演者がとにかくみんな達者です。この人選が作品を成功させたと考えていいと思います。フォックスさま・ロイドさまはもちろん、父・母・ビフ、それぞれに芸達者。さすがにとっても面白うございます。

さて。次回もSFです。H・G・ウェルズ先生原作、マーロン・ブランドさま、ヴァル・キルマーさま主演「DNA」でございます。

1996年アメリカ映画

監督 ジョン・フランケンハイマー

主演 マーロン・ブランド、ヴァル・キルマー

H・G・ウエルズさま原作の「モロー博士の島」の三度目の映画化です。南海の孤島で繰り広げられる遺伝子操作の実験。繰り返される実験のその果てに何があるのでしょうか。

出演者欄にマーロン・ブランドさま、ヴァル・キルマーさまと書いていますが、残念ながらどちらも主人公ではありません。主人公は知らない役者さんでした。って、書くんやったらちゃんと調べとかんかいて怒られそうですが。

実は私、このマーロン・ブランドさま版よりもこの前の映画化、バート・ランカスターさま版の「ドクターモローの島」のほうがお気に入りでございます。今回ってね、「DNA操作」とか「遺伝子工学」みたいな先端技術で理論武装しすぎて、ちょっと雰囲気おかしくなっちゃったって思うのです。んで「人」「神」「獣」なんて哲学的なキーワードを押し出しすぎちゃった。ブランドさまは遺伝子工学の権威。キルマーさまはその助手です。彼らは南海の孤島で実験を繰り返します。彼らは動物のDNAを操作し、二本足歩行ができ、言葉を話すことができる動物を大量に創造します。あろうことか彼らの神として君臨し、絶対的支配者として暮らしています。なんかいきなりブルーになる設定ざんしょ？長く続くわけないです。こんな体制。心配通り王国は破綻します。王国のルールに「殺してはいけない」というものがありまして、獣人のうち一体がその禁を破って仲間を殺してしまう。ブランドさまたちがそいつを処罰しようとしたとき、みんな気づく。何故支配者は獣人を殺しても罰を受けないのか、ということに気づきます。あわわ。そこから獣人たちの暴走が始まります。

ラストのドンデン返しはランカスターさま版のほうがよかったです。ランカスターさま版は「獣を人間化させる薬」「人間を獣化させる薬」がキーワードになっていたため、作風がいくぶんおらかだったような気がします。

次回は鈴木光司原作のUSA版「ザ・リング」のご紹介でございます。

## ザ・リング

---

2002年アメリカ映画

監督 ゴア・バービンスキー

原作 鈴木光司

主演 ナオミ・ワッツ、マーティン・ヘンダーソン

鈴木光司さま原作の「リング」のUSA版「ザ・リング」です。

「ゴジラ」のUSA版リメイクは明らかにイマイチだったのですが、こいつはけっこうがんばっていました。でも謎解きの見事さは邦画の松嶋菜々子さま・真田広之さま版のほうがあきらかによかったです。高橋克典さま版もよかったですよね。USA版はちょっと大味な感じ。本筋とは別の「恐がらせるエピソード」を重ねすぎて、物語展開に大事なエピソードがおろそかになってしまった感がありますなあ。

基本となるストーリー展開は日本版と同じ。あるペンションの一室に一本のビデオがありまして、そのビデオを見た人は七日後のその時間に死んでしまう。まず四人の若者が死にます。ワッツさまは死んだ若者の知り合いです。若者が死んだ理由を探るうちに、ワッツさまはそのペンションに行き、問題のビデオを見てしまいます。彼女はビデオを分析しようと親友に見せる。そしてデッキの近くに置いてあったビデオを、彼女の息子が見てしまう。おお、えらいこっちゃ。ここから先はひたすら謎ときですが、井戸を捜しあてるあたりで、テレビがひとりでにスイッチが入ったり、井戸の周囲の床のネジが勝手にゆるんだり、とかの描写が、なんかアメリカやなあって感じました。ポルターガイストっぽいなあ。日本ものだといきなりドスンって床が落ちる描写にするだろうに、って思いました。

ラストもなんかアメリカ的。ほとんど余韻を残さずストンと投げ出すような感じでした。日本ホラー韓国ホラーはちょっと余韻残すのに。国民性でしょうか。

次回はジャン・クロード・バン・ダムさま主演の「レプリカント」をご紹介します。

## レプリカント

---

2001年アメリカ映画

監督 リンゴ・ラム

主演 ジャン・クロード・バン・ダム、マイケル・ルーカー、キャサリン・デント

レプリカントって言葉は「ブレードランナー」の作品の中での造語だと思っていたのですが、こういうふうに普通に使われていい言葉なんですね。ってよく考えたら、「レプリカ」って言葉もあるから、けっこう普通の言葉なのかもしれない。それにしても肉体派の役者さんって、自分対自分って作品よく作りますよね。ジェットリーさまも「ザ・ワン」みたいな映画撮ってましたもんね。

若い母親を狙った連続殺人事件が起こります。犯人はバン・ダムさま。三年以上にわたって犯行を続けています。アメリカの国家安全局は、犯人の毛髪から採取されたDNAを使って犯人のクローン・レプリカントをつくり、彼を使って犯人逮捕しようとする。これは国家の機密プロジェクトだったわけですね。国家安全局は、彼の記憶の中に眠っている殺人鬼の記憶をひきだそうとします。

レプリカントのパートナーというか、お守りに抜擢されたのは警察を退職したばかりのルーカーさま。クローンバンダムさまは未完成な段階でこの世界に放り出されたため、言葉などが未発達。はじめのうちはオウム返ししかできない。やがて少しずつ独自の思考や言葉をもちはじめます。クローンバンダムさまの断片的な記憶をたどり、刑事ルーカーさまは少しずつ犯人バンダムさまに近づいていきます。そしてやっぱりこうなるんですね。犯人バンダムさま対クローンバンダムさまの対決でございます。長髪のワルバンダムさまもけっこうかっこよござんす。悪役けっこう似合いそうですね。

さて次回は黒木瞳さま・岡田准一さま主演の「東京タワー」でございます。

## 東京タワー

---

2006年東宝・日本テレビ作品

監督 源孝志

原作 江国香織

主演 黒木 瞳、岡田准一、松本 潤、寺島しのぶ、平山あや、銀粉蝶、石橋蓮司、宮迫博之、岸谷悟郎、余 美貴子

人妻と青年との恋愛を描いた物語。人妻は黒木さま。若い青年は岡田さま。黒木さまの夫が岸谷さま。黒木さまと岡田さまは東京タワーが見える部屋で愛し合い、ベッドでじゃれあいます。平日の午後四時ごろの、彼女からの電話を待つ岡田さま。自分からは電話ができない。待つことは苦痛じゃない。それ以上の価値が見つけれないと彼は考えています。うおおおお。ごっついええかも。

黒木さま岡田さまの恋愛と並行して、松本 潤さまと寺島しのぶさまの恋愛が描かれます。寺島さまの夫は宮迫さま。夫の母・銀粉蝶さまと暮らしています。そんな寺島さまに松本さまは言います。「俺のこと『はげぐち』にしていいよ」寺島さまは答える。「ブレーキが壊れそうでこわい」いやあ、映画って本当にいいもんですね。

で、松本さまと寺島さま、します。それと並行して、黒木さまと岡田さま、します。で、また、寺島さまと松本さまがして、黒木さまと岡田さまがします。

いやね、そやからね、ええやないですか。しても。ほっといたりいな。

でもこの映画は台詞を聞いてほしいですね。さすが女流作家が書いた恋愛小説の映画化ですね。ほんと、どきっとするような台詞がバンバンでてきます。そうなのか。こういう台詞書かないといけないのか。ちょっと勉強させていただきました。ラストもこの前に見た「海猫」のような悲惨さはなかったです。というか、むしろ後味が良い恋愛の形かもしれません。

さあて。次回は「ガメラIII・邪神降臨」でございます。

## ガメラIII・邪神（イリス）覚醒

---

1999年大映作品

監督 金子修介

主演 中山 忍、前田 愛、津川雅彦、本田博太郎、生瀬勝久、蛭 雪次郎

いやあ、平成ガメラ。なかなかいけてると思うのは私だけでしょうか。平成ゴジラはちょっと拒否反応がでたわけです。だっていきなりスーパーXとかでてくるんだもん。んでその次に出てくるのはビオランテだし。まあね、ビオランテ以降は許そうかな。VSキングギドラを除く。でも私的にはメカゴジラの新設定とか、G細胞が基になってビオランテだとかスペースゴジラだとかメガギラスだとかデストロイアとかが生まれるって作品世界は許します。モスラも許す。作品世界としては、神話にゴジラの物語を挿入した「ゴジラ・モスラ・キングギドラ・バラゴン編」が一番好きだったりします。

さてガメラ。これはもう神話世界をまんまいただき、みたいなシリーズになっております。勾玉とかがバンバンでてくる。ギャオスとかも、第一作以降普通に出てくるし。

えっと。イリスが何なのか、そこいらの説明部分を家事しながら見てて、しっかり見てなかったのによくわかりません。ごめんなさい。ギャオスとエイリアンとの融合体とか、ギャオスの突然変異とか、そういう風に捉えたらいいんじゃないでしょうか。主人公の少女前田さまは、これまでのエピソードでガメラと怪獣が戦ったときにカメラマンの父と、いっしょにいた母を亡くしています。彼女はガメラが憎くてたまらない。ガメラはこの作品世界では「神の使い」っぽい。あるいは病む地球からのメッセンジャーかな。ガメラが戦う相手は、地球の生態系を壊すっぽいギャオスが主ですから。で、やっぱり人間の味方って設定です。イリスはほとんどエイリアン。なんかポケモンのデオキシスに似てるイメージです。イリスは洞窟で前田さまに拾われ、前田さまの精神と感応しながら大きくなり、やがて怪獣となってガメラと戦うことになります。

ガメラが飛ぶ理屈って、やっぱり無理がありますよね。亀が甲羅の中に手足ひっこめたその穴から炎噴き出しながら飛ぶわけですから。科学的にはすげえ違和感のある飛び方だけど、ビジュアル的にはすごい。手足の穴から炎を噴き出し、ぐるぐる回りながら飛ぶなんて、特撮チームの腕の見せ所ですからね。

なんだかんだいいながら、実はすごく楽しみました。ところでこの映画、イリスに最初に殺されるオバカな女子大生ギャル役で、今をときめく仲間由紀恵さまがご出演されております。なんか仲間さま、精気すいとられてミイラになってたし。笑いました。

次回からちょっと懐かしい作品を集中的にとりあげようと思っています。

明日は第一弾。「明日に向かって撃て」いきたいと思います。

## 明日に向かって撃て

---

1969年アメリカ映画

監督 ジョージ・ロイ・ヒル

主演 ポール・ニューマン、ロバート・レッドフィード、キャサリン・ロス

アメリカン・ニューシネマの傑作でございます。

あるサイトにアメリカンニューシネマとは、みたいな記述がありました。1960年代から1970年代に作られた、それまでのハリウッド的「お約束」なしの映画の総称って説明になるらしいです。

原題は「ブッチ・キャッシュとサンダンス・キッド」。そのまんまやがな。ひたすら二枚目俳優の道をつき進んでいたロバート・レッドフォードさまが大化けした傑作でございます。同時に「西部劇時代」というものに終止符を打った作品です。

お尋ね者の銀行強盗、ニューマンさまとレッドフォードさま。犯行を重ねるうちに彼らにかけられた賞金はどんどんとつりあがっていきます。二人は保安官たちからも賞金稼ぎからも追われることとなります。

英語が通じないエリアでの強盗。前日に「手を上げろ」だとか「金を出せ」だとか必死で練習したりするところがなんだか笑えます。レッドフォードさまの恋人がキャサリン・ロス。ニューマンさま・レッドフォードさま・ロスさまが自転車に乗って戯れる場面があります。このバックに流れるのが「雨に濡れても」って曲。

映画音楽のベストテンとかを選ぶと、常に上位にランクインする名曲。そして名場面です。

ラストシーンもこれまた映画史に残る名場面。保安官との撃ち合いの末、二人は建物に逃げ込みます。しかしその建物には逃げ場がない。建物の中でこれまでのこと、これからのことを語り合う二人。しかしその間に彼らは軍隊に完全に包囲されます。武装した軍隊の銃口は全て建物の入り口に向けられています。そんなことを知らない二人は発砲しながら建物から飛び出します。ここで突然のストップモーション。ライフルの銃声が何度も何度も響く。おお、これぞアメリカン・ニューシネマ。

さて、次回も懐かしの名画。西部劇いきましょう。「荒野の七人」です。



## インターバル

---

つらつらだらだらと書き進めてまいりまして。  
ふと気づくと、ものすごい量の本になりつつありまして。

こうなってしまうと、編集やら校正やら出力やらがだんだん大変になってきました。  
そうなる、読まれる皆様のほうもかなり読みにくいのはって思いました。

ってことで、上下巻分冊で原稿管理させていただきます。  
これが普通の書籍だとこういうこまわりきかないんだけど。

221番目の作品、「荒野の七人」からは下巻でご紹介してまいります。

それでは皆様、下巻でお会いしましょう。

今後ともごひいきに、よろしくお願いいたします。